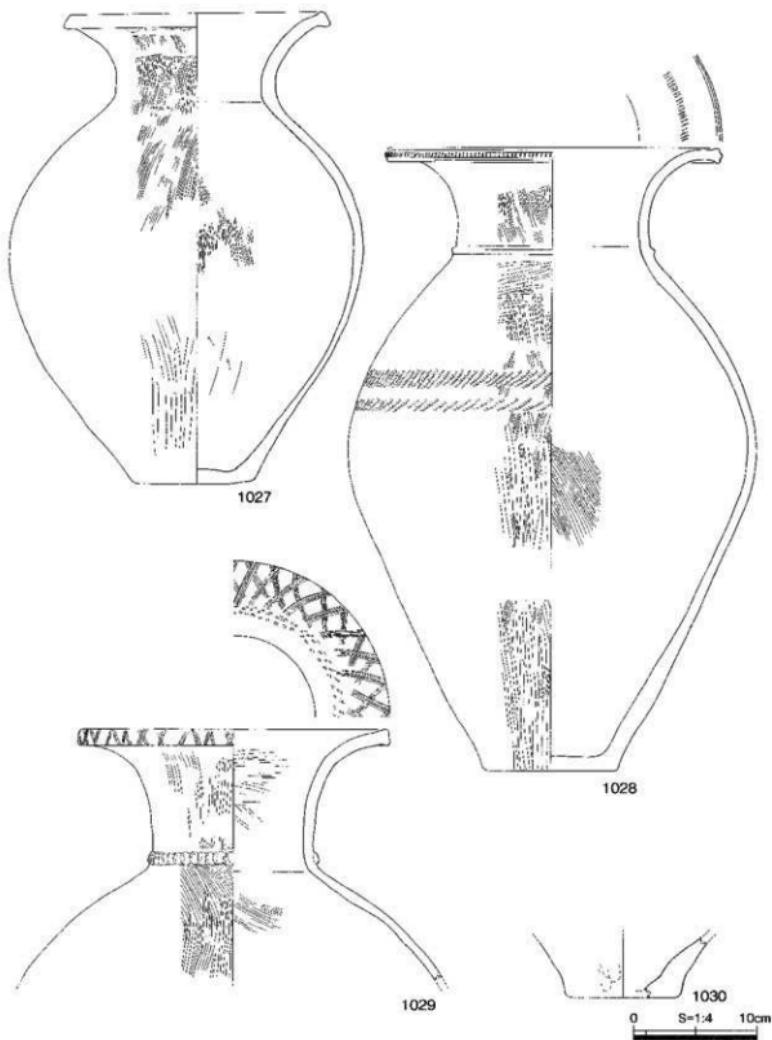


第194図 SI-09 焼土・炭化物出土状況



第195図 SI-09 出土土器



第196図 SI-09 出土石器

上している。また、同様に遺構面（床面）から石包丁1032、P3-1内埋土中から石包丁1031、黒曜石製の石核・剥片・チップが出土している。その他、遺構面上埋土中から弥生土器の底部1030、石包丁1033、黒曜石製の石錐未製品1034・大形剥片・剥片・チップ、白色頁岩製の石錐1035が出土している。このうち、弥生土器の壺1029は出土状況から、口縁部を下にして置かれていたものと思われる。この他、上記のとおり、遺構面から黒曜石製の石核・剥片・チップが出土していることや、埋土中から黒曜石製の石錐未製品・大形剥片・剥片・チップが検出されていることから、SI-09住居内もしくは、その周辺において石器製作がおこなわれていたものと考えられる。

遺構存在時期は、遺構面（床面）の出土遺物よりⅢ-2様式（弥生中期中葉）頃と推定される。

SI-09 出土遺物（第195・196図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1027は口縁部が緩く外反する無文の壺で、1028は口縁端部に凹線文と刻目、頸部に1条の突帶文・2段の刺突文が施された壺である。1029は朝顔状に開く口縁部で、口縁部内面に斜格子文と刺突文、口縁端部に斜格子文、頸部に指頭圧痕文帯が施される壺の口縁部～肩部である。以上、Ⅲ-2様式のものと思われる。1030は内面に煤が付着する壺の底部である。1031・1032は頁岩の石包丁である。刃部は研磨によって作り出されており、1032には穿孔がみられる。1033は大型石包丁で、他の石包丁と同様、刃部は研磨によって作り出されている。1034は黒曜石製の石錐未製品で、1035は白色頁岩製の平基式の石錐である。

環壕外側斜面周辺 出土遺物（第197図）※遺物の法量・出土地等の詳細は遺物観察表を参照。

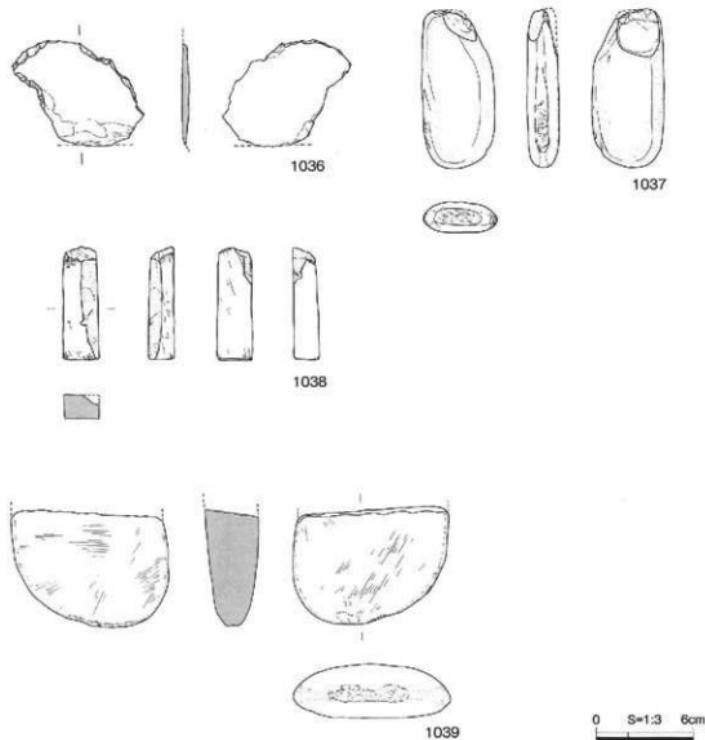
多くの遺構が検出された環壕外側の北側斜面周辺からは、遺構外の遺物も多く出土している。ここでは、図化可能なこれら出土遺物をあげておく。

1036は石包丁で、刃部は研磨によって作り出されている。1037は敲打痕が2箇所においてみられ

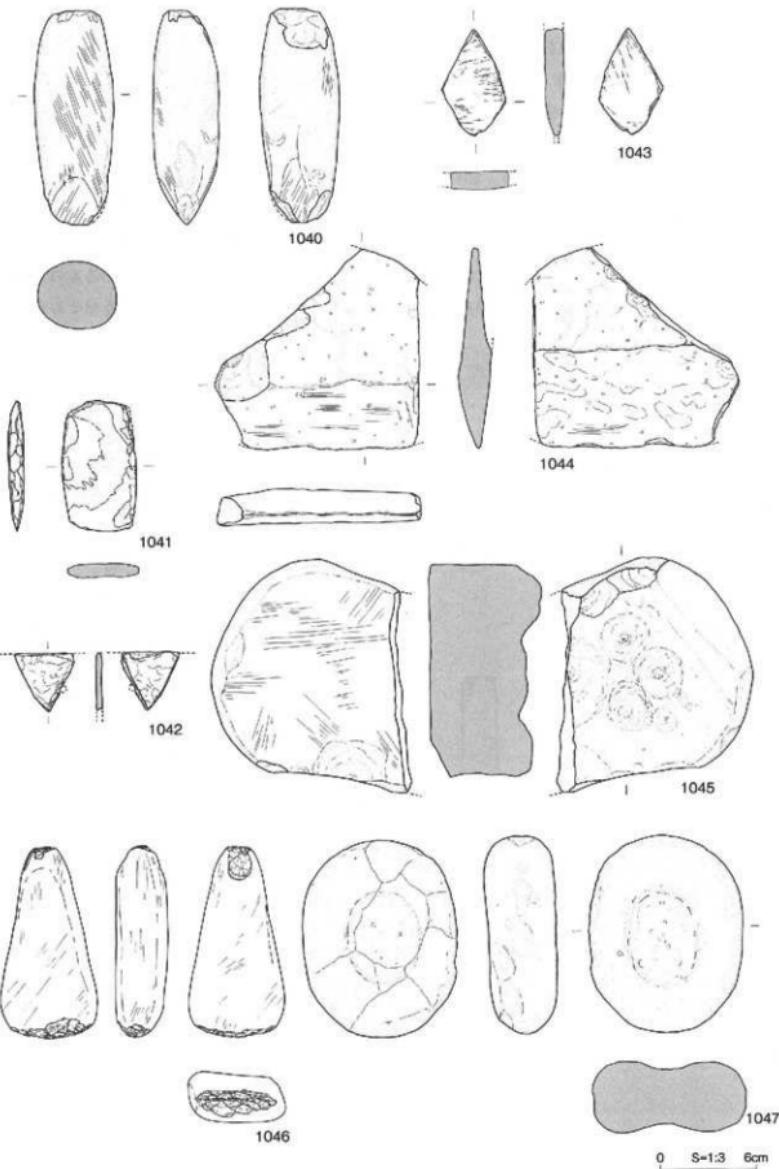
る敲石と思われるものである。1038は4面使用された砥石である。1039は外面に擦痕がみられる敲石と思われるもので、敲打痕は1箇所においてみられる。

出土地不明 出土遺物（第198・199図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

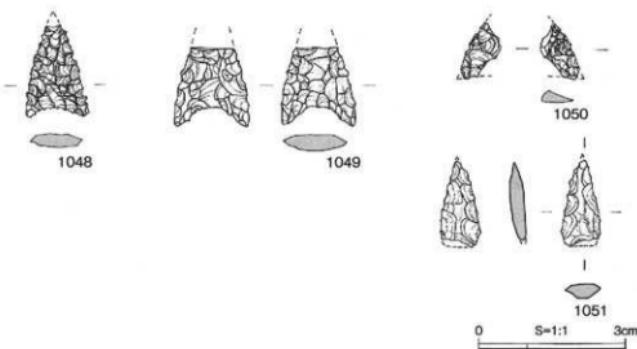
1040は蛤刃石斧のほぼ完形品で、刃部に使用痕がみられるものである。1041は扁平片刃石斧の完形品である。1042は頁岩の石包丁で、穿孔が1孔みられるものである。1043は2面において使用された砥石と思われるものである。1044は大型石包丁で、刃部は研磨によって作り出されている。1045は多数の窪みが残る凹石で、1046は敲打痕が1箇所においてみられる頁岩の敲石である。また、1047は表裏に窪みがみられる円形の凹石である。1048～1050は黒曜石製の石鏃で、このうち1048・1049は四基式を呈するものである。また、1048は細かな剥離がおこなわれているもので、側刃が鋸歯状となっている。1051は平基式のサヌカイト製の石鏃で、縦長な三角形状を呈するものである。



第197図 環壕外北側斜面周辺 出土石器



第198図 出土地不明 石器



第199図 出土地不明 石器（石鎌）

註

- (1) 穫穴住跡・掘立柱建物跡の同位置での建替えの可能性が考えられたものは枝番号にて表現しているため、この棟数には数えられていない。
- (2) 「和田原E地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会 2004
- (3) 「布田遺跡」「一般国道9号線松江道路建設予定地内 埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』建設省松江国道工事事務所・鳥根県教育委員会 1991.3
- (4) 「台形土器出土遺跡一覧（中国地方）」「和田原E地点遺跡・小和田横穴墓」庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会 2004
- (5) 丹羽野裕氏に実測・鑑定して頂いた。
- (6) 本書、第5章 自然化学分析と検討「松江市田和山遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」国立歴史民俗博物館 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門 SMMT-13を参照。
- (7) 本書、第5章 自然化学分析と検討「松江市田和山遺跡出土試料の¹⁴C年代測定」国立歴史民俗博物館 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門 SMMT-9を参照。
- (8) 本書、第5章 自然化学分析と検討「松江市、田和山遺跡群における自然科学分析」株式会社 古環境研究所を参照。
- (9) 清川滋男氏にご教示して頂いた。

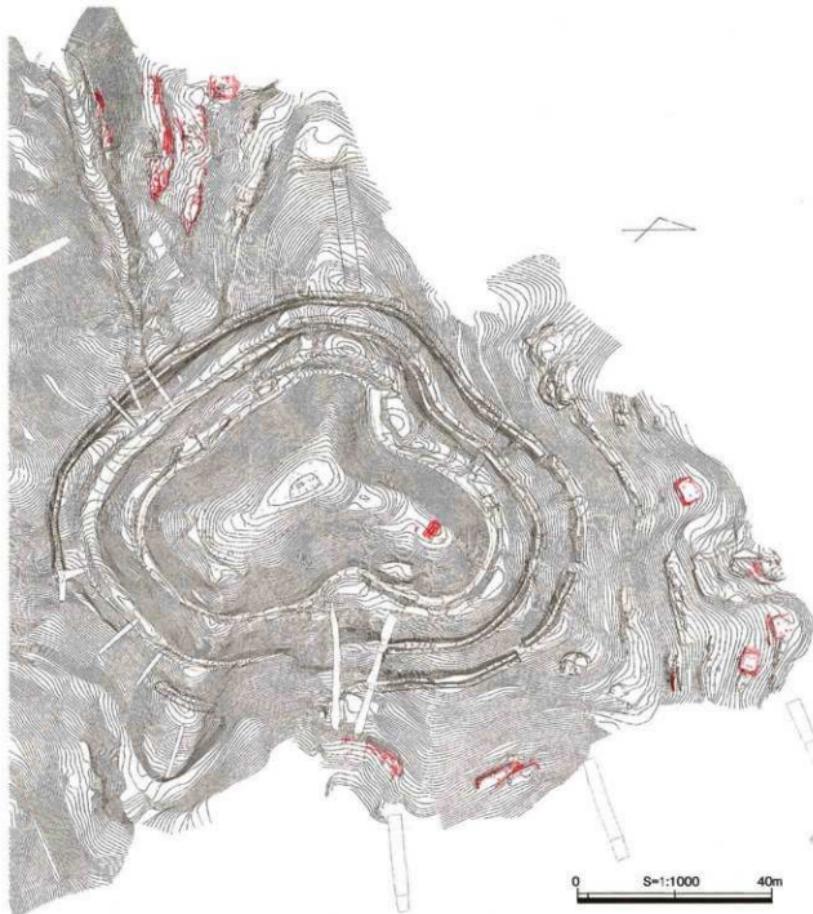
参考文献

- ・竹広文明『サヌカイトと先史社会』2003.2.20 漢水社
- ・寺前直人「弥生時代の武器形石器」『考古学研究 第45巻 第2号』1998.9 考古学研究会
- ・平井 勝「弥生時代の石器」『考古学ライブリー64』ニュー・サイエンス社
- ・松木武彦「田和山遺跡鑑定書」2001.1.23
- ・「弥生時代の磨製石器」「鳥根県古代文化センター調査研究報告書13」2003.3 鳥根県埋蔵文化財調査センター・鳥根県古代文化センター

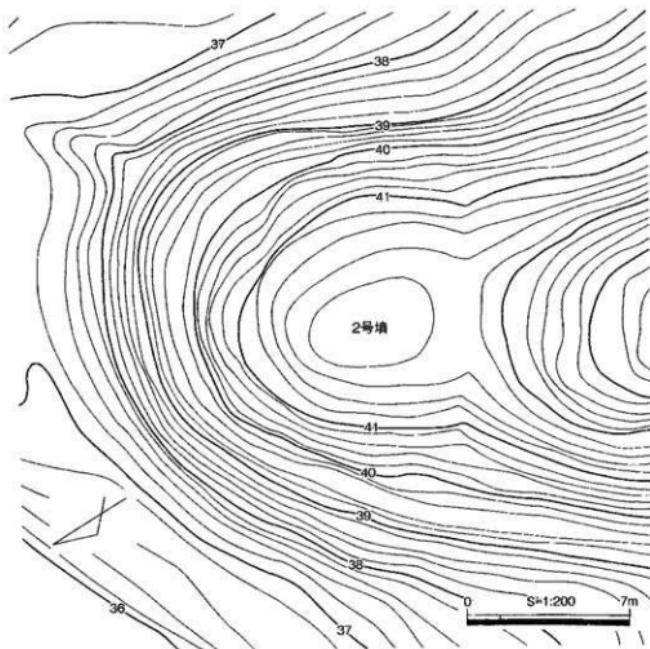
第2節 古墳時代以降の遺構（第200図）

1. 山頂部

山頂部の北端に位置する山頂部北側段状平坦面では、古墳時代前期の古墳が確認されている。この古墳は、弥生中期後葉に終焉した環壕遺跡の後、本遺跡内に現れた最初の遺構となるもので、標高41.8mを測る非常に眺望が良い場所に立地している。以下、この古墳を2号墳と呼称し、調査の詳細を述べる。



第200図 古墳時代以降の遺構 全体図



第201図 2号墳 調査前 地形図

2号墳（第200～206図）

2号墳は、田和山南丘陵の最高所付近で確認されている田和山1号墳⁽¹⁾が存在することから、これに次ぎ命名されたものである。山頂部の最高所から北東に派生する尾根の先端に位置し、この場所では弥生期の柱穴も検出されている。また、本古墳の斜面下においては、弥生期に環濠が廻らされており、古墳が築造された時には緩やかに湾曲する崖みを呈していたものと推測される。

この2号墳からは、墳丘中央にて主体部を検出している。また、主体部と軸を同じくしてこれの南側から小墓塚を検出している。

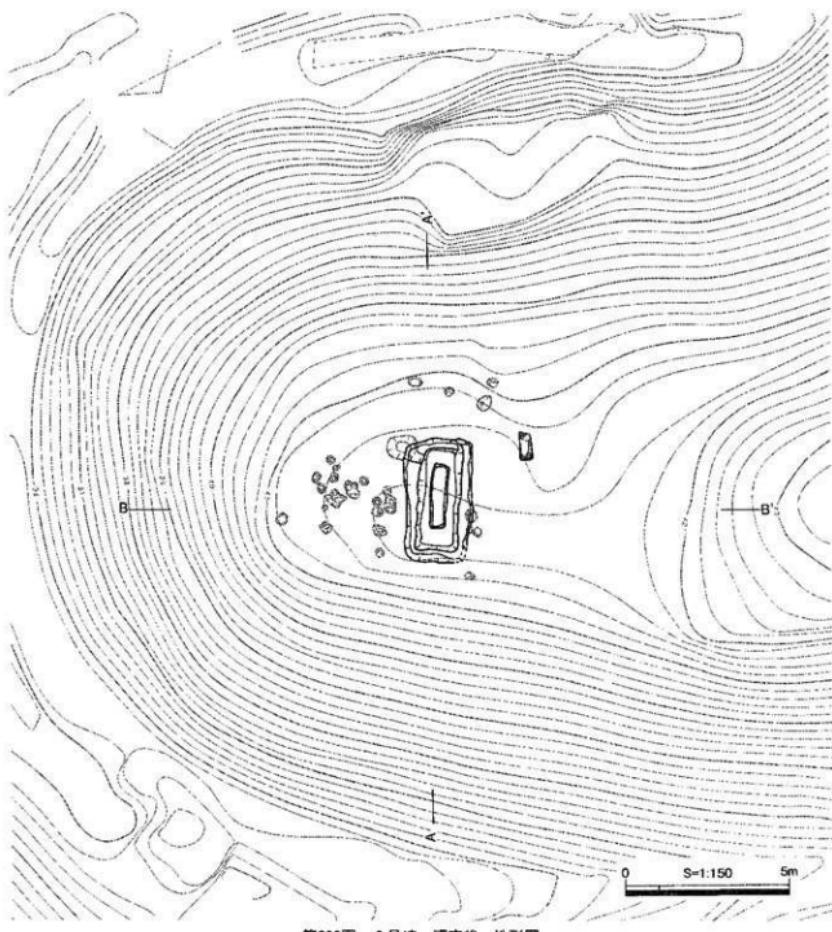
墳丘（第202・203図）

墳丘は旧表土がみられないことから、切削加工した後、その土を盛って築造したものと思われるが、基本的には弥生期に造成された形状を墳丘に見立てて使用されたものとみられる。また、南西側には周溝状の緩やかな崖みが造られている。墳形は、残存する外形ラインから円墳と思われ、墳丘規模は、径9m前後を測るものであったと推測される。また、残存する墳丘の高さは、周溝状の緩やかな崖みから0.6m、埋没した環濠から5.5mを測っている。

主体部（第204図）

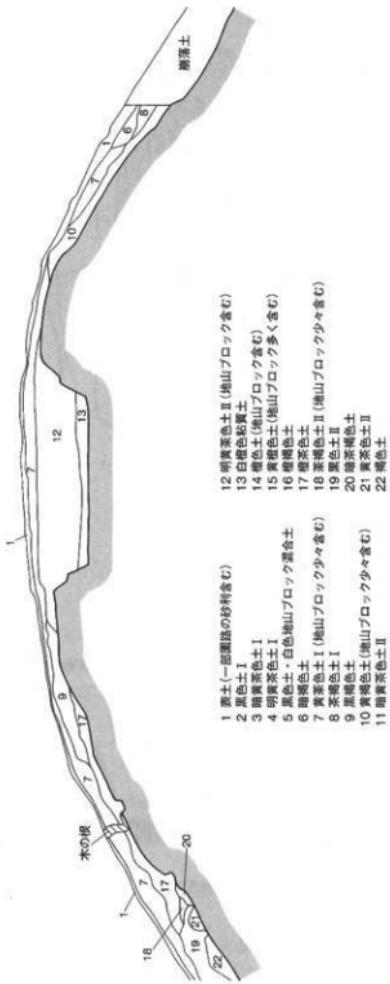
主体部は、墳丘中央付近から検出したもので、平面プランは隅丸長方形を呈し、主軸はN-61°-Wを測る。切削加工した面から2段掘りで地山が掘られており、その底面には木管安置の為の枠

床粘質土が入れられている。主体部の上端は、最大長3.8m・幅1.9~2.1m、深さは66~75cmを測り、2段に掘られた底面は、最大長2.8cm・幅75~80cmを測っている。棺床粘質土は白橙色の粘質土で、主体部中央にみえる長方形状の窪んだ形跡から、長さ1.95m・幅0.5mの箱式木棺が置かれていたものと推察される。なお、棺床粘質土の厚さは、木棺底面で2~3cm、木棺を安定させる為のこの外側付近で、10~13cmを測っている。主体部内埋土は、棺床粘質土によって安置された木棺の上に、まず第4層が入れられ、その上に埴丘盛土の第2層が盛られている。第2・4層の中央の落ち込みは、木棺が腐朽した為の痕跡と考えられる（第204図）。また、供獻土器と思われる

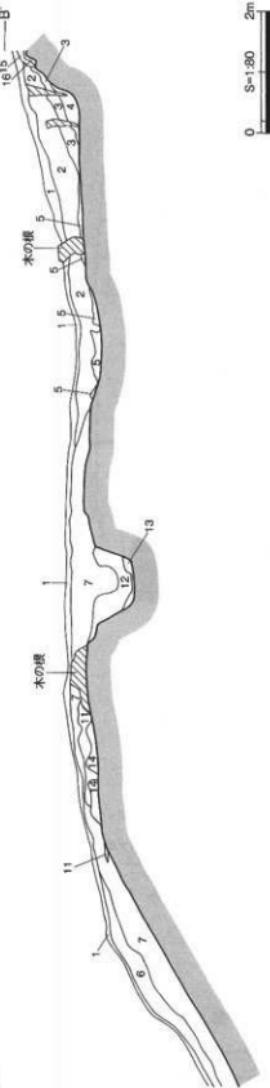


第202図 2号墳 調査後 地形図

A—A'

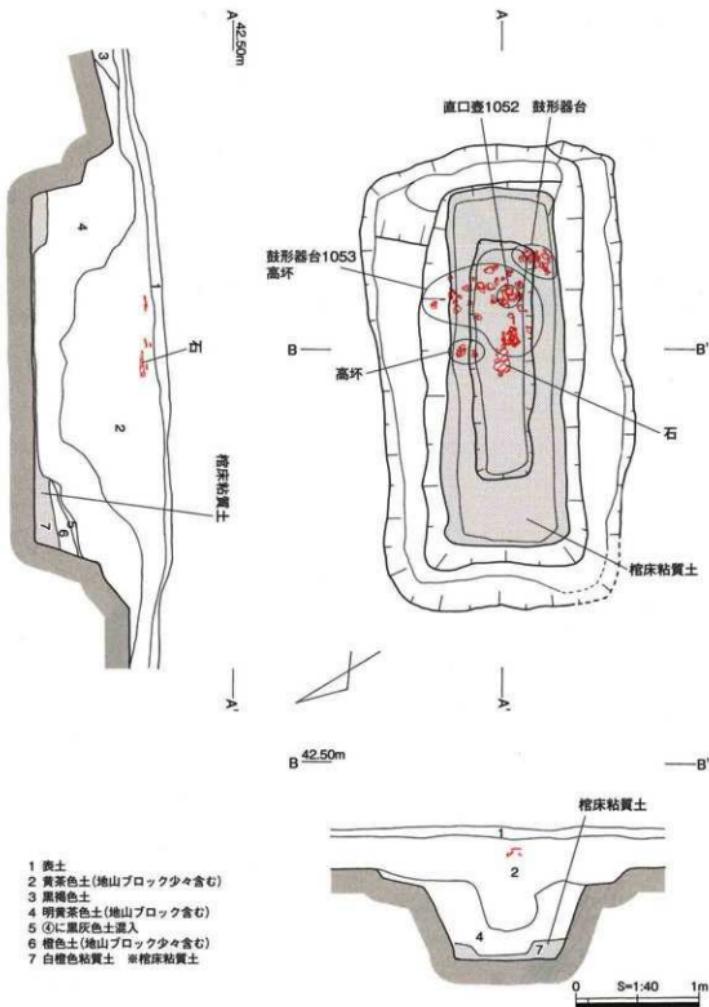


B—B'



0 S=1:80 2m

第203図 2号墳 墳丘 土層断面図



第204図 2号墳 主体部 平面図・土層断面図

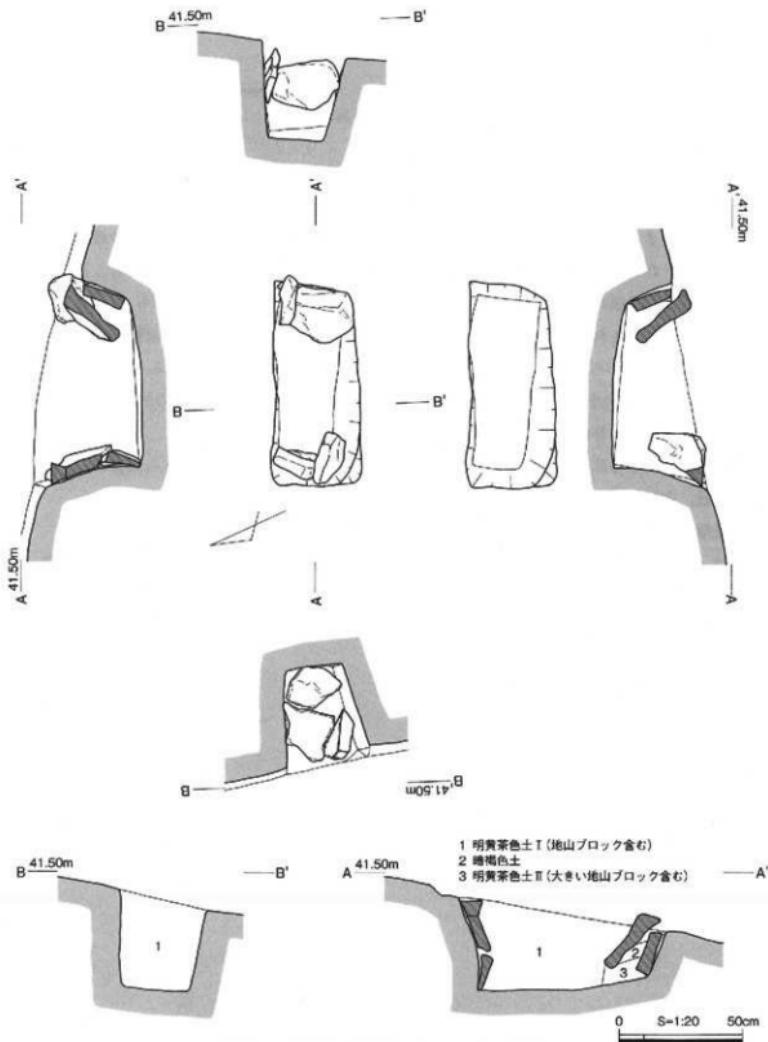
土器が第2層の上方にみられるが、これも同状況から落ち込んだものと考えられ、供獻時のレベルは30~40cm程度高かったものと推察される。

遺物は、供獻器と思われる土器類の直口壺1052・鼓形器台2個体1053・高坏2固体が破碎して主体部上の南東側に集中して出土している。これら出土位置から、被葬者の頭位は南東頭位とも推察出来得る。その他、周溝状の緩やかな窪みの埋土中からは須恵器の蓋片1054が出土している。

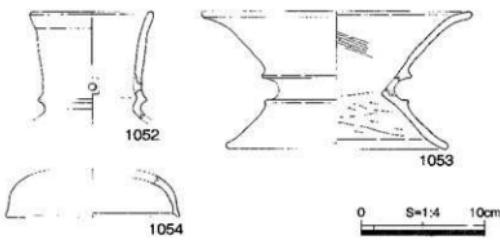
埋葬時期及び古墳構築時期は、供獻上器と思われる土器より古墳時代前期頃と推定される。

小墓壙（205図）

小墓壙は、墳丘中央付近の主体部から南西側に2.5m程離れた周溝状の緩やかな崖み付近から検出した小形の墓壙である。平面プランは長方形を呈するもので、主軸はN-65°-Wを測り、主体



第205図 2号墳 小墓壙 平面図・土層断面図



第206図 2号墳 出土土器

部の主軸とほぼ並列している。この小墓壙は、主体部同様、切削加工した地山面から掘られており、上端の長さ78~84cm・幅30~35cm、下端の長さ68~70cm・幅21~27cm、深さは20~38cmを測っている。また、墓壙内の短軸部分にあたる南東側と北西側には、板状の石がこの側面に張り付く形で検出されている。推定される棺の形態は、主体部に箱式木棺が用いられていることや、短軸部分に配石された板状の石が木棺を安定させる為のものとも考えられることから、長さ50cm前後の箱式木棺が安置されていたものと思われる。被葬者の頭位は、墓壙底面の南東側が南西側に比べやや高いことが認められることから、主体部同様、南東頭位とも推察出来得る。また、この墓壙は、長さ50cm前後の小形の木棺が想定されることから、小児が埋葬されたものと思われる。なお、この墓壙に関わる遺物の出土は認められていない。

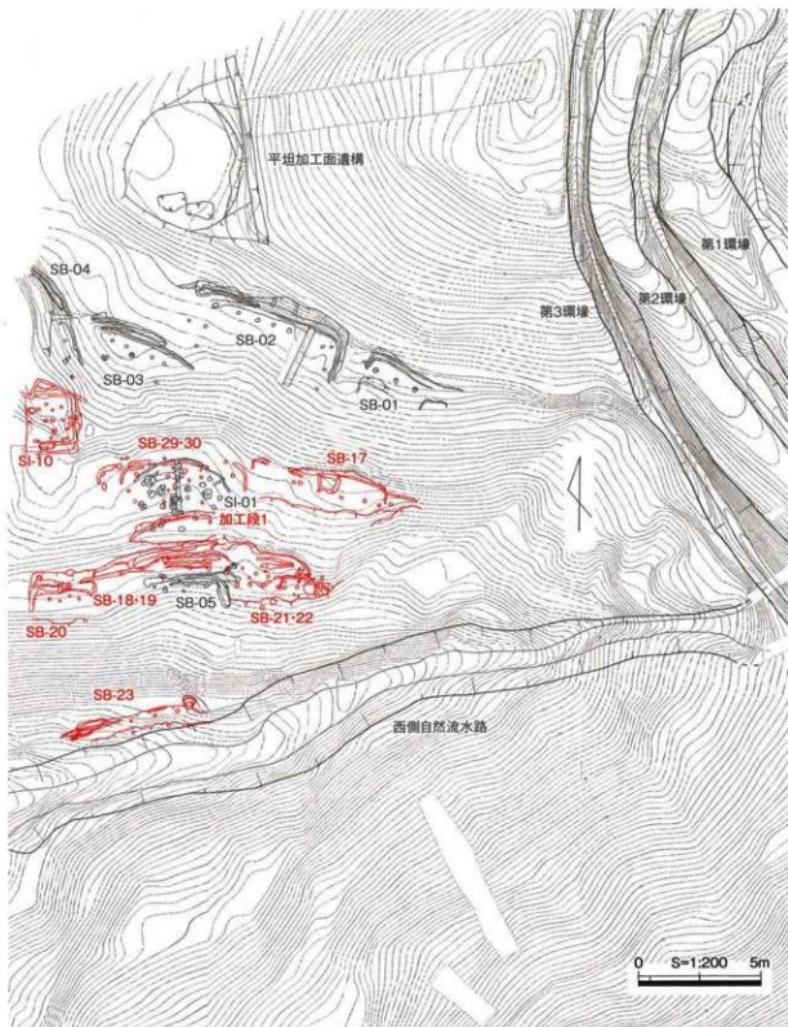
埋葬時期は、主体部の埋葬時期とそう相違ない時期に埋葬されたものと考えられることから、主体部同様、古墳時代前期頃と推定される。

2号墳 出土遺物（第206図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

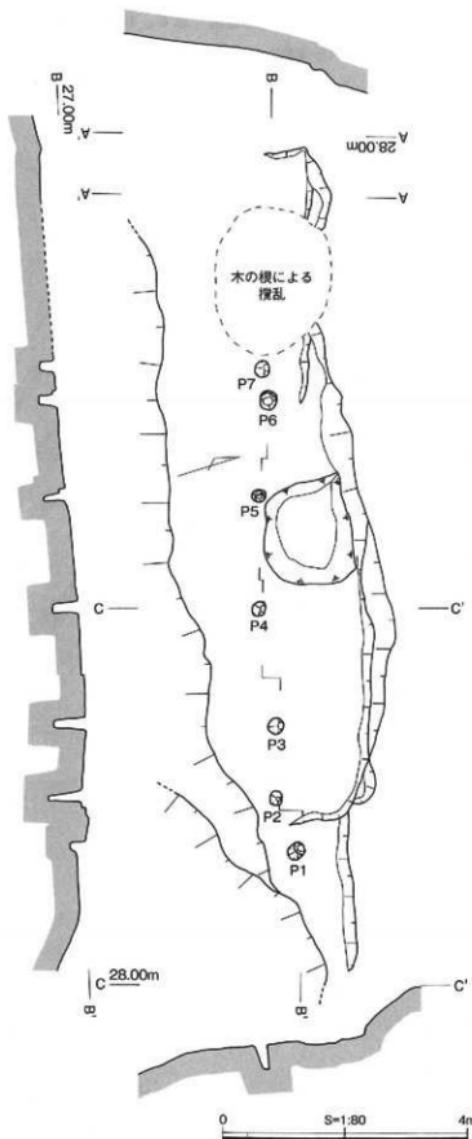
1052・1053は土師器である。1052は口縁下部に円孔があけられた二重口縁の直口壺の口縁部～頸部で、1053は筒部が短縮する鼓形器台である。これらは古墳時代前期のものと思われる。1054は口縁端部が外側にやや開き口縁端部が斬刃状を呈す、須恵器の壺類の蓋である。

2. 環壕外側遺構（住居部）（第207・228図）

弥生期の環壕の外側斜面にて確認された古墳時代以降の住居関連遺構である。検出した遺構は、堅穴住居跡4棟・掘立柱建物跡（その可能性があるものを含む）14棟・加工段1所・石列1所で、弥生期の遺構と混在する形で検出している。¹² また、これら遺構は古墳時代中期～中世までと幅広



第207図 南西側環壕外側遺構 分布図（古墳時代以降）



第208図 SB-17 平面図・断面図

い時代のものである。遺構の存在する位置は、弥生期の建物遺構が検出された環壕外の南西側と北側のエリアの他、東側のエリアにおいても遺構の存在を確認している。なお、南西側～北側エリアの間にあたる西側緩斜面は、弥生期と同様、遺構の存在は確認されていない。

以下、これら遺構の詳細を南西側エリアから順に述べるものとする。

(1) 南西側環壕外側遺構

(第207図)

SB-17 (第208・209図)

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って遺構面とした、掘立柱建物跡と思われるものである。同斜面西側においてはSB-29・30が検出されている。

この遺構面からは柱穴7穴(P1～P7)を検出している。このうち、P3～P4～P5～P6は柱間距離にはば統一性がみられるところから掘立柱建物跡の桁行部分と想定できるが、P4～P5～P6間は直線状に並ぶものの、P3～P4間はやや北側にぶれることから本報告では可能性があるものに留めておく(柱穴間距離はP3～P4間1.9m、P4～P5間1.8m、P5～P6間1.65m)。なお、建物規模は、P6西側の木の根による擾乱部分にも柱穴の存在が疑われることから、仮にこれらを掘立柱建物跡と想定するならば、桁行3間

(5.35m) もしくは4間×梁間1間以上を測るものと思われる。その他、P1がこれら遺構面とは違う東側の平坦面から検出されている。このことから東側に新たな遺構の存在が疑われるが、この平坦面の南側が欠落していることからその詳細は明らかではない。

遺物は、遺構面埋土中から須恵器の坏身片1055・土師器の壺片が出土している。

遺構存在時期は、これら遺構面埋土中の出土土器から6世紀後半～7世紀初頭（古墳後期）頃もしくは、それ以前と推定される。

SB-17 出土遺物（第209図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1055は口縁の立ち上がりは内傾して低い須恵器の坏身で、出雲5期相当のものと思われる。1056は土師器の壺の口縁部を欠くもので、単純口縁の口縁をもつものと思われる。

SB-29・30（第210～212図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面に作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。同斜面東側においてはSB-17が検出されている。

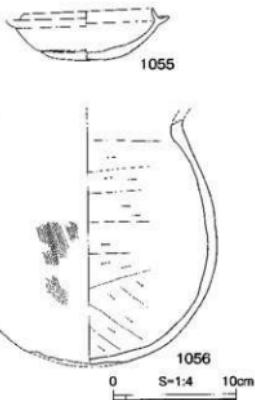
この遺構は、弥生聚穴住居SI-01埋没後、その上に作られた遺構である。遺構面からは溝5条（溝1～5）と柱穴21穴（P1～P7等）を検出している。溝1は幅16～26cm・深さ5～15cm、溝2は幅24～36cm・深さ3～10cm、溝3は幅20～32cm・深さ4～6cm、溝4は幅14～20cm・深さ2～5cm、溝5は幅24～30cm・深さ4～10cmを測り、溝2・3は連続する1条の溝であった可能性が考えられるものである。このうち、掘立柱建物跡と思われるSB-29は、溝2・3と柱穴P1～P5によって構成されたもので、南西角の柱穴は検出できなかったが、溝2・3の雨落ち溝を付随する桁行2間（5.5m）以上×梁間1間の建物であったと推測される。SB-30は、溝1と柱穴（P6・P7）で構成される雨落ち溝（溝1）を付隨する掘立柱建物跡と推測するもので、建物規模は桁行1間（2.1m）以上×梁間1間以上のものと考えられる。その他、溝4・5も建物に付隨する溝と考えられるが、これに対応する柱穴がみられないことから、詳細は不明である。

遺物は、溝3付近から須恵器の坏蓋1057・坏身1058、SB-30の遺構面から土師質土器の高台付坏底部1059が出土している。

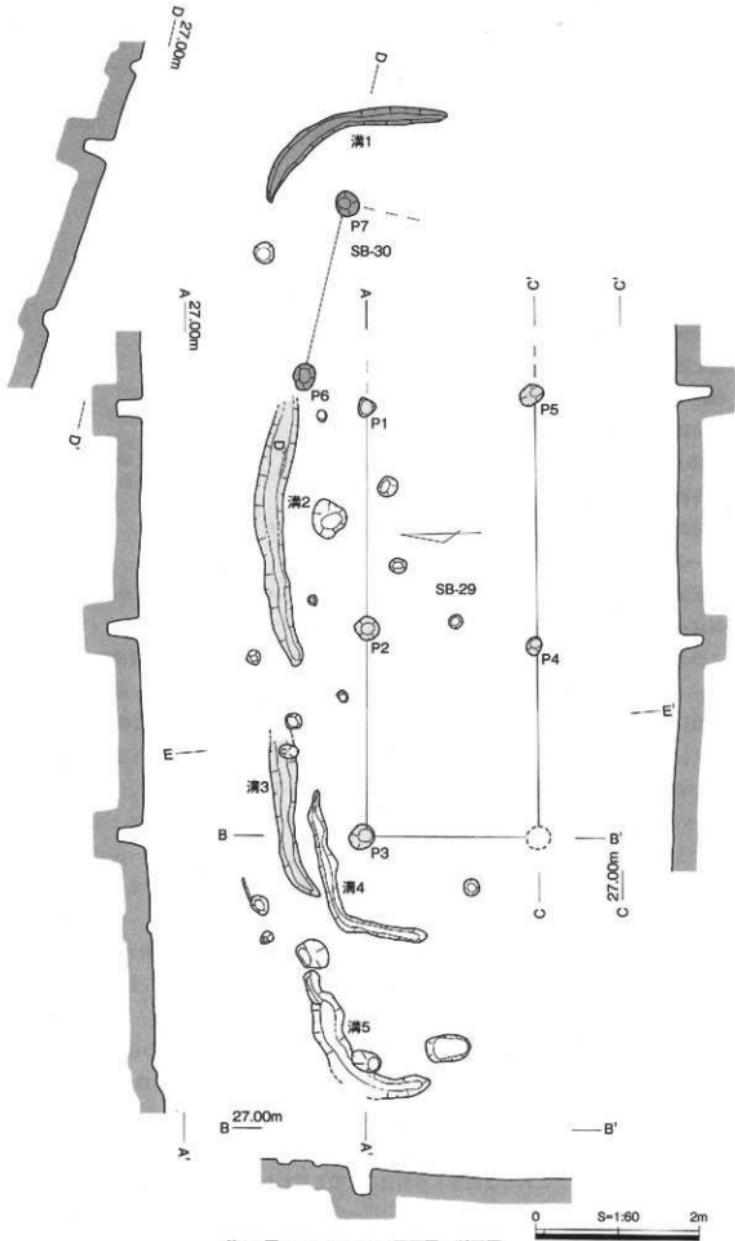
遺構存在時期は、溝3付近及び、SB-30の遺構面の出土土器から、SB-29が6世紀後半（古墳後期）頃もしくは、それ以前、SB-30が平安時代～中世頃もしくは、それ以前と推定される。

SB-29・30 出土遺物

1057は口縁部と天井部の境に沈線が施された須恵器の坏蓋で、1058は口縁の立ち上がりが内傾する須恵器の坏身である。これらは出雲5期相当のものと思われる。1059は口縁が欠損する土師質土器の高台付の坏である。

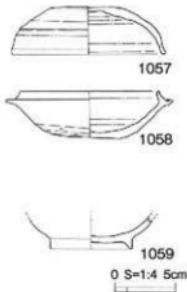


第209図 SB-17 出土土器





第211図 SB-29・30 土層断面図



第212図 SB-29・30 出土土器

SI-10 (第213～215図)

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面に作られた、

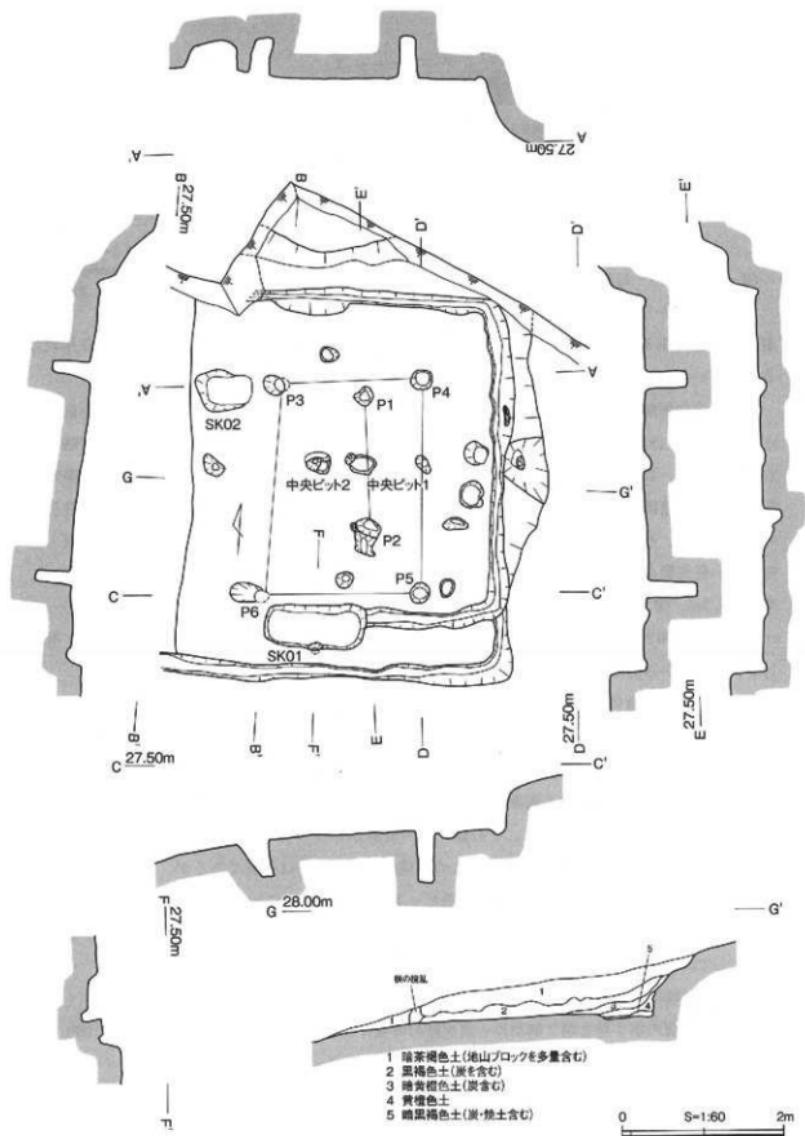
堅穴住居跡である。北側では弥生期のSB-04が検出されており、南西側は急斜面に変わり崖状地となっている。

この堅穴住居跡は、壁体溝の検出状況から建替えがおこなわれたことが分かるもので、平面規模が小さいもの (SI-10-1) から大きいもの (SI-10-2) へと作り変えられていることが確認されている。SI-10-1は、壁体溝を付随する主柱穴2穴 (P1・P2) によって構成される堅穴住居跡である。造構面の西側は、後に作り変えられたSI-10-2の削平等により当時の状態を残していないもので、当時存在したであろう西側の周壁・壁体溝は消滅している。平面プランは、東・西側が長い長方形を呈するもので、住居平面規模は、残存する周壁・壁体溝を基に復元したもので、東西辺3.3m、南北辺3.8mを測るものであったと思われる。その他、南側の端において上端45～55cm×125cm、深さ13cmの隅丸長方形の土坑 (SK01) を検出している。この土坑は、壁体溝と連結していることから雨水等を貯蓄したものと考えられるが、詳細な用途については不明である。

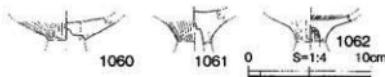
SI-10-2は、壁体溝を付随する主柱穴4穴 (P3～P6) によって構成される堅穴住居跡である。造構面の西端付近は、流失等により当時の状態を残していないもので、当初存在したであろう西側の周壁・壁体溝も消滅している。平面プランは、SI-10-1同様、東・西側が長い長方形を呈し、住居平面規模は、残存する周壁・壁体溝を基に復元したもので、東西辺3.8～4m、南北辺4.6mを測るものであったと思われる。その他、その位置からSI-10-2に伴うものと思われる土坑 (SK02) をP3の西側から検出している。この土坑の明確な用途は不明であるが、SK01に変わる施設であった可能性も考えられる。なお、中央ピットとも思われる穴を住居跡中央付近にて2穴 (中央ピット1・2) 検出しているが、これらがSI-10-1・SI-10-2どちらのものに成り得るのかは分かっていない。

遺物は、造構面上一層の埋土層である第2層中から土器器の高坏片1060～1062が出土している。その他、埋土層の第1層と第2層間から須恵器の壺蓋片1063・1064・壺身片1065・高坏片1066、土器器の壺片1067～1069、土支脚1070・1071が出土している。

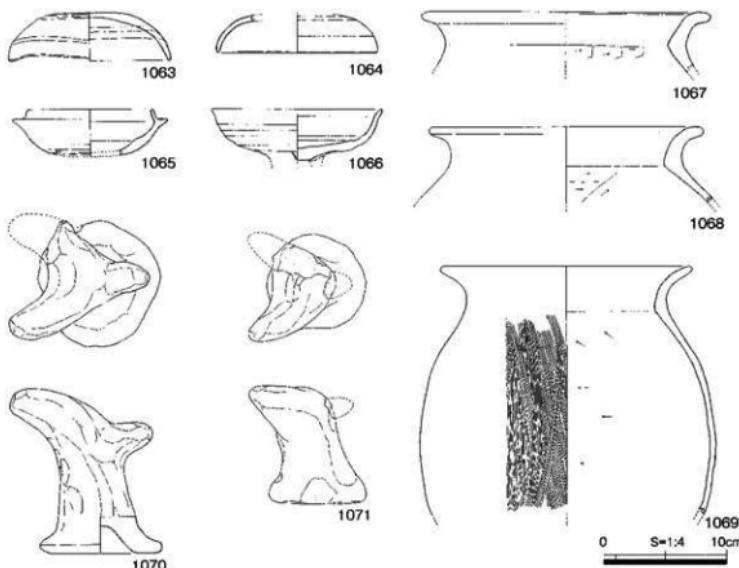
造構存続時期は、造構面上一層の埋土層である第2層中からの出土土器より、古墳時代中期頃もしくは、それ以前と推定される。



第213図 SI-10 平面図・土層断面図



第214図 SI-10 出土土器



第215図 SI-10 埋土層上層 出土土器・土製品

SI-10 出土遺物（第214・215図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1060～1062は土師器の高坏の坏部と脚部の接合部付近である。1063～1066は須恵器である。1063は口縁部と天井部の境にわずかな段をもつ坏蓋で、1064は坏蓋の口縁部である。1063は出雲4期相当、1064は出雲5期相当のものと思われる。1065は口縁の立ち上がりが内傾する出雲4期相当の坏身の底部を欠くものである。1066は脚部に切り込み状の透かしが二方向にみられる出雲5期相当の高坏の坏部～脚部上部である。1067～1071は上師器である。1067・1068は口縁端部が強く外反する壺の口縁部～頭部付近で、1069は胴部の張りが少ない壺の口縁部～胴部である。外面には煤の付着がみられる。1070・1071は土製支脚である。

加工段1（第216図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って作られた、加工段状の遺構である。北側の斜面上方ににおいてはSB-29・30が検出されている。

この加工段状遺構は、弥生聚落SI-01の南側を切って平坦面を作り出した遺構で、この切った際（きわ）には東側がU字状に曲がる溝を検出している。溝は、幅15～35cm・深さ3～6cmを

測る。遺構面からは、柱穴等がみつかっていないことから、ここに建物が存在したのか、上屋がない作業スペースのようなものであったのか、詳細は不明なものである。なお、北側（斜面下方側）は遺構面が流失していることから、本来はこれより広い平坦面を有するものであったと思われる。

遺物は、遺構面上一層の第3層中から黒曜石製の石鎚1072が出土している。

遺構存在時期は、遺構面及び、埋土層からの出土土器がみられなかったことから確定できないが、遺構面上埋土がこの北側の斜面上方に存在するSB-29と共有するものであったことから、SB

-29と同等の時期、6世紀後半頃（古墳後期）もしくは、それ以前であったとも思われる。

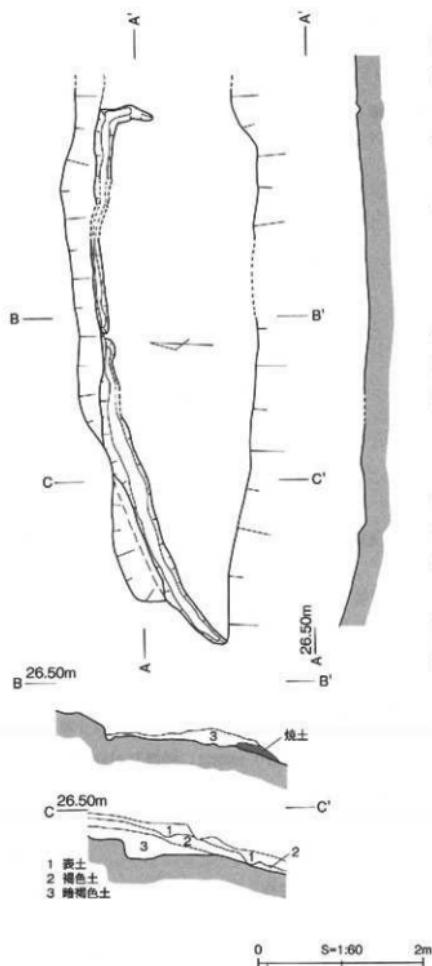
加工段1 出土遺物（第217図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1072は凹基式の黒曜石製の石鎚である。原産地分析により、隱岐久見産であることが分かっている。²³⁾

SB-18・19（第218～221図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って作られた、加工段状の掘立柱建物跡と思われるものである。同斜面西側においてはSB-20が、東側にはSB-21・22が検出されている。

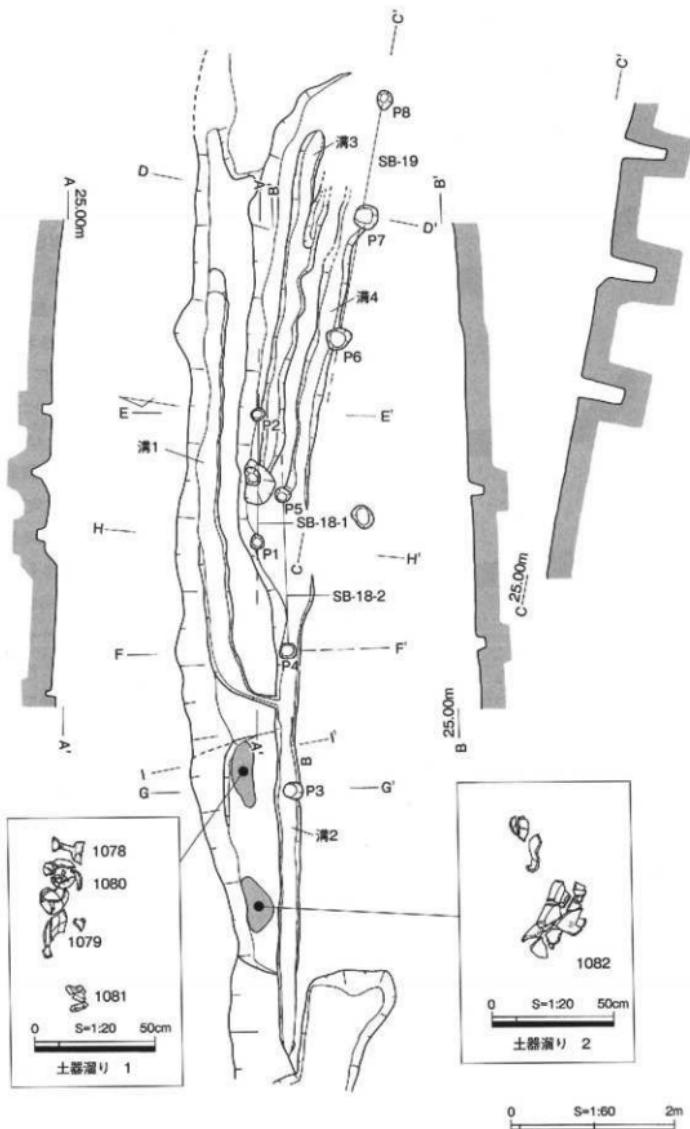
この遺構面は、斜面を加工段状に切って作られた細長い平坦面で、南側（斜面下方側）の大半は流失しているものであった。遺構面からは、溝4条（溝1～4）、柱穴9穴（P1～P9）、土器溜まり2ヶ所（土器溜まり1・2）を検出している。溝は、溝1が長さ5.5m、幅20～35cm・深さ2～7cm、溝2が長さ6m、幅20～30cm・深さ2～4cm、溝3が長さ4.3m、幅25～35



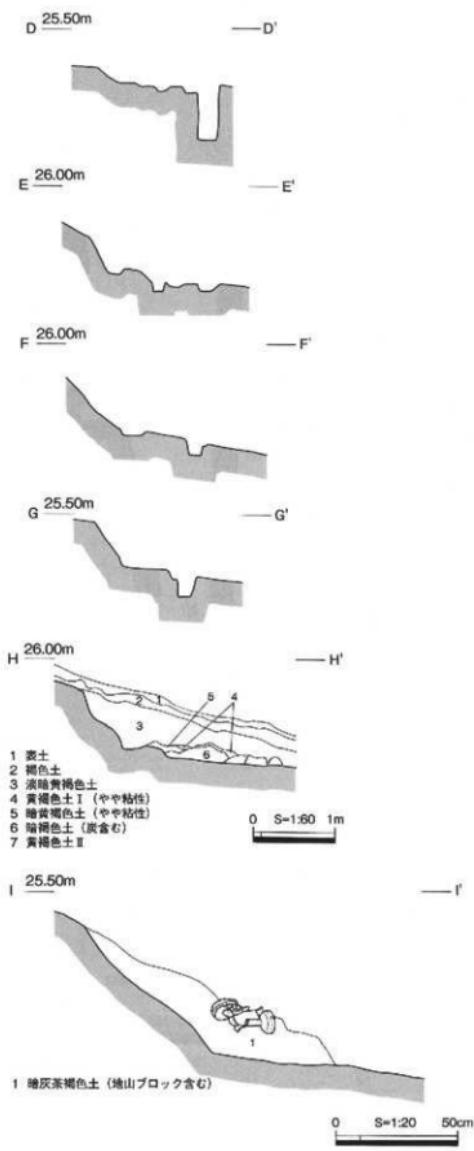
第216図 加工段1 平面図・土層断面図



第217図 加工段1 出土石器（石鎚）



第218図 SB-18・19 平面図・断面図



第219図 SB-18・19 土器窓り 1 土層断面図

cm・深さ 3~5 cm、溝 4 が長さ 3.9 m、幅 25~35 cm・深さ 8~10 cm を測り、溝 4 → 溝 3 と作られていたことが分かっている（溝 1・2 は不明）。このうち、SB-18-1 は、柱穴 P 1-P 2 が桁行部分と思われるもので、柱穴 2 穴しか確認できなかったことより全容は明らかではないが、桁行 1 間（1.5 m）以上 × 梁間 1 間以上の掘立柱建物跡であったと推測される。なお、この桁行は西側に 1 間、東側に 1 間以上延びていた可能性も考えられる。SB-18-2 は、SB-18-1 の南側（斜面下方側）に位置する、柱穴 P 4-P 5 が桁行部分と思われる建物跡である。SB-18-2 も柱穴 2 穴しか確認できなかったことから、全容は明らかでないが、桁行 1 間（1.9 m）以上 × 梁間 1 間以上の掘立柱建物跡であったと推測される。なお、SB-18-1・SB-18-2 の北側で検出している溝 1 は、このどちらかの雨落ち溝と考えられるものである。また、この両建物跡は、その位置的状況から建替えがおこなわれたものと推測されるが、その新旧については不明である。SB-19 は、柱穴 P 6-P 7-P 8 を桁行部分とした、雨落ち溝と思われる溝 3 を付随する掘立柱建物跡と考えられるものである。検出状況から、桁行 2 間（3.1 m）以上 × 梁間 1

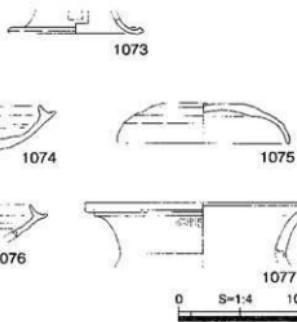
間以上の規模をもつものであったと推測される。なお、この桁行部分は溝3の位置的状況から西側に1間程度延びていたものとも考えられる。その他、溝2・溝4も建物に付随する溝と考えられるが、これに対応する柱穴を検出できていないことから、詳細は不明である。

土器溜まり1・2は、西側の平坦面の埋土上において検出したもので、須恵器や土師器が固まって出土したところである。検出状況から遺構に伴う可能性は低いものと判断されるが、土器が一括して存在することから、この場所に破棄されたものとも考えられる。

この加工段で検出した遺構等は、溝4→SB-19(溝3)→SB-18-2(溝1?)→SB-18-1(溝1?)→土器溜まり1・2の順に作られたものと推測される(溝2は不明)。

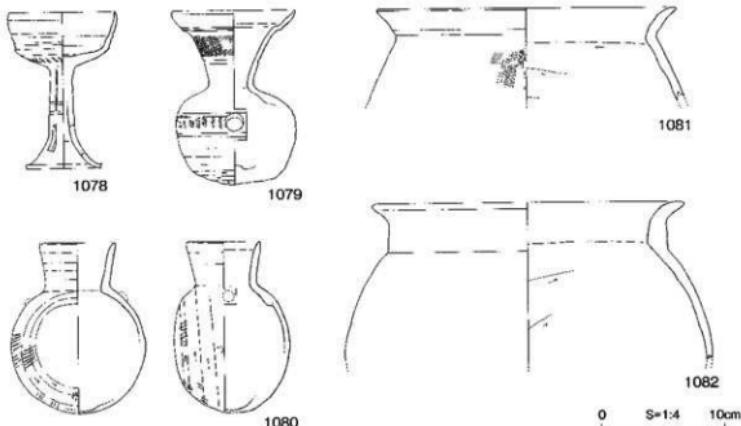
遺物は、溝1埋土中から高杯の脚部1073、加工段埋土中から須恵器の壺片1077、表土から須恵器の壺身片1076、東側の遺構外埋土中から須恵器の壺蓋片1075・壺身片1074が出土している。また、土器溜まり1からは須恵器の高杯1078・壺1079・提瓶1080、土師器の壺1081が、土器溜まり2からは土師器の壺1082等が出土している。

遺構存在時期はこれら出土土器より、6世紀後半(古墳時代後期)頃もしくは、それ以前と推定される。



第220図 SB-18・19 出土土器

0 S=1:4 10cm

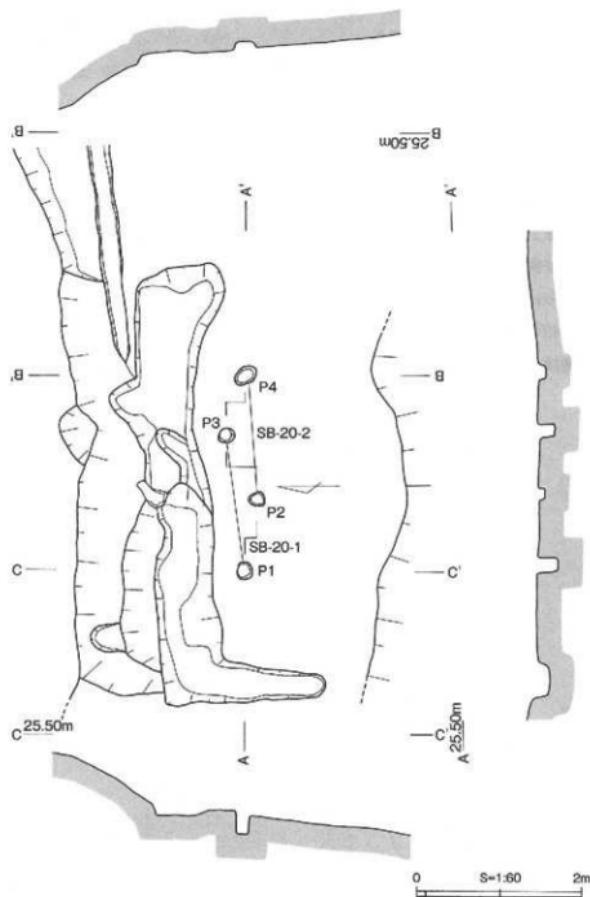


第221図 SB-18・19 土器溜り1・2 出土土器

0 S=1:4 10cm

SB-18・19 出土遺物（第220・221図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1073は脚部に三角形または長方形の透かしがみられる須恵器の高坏の脚部で、1074・1076は口縁の立ち上がりが内傾する須恵器の坏身である。これらは出雲4期相当のものと思われる。1075は出雲5期相当のものと思われる坏蓋である。1077は口縁下に段が付く須恵器の壺の口縁部～頸部で、1078は坏部に沈線と刺突文、脚部に2段の透かしが3方向にあけられた須恵器の長脚高坏である。1079は頭部に波状文、胴部に2条の沈線と刺突文が施され、1穴の円孔があけられた須恵器の壺である。1080は肩部に把手の痕跡がある須恵器の提瓶である。1078～1080は出雲4期相当のものと思われる。1081・1082は土師器の單純口縁の壺の口縁部～肩部である。



第222図 SB-20 平面図・断面図

SB-20（第222図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面に作られた、掘立柱建物跡と思われるものである。同斜面東側においてはSB-18・19が検出されている。

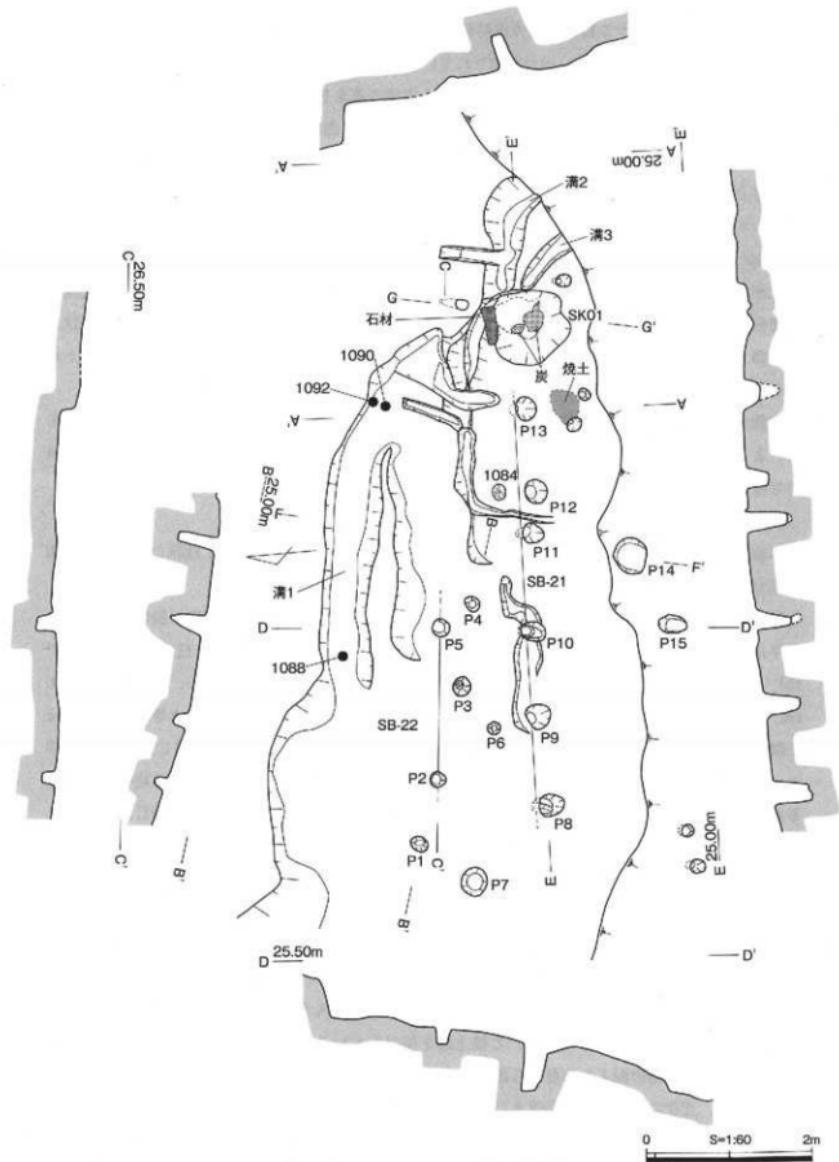
この造構面からは、柱穴4穴（P1～P4）とL字状の溝を検出している。溝は造構面北側の際（きわ）に作られており、西側では斜面下方に向かって90°曲がっている。幅は40～110cm・深さは2～10cmを測る。このうちSB-20-1は、この溝を付隨し、P1-P3を桁行部分とする掘立柱建物跡と推測するものである。このSB-20-1は、柱穴が2穴のみであることから全容は明らかなものではなく、検出状況からは桁行1間（1.7m）以上×梁間1間以上のものとしか言えない。SB-20-2は、P2-P4を桁行部分とする掘立柱建物跡と推測するものであるが、この建物跡も柱穴が2穴のみであることから全容は不明である。ただ、このSB-20-2は検出状況から西側に1間分延びていた可能性も考えられることから、建物規模は桁行1間（1.55m）もしくは2間以上×梁間1間以上であったと推測される。なお、これら建物跡は建替えがおこなわれたものと考えられるが、その前後関係については不明である。

遺物は、溝埋土中から須恵器の瓦片・高坏片が出上しているが、明確な時期は不明なものである。よって、造構存在時期を明らかにすることはできないが、周辺造構の状況から古墳時代後期頃の可能性が高いものと推測される。

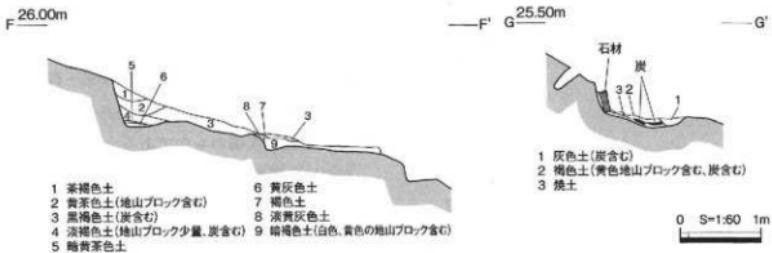
SB-21・22（第223～226図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って作られた、加工段状の掘立柱建物跡と思われるものである。同斜面西側においてはSB-18・19が検出されている。

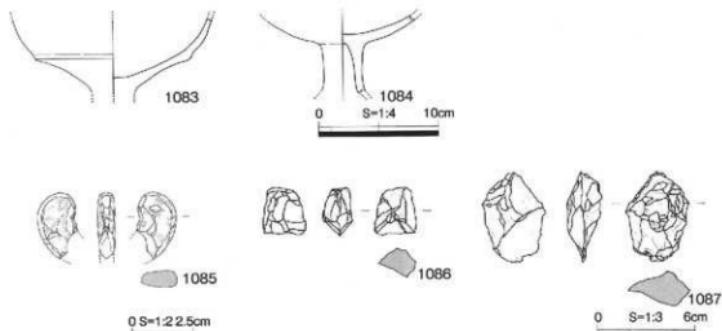
SB-21・22の造構面は、斜面を加工段状に2段に切って作られており、南側（斜面下方側）の大半は流失しているものであった。この造構面からは、溝3条（溝1～3）・柱穴15穴（P1～P15）・土坑（SK01）を検出している。溝は、溝1が幅50～60cm・深さ3～4cm、溝2が幅25～30cm・深さ3～4cm、溝3が幅20～25cm・深さ5～7cmを測り、溝2・3は流水等によって溝状に削られた可能性も考えられる。SB-21は、加工段状に切られた下の段から検出した柱穴P8-P9-P10-P11-P13を桁行とした、桁行4間（4.9m）以上×梁間1間以上の掘立柱建物跡と想定されるものである。柱穴间距離はP8-P9間1.1m、P9-P10間1.1m、P10-P11間1.2m、P11-P13間1.5mを測る。なお、これら柱穴は、堀形がオーバーハングしており、これが柱穴本来の形状を呈するものだとすれば、柱が斜面下方（南側）に倒れる形になることが想像できる。この状況からは到底建物の桁行など考えられないが、この造構面は流水が集まる軟弱地盤であり、造構面がズレを起こした可能性も考えられることから、本報告では掘立柱建物跡と考えておく。ただ、このような斜め方向に穿たれた柱穴列の検出例で、その性格が明確にできるものがあるならば、再検討しなければならない。その他、この東側では長方形状の石を混入する上端径115cm、下端径（底径）60cm、深さ17cmの浅い土坑（SK01）と焼上跡を検出している。土坑（SK01）は深さが極端に浅いことから、この造構面より上層から掘られた可能性が高く、且つ土坑内から木炭が検出されていることから、近世の炭焼き（こ炭焼き）¹⁰ 土坑であった可能性も考えられる。焼上跡はその位置からSB-21に関わるものであったと思われる。SB-22は、加工段状に切られた上の段から検出した柱穴P2-P5を桁行とした、桁行1間（1.85m）以上×梁間1間以上の掘立柱建物跡と想定され



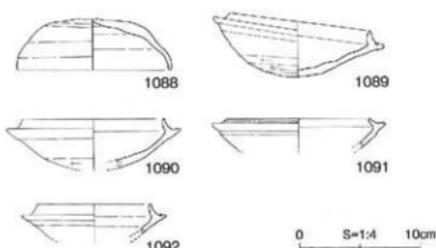
第223図 SB-21・22 平面図・断面図



第224図 SB-21・22、SK01 土層断面図



第225図 SB-21 出土土器・石器(勾玉未製品)

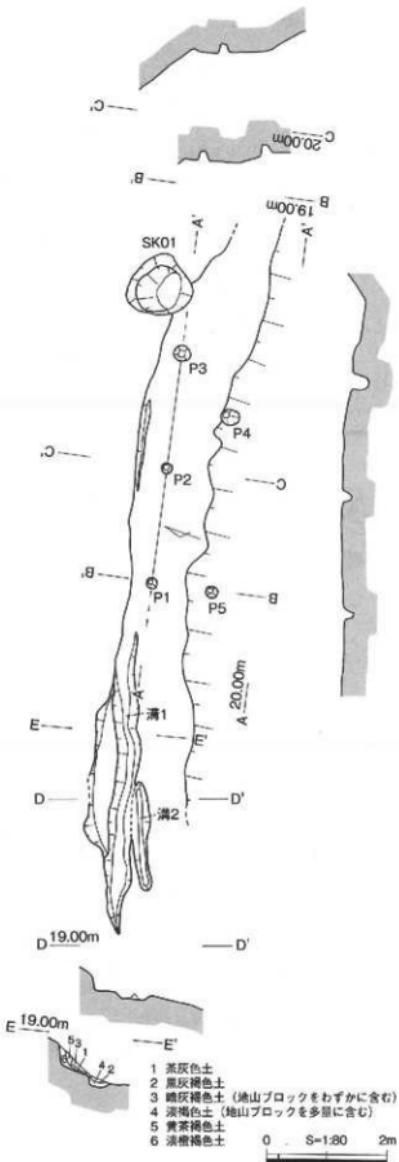


第226図 SB-22 出土土器

るものである。この建物は、溝1を付随していたものと思われ、その溝1の存在位置から東側に1間程度延びていたものとも考えられる。なお、SB-22はSB-21埋没後に作られたことが分かっている。

遺物は、SB-21の遺構面(床面)近くから土師器の高片1088・須恵器の高片1084、P11・P12・P13付近から瑪瑙の勾玉未製品が出土している。また、SB-22に付随する溝1埋土中から須恵器の壺蓋1092、溝1の東側から須恵器の壺身1090・1092、遺構面埋土中から須恵器の壺身1089・1091が出土している。

遺構存在時期は、SB-21の遺構面(床面)近くと、SB-22に付隨する溝1埋土中からの出土土器より、両遺構とも6世紀後半(古墳後期)頃もしくは、それ以前と推定される。



第227図 SB-23 平面図・土層断面図

SB-21 出土遺物（第225図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1083・1084は土師器の高坏の坏部～脚部付近で、1083の坏部には段がみられるものである。5世紀末頃のものであろうか。1085～1087は瑪瑙の勾玉未製品である。1085は一次研磨段階のもので、1086・1087は素材剥片段階のものと思われる。

SB-22 出土遺物（第226図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1088～1092は須恵器である。1088は坏蓋で1089～1092は口縁の立ち上がりが内傾する坏身である。このうち1089は器形に歪みがあるもので、1091は口縁の立ち上がりが無いものである。1088～1090は出雲4期末頃、1091は出雲5期末か6期初頃のものと思われる。

SB-23（第227図）

山頂部丘陵から派生する西側尾根の南側斜面を段状に切って作られた、加工段状の掘立柱建物跡と思われるものである。北側の斜面上方ではSB-18・19・20・21・22等が、南側の斜面下方では遺物を包含する西側自然流水路が検出されている。

この加工段状の遺構面は、南側（斜面下方側）の大半は流失しているものであったが、溝2条（溝1・2）・柱穴5穴（P1～P5）・土坑（SK01）を検出している。溝は、溝1が長さ5m、幅30～45cm・深さ4～5cm、溝2が長さ1.8m、幅20～30cm・深さ3～5cmを測り、両溝とも遺構面の西側において検出している。SB-23は遺構面の東側にて検出したP1-P2-P3を桁行とした、桁行2間（3.8m）以上×梁間1間以上の掘立柱建物跡と想定されるものである。柱穴間距離はP1-P2間1.9m、P2-P3間1.9mを測る。なお、この建物跡の桁行部分と思われるP1-P2-P3の北側には溝のような痕跡が

残っていたことから、雨落ち溝を伴う建物であったかもしれない。また、梁間部分の柱穴は造構面と共に流失しているものと考えられる。その他、検出した溝1・2は建物に付随する雨落ち溝とも考えられるが、これに対応する柱穴が残存する造構面にみられないことから詳細は不明である。また、斜面上で検出している土坑（SK01）は、底から水が湧き出ることが確認されており、人為的なものではなく自然に出来た穴と考えられる。

遺物は、造構面埋土中から須恵器の壺蓋の天井部が出土している。

造構存在時期は以上の出土土器より、6世紀後半～7世紀前半（古墳時代後期）頃もしくは、それ以前と推定される。

（2）北～東側環壕外側造構（第228図）

SI-11（第229～231図）

環壕外側の北側斜面の尾根上に作られた堅穴住居跡である。南側の斜面上方には弥生期のSB-07、東側においては、同じく弥生期のSB-14が検出されている。

SI-11は、壁体溝を付随する主柱穴4穴（P1～P4）によって構成される堅穴住居跡である。造構面の北西側は流失しており、当時存在したであろう北西側の周壁・壁体溝は消滅している。平面プランは、北西・南東側が長い長方形を呈するもので、住居平面規模は、残存する周壁・壁体溝を基に復元したもので、北東・南西辺約4m、北西・南東辺4.2～4.7mを測る。また、残存する住居内の北西側においては、焼上跡を検出している。その他、住居内西側の角から上端34～40cm×66cm、深さ6cmの浅い楕円形の土坑（SK01）を検出している。この土坑は、壁体溝と連結していることから雨水等を貯蓄したものと考えられるが、詳細な用途については不明である。

遺物は、造構面上一層の埋土層である第6層中から土師器の壺片1093、高坏片1095が出土している。また、土坑（SK01）内埋土中から砥石1096が出土している。その他、造構面埋土中から土師器の壺片1094が、SI-11周辺から環壕からの転落物と思われる、弥生上器の壺片1097～1099・壺片1100・高坏片1101が出土している。

造構の存在時期は、造構面上一層の埋土層からの出土土器より古墳時代中期頃と推定される。

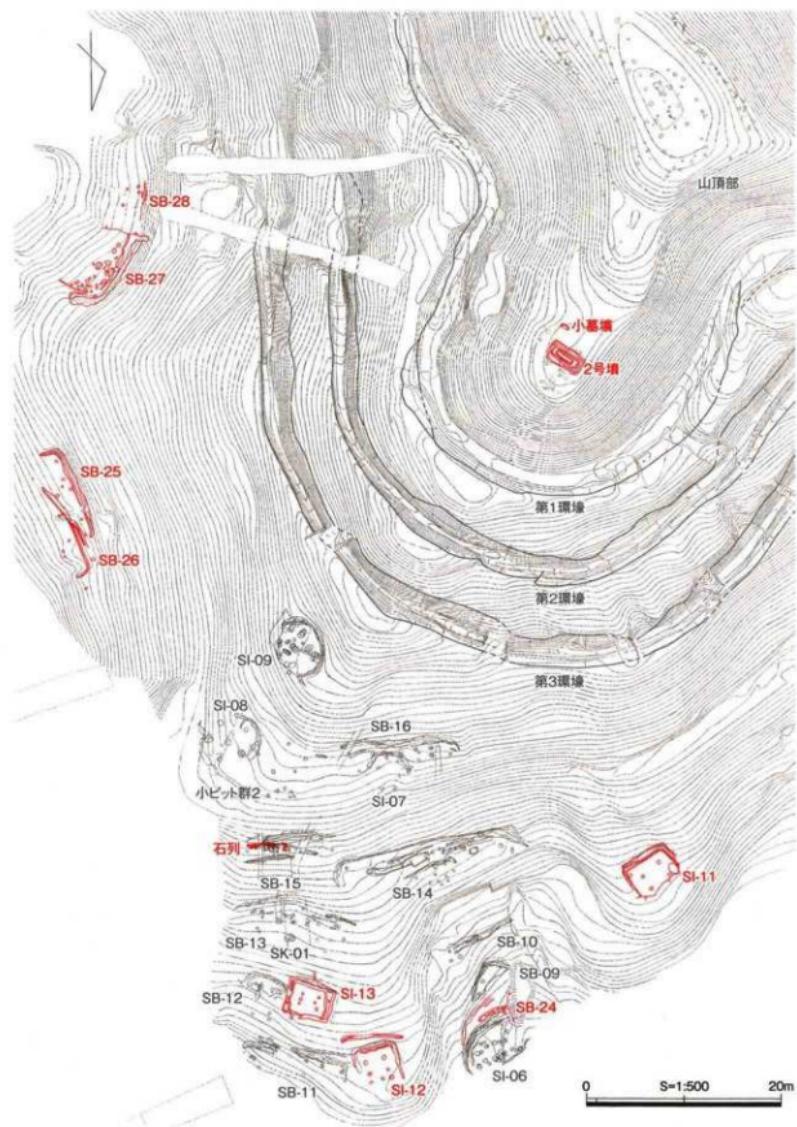
SI-11・SI-11周辺 出土遺物（第230・231図）

※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

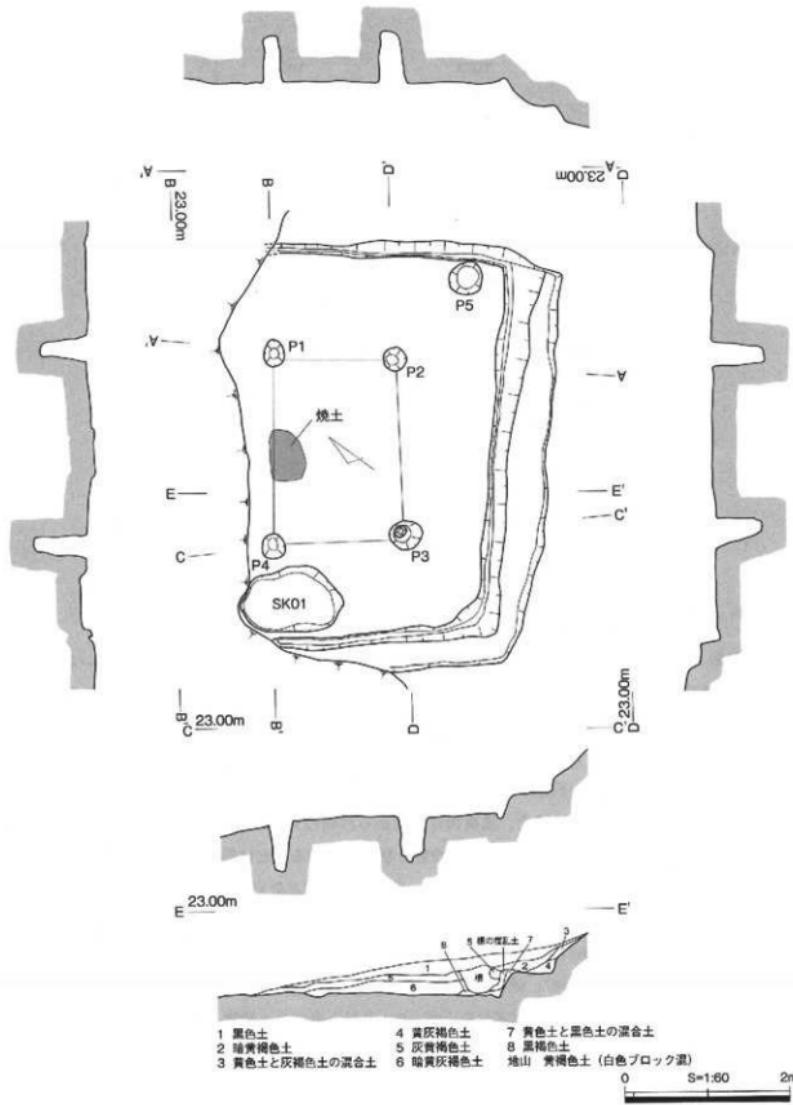
1093・1094は土師器の単純口縁の壺の口縁部～肩部・口縁部で、1095は筒部から屈曲して大きく開く土師器の高坏の筒部～脚部である。1096は側面2面に使用が認められる砥石である。1097～1101は弥生土器である。1097は頸部があり湾曲しない壺の口縁部～頸部で、III-1～2様式と思われる。1098は口縁部に3条の凹線文を施す壺の口縁部で、IV-1～2様式のものと思われる。1099は口縁部が平坦で、頸部に突唇文を施す直口壺の口縁部～頸部である。III-1～2様式と思われる。1100は口縁部に1条の凹線文と刻目、頸部に指頭圧痕文帯を施す、IV-1様式と思われる壺の口縁部～肩部である。1101はIV-1～2様式と思われる高坏の脚部である。

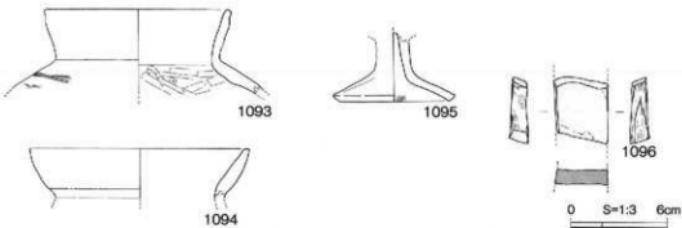
SB-24（第232・233図）

環壕外側の北側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われる造構である。南東側の斜面上方には弥生期のSB-09、北側の斜面下方においては、同じく弥生期のSI-06が検出されて

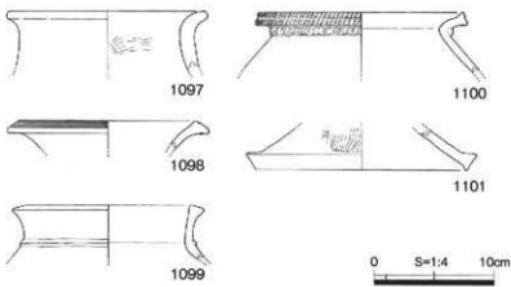


第228図 北～東側環壕外側構造 分布図（古墳時代以降）





第230図 SI-11 出土土器・石器



第231図 SI-11周辺 出土土器

いる。

この加工段状の遺構面からは、溝2条（溝1・2）と柱穴2穴（P1・P2）を検出している。溝1は、幅約30cm・深さ3~4cmを測り、斜面を切って作られた平坦面の際（きわ）に作られている。溝2は、幅25~45cm・深さ9~16cmを測るもので、溝2から1m程度離れた北西側から検出している。柱穴P1・P2は、溝2を切る形で掘られており、溝2より新しいものと思われる。なお、P2は上端径約50cm、下端径（底径）約30cmの大形のもので、柱穴というより土坑と考えたほうが良いのかもしれない。また、遺構面は北西から西側の大半が流失している状況であった。SB-24は、遺構面の残りが悪いことから、全容を明らかにすることは難しいが、検出した溝が建物に付随する雨落ち溝とも考えられることから、掘立柱建物跡と仮定しておく。

遺物は、P2内埋土中より弥生土器か土師器の鉢1102、弥生土器の底部1103、土師器の高坏の脚部1104・土師器の把手付鍋1106等が出土している。また、遺構面埋土の第1層中から土師器の把手付鍋1105、黒曜石製の石鏃1107、砥石1108が出土している。

遺構の存在時期は、詳細な時期は示せないが、P2内埋土中の出土遺物より古墳時代と推定される。

SB-24 出土遺物（第233図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1102はそのプロポーションから鉢と考えられるものだが、弥生土器か土師器か不明なものである。1103は弥生土器の壺・甕・鉢の底部で、1104は土師器の高坏の底部である。1105・1106は土師

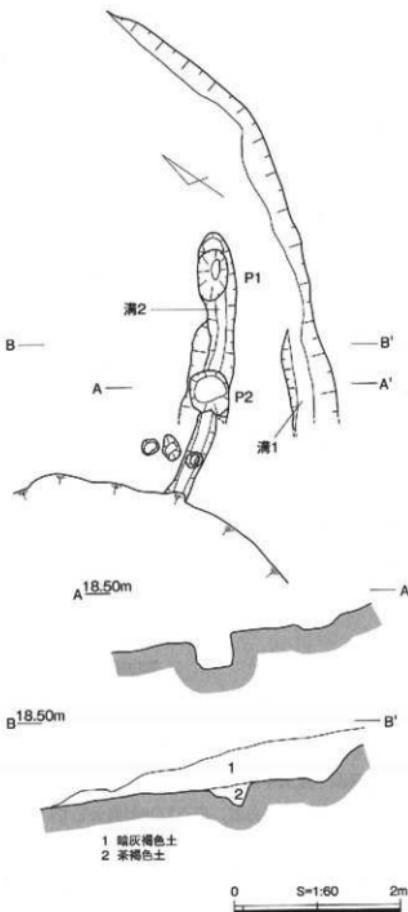
器である。1105は口縁部は直線状に終結し、底部が平底の把手付の鍋と考えられるもので、また、1105は把手部分はあるものの接合できなかった鍋である。1107は黒曜石製の石鎚である。形態は凹基式に属するものと思われるが、基辺の抉りはV字状に大きいものとなっており、他の石鎚とは違う形状を呈している。繩文期の石鎚とも考えられる。1108は表裏2面を使用した砥石で、磨ぎ面は粗目のものである。

SI-12（第234～236図）

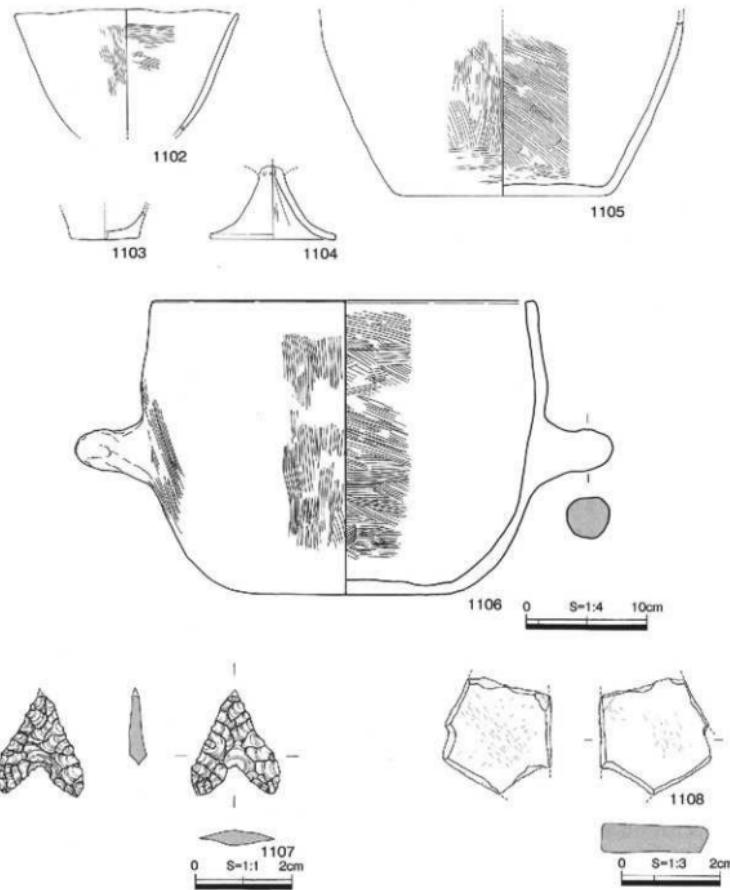
山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面に作られた竪穴住居跡である。南東側の斜面上方ではSI-13が、近接する同斜面の東側においては弥生期のSB-11が検出されている。

SI-12は、壁体溝を付随する主柱穴4穴（P1～P4）によって構成される竪穴住居跡である。北側においては後世の削平の為か、当時存在したであろう周壁は消滅している。また、壁体溝は南側付近のみ残存している。平面プランは、東・西側が長い長方形を呈し、住居平面規模は、残存する周壁を基に復元したもので、東・西辺約4.5～4.8m、北・南辺3.9～4.2mを測る。その他、住居内の南北西角付近において、焼上跡、主柱穴以外の柱穴4穴（P5～P8）を検出している。このうち、P5～P6もしくは、P8～P6はSI-10でみられた2穴の主柱穴で構成された住居跡の建替えを示すものとも考えられるが、検出した遺構面に建替えの痕跡がみられないことから、その可能性があるものとだけに留めておく。その他、住居外の斜面上方の南側から、東端がL字状に屈曲していたと思われる幅20～46cm、深さ2cmの溝を検出している。この溝は、SI-12と平行して存在するものではないことから、SI-12に伴わない別の遺構であった可能性も考えられる。

遺物は、遺構面から土師器の瓦片



第232図 SB-24 平面図・断面図



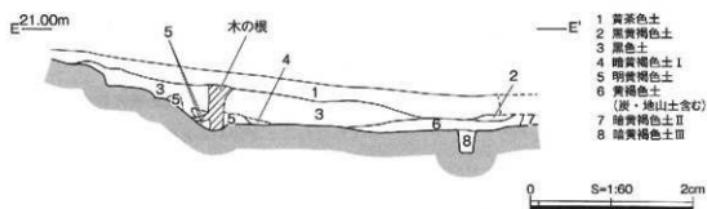
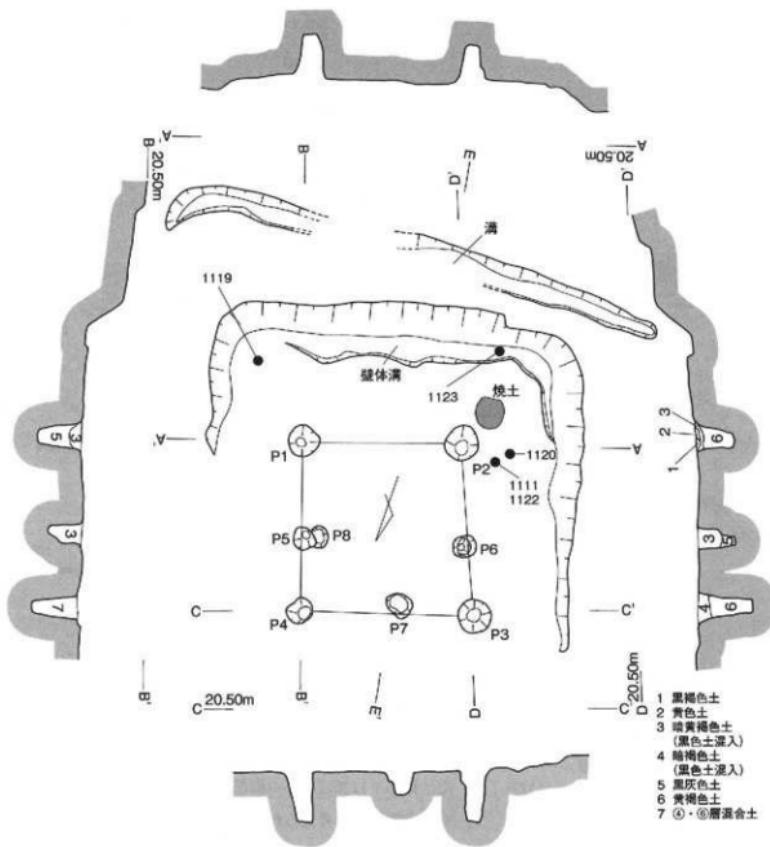
第233図 SB-24 出土土器・石器

1109・1111・高坏片1118～1122、壁体溝内埋土中から土師器の高坏片1123が出土している。その他、遺構面上埋土中から土師器の壺片1110・1112～1115・坏片1116・高坏片1117・1124～1126、黒曜石製の石鏃未製品1127、砥石1128が出土している。

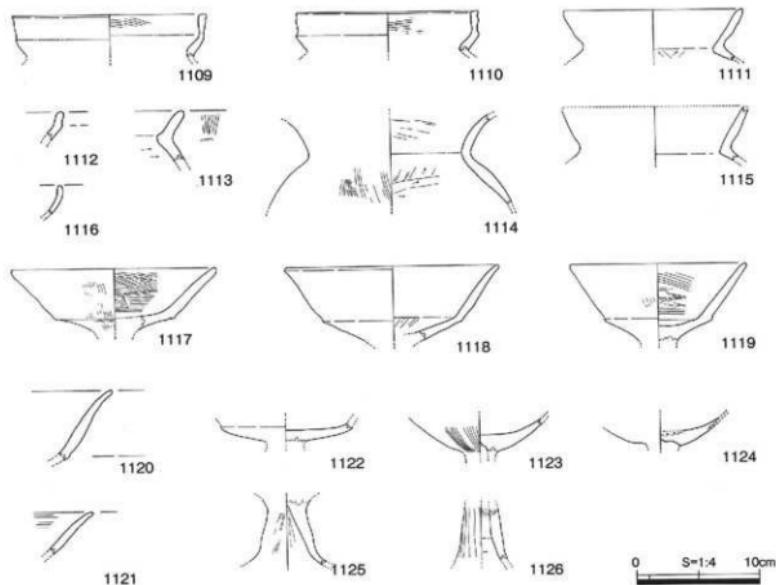
遺構の存在時期は、遺構面からの出土土器より古墳時代中期頃と推定される。

SI-12 出土遺物（第235・236図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

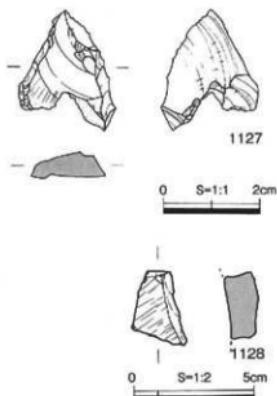
1109～1126は土師器である。1109・1110・1112は退化した二重口縁の壺の口縁部で、1111・1113～1115は単純口縁の壺の口縁部～頸部・口縁部～肩部付近である。このうち1113の外面には煤



第234図 SI-12 平面図・土層断面図



第235図 SI-12 出土土器



第236図 SI-12 出土石器

の付着も認められる。1116は口縁部が内湾する壊の口縁部で、1117～1121は高壊の壊部である。1117～1120には壊部に段が付いている。1122～1124は高壊の壊部と脚部の接合部付近で、1122は壊部有段のものと思われる。また、1125・1126は高壊の脚部である。1127は黒曜石製の石鎚未製品とも考えられるもので、1128は1面に使用痕がみられる砥石である。

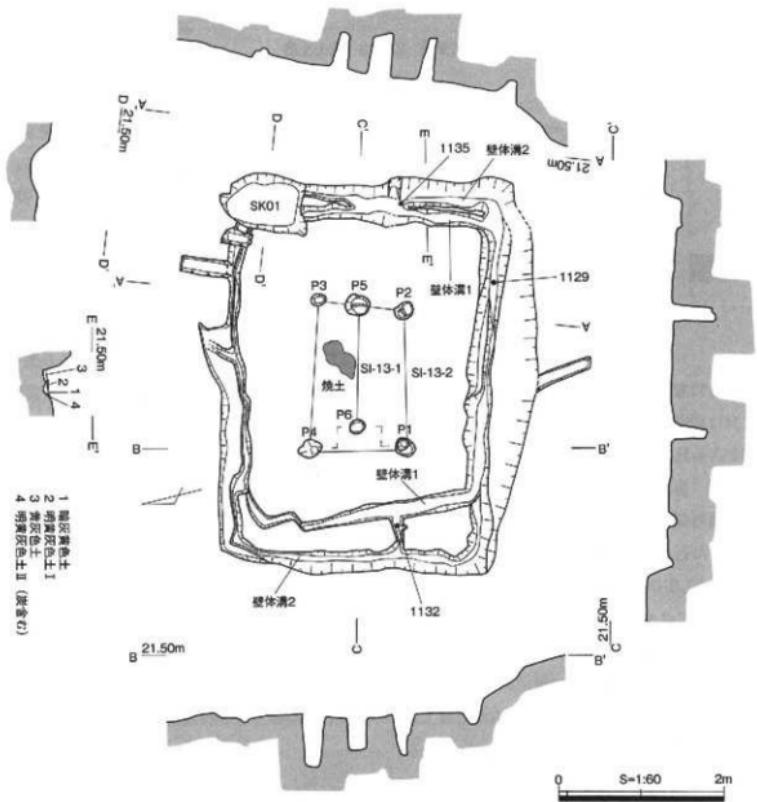
SI-13 (第237～239図)

山頂部から派生する北側尾根の環壕外側の緩斜面に作られた竪穴住居跡である。北西側の斜面下方ではSI-12が、近接する同斜面の東側においては弥生期のSB-12が検出されている。

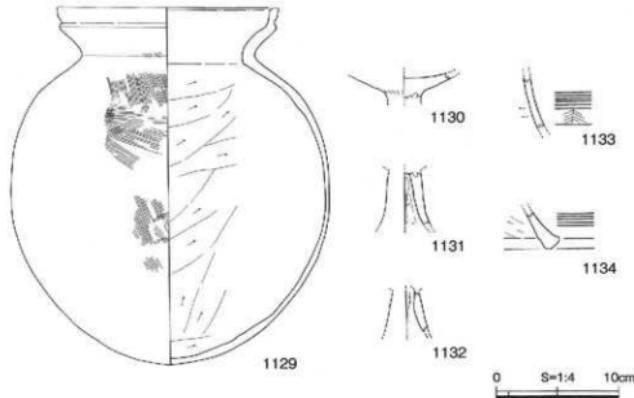
この竪穴住居跡は、壁体溝の検出状況から建替えがおこなわれたことが分かるもので、平面規模が小さいもの(SI-13-1)から大きいもの(SI-13-2)へと作り変えられている。SI-13-1は、内側の壁体溝1を付随する主柱穴2穴(P5・P6)によって構成される竪穴

住居跡である。西側の周壁は、後に拡張されたSI-13-2によって削平されているが、壁体溝はその痕跡を残している。平面プランは、南・北側が長い長方形を呈するもので、住居平面規模は壁体溝を含め、東西辺2.9~3.2m、南北辺3.4~3.6mを測る。SI-13-2は、外側の壁体溝2を付随する主柱穴4穴（P1~P4）によって構成された堅穴住居跡である。平面プランは、SI-13-1同様、南・北側が長い長方形を呈するもので、住居平面規模は壁体溝を含め、東西辺3.1~3.3m、南北辺4.5mを測る。その他、住居跡内中央付近から焼土跡、北東隅から土坑（SK01）を検出している。土坑（SK01）は、上端68cm×90~100cm、深さ15cmの楕円形を呈するもので、壁体溝と連結していることから雨水等を貯蓄したものと考えられるが、詳細な用途については不明である。焼土跡と土坑は、検出状況からSI-13-2に伴うものと思われる。

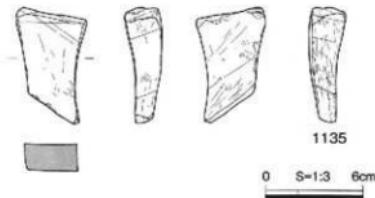
遺物は、南東側の壁体溝から土師器の壺1129が潰れた形で出土している。また、東側の壁体溝2上からは砥石1135が出土している。その他、壁体溝2内埋土中から土師器の高壙片1132~1134、遺



第237図 SI-13 平面図・断面図



第238図 SI-13 出土土器



第239図 SI-13 出土石器

構面上埋土中から土師器の高坏片1130、調査排土中から土師器の高坏片1131が出土している。

遺構存続時期は、壁体溝または、壁体溝内埋土中からの出土土器より、古墳時代中期頃と推定される。

SI-13 出土遺物（第238・239図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

1129は退化した二重口縁をもつ土師器の壺である。1130～1134は土師器の高坏で、1130は坏部と脚部の接合部付近、1131・1132は筒部、1130・1134は脚部である。このうち1130・1134は同一個体と思われ、1130には平行線文と羽状文に1本の線が入る施文、1132には平行線文がみられる。また、1135は4面に使用痕がみられる砥石である。

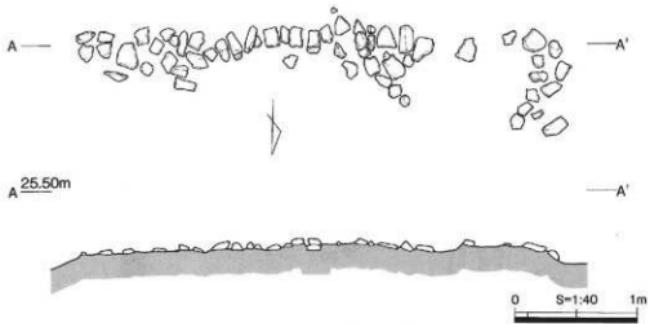
石列（第240図）

環濠外側の東側斜面上で検出した直線状に並ぶ石である。弥生期のSB-15の直上に位置する。検出した石は扁平な自然石で、表土除去後に現れたことから比較的新しいものと考えられる。石列の西端がL字状に曲がる様相をみせることから当初は、貼石墓の可能性も考えられたが、斜面上に位置することや、これら石が斜面に対してそのまま置かれている状況などから、近代の所産であると考えている。なお、これに関わる遺物は出土していない。

SB-25・26（第241～243図）

環濠外側の東側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われる遺構である。北西側の斜面上方には弥生期のSI-09が検出されている。

斜面を切って平坦面を作った加工段は2ヶ所においてみられ、その平坦面では柱穴を、また平坦面の際（きわ）では溝を検出している。溝は、溝1が幅30～40cm・深さ7～18cm、溝2が幅約20



第240図 石列 平面図・断面図

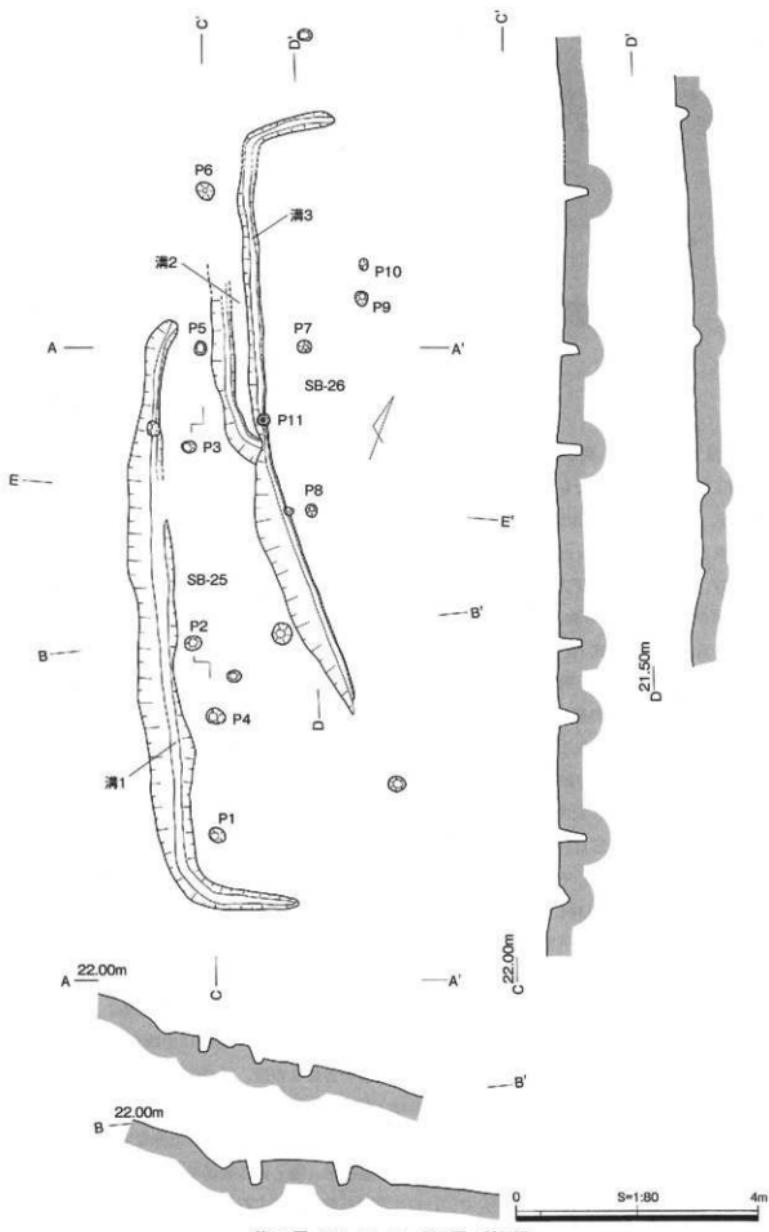
cm・深さ8~16cm、溝3が幅15~20cm・深さ3~7cmを測る。SB-25は、斜面上方側に位置する加工段を遺構面としたもので、南西側で斜面下方に向かって折れ曲がる雨落ち溝と思われる溝1と柱穴(P1~P5)を検出している。当遺構は、溝と柱穴が共存することから掘立柱建物跡と想定されるが、柱穴(P1~P5)が直線状に並ばないことから、建物の全容は明らかではない。SB-26は、SB-25の斜面下方側の加工段を遺構面としたもので、雨落ち溝と思われる溝3と柱穴(P7~P10)を遺構面から検出している。SB-26も雨落ち溝と柱穴が共存することから掘立柱建物跡と考えられるが、柱穴(P7~P10)の配列に規則性がみられないことや、その柱穴の検出数の少なさから、建物の全容を明らかにすることはできていない。なお、SB-25とSB-26には新旧関係が認められ、SB-25の後にSB-26が作られたことが分かっている。その他、溝2をSB-26と切れ合う形で検出している。この溝2も建物に付随する雨落ち溝と考えられるが、この遺構面の大半が消失していることから詳細は不明である。

遺物は、SB-25の柱穴内埋土中から土師器の壺片1136、SB-25遺構面埋土中から土師質土器の台付皿片1139・坏底部1141が出土している。また、SB-26の遺構面からは土師質土器の高台付坏片1137が出土している。その他周辺からは、土師質土器の底部1140・土師質土器の高台付坏底部1142、弥生土器の壺片1144・底部1145、黒曜石製の石鐵片1146・1147が出土している。

遺構の存在時期は、SB-25・26共に平安時代後期頃もしくは、それ以降と推定される。

SB-25・26 出土遺物（第243図）※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

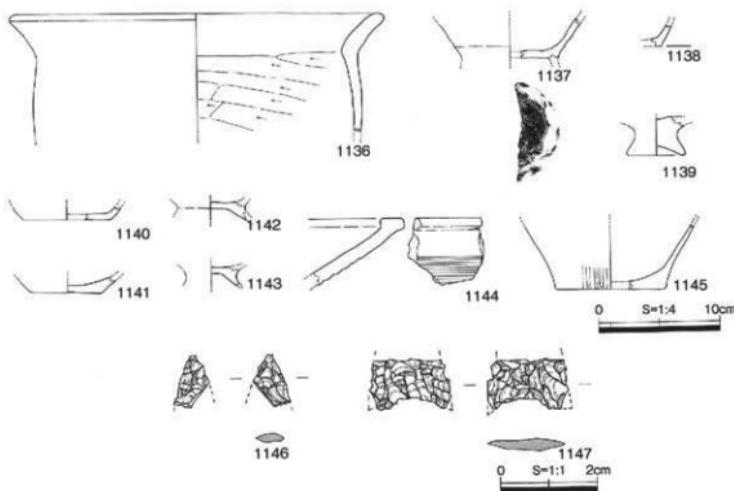
1136は胴部の張りが少ない土師器の壺で、外面には煤の付着がみられるものである。1137は底部に回転糸切り痕がみられる上師質土器の高台付きの坏である。1138・1140は土師質土器の底部で、1140には回転糸切り痕がみられる。1139は上師質土器の台付きの皿、1141は回転糸切り痕がみられる坏の底部と思われるものである。1142・1143は土師質土器の高台付きの坏の底部と思われるものである。1144は口縁端部が平坦を成し、口縁部下に5条以上の凹線文を施した弥生土器の壺の口縁部で、IV-1様式のものと思われる。1145は弥生土器の壺・壺・鉢の底部である。1146は珪質岩とも思われる白色石材の石鐵の先端部分で、1147は黒曜石製の四基式石鐵の基部付近である。



第241図 SB-25・26 平面図・断面図



第242図 SB-25・26 土層断面図



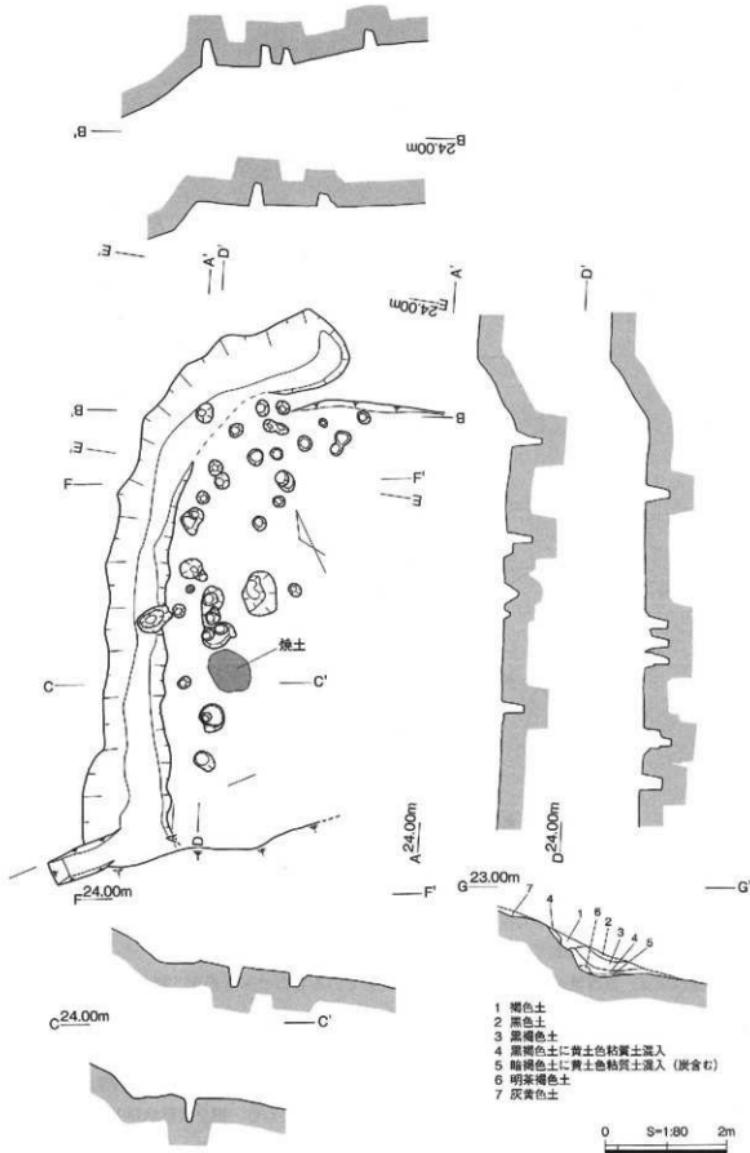
第243図 SB-25・26 出土器・石器

SB-27 (第244・245図)

環壕外側の東側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われる遺構である。南側の同斜面ではSB-28が検出されている。

この遺構面は、南西側から南東側に渡って消失しているものであったが、残存する遺構面から、幅40~80cm・深さ3~12cmの溝と柱穴33穴と焼土跡を検出している。溝は、斜面を切って作られた平坦面（遺構面）の際（きわ）で検出しており、建物に付随する雨落ち溝とも考えられる。また、柱穴は溝に沿う形でランダムに存在しており、その配列に建物等を想定させる規則性はみられない。当遺構は、雨落ち溝ともみられる溝と柱穴が共存することから、掘立柱建物跡と想定しておきたいが、この多くの柱穴はどのようなものであったのか等、その全容は明らかではない。

遺物は、遺構面から土師質土器の高台付底部1148、土師器の甕片1154・1155、柱穴内埋土中から



第244図 SB-27 平面図・土層断面図

土師質土器の壺底部1149・1151、陶器小皿片1153が出土している。その他、遺構面埋土層の第3層中からは、土師質土器の壺底部1150・1152、須恵器の壺片1156、弥生土器の底部1157が出土している。

遺構の存在時期は、遺構面上の出土土器等から平安時代後期もしくは、それ以降と推定される。なお、埋土中から陶器小皿片が出土する柱穴もあることから、当遺構は時期の違う遺構（柱穴）が混在している可能性も考えられる。

SB-27 出土遺物 (第245図) ※遺物の法量等の詳細は遺物観察表を参照。

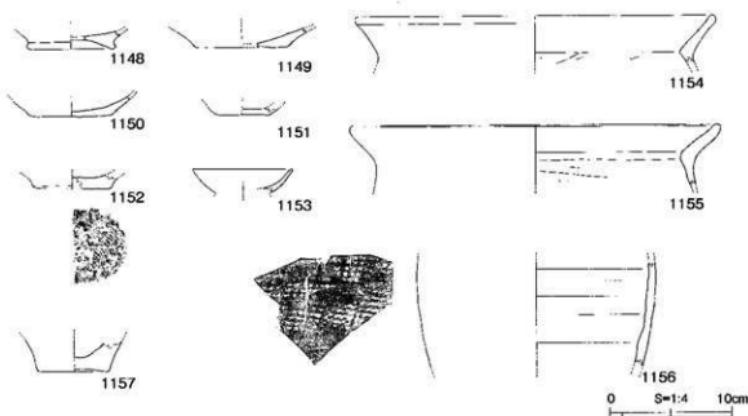
1148～1152は土師質土器である。1148は低い高台が付く、高台付壺の底部で、1149～1152は壺の底部である。また、1152には回転糸切り痕がみられる。1153は灰釉が内面全体と外縁部に薄くかかる乳灰色の陶器の小皿である。1154・1155は口縁部が外傾する土師器の壺の口縁部～頸部で、1155の頸部外面には炭化物の付着がみられる。1156は外面に格子タタキがみえる須恵器の壺の頸部である。1157は弥生土器の壺・甕・鉢の底部である。

SB-28 (第246図)

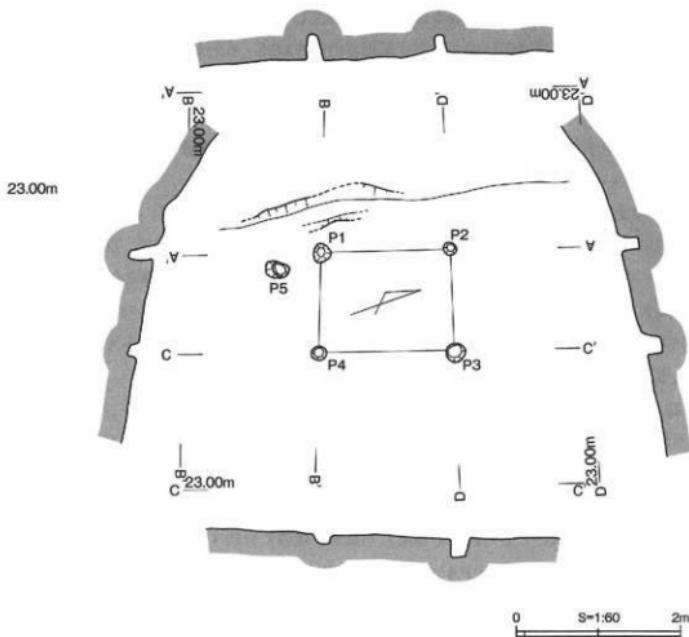
環壕外側の東側斜面を切って作られた加工段状の掘立柱建物跡と思われる遺構である。北側の同斜面ではSB-27が検出されている。

ここからは、溝の痕跡と柱穴5穴 (P1～P5) を検出している。溝は、斜面を切って作られた遺構面の際（きわ）においてその痕跡を検出しており、建物に付随する雨落ち溝であった可能性が考えられる。この溝と柱穴 (P1～P4) から桁行1間 (1.25m) × 梁間 (1.65m) の掘立柱建物跡が存在していたものと推測するが、この南・北・東側は遺構面の残存状況が非常に悪いことから、桁行・梁間共にこれ以上の規模をもっていた可能性も考えられる。

遺物は、これら付近からの出土はみられなかった。遺物の出土がなかったことから、遺構の存在時期は不明である。



第245図 SB-27 出土土器



第246図 SB-28 平面図・断面図

註

- (1) 『田和山古墳群発掘調査概報』松江市文化財調査報告書第47集、松江市教育委員会 1991.3
- (2) 墓穴住居跡・掘立柱建物跡の同位置での建替えの可能性が考えられたものは枝番号にて表現しているため、この棟数には数えられていない。
- (3) 本書、第5章「自然化学分析と検討『田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳遺跡出土のサスカイト製造物および黒曜石製造物の原材料产地分析』」京都大学原子炉実験所 藤井哲男を参照。
- (4) こ炭焼きは、自家消費用の簡素な炭窯で古墳時代から近世まで活用されていたものである。

参考文献

- ・大谷見二「山雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌 第11集』1994.3 島根考古学会
- ・平井 勝「弥生時代の石器」『考古学ライブラリー 64』ニュー・サイエンス社
- ・松木武彦「田和山遺跡鑑定書」2001.1.23
- ・松本岩雄「山雲・隱岐地域 山陽・山陰編」「弥生土器の様式と編年」木耳社

第5章 自然科学分析と検討

田和山遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社 金井 慎二

はじめに

今回の分析目的は、田和山遺跡で確認されている弥生時代前期末および中期後半の環壕堆積物について花粉分析・植物珪酸体分析を実施し、当時の古環境に関する情報を得ることにある。

本遺跡は、宍道湖へ流下する足部川の中流域に展開する乃木平野の東部に独立して存在する田和山と呼ばれる丘陵の北半部に位置する。丘陵を構成する堆積物は、新第三紀前期～中期中新世の布志名層のシルト岩および泥岩からなる（鹿野ほか, 1994）。弥生時代前期末および弥生時代中期後半の環壕は、この丘陵頂部（標高約46m）直下の斜面に構築されている。環壕の内側からは9本柱造構・5本柱造構・柵跡・加工段が、また外側からは住居跡・焼土などが検出されている。遺跡立地環境から花粉化石の保存状態が悪いことが予測されたため、当時の環境に関する情報を得るために環壕内堆積物中の炭化材や住居址出土炭化材の樹種同定も合わせて実施した。

1. 調査地点・試料

分析試料は、弥生時代前期末～中期初頭の環壕堆積物（1・2地点）、弥生時代中期後半の環壕堆積物（3地点）を中心に採取した（図3）。調査地点の代表的な層序を模式柱状図として図1に示す。以下に各地点の堆積状況の概要および試料採取位置について示す。

1 地点：本地点では、弥生時代中期後半の環壕構築面より下位の堆積物が観察された。弥生時代中期後半の環壕の下位には、弥生時代前期末～中期初頭の環壕が確認されている。弥生時代前期末～中期初頭の環壕埋積物は、最下部が厚さ5cm程度の暗灰色の腐植質の砂質シルト層からなる。周囲から流れ込んだとみられる炭化物片が混じり、弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土する。本層の上位には丘陵を構成するシルト岩の風化した礫片を多く含む黄褐色の砂・礫層が累重する。シルト岩の風化礫の配置は不規則である。

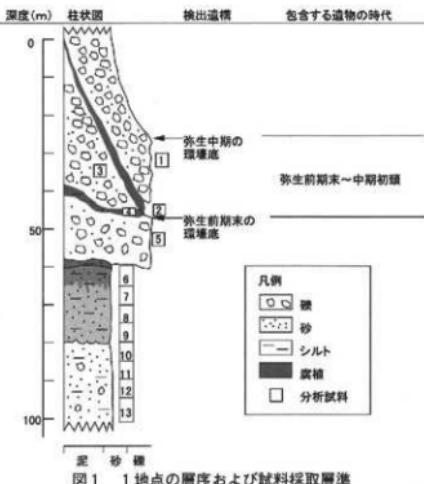


図1 1地点の層序および試料採取層準

り、マトリクスをなすシルトの構造も乱れていることから、人為的に埋め戻された堆積物と考えられる。本堆積物上部には土壤化したとみられる腐植に富む層準が認められる。本層から弥生時代前期末～中期初頭の遺物が出土する。弥生時代前期末～中期初頭の環壕が構築されているベースをなす堆積物は、風化したシルト岩片が多く含む、細粒砂層からなる。本層も擾乱されており、盛土と判断される。その直下には盛土が行われる直前の丘陵の表層を構成する堆積物が認められる。旧表土は丘陵を構成するシルト岩が風化したシルト質堆積物からなり、上部が土壤化しており、樹木根の痕跡が認められる。

試料は、弥生時代前期末～中期初頭の環壕埋積物から旧表土までの13層準から採取した。分析は、弥生時代前期末～中期初頭の環壕埋積物上部の腐植質層準（試料2）、埋積物下部の腐植質砂質シルト層（試料4）、盛土以前の丘陵表土の土壤化層準（試料6）とその下位の層準（試料8）を選択した。

2 地点：本地点では弥生時代前期末～中期初頭の環壕を充填する堆積物の断面が観察された。環壕埋積物は、最下部に厚さ5cm程度の風化したシルト岩片を含む暗灰色シルト質細粒砂、その上位にシルト岩片と細粒砂からなる堆積物が累重する。下部堆積物からは炭化物が出土する。上位の堆積物は、岩片の配置がランダムであり、著しい擾乱の痕跡が認められることから盛土と判断される。盛土中には有機質に富むシルト質細粒砂の薄層をレンズ状に挟在する。

試料は環壕内堆積物最下部層準（試料4）、上部の腐植質に富む2層準（試料1・3）より採取した。

3 地点：本地点は弥生時代中期後半の環壕の端部に位置する。環壕埋積物の一部が観察された。環壕埋積物はシルト質細粒砂からなる。試料は、環壕埋積物および環壕直下の旧表土から採取し、分析には環壕埋積物1点（試料1）を選択した。

以上の各地点の堆積物試料の他、1地点の環壕埋積物最下部から出土した炭化材1点、SI-09で出土した炭化材5点（試料4・12～15）も併せて採取し、樹種同定試料とした。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約30gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。

(2) 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレンナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞

に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集の層位分布図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求める。

（3）樹種同定

木口（横断面）・柱口（放射断面）・板口（接線断面）の3断面の割断面を作製し、光学顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結 果

（1）花粉分析

結果を表1に示す。分析を行った全試料で花粉化石の保存状態が悪く、検出される花粉化石数が少なかった。プレパラートには植物に由来する微細な組織片が認められた。

検出された種類は、木本花粉では針葉樹のツガ属・マツ属・コナラ属・アカガシ属・クリ属-シノキ属、草本花粉ではイネ科、セリ科、ヨモギ属、キク亞科、シダ類胞子ではイノモトソウ属と種類が特定できないシダ類胞子が確認された。これらの種類は、ほとんどが1地点の弥生時代前中期～中期初頭環境の試料4から検出された。

（2）植物珪酸体分析

結果を表2、図2に示す。各試料から検出された植物珪酸体の保存状態は悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。各地点の産状を以下に述べる。

・1 地点

植物珪酸体は、試料2・4で検出個数が少ないが、植物珪酸体の産状は各試料で同様であり、クマザサ属とネザサ節を含むタケ亞科の産出が日立つ。また、試料4・6ではイチゴツナギ亞科もわずかに認められる。なお、試料8・6・4では、樹木起源珪酸体第Ⅲグループや第Ⅳグループ（近藤・ピアスン、1981）が検出される。第Ⅲグループは「Y」あるいは「く」の字状の形態を呈し、大部分の樹木葉部に観察される。第Ⅳグループは網目模様の付いた紡錘形を呈し、第Ⅲグループと同様に大部分の樹木葉部で観察される。

表1 花粉分析結果

種類	地点・試料番号							
	1地点		2地点		3地点			
	2	4	6	8	1	3	4	1
木本花粉								
ツガ属	-	1	-	-	-	-	-	-
マツ属	-	2	-	-	-	-	-	-
コナラ属	-	1	-	-	-	-	-	-
コナラ属アカガシ属	-	-	1	-	-	-	-	-
クリ属-シノキ属	-	5	-	-	-	-	-	-
草本花粉								
イネ科	-	2	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	3	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	3	-	-	-	-	-	-
キク亞科	-	3	-	-	-	-	1	-
小明花粉	-	5	-	-	-	-	-	-
シダ類胞子								
イノモトソウ属	1	2	-	-	-	-	-	-
他のシダ類胞子	37	49	2	15	6	19	4	4
合計								
木本花粉	0	9	1	0	0	0	0	0
草本花粉	0	11	0	0	0	0	1	0
小明花粉	0	5	0	0	0	0	0	0
シダ類胞子	38	51	2	15	6	19	4	4
総計（不明を除く）	38	71	3	15	6	19	5	4

・ 2 地点

試料 1・3・4 の中では、試料 4 の検出個数が少ない。各試料での産状は、1 地点と類似した傾向を示しており、クマザ

サ属とネザサ節を含むタ

ケア科の産出が目立つ。

またヨシ属、ススキ属、

イチゴツナギ亞科もわず

か、あるいは稀に認めら

れる。

この他、樹木起源珪酸

体第Ⅳグループが検出さ

れる。

・ 3 地点

植物珪酸体群集は、種

類構成が単純である。試

料 1 では、クマザサ属を

含むタケア科の産出が目

立ち、ヨシ属の起動細胞

珪酸体がわずかに認めら

れる。

表 2 花粉分析結果

種類	地点・試料番号							
	1 地点				2 地点			3 地点
	2	4	6	8	1	3	4	1
イネ科葉部短細胞珪酸体								
タケア科クマザサ属	1	5	30	15	30	17	3	9
タケア科ネザサ節	-	2	20	12	14	2	-	-
タケ亞科	12	40	180	96	105	90	7	36
ヨシ属	-	-	-	-	2	1	1	-
ウシクサ族ススキ属	-	-	-	-	2	1	-	-
イチゴツナギ亞科	-	1	3	-	3	-	-	-
不明キビ型	1	-	10	5	4	2	1	1
不明ヒゲシバ型	-	-	14	1	-	5	-	1
不明ダンチク型	-	7	12	4	3	1	-	1
イネ科葉身機動細胞珪酸体								
タケア科クマザサ属	1	6	23	14	28	41	8	17
タケア科ネザサ節	-	2	12	9	13	4	1	-
タケ亞科	11	20	71	102	120	67	30	33
ヨシ属	-	-	-	-	2	1	-	1
ウシクサ族	-	-	-	1	-	-	-	-
不明	1	5	3	10	11	6	7	3
合計								
イネ科葉部短細胞珪酸体	14	55	269	133	163	119	12	48
イネ科葉身機動細胞珪酸体	13	33	109	136	174	119	46	54
総計	27	88	378	269	337	238	58	102
樹木起源								
第Ⅲグループ	-	3	-	-	-	-	-	-
第Ⅳグループ	-	-	2	7	2	2	1	2

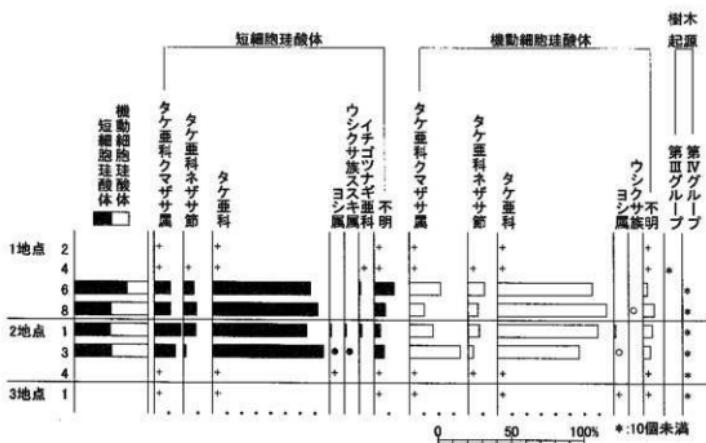


図 2 各地点の植物珪酸体群集

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は 1%未満、+は 100 個体未満の試料で検出された種類を示す。また、樹木起源珪酸体の産状を * で示す。

(3) 樹種同定

樹種同定結果を表3に示す。炭化材は、広葉樹のスダジイとケンボナシ属に同定された。主な解剖学的特徴を以下に記す。

- ・スダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai) ブナ科シイノキ属

環孔性放射孔材で、孔圈部は3~4列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、單列、1~20細胞高。

- ・ケンボナシ属 (*Hovenia*) クロウメモドキ科

環孔材で孔圈部は1~3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減する。小道管は厚壁で、単独または放射方向に2~3個が複合する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は異性III~II型、1~5細胞幅、1~50細胞高。

表3 樹種同定結果

選択・地点	試料番号	試料の質		樹種
		試料2 採取標準	炭化材	
SI-11	4	炭化材	スダジイ	
	12	炭化材	スダジイ	
	13	炭化材	ケンボナシ属	
	14	炭化材	スダジイ	
	15	炭化材	スダジイ	

4. 考 察

今回の各分析結果から、弥生時代前期以前、弥生時代前期末～中期初頭、弥生時代中期後半の各時期の古植生に関する検討を行う。

弥生時代前期末以前：弥生時代前期末～中期初頭の環境のベースを構成する盛土の下位堆積物（1地点試料6・8）が相当する。堆積物は丘陵を構成するシルト岩の風化物からなり、上部は土壤化している。堆積物の断面には樹木に由来する根痕が認められた。本堆積物からは、花粉化石はほとんど検出されず、上位の土壤化層から保存状態の悪いアカガシ亜属が検出されただけである。一般的に常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村, 1967；徳永・山内, 1971）。今回の結果も、堆積時あるいは堆積後の経年変化により、花粉化石が分解・消失したことを示している。

植物珪酸体では、クマザサ属、ネザサ節、その他のタケ亜科、イチゴツナギ亜科、樹木起源の第IVグループに属する珪酸体が検出された。この中ではクマザサ属を含むタケ亜科が卓越した。これらの植物が当時の丘陵およびその周辺の植生を構成する要素であったとみられる。これらのうち、クマザサ属は林床下、ネザサ節は林縁などの開けた場所に生育する種を含む分類群である。樹木起源の植物珪酸体が検出されることを合わせ考えると、おそらく当時の調査地点周辺には林分が存在し、その林床にはクマザサ属が分布し、林縁部などの開けた場所にネザサ節が分布していたことが推定される。なお、多産したタケ亜科の植物珪酸体は、他のイネ科に由来する植物珪酸体と比較して風化に強く、植物体における珪酸体生産量が多いという特徴をもっている（近藤, 1982；杉山・藤原, 1986）。そのため、堆積物中において、他の種類よりも残存しやすく、実際の植生に比較して過大に評価されている可能性がある。今回の結果も植物珪酸体の保存状態が全体的に悪かったことから、過大に評価されていると考えるのが妥当である。また、当時の林分の様相については、今回の結果からは推定することは難しいが、検出された樹木起源の植物珪酸体から次のようなことが推定される。近藤・ピアソン（1981）によると、今回検出された第IIIグループと第IVグループに属する

形態をもつ植物珪酸体は、ブナ科・モクレン科・マンサク科などの仲間に形成されること、暖温帶常緑広葉樹林（いわゆる照葉樹林）を構成する樹木の葉部にも形成されることが確認されている。花粉化石ではアカガシ亜属が検出されただけであるが、下述する弥生時代前期末以降の炭化物や花粉化石の産状をみると、暖温帶性の樹種も当時の林分を構成する要素であったことが推定される。

弥生時代前期末～中期初頭：本時期の堆積物は、弥生時代前期末～中期初頭の環壕底部に堆積した堆積物（1地点試料4、2地点試料4）と、その上位の盛土中の土壤化している堆積物（1地点試料2および2地点試料1・3）が相当する。環壕底部の堆積物は、丘陵を構成するシルト岩の風化礫片や炭化物を多く含む暗灰色シルトからなる。取り込まれていた炭化材の樹種はスダジイであった。これらの堆積物からは、花粉化石では針葉樹のツガ属・マツ属、広葉樹のコナラ亜属・クリ属・シノキ属、草本類のイネ科、セリ科、ヨモギ属、キク亜科が産出したが、いずれも保存状態が悪かった。植物珪酸体も保存状態が悪く検出数が少なかったが、クマザサ属・ネザサ節などタケ亜科のほか、ヨシ属・ススキ属などが認められた。このような化石の産状から、本時期も基本的には上述の弥生時代前期末以前の時期と類似した植物が存在したことが推定される。ただし、前時期には検出されていなかったススキ属やヨシ属などが認められるようになり、これらの植物が開けた場所に分布する種類であることから、周囲の植生環境は多少なりとも変化したことが推測される。当時の人の活動とも同調的な傾向であり、今後、さらに調査地点を増やし検討していく必要があるだろう。

弥生時代中期後半：本時期の堆積物は弥生時代中期後半の環壕内堆積物（3地点の試料1）が相当する。本堆積物からは花粉化石がほとんど検出されなかった。植物珪酸体は保存状態が悪かったが、前時期と同様な種類が検出された。前時期と同様な植物が分布していた可能性がある。また、環壕外側の第3環壕付近に構築されていたSI-09から出土した炭化材は、多くがスダジイに同定された。スダジイは暖温帶林の構成要素でもあり、沿岸部において特徴的に認められる。本遺構から出土した炭化材は、丘陵に分布していた樹木を利用している可能性がある。そうだとすると、丘陵部にはタケジイなどが生育する暖温帶林が成立していた可能性が考えられる。

引用文献

- 鹿野和彦・山内靖喜・高安克巳・松浦浩久・豊 遼秋（1994）地域地質研究報告5万分の1地質図幅「松江地域の地質」、126p., 地質調査所。
- 近藤錬三（1982）Plant opal分析による黒色腐植層の成因究明に関する研究、昭和56年度科学研究費（一般研究C）研究成果報告書、32p.
- 近藤錬三・ピアソン友子（1981）樹木葉のケイ酸体に関する研究（第2報）双子葉被子植物樹木葉の植物ケイ酸体について、帯広畜産大学研究報告、12, p. 217-229.
- 近藤錬三・佐瀬 隆（1986）植物珪酸体分析、その特性と応用、第四紀研究、25, p. 31-64.
- 中村 純（1967）花粉分析、232p., 古今書院。
- 杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞壁酸体の形態によるタケ亜科植物の同定-古環境推定の基礎資料として-、考古学と自然科学、19, p. 69-84.
- 徳永重元・山内禪子（1971）花粉・孢子、「化石の研究法」、p. 50-73、共立出版株式会社。

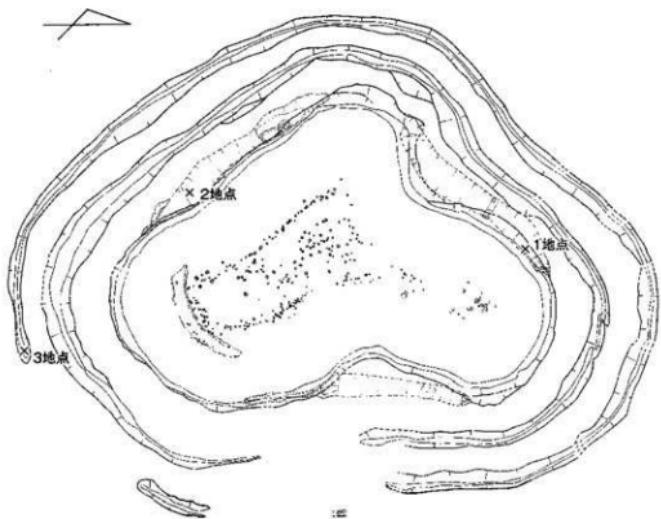
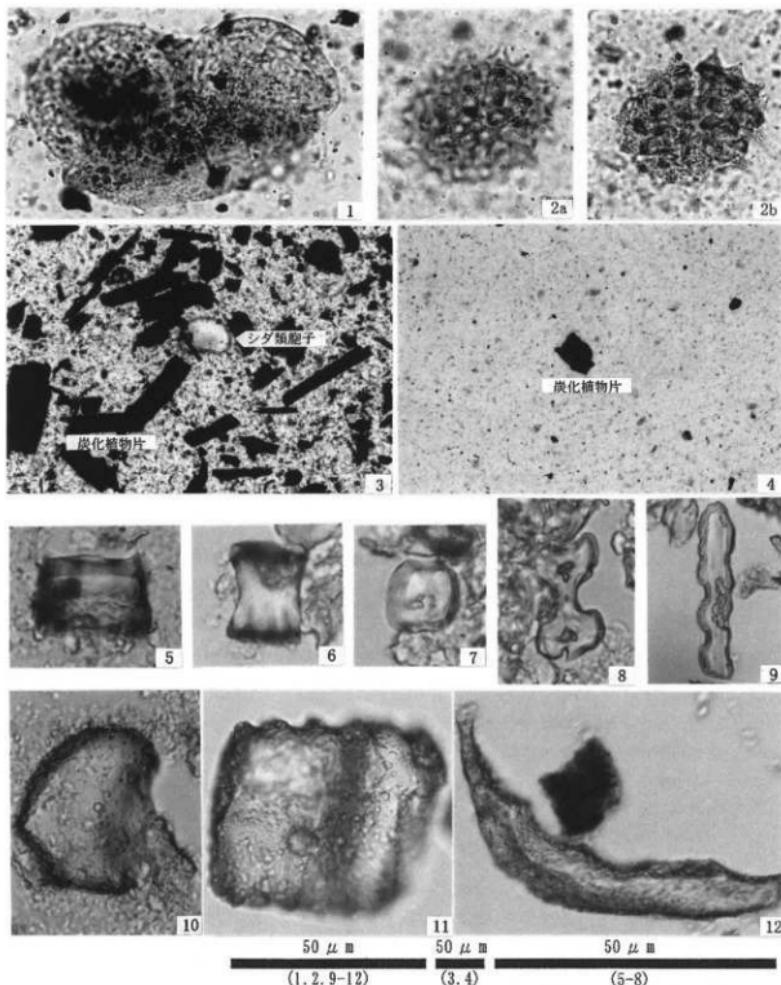


図3 試料採取地点図

図版1 花粉化石・植物珪酸体



1. マツ属(1地点;4)
 2. キク亜科(2地点;4)
 3. 花粉分析プレパラート内の状況写真(1地点;4)
 4. 花粉分析プレパラート内の状況写真(3地点;1)
 5. クマザサ属短細胞珪酸体(1地点;4)
 6. ネズサ節短細胞珪酸体(1地点;6)
 7. ヨシ属短細胞珪酸体(2地点;1)
 8. ススキ属短細胞珪酸体(2地点;1)
 9. イチゴソナギ亞科短細胞珪酸体(1地点;6)
 10. クマザサ属機動細胞珪酸体(1地点;4)
 11. ネズサ節機動細胞珪酸体(1地点;6)
 12. 樹木起源第IVグループ(1地点;8)

松江市、田和山遺跡群における自然科学分析

株式会社古環境研究所

I. 炭化材の樹種同定

1. はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から概ね属レベルの同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が少ないとことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

2. 試 料

試料は、焼失竪穴住居跡（SI-09）から出土した炭化材8点である。

3. 方 法

試料を割折して新鮮な基本的三断面（木材の横断面、放射断面、接線断面）を作製し、落射顕微鏡によって75～750倍で観察した。同定は解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

4. 結 果

結果を表1に示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

スダジイ *Castanopsis sieboldii* Hatusima ブナ科 図版1-1

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疊に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は単列の同性放射組織型である。

以上の形質よりスダジイに同定される。スダジイは本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* Schottky ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管が、やや疊に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。放射組織は、単列のものと集合放射組織が存在する。

放射断面：道管の穿孔は單穿孔で、放射組織は平伏細胞からなり、同性放射組織型である。

接線断面：放射組織は同性放射組織型で、単列のものと集合放射組織が存在する。

以上の形質よりツブラジイに同定される。ツブラジイは関東以南の本州、四国、九州に分布する。常緑の高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽性、保存性低く、建築材などに用いら

れる。

シイ属 *Castanopsis* ブナ科

横断面：年輪のはじめに中型から大型の道管がやや疎に数列配列する環孔材である。晩材部で小道管が火炎状に配列する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、放射組織は平伏細胞からなる。

接線断面：放射組織は單列の同性放射組織型のもののが存在する。

以上の形質よりシイ属に同定される。シイ属は本州（福島県、新潟県佐渡以南）、四国、九州に分布する。常緑高木で、高さ20m、径1.5mに達する。材は耐朽、保存性やや低く、建築、器具などに用いられる。

なおシイ属には、スダジイとツップラジイがあり、集合放射組織の有無などで同定できるが、本試料は保存状態が悪く広範囲の観察が困難なため、シイ属の同定にとどめた。

ヤブニッケイ *Cinnamomum japonicum* Sieb. クスノキ科 図版1-2

横断面：小型の道管が、単独および2～数個放射方向に複合して、散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には、大きく膨れ上がったもののが存在する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔および数の少ない階段穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。

接線断面：放射組織は異性放射組織型で1～2細胞幅である。上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がったもののがみられる。

以上の形質よりヤブニッケイに同定される。ヤブニッケイは、関東以西の本州、四国、九州、沖縄に分布する。常緑の高木で、高さ15m、径1mに達する。材は強さ中庸で、家具、器具、薪炭などに用いられる。

キハダ属 *Phellodendron* ミカン科 図版1-3

横断面：年輪のはじめに大型でやや厚壁の丸い道管が、単独あるいは2個複合して2～3列配列する環孔材である。晩材部では薄壁で方形の小道管が、多数集合して斜め方向および接線方向に帯状に配列する。早材から晩材にかけて、道管の径は徐々に減少する。

放射断面：道管の穿孔は単穿孔である。放射組織は同性である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

接線断面：放射組織は多列の同性放射組織型で、紡錘形を呈する。幅は1～3細胞幅である。小道管の内壁にはらせん肥厚が存在する。

以上の形質よりキハダ属に同定される。キハダ属には、キハダ、ヒロハノキハダなどがあり、北海道、本州、四国、九州に分布する。落葉の高木で、高さ25m、径1mに達する。

5. 考 察

分析の結果、焼失翌穴住居跡（SI-09）から出土した炭化材では、スダジイ3点、ツブラジイ1点、シイ属1点、ヤブニッケイ2点、キハダ属1点が同定された。このうち、スダジイ、ツブラジイ、シイ属、ヤブニッケイは常緑高木の照葉樹であり、キハダ属は温帯に分布する落葉高木である。いずれも、建築材などの比較的大きな木材が採取できる樹種である。

文献

佐伯浩・原田浩（1985）針葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.20-48.

佐伯浩・原田浩（1985）広葉樹材の細胞、木材の構造、文永堂出版、p.49-100.

島地謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧、雄山閣、296p.

表1 田和山遺跡群における樹種同定結果

No.	結果（和名／学名）
No.1	スダジイ Castanopsis sieboldii Hatusima
No.3	スダジイ Castanopsis sieboldii Hatusima
No.5	スダジイ Castanopsis sieboldii Hatusima
No.6	ツブラジイ Castanopsis cuspidata Schottky
No.7	シイ属 Castanopsis
No.9-1	ヤブニッケイ Cinnamomum japonicum Sieb.
No.9-2	ヤブニッケイ Cinnamomum japonicum Sieb.
No.10	キハダ属 Phellodendron

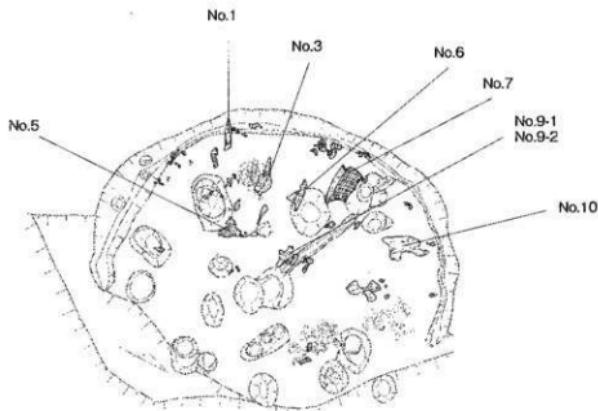


図1 焼失住居跡（SI-09）炭化材試料位置図

田和山遺跡群の炭化材

図版 1



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接縫断面 : 0.2mm

1. No. 3 スダジイ



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.2mm



接縫断面 : 0.2mm

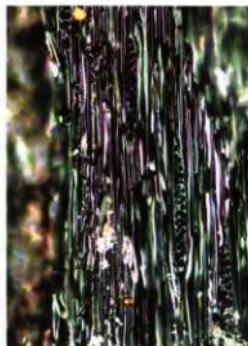
2. No. 9-1 ヤブニッケイ



横断面 : 0.4mm



放射断面 : 0.5mm



接縫断面 : 0.2mm

3. No.10 キハダ属

II. 炭化物の植物珪酸体分析（灰像分析）

1. はじめに

田和山遺跡群の発掘調査では、弥生時代中期後半とされる焼失堅穴住居跡から多数の炭化物が検出された。ここでは、植物珪酸体分析および灰像分析の手法を用いて炭化物の給源植物の同定を試みた。

2. 試 料

分析試料は、焼失堅穴住居跡 (SI-09) から採取された炭化物 (No.1, No.3, No.8, No.9-1, No.9-2) である。

3. 分析法

炭化物を電気炉灰化法 (550°C・6時間) によって灰化し、オイキットで封入してプレパラートを作成した。検鏡は偏光顕微鏡を用いて、100~400倍の倍率で行った。なお、灰化物の内部を調べるために、植物組織の一部を破壊して観察を行った。

4. 結果および考察

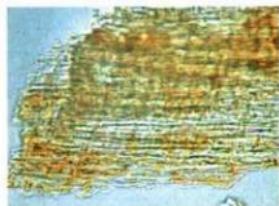
分析の結果、No.9-1およびNo.9-2の炭化物では、イネ科のススキ属に由来する機動細胞珪酸体や植物組織片が確認された。したがって、これらの炭化物にはススキ属の茎葉が含まれていると推定される。

その他の炭化物では、何らかの植物組織片が確認されたが、植物珪酸体（機動細胞や短細胞由来など）およびその組織片は認められなかった。したがって、これらの炭化物には、イネ科やカヤツリグサ科などの植物珪酸体が形成される植物の茎葉は含まれていないと考えられる。なお、No.8の炭化物ではクマザサ属型などの植物珪酸体が少量検出されたが、これらの植物組織片が認められないことから、炭化物に付着した土壤に由来するものと考えられる。

文 獻

杉山真二 (2000) 植物珪酸体 (プラント・オバール), 考古学と植物学, 同成社, p.189-213.

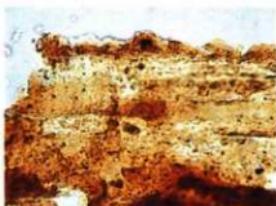
図版 2



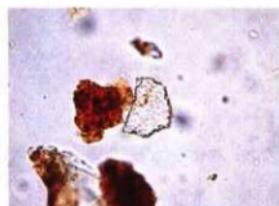
植物組織片
No. 1



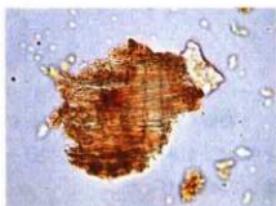
植物組織片
No. 3



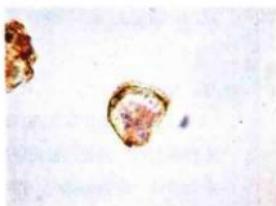
植物組織片
No. 3



クマザサ属型の機動細胞珪酸体
No. 8



植物組織片
No. 8



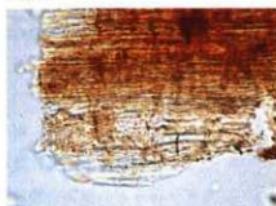
ススキ属型の機動細胞珪酸体
No. 9-1



植物組織片
No. 9-1



ススキ属型の機動細胞珪酸体組織片
No. 9-2



植物組織片
No. 9-2

灰岩組織の顕微鏡写真

— 50 μ m —

松江市田和山遺跡出土試料の¹⁴C年代測定

小林 謙一¹・春成 芳爾¹・坂本 稔¹・尾崎 大真²・新免 歳靖²・松崎 浩之²

¹ 国立歴史民俗博物館

² 東京大学原子力研究総合センター・タンデム加速器研究部門

松江市田和山遺跡出土土器付着物および出土木材の炭素14年代測定を行った。試料記号はSMMT（SMは鳥取県、MTは松江市の略）とした。

1 測定試料

SMMT-9は、SB06件、弥生中期IV-1期の壺形土器の口縁から胴部外向付着物で、ススである。

SMMT-10は、SI03件、弥生中期IV-1期の壺形土器の胴部外向付着物で、ススである。

SMMT-13は、弥生前中期I-4期の壺形土器の口縁部外向付着物で、ススである。

SMMT-C1は、弥生中期III期の火災住居であるSI09の炭化材No.3である。広葉樹と思われる。

SMMT-C2は、弥生中期III期の火災住居であるSI09の炭化材No.5である。広葉樹と思われる。

2 炭化物の処理

年代測定用試料については、以下の手順で試料処理を行った。（1）の作業は、国立歴史民俗博物館の年代測定資料実験室において小林、（2）（3）は、坂本が行った。

（1）前処理：酸・アルカリ・酸による化学洗浄（AAA処理）。

AAA処理は、上器付着物については、アセトンで洗浄し、油分など汚染の可能性のある不純物を溶解させ除去した（2回）。AAA処理として、80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）で岩石などに含まれる炭酸カルシウム等を除去（2回）し、さらにアルカリ溶液（1回目0.001N、3回目0.01N、5回目以降0.1NのNaOH）でフミン酸等を除去する。5回行い、ほとんど着色がなくなったことを確認した。さらに酸処理（6時間以上）を行い中和後、純水により洗浄した（4回）。

本材試料については、自動処理器を用いてAAA処理を行った。80°C、各1時間で、希塩酸溶液（1N-HCl）2回、アルカリ溶液（1NのNaOH）5回、酸処理（240分2回）、純水洗浄5回の設定である。土器付着物・炭化材とともに測定試料については、すべて良好な状態であり、精製段階で50%以上の炭素含有率（表の炭素含有率）を得ている。

試料は、AAA前処理を行った量（処理量）、処理後回収した量（回収量）、二酸化炭素化燃焼に供した量（燃焼）、精製した二酸化炭素の炭素相当量（CO₂）の重量（mg）を表1に記す。処理した量に対するAAA処理後に回収された試料の重量による重量比を回収／処理、二酸化炭素に精製した際の炭素含有率を含有率、前者と後者を掛けて求められるところの処理した量に対する炭素量の重量比を炭素相当量、処理として表1に付す。

（2）二酸化炭素化と精製：酸化銅により試料を酸化（二酸化炭素化）、真空ラインを用いて不純物を除去する。

AAA処理の済んだ乾燥試料を、500mgの酸化銅とともに石英ガラス管に投じ、真空に引いてガスバーナーで封じ切った。このガラス管を電気炉で850°Cで3時間加熱して試料を完全に燃焼させた。得られた二酸化炭素には水などの不純物が混在しているので、ガラス真空ラインを用いてこれを分離・精製した。

(3) グラファイト化：鉄触媒のもとで水素還元しグラファイト炭素に転換し、アルミ製カソードに充填する。

1.5mgのグラファイトに相当する二酸化炭素を分取し、水素ガスとともに石英ガラス管に封じた。これを電気炉で650°Cで12時間加熱してグラファイトを得た。管にはあらかじめ触媒となる鉄粉が投じてあり、グラファイトはこの鉄粉の周囲に析出する。グラファイトは鉄粉とよく混合した後、穴径1mmのアルミニウム製カソードに600Nの圧力で充填した。

表1 試料の重量 (mg) と炭素含有率

No.	採取量 (mg)	処理量 (mg)	回収量 (mg)	回収率/処理	燃焼量 (mg)	CO ₂ (mg換算)	含有率	炭素相当量 処理
SMMT C 1	149.00	74.00	51.60	69.7%	4.00	2.04	51.0%	35.6%
SMMT C 2	369.00	172.00	62.12	36.1%	5.00	3.38	67.6%	24.1%
SMMT 9	183.5	81.32	6.15	7.6%	4.01	2.24	55.8%	4.2%
SMMT 10	118.98	87.07	21.25	24.4%	4.00	2.20	55.0%	13.4%
SMMT 13	64.43	45.79	4.02	8.8%	3.31	1.55	46.9%	4.1%

3 測定結果と曆年較正

AMSによる¹⁴C測定は、炭化材試料は地球科学研究所を通してベータアナリティック社へ委託した。上器付着物試料は、東京大学原子力研究総合センターのタンデム加速器施設 (MALT、機関番号MTC) で行った。

年代データの¹⁴CBPという表示は、西暦1950年を基点にして計算した¹⁴C年代（モデル年代）であることを示す（BPまたはyr BPと記すことが多いが、本稿では¹⁴CBPとする）。¹⁴Cの半減期は国際的に5,568年を用いて計算することになっている。誤差は測定における統計誤差（1標準偏差、68%信頼限界）である。

AMSでは、グラファイト炭素試料の¹³C/¹²C比を加速器により測定する。正確な年代を得るには、試料の同位体効果を測定し補正する必要がある。同時に加速器で測定した¹³C/¹²C比により、¹³C/¹²C比に対する同位体効果を調べ補正する。¹³C/¹²C比は、標準体（古生物belemnite化石の炭酸カルシウムの¹³C/¹²C比）偏差値に対する千分率 $\delta^{13}\text{C}$ （パーミル、‰）で示され、この値を-25‰に規格化して得られる¹³C/¹²C比によって補正する。補正した¹³C/¹²C比から、¹⁴C年代値（モデル年代）が得られる（英語表記ではConventional Ageとされることが多い）。東京大学測定の $\delta^{13}\text{C}$ 値は、加速器による測定であり、記さない。

測定値を校正曲線INTCAL98（歴年代と炭素14年代を曆年代に修正するためのデータベース、1998年版）(Stuiver, M. et al. 1998) と比較することによって実年代（曆年代）を推定できる。両者に統計誤差があるため、統計数理的に扱う方がより正確に年代を表現できる。すなわち、測定値と校正曲線データベースとの一致の度合いを確率で示すことにより、曆年代の推定値確率分布とし

て表す。曆年較正プログラムは、OxCal Programに準じた方法で作成したプログラムを用いている。統計誤差は2標準偏差に相当する、95%信頼限界で計算した。年代は、較正された西暦cal BCで示す。()内は推定確率である。図は、各試料の曆年較正の確率分布である。

4 年代的考察

以下に、較正年代について、検討する。

弥生中期Ⅲ期のSI09出土の炭化材は、ともに焼失住居の柱材の最外縁部から採取した試料であり、測定結果はばらけた数値がでているが、採取箇所の違いによる樹齢の差違とは考えにくい。C2が古木を用いた柱であった可能性はあるが、むしろ、本来同一頃の時期の所産である炭化材について、測定値がばらけた可能性を考えたい。較正結果で見れば、紀元前200-195年において、両者は高い確率密度で重なる。これは、弥生中期頃の時期の較正曲線に、大きな波があるためで、この材がともに紀元前200年頃に伐採されたものであれば、このような見かけ上離れた測定結果になる可能性はある。さらに測定して検討する必要がある。

土器付着物では、弥生前中期のSMMT13は、測定結果からはやや新しく、395-205年の中に含まれる年代となっている。

中期後半のSMMT9と10は、ほぼ同一の時期が測定されており、9は前355-30年に含まれ、特に前210-85年の確率密度が高く、10は前355-60年に含まれ、特に前230-90年に含まれる可能性が高い。

表2 測定結果と曆年較正年代

ラボNO.	試料番号	$\delta^{14}\text{C}$	"C	BP	較正年代	BC
Beta-200293	SMMT C 1	-26.6	2090	± 40	335-330	0.5%
					200-15	91.3%
					10-AD 5	3.3%
Beta-200294	SMMT C 2	-27.5	2230	± 40	385-195	95.1%
MTC-05563	SMMT 9	-	2145	± 35	350-290	21.9%
					255-245	1.4%
					230-215	4.6%
					210-85	62.7%
					80-50	4.8%
MTC-05564	SMMT 10	-	2155	± 35	355-280	30.4%
					255-240	2.7%
					230-90	60.1%
					75-60	1.7%
MTC-05565	SMMT 13	-	2265	± 35	395-345	37.3%
					315-225	51.7%
					220-205	6.0%

この研究は、平成16年度文部科学省・科学研究費補助金 学術創成研究「弥生農耕の起源と東アジア-炭素年代測定による高精度編年体系の構築-」(研究代表 西本豊弘)の成果である。測定については、国立歴史民俗博物館今村峯雄に教示いただいた。感謝します。(2005年2月記)

参考文献

今村肇雄2004「課題番号13308009基盤研究(Λ・1) (一般) 繩文弥生時代の高精度年代体系の構築」(代表今村肇雄)

Stuiver, M. et al. 1998 INTCAL 98 Radiocarbon age calibration, 24,000 - 0 cal BP. *Radiocarbon* 40 (3), 1011 - 1083.

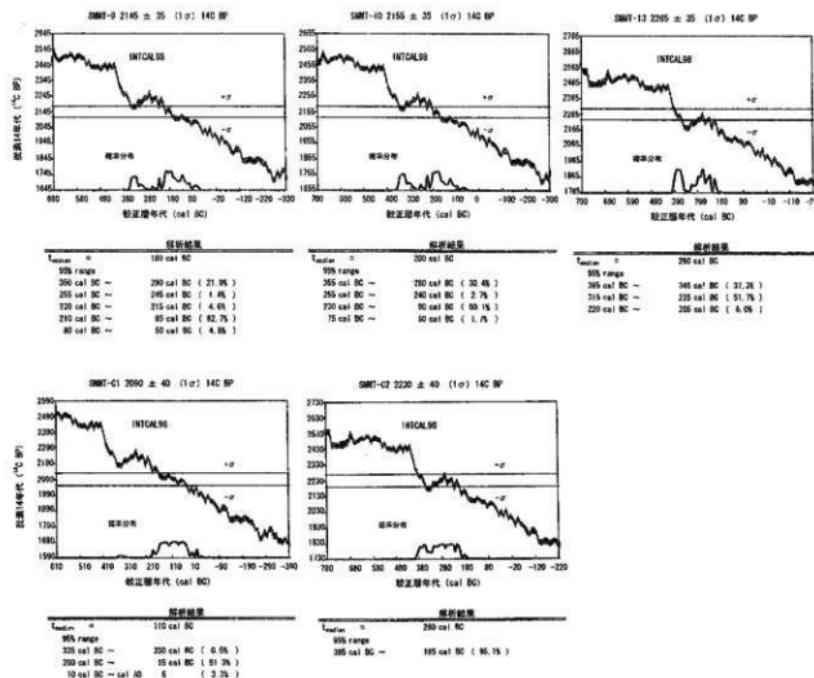


図1 解析結果データ

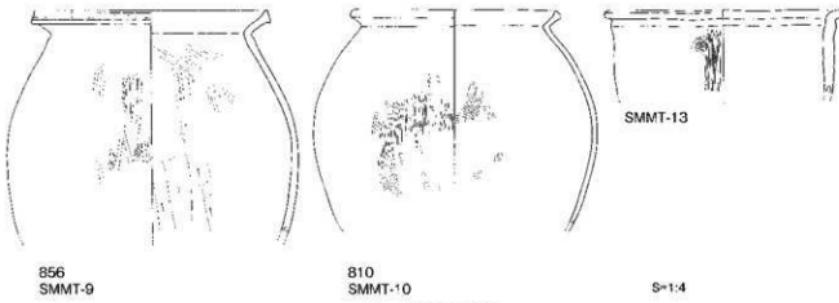


図2 測定試料土器



SMMT9 表面



SMMT9 洞外面スス付着状態



SMMT10 表面



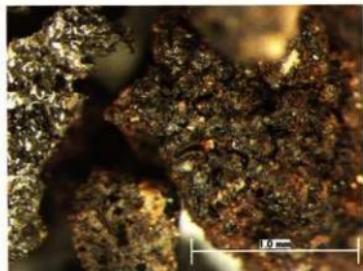
SMMT10 洞外面スス付着状態



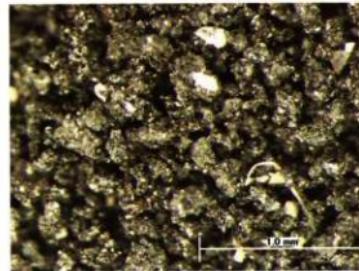
SMMT13 表面



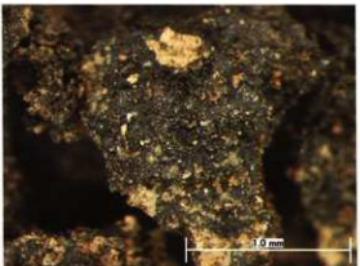
SMMT13 口縁外面スス付着状態



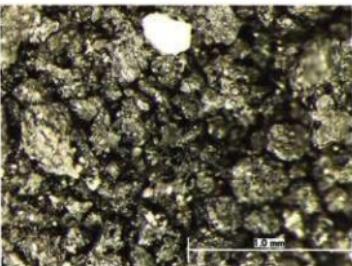
SMMT9 AAA処理前 6倍



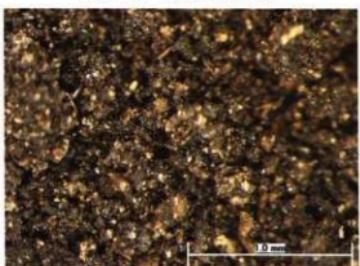
SMMT9 AAA処理後 6倍



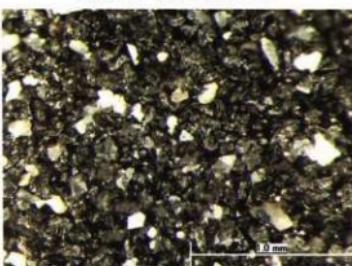
SMMT10 AAA処理前 6倍



SMMT10 AAA処理後 6倍



SMMT13 AAA処理前 6倍



SMMT13 AAA処理後 6倍

(注) 拡大写真的スケールの1.0mmは4.0mmの長さ

追記) 脱稿後の2005年3月に、較正曲線がIntCal04に更新された。主な変更点は、1万2千年前のデータの追加改正と、全体の較正曲線の計算方法をランダムウォーク法による計算に変更した点である。我々のデータベースでも再計算を行なっているが、当該資料については、較正年代で5年以上の差は生じておらず、INTCAL98による計算をそのまま呈示しておく。学術創成研究の業績報告には、IntCal04に基づく再計算結果を（他とすべてあわせるために）載せる予定であるが、基本的な違いはない。

年代測定結果報告書

加速器分析研究所

- 1) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用しています。
- 2) BP年代値は、1950年からさかのぼること何年かを表しています。
- 3) 付記した誤差は、標準偏差 (1σ) に相当する年代で、次のように算出しています。
複数回の測定値について χ^2 検定を行い、測定値のばらつきが小さい場合には測定値の統計誤差から求めた値を用い、ばらつきが大きい場合には不偏分散の平方根（標準偏差）と統計誤差から求めた値を比較して大きい方を誤差としています。
- 4) $\delta^{13}\text{C}$ の値は、通常は質量分析計を用いて測定しますが、AMS測定の場合に同時に測定される $\delta^{13}\text{C}$ の値を用いることもあります。
 $\delta^{13}\text{C}$ 補正をしない場合の同位対比および年代値も参考に掲載しておきます。

同位対比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (‰; パーミル) で表したものです。

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{As} - {}^{13}\text{Ar}) / {}^{13}\text{Ar}] \times 1000 \quad (1)$$

$$\delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{As} - {}^{13}\text{Apdb}) / {}^{13}\text{Apdb}] \times 1000 \quad (2)$$

ここで、 ${}^{13}\text{As}$ ：試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度： $({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{S}}$ または $({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{S}}$

${}^{13}\text{Ar}$ ：標準現代炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度： $({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$ または $({}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C})_{\text{R}}$

$\delta^{13}\text{C}$ は、質量分析計を用いて試料炭素の ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{As} = {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$) を測定し、PDB (白亜紀のペレムナイト (矢石) 類の化石) の値を基準として、それからのずれを計算します。

但し、JAAでは加速器により測定中に同時に ${}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C}$ も測定しているので、標準試料の測定値との比較から算出した $\delta^{13}\text{C}$ を用いることもあります。この場合には表中に「[加速器]」と注記します。

また、 $\Delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素が $\delta^{13}\text{C} = -25.0$ (‰) であるとしたときの ${}^{13}\text{C}$ 濃度 (${}^{13}\text{As}$) に換算した上で計算した値です。(1) 式の ${}^{13}\text{C}$ 濃度を、 $\delta^{13}\text{C}$ の測定値をもとに次式のように換算します。

$${}^{13}\text{As} = {}^{13}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000))^{\frac{1}{2}} \quad ({}^{13}\text{As} \text{として } {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

または

$$= {}^{13}\text{As} \times (0.975 / (1 + \delta^{13}\text{C}/1000)) \quad ({}^{13}\text{As} \text{として } {}^{13}\text{C}/{}^{12}\text{C} \text{ を使用するとき})$$

$$\Delta^{13}\text{C} = [({}^{13}\text{As} - {}^{13}\text{Ar}) / {}^{13}\text{Ar}] \times 1000 \quad (\text{‰})$$

貝殻などの海洋が炭素起源となっている試料については、海洋中の放射性炭素濃度が大気中の炭酸ガス中の濃度と異なるため、同位体補正のみを行った年代値は実際の年代との差が大きくなります。多くの場合、同位体補正をしない $\delta^{13}\text{C}$ に相当するBP年代値が比較的よくその貝

と同一時代のものと考えられる木片や木炭などの年代値と一致します。

^{14}C 濃度の現代炭素に対する割合のもう一つの表記として、pMC (percent Modern Carbon) がよく使われており、 $\Delta^{14}\text{C}$ との関係は次のようにになります。

$$\Delta^{14}\text{C} = (\text{pMC}/100 - 1) \times 1000 \text{ (‰)}$$

$$\text{pMC} = \Delta^{14}\text{C}/10 + 100 \text{ (%)}$$

国際的な取り決めにより、この $\Delta^{14}\text{C}$ あるいはpMCにより、放射性炭素年代 (Conventional Radiocarbon Age ; yrBP) が次のように計算されます。

$$T = -8033 \times \ln [(\Delta^{14}\text{C}/1000) + 1]$$

$$= -8033 \times \ln (\text{pMC}/100)$$

Code No.	試 料	BP年代および炭素の同位体比
IAAA-31714	試料採取場所 : 松江市乃白町 田和山遺跡 山頂部 第3区 No.117 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : TW-1 (掲載土器 15) (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age (yrBP) : $2,200 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -25.94 ± 0.90 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -239.7 ± 4.1 pMC (%) = 76.03 ± 0.41 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -211.1 ± 3.8 pMC (%) = 75.89 ± 0.38 Age (yrBP) : $2,220 \pm 40$
IAAA-31715	試料採取場所 : 松江市乃白町 田和山遺跡 第1環壕 6区 No.1 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : TW-2 (掲載土器 211) (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age (yrBP) : $2,030 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -25.81 ± 0.68 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -223.1 ± 4.0 pMC (%) = 77.69 ± 0.40 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -224.4 ± 3.9 pMC (%) = 77.56 ± 0.39 Age (yrBP) : $2,040 \pm 40$
IAAA-31716	試料採取場所 : 松江市乃白町 田和山遺跡 1-a環壕 3区 No.6 試料形態 : 炭化物 試料名(番号) : TW-3 (掲載土器 86) (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age (yrBP) : $2,790 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -25.11 ± 0.97 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -293.4 ± 3.7 pMC (%) = 70.66 ± 0.37 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -293.6 ± 3.4 pMC (%) = 70.64 ± 0.34 Age (yrBP) : $2,790 \pm 40$
IAAA-31717	試料採取場所 : 松江市乃白町 田和山遺跡 SI-09 炭化木材 No.3 試料形態 : 木炭 試料名(番号) : TW-4 (参考) $\delta^{13}\text{C}$ の補正無し	Libby Age (yrBP) : $2,180 \pm 40$ $\delta^{13}\text{C}$ (‰)、(加速器) = -23.79 ± 1.29 $\Delta^{14}\text{C}$ (‰) = -237.4 ± 4.1 pMC (%) = 76.26 ± 0.41 $\delta^{14}\text{C}$ (‰) = -235.5 ± 3.6 pMC (%) = 76.45 ± 0.36 Age (yrBP) : $2,160 \pm 40$

田和山遺跡の焼土の残留磁気の測定結果

島根大学総合理工学部 時枝 克安

(1) 目的

この調査の目的は、田和山遺跡で検出された焼土の残留磁気を測定し、測定値を地磁気変動と比較して、焼土の最終焼成年代を検討することである。

(2) 定方位試料の採取

田和山遺跡の環壕周辺にある3つの焼土から定方位試料を採取した。加工段1の焼土は焼成度が低く、また、発掘後約1年間放置されたために保存状態が悪く、雨による侵食等で表面が荒れていった。なお、この焼土のある加工段の下方近くの斜面から古墳時代の須恵器が出上している。1-a環壕（8区サブレンチ底部）の焼土は厚い堆積土に覆われていたものである（地表から約4m下）。一様に弱赤変した小範囲の地山表面の窪みに炭化物と微小な強赤変焼成塊が混入していた。1-c環壕（3区山頂側斜面）の焼土は、急斜面にある風化した1ヶの岩石（表面は斜面と平行になっている）が焼けたものであり、周囲の地山は焼けていない。岩石の表面は剥離しやすく、樹脂で固めてから試料を採取した。この岩石を火を焚くための構造の一部と仮定すると、その急傾斜が底部に適さないので、圓い、または煙道の一部ではないかと考えられる。試料採取状況を次表に、試料採取場所を図1に示す。

試料採取状況

焼土の場所	試料数	焼土の状態
加工段1の最上段	14	発掘後約1年放置のため保存状態は良くない。 低焼成度。古墳時代の須恵器が近辺より出土。
1-a環壕 (8区サブレンチ底部)	15	一様に弱赤変した小範囲の地山表面の窪みに、炭化物と微小な強赤変焼成塊が混入している。
1-c環壕 (3区山頂側斜面)	21	風化した岩石が焼けた赤変し一部が黒変している。 ひび割れによる表面の剥離を樹脂で抑えた。

(3) 測定結果

すべての試料について交流消磁を行った。交流消磁というのは、試料を交流磁場中で回転させながら、磁場強度をある値IIから零になるまで滑らかに減少させて、抗磁力がIIよりも弱い磁気成分を消去する方法である。データの分散の原因が弱抗磁力の2次磁化である時には、交流消磁によってデータの集中度が改善される場合がある。

図2～4は交流消磁による各焼土の残留磁気の方向の変化を示す。各焼土の消磁結果の中から、残留磁気の方向がよく揃い、強度が充分に減少している結果を選択し、その結果の中で飛び離れたデータを省略すると各図の小円内に示す集中度の良いデータを得る。加工段1の焼土の残留磁気は、強度が弱く ($\sim 10^{-6}$ emu/g)、磁気的に不安定であり、交流消磁の消磁場の上昇に伴って、

残留磁気の方向の平均値が狭い範囲ではあるが変動する。小円内のデータは焼土の焼成時の地磁気の方向を表していると考えられる。次表は小円内のデータの平均方向と誤差の目安となる数値である。

焼土の残留磁気の平均方向と誤差の目安となる数値

焼土の場所	Im (度)	Dm (度E)	k	α_{95} (度)	n/N	渾磁場 (mT)
加工段1の最上段	48.75	-5.49	803	3.24	4/14	10
1-a環境 (8区サブトレンチ底部)	31.32	-18.12	385	3.42	6/14	5
1-c環境 (3区山頂斜面縦)	28.36	8.25	1812	1.14	10/21	10

Im: 平均伏角 k: Fisherの信頼度係数 n/N: 採用試料数 採取試料数
Dm: 平均偏角 α_{95} : 95%誤差角

(4) 西南日本の地磁気変動との比較

図5は川和山遺跡の各焼土の残留磁気の平均方向 (+印) と誤差の範囲 (点線の楕円) および、広岡による西南日本の過去2000年間の地磁気永年変化曲線である。

まず、加工段1の焼土の地磁気年代を推定する。そのためには、残留磁気の平均方向に近い点を曲線上に求めて、その点の年代を読みとればよい。同様にして、年代誤差も点線の楕円から評価できる。このようにして求めた地磁気年代は $AD80 \pm 30$ あるいは $AD470 \pm 40$ となる。そして、出土した古墳時代の須恵器を念頭におくと $AD470 \pm 40$ を第1候補として選ぶのが適当と考えられる。ただし、これらの年代値の信頼性は劣ると考えている。その理由は、残留磁気強度が弱く ($\sim 10^3$ emu/g)、磁気的に不安定であり、交流消磁の消磁磁場を上げていくと、残留磁気の方向の平均値が狭い範囲ではあるが変動し、一定値に収束しないからである。

1-a、1-c各環境の焼土の残留磁気の平均方向は過去2000年間の地磁気変動範囲の外にある。したがって、焼けた年代の数値は分からぬが、少なくとも、紀元前であることは間違いない。さらに、西南日本の地磁気変動曲線を紀元前に遡って少し延長すると、1-a環境の焼土の残留磁気の方向にたどりつくので、1-a環境の焼土のおよその年代として、弥生時代の比較的若いBC年代が推定できる。一方、1-c環境の焼土の残留磁気の方向は1-a環境の焼土のものから大きく離れているので、1-a環境の焼土よりも古いと推定できる。ただし、両者の年代差は不明である。前述のように紀元前の地磁気変動曲線はまだ確立されていないので、紀元前の地磁気年代を正確に推定することはできない。これらのデータは、紀元前の地磁気の方向の貴重なデータであるが、これらを紀元前の地磁気変動曲線の作製に用いるためには、何かの物理的方法で年代を求めておく必要がある。したがって、たとえば、炭化物が出土したような場合には放射性炭素年代を測定しておくことが望ましい。

田和山遺跡の焼土の地磁気年代、または、地磁気から見た年代観

焼上	地磁気年代、または、地磁気から見た年代観
加工段1の最上段の焼土	AD470 ± 40 (第1候補)、AD80 ± 30 (第2候補)
1-a環壕 (8区サブレンチ底部) 焼土	弥生時代の比較的若いBC年代
1-c環壕 (3区山頂側面裾) 焼土	1-a環壕の焼土よりも古いBC年代

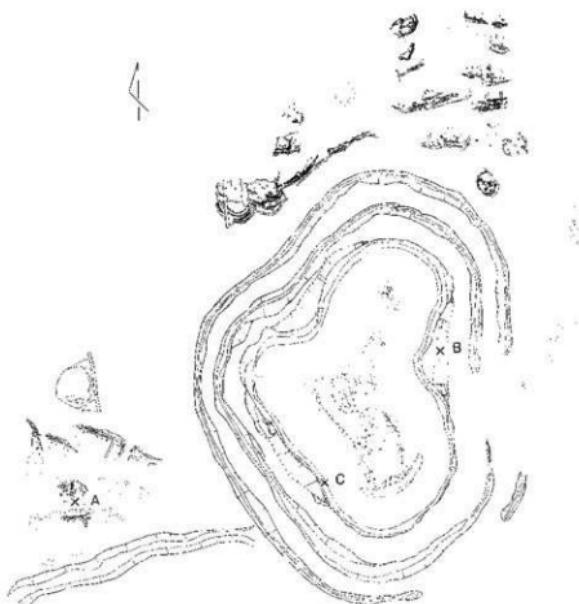


図1 今回調査を行った田和山遺跡の環壕周辺の焼土の位置
(A) 加工段1の焼土 (B) 1-a環壕の焼土 (C) 1-c環壕の焼土

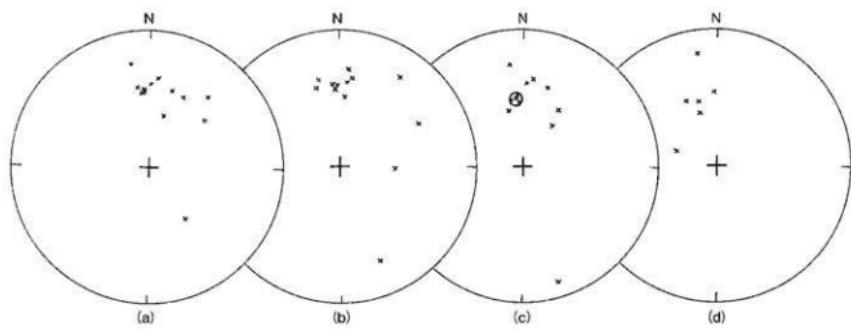


図2 加工段1の焼土の交流消磁による残留磁気の方向の変化
 (a) NRM (b) 消磁磁場 $H=5\text{ mT}$ (c) $H=10\text{ mT}$ (d) $H=20\text{ mT}$

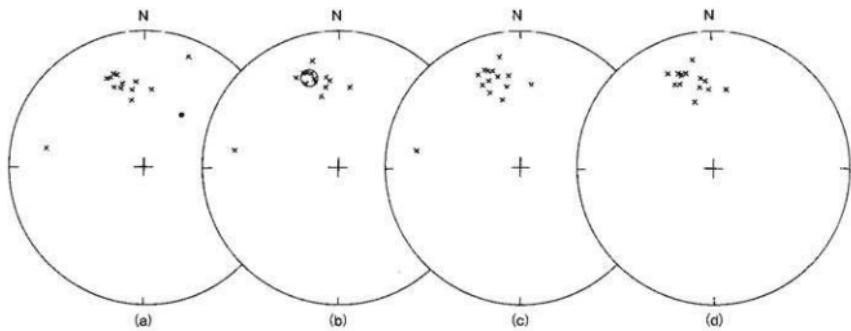


図3 1-a深堀（8区サブトレーン底部）の焼土の交流消磁による残留磁気の方向の変化
 (a) NRM (b) 消磁磁場 $H=5\text{ mT}$ (c) $H=10\text{ mT}$ (d) $H=20\text{ mT}$

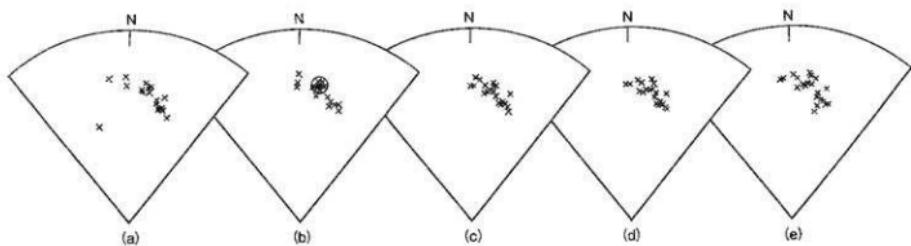


図4 1-c環境（3区山頂傾斜斜面掘）の焼土の交流消磁による残留磁気の方向の変化
 (a) NRM (b) 消磁場 $H=10\text{mT}$ (c) $H=20\text{mT}$ (d) $H=30\text{mT}$ (e) $H=40\text{mT}$

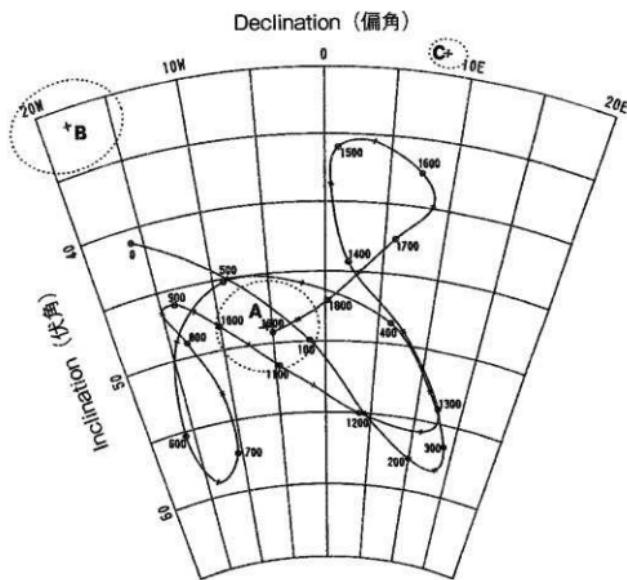


図5 各焼土の残留磁気の平均方向（+印）と誤算の範囲（点線の楕円）、および、
 広岡による過去2000年間の西南日本における地磁気永年変化曲線
 (A) 加工段1の焼土 (B) 1-a環境の焼土 (C) 1-c環境の焼土

田和山遺跡環壕中の石塊について

島根大学総合理工学部 山内 鋼喜

田和山遺跡の3つの環壕の内部からは数1000個の玉石状石塊が見つかった。これらの石はこぶし大から人頭大で、角のとれて丸くなっているものが多い。これらの石塊から表1に示す41個を無作為に集め、岩石切断機で切削し、研磨した面で岩石鑑定を行った。

表1 玉石状石塊の採集地点

	1区	2区	3区	4区	5区	8区	B区
第1環壕	7	5	9	3		4	6
第2環壕					3		
不明				4			

表2 玉石状石塊の岩種

		玄武岩	安山岩	流紋岩	花崗岩	ドレライト	計
第1環壕	1区	4	3				7
	2区	3	1		1		5
	3区	8			1		9
	4区	3					3
	8区	1		1	1	1	4
	B区	3	3				6
第2環壕	5区	1	1		1		3
	不明	4					4
計		27	8	1	4	1	41

岩石鑑定の結果は表2に示した。表2から読み取れるように、これらの石塊の約66%は玄武岩で、約20%は安山岩、約10%は花崗岩である。この他に、流紋岩ないしディサイトとドレライトの石塊が1つずつ認められた。

本遺跡は布志名層の泥岩からなる尾根の先端に作られているが、遺跡の南部では2本のかんらん石アルカリ玄武岩の岩脈が貫入している。石塊の過半数を占める玄武岩はかんらん石玄武岩であることから、環壕を作るためにこの岩脈を掘削した時にこれらの石塊は掘り出されたものと考えられる。二番目に多い安山岩は、斑状の玄武岩質安山岩で、田和山の南方の山地に広く分布する大森層の安山岩から由来したものと考えられる。この安山岩は本遺跡から約1km上流の忌部川の両岸では崖を作っている。また、三番目に多い花崗岩は、本遺跡から約1.5~5km上流の忌部川両岸に分

布する。この地域の花崗岩は一般にマサ状に風化しているが、細粒のアブライトの部分は風化に強いためマサの中に玉石状に残っている。さらに、流紋ディサイトは忌部川の最上流部に分布する。このような岩石の分布から、玄武岩以外の石塊は、忌部川から採取されてきたものと考えられる。

遺跡南部の玄武岩岩脈は不規則な細い枝脈を周りの泥岩中に出していたり、泥岩中の水分と玄武岩マグマが反応した痕跡が岩脈の縁辺で見られ、岩脈の縁辺は風化を強く受けている。玄武岩は板状節理が良く発達しており、節理に沿っても風化が進行し、粘土化している部分がある。発掘された遺跡面での観察によれば、尾根の上に露出する玄武岩は全体的に粘土化しているが、環壕の内部には風化の程度が低い硬い玄武岩が分布する。このことから、環壕が作られた当時は、尾根の地表付近では玄武岩岩脈は著しく風化して、全体が粘土化していたり、粘土中に硬い玄武岩が玉石状に点在した状態であったと推定される。また、環壕が掘られた山腹斜面には未風化の硬い玄武岩が存在したが、玄武岩中には板状節理が多く発達しており、それらの節理に沿って玄武岩の一部は粘土化していたものと考えられるので、玄武岩を掘削することはそれほど困難ではなく、掘削に伴って様々な大きさの石塊が掘り出されたと判断される。

なお、強く風化した玄武岩は著しく赤色化しており、石塊の内部まで赤色化が進行したものも認められた。石塊の表面が赤色化しているため、人為的な熱を受けて赤色化したのではないかという意見も出されたが、断面での観察では風化による赤色化と判断される。



石塊（つぶて）切断写真

田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳遺跡出土の サヌカイト製遺物および黒曜石製遺物の原材産地分析

京都大学原子炉実験所 薩科 哲男

はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圈を探るという目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目指して研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行っている^{1,2,3)}。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量元素組成には異同があると考えられるため、微量元素を中心元素分析を行い、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定の操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からぬといふ場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

松江市に位置する田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳から出土したサヌカイト製石器16個および黒曜石製石器5個について産地分析の結果が得られたので報告する⁴⁾。

黒曜石、サヌカイト原石の分析

黒曜石、サヌカイト両原石の自然面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X線分析装置によって元素分析を行う。分析元素はAl、Si、K、Ca、Ti、Mn、Fe、Rb、Sr、Y、Zr、Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。

黒曜石原石

黒曜石は、Ca/K、Ti/K、Mn/Zr、Fe/Zr、Rb/Zr、Sr/Zr、Y/Zr、Nb/Zrの比の値を産地を区別する指標をしてそれぞれ用いる。黒曜石の原産地は北海道、東北、北陸、東関東、中信高原、伊豆箱根、伊豆七島の神津島、山陰、九州の各地に分布する。調査を終えた原産地を図1に示す。また、元素組成によってこれら原石を分類し表1に示す。この原石群に原石産地不明の遺物で作った遺物群を加えると、167個の原石群になる。中信高原地域の黒曜石産地の中で、霧ヶ峰群は、長野県下諏訪町金明水、星ヶ塔、星ヶ台の地点より採取した原石でもって作られた群で、同町觀音沢の露頭の原石も、霧ヶ峰群に一致する元素組成を示した。和田岬地域原産の原石は、星ヶ塔の西方の山に位置する旧和田岬トンネルを中心とした数百メートルの範囲より採取され、これらを元素組成

で分類すると、和田岬第一、第二、第三、第四、第五、第六の各群に分かれる。和田岬第一、第三群に分類された原石は旧トンネル付近より北側の地点より採取され、和田岬第二群のものは、トンネルの南側の原石に多くみられる。和田岬第四群は男女倉側の新トンネルの入り口、また、和田岬第五、第六群は男女倉側新トンネル入り口左側で、和田岬第一、第三の両群の産地とは逆の方向である。男女倉原産地の原石は男女倉群にまとまり、元素組成は和田岬第五群に似る。鷹山、星ヶ峰の黒曜石の中に和田岬第一群に属する物が多数みられる。麦草岬群は大石川の上流および麦草岬より採取された原石で作られた。これら中伊豆高原の原産地は、元素組成で和田岬、霧ヶ峰、男女倉、麦草岬の各地域に区別される。伊豆箱根地方の原産地は笛塚、烟宿、鍛冶屋、上多賀、柏崎西の各地にあり、良質の石材は、烟宿、柏崎西で斑晶の多いやや石質の悪いものは鍛冶屋、上多賀の両原産地でみられる。笛塚産のものはピッチストーン様で、石器原材としては良くないであろう。伊豆諸島の神津島原産地は砂糠崎、長浜、沢尻湾、恩恵島の各地点から黒曜石が採取され、これら原石から神津島第一群および第二群の原石群にまとめられる。浅間山の大窪沢の黒曜石は貝殻状剥離せず石器の原材料としては不適当ではあるが、考古学者の間でしばしば話題に上るため大窪沢群として遺物と比較した。また、北陸地方では、富山県の魚津、石川県の比那、福井県の三里山、安島の各原産地が調査されていて、比那、魚津産黒曜石が石器原材として使用されている。山陰地方の原産地は隱岐島の久見、津井、加茂に代表され石器原材としては小さすぎる豆粒大の黒曜石の露頭が福浦地区にある。また、兵庫、鳥取の県境の兩造地区から発見されている黒曜石は微小で、石器原材としては使用できない。九州北部地方では佐賀県の腰岳地域および大分県の姫島地域の観音崎、両瀬の両地区は黒曜石の有名な原産地で、姫島地域ではガラス質安山岩もみられ、これについても分析を行った。また、長崎県、壱岐島も君ヶ浦、久喜ノ辻、角川、貝畠など地点から黒曜石が採取できる。西北九州地域で似た組成を示す黒曜石の原石群は、腰岳、古里第一、松浦第一の各群（腰岳系と仮称する）および淀姫、中町第一、古里第三、松浦第四の各群（淀姫系と仮称する）などである。また、古里第二群原石と肉眼的および成分的に似た原石は嬉野町松尾地区でも採取でき、この原石は姫島産乳灰色黒曜石と同色調をしているが、元素組成によって姫島産の黒曜石と容易に区別できる。もし似た元素組成の原石で遺物が作られたとき、この遺物は複数の原産地に帰属され原石産地を特定できない場合がある。たとえ遺物の原石産地がこれら腰岳系、淀姫系の原石群の中の一群および古里第二群のみに帰属されても、この遺物の原石産地は腰岳系、淀姫系および古里第二群の原石を産出する複数の地点を考えなければならない。角礫の黒曜石の原産地は腰岳および淀姫で、円礫は松浦、中町、古里（第二群は角礫）の各産地で産出していることから、似た元素組成の原石産地の区別は遺物の自然面から円礫か角礫かを判断すれば原石産地の判定に有用な情報となる。また、九州中部地域の塚瀬と小国（第二群は角礫）の原産地は隣接し、黒曜石の生成マグマは同質と推測され両産地は区別できない。また、熊本県の南関、瀬、冠ヶ岳の各産地原石はローム化した阿蘇の火碎流の層の中に含まれる最大で親指大の黒曜石で、非常に広範囲な地域から採取される原石である。

サスカイト原石

サスカイトでは、 K/Ca 、 Ti/Ca 、 Mn/Sr 、 Fe/Sr 、 Rb/Sr 、 Y/Sr 、 Zr/Sr 、 Nb/Sr の比の値を指標として用いる。サスカイトの原産地は西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地お

より質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。図2にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数個の群に分かれる。近年、丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で善通寺市の大麻山南からも産出している。これらの原石を良質の原石を産出する産地および原石産地不明の遺物を元素組成で分類すると69個の原石群に分類でき、その結果を表2に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類され区別が可能なことを明らかにした。金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円錐状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が表2に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。また和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋・和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、表2、3のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心とした広い地域から採取された。この二上山群と元素組成の類似する原石は和泉・岸和田の原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、表3のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行った。一方黒曜石製のものは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。産地分析で水和層の影響は、軽い元素の分析ほど大きいと考えられるが、影響はほとんど見られない。Ca/K、Ti/Kの両軽元素比の値を除いて産地分析を行った場合と、また除かずに産地分析を行った場合で同定される原産地に差はない。他の元素比の値についても風化の影響を完全に否定することができないので、得られた確率の数値にはやや不確実さを伴うが、遺物の石材産地の判定を誤るようなことはない。

今回分析した田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳から出土した黒曜石製石器およびサヌカイト製

石器の分析結果を表3-1、3-2に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するために数理統計的手法を用いる。例えば試料番号57614番の遺物ではRb/Zrの値は0.417で、久見群の〔平均値〕 \pm 〔標準偏差値〕は、 0.398 ± 0.013 である。遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 1.5σ 離れている。ところで久見原産地から100ヶの原石を探ってきて分析すると、平均値から $\pm 1.5\sigma$ のずれより大きいものが13個ある。すなわち、この遺物が久見群の原石から作られていたと仮定しても、 1.5σ 以上離れる確率は13%であると言える。だから、久見群の平均値から 1.5σ しか離れていないときには、この遺物が久見群の原石から作られたものではないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を佐賀県腰岳産地の原石に比較すると、腰岳群の平均値からの隔たりは、約 15σ である。これを確率の言葉で表現すると、腰岳群の原石を探ってきて分析したとき、平均値から 15σ 以上離れている確率は、千兆分の一であると言える。このように、千兆個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、腰岳群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことと簡単にまとめて言うと、「この遺物は久見群に13%で帰属され、信頼限界の0.1%を満たしていることから久見原産石が使用されると同定され、さらに腰岳群に対しては十発分の一%の低い確率で帰属され、信頼限界の0.1%に満たないことから腰岳産原石でないと同定される」。遺物が…ヶ所の産地(久見産地)と一致したからと言って、例え久見群と腰岳群の原石は成分が異なっていても、分析している試料は原石でなく遺物でさらに分析誤差が大きくなる不定形(非破壊分析)であることから、他の産地に一致しないとは言えない、同種岩石の中での分類である以上、他の産地にも一致する可能性は推測される。即ちある産地(久見群)に一致したと言っても一致した産地の原石とは限らないために、帰属確率による判断を表2の167個すべての原石群について行い、低い確率で帰属された原石群を消していくことにより、はじめて久見産地の石材のみが使用されていると判定される。実際はRb/Zrといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量を取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しづれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行うホテリングのT²検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて産地を同定する^{1,6}。産地の同定結果は1個の遺物に対して、黒曜石製では167個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略しているが、これら産地の可能性が非常に低いことを確認したという非常に重要な意味を含んでいる、すなわち、鷲岐島の久見原産石と判定された遺物について、北朝鮮の会寧遺跡で使用された原石と同じ元素組成の原石とか信州和田岬産の原石の可能性を考える必要がない結果であり、高い確率で同定された産地のみの結果を表4に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、多数の試料を処理するために、小さな遺物試料の分析に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大

きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行ったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。この場合には、原石産地（確率）の欄の確率値に替えて、マハラノビスの距離D²の値を記した。この遺物については、記入されたD²の値が原石群の中で最も小さなD²値で、この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の元素組成と似ていると言えるため、推定確率は低いが、その原石産地と考えてほや間違ないと判断されたものである。今回分析した田和山遺跡出土の黒曜石遺物4個には隱岐・久見産黒曜石が使用され、サスカイト製造物13個には香川県金山産原石が使用され、縄文時代に金山・五色台産地地域遺跡で使用される国分寺・法印谷の各産地の原石の使用は確認できなかった。これは分析した遺物が弥生時代に伝播した原石が使用されているためと推測される。友田遺跡の石鏃3個にも久見産原石が1個と金山産原石が2個使用されていると判定された。また長砂11号古墳盛土から出土したサスカイト製造物も金山産原石が使用されていると同定された。今回、産地分析の結果が遺跡報告書に出土遺物についての正確な記録として残されることは、考古学上の交流、交易、文化圏などを考察する場合に貴重な資料を提供することになる。

参考文献

- 1) 萩科哲男・東村武信 (1975), 蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定 (II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 萩科哲男・東村武信・鎌本義昌 (1977), (1978), 蛍光X線分析法によるサスカイト石器の原産地推定 (III), (IV)。考古学と自然科学, 10, 11:53-81; 33-47
- 3) 萩科哲男・東村武信 (1983), 石器原料の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 友田遺跡・長砂11号墳は、岡崎雄二郎・中尾秀信・佐々木稔 (1983), 松江灘都市計画事業乃木七地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書。松江市教育委員会に掲載されている。
- 5) 東村武信 (1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 6) 東村武信 (1980), 考古学と物理化学。学生社

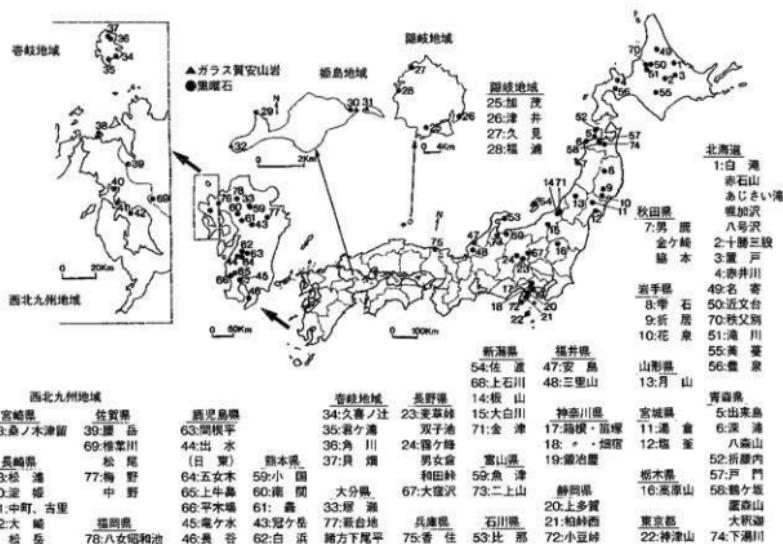


図1 黒曜石原産地

- 1.下呂地域
- 2.二上山地域
- 3.若狭地域
- 4.淡路島中西地域
- 5.金山・城山・五色台地域
- 6.冠山地域
- 7.多久
- 8.老松山・寺山・岡本
- 9.福井
- 10.牛田
- 11.大串
- 12.龜岳
- 13.甲山
- 14.馬ノ山
- 15.鹿島
- 16.小豆島
- 17.屋島
- 18.紫雲山
- 19.奥ヶ嶺地域
- 20.阿蘇
- 21.西有田
- 22.川棚
- 23.船針尾
- 24.和泉
- 25.梅原
- 26.火打沢
- 27.八幡山
- 28.御船山
- 29.施山
- 30.イトムカ
- 31.子子山
- 32.大麻山南

●: 石器原料としては良質と考えられる産地
▲: あまり良質とは言えない産地



図2 サスカイト及びサスカイト様岩石の原産地

表3-2 田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳出土サヌカイト製石器の元素比分析結果

分析番号	元素比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
57619	0.431	0.228	0.078	4.510	0.318	0.048	1.074	0.000	0.023	0.201
57620	0.441	0.223	0.095	4.994	0.314	0.114	1.190	0.026	0.025	0.196
57621	0.458	0.221	0.099	4.846	0.323	0.088	1.144	0.000	0.023	0.191
57622	0.476	0.225	0.095	4.464	0.326	0.079	1.103	0.020	0.023	0.197
57623	0.444	0.223	0.082	4.584	0.363	0.084	1.120	0.017	0.025	0.206
57624	0.457	0.222	0.078	4.873	0.325	0.081	1.145	0.000	0.023	0.203
57625	0.462	0.219	0.081	4.623	0.329	0.071	1.166	0.021	0.022	0.192
57626	0.456	0.224	0.069	4.665	0.317	0.071	1.177	0.018	0.022	0.189
57627	0.440	0.221	0.079	4.615	0.337	0.076	1.109	0.023	0.024	0.186
57628	0.420	0.226	0.087	4.665	0.335	0.065	1.076	0.012	0.023	0.183
57629	0.446	0.217	0.079	4.666	0.312	0.064	1.128	0.019	0.023	0.196
57630	0.456	0.223	0.088	4.572	0.317	0.072	1.157	0.041	0.022	0.193
57631	0.455	0.223	0.088	4.612	0.301	0.082	1.178	0.026	0.025	0.197
57632	0.457	0.224	0.078	4.741	0.293	0.069	1.136	0.019	0.025	0.202
57633	0.178	0.288	0.046	3.877	0.075	0.106	0.594	0.009	0.020	0.170
57634	0.451	0.224	0.080	4.576	0.317	0.082	1.177	0.018	0.022	0.193
JG-1	1.329	0.311	0.051	2.807	0.774	0.187	0.738	0.033	0.035	0.455

JG-1 : 菊原英羽-Ando,A., Kurassawa,H., Ohmori,T. & Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JG-1 basalt. *Geochemical Journal*, Vol.8 175-192 (1974)

表4 田和山遺跡、友田遺跡、長砂11号墳出土の黒曜石、サヌカイト製石器の原材産地推定結果

分析番号	遺物名	地 石 壓 地 (地質)	判 定	時代時期	遺物名 分類
田和山遺跡群					
57614	317. 第1遺跡 H-2区 黒色土下 黄褐色土	久慈(35%)	久 慈		不 确
57615	1072. 第1遺跡 3層 暗褐色土	久慈(15%)	久 慈		不 确
57616	(A)遺跡・B遺跡 112. - D遺跡 T-1	久慈(0.3%)	久 慈		未認爲
57617	46. 第1遺跡 3号トネルK段 №47	久慈(0.5%)	久 慈		原 石
57619	392. 第1遺跡 H-2区 黑色土下 黄褐色土	余山東(35%), 横山(35%)	各 山		石 砂
57620	434. 第1遺跡 2区 T-7 暗褐色土上	金山東(18%)	金 山		石 砂
57621	437. 第1遺跡 3区 暗褐色土上	金山東(20%)	金 山		石 砂
57622	555. 第1遺跡 2区 山頂斜面 黑色土	金山東(15%)	金 山		石 砂
57623	409. 第1遺跡 2号 暗褐色土上	金山東(25%), 金山西(3%)	金 山		石 砂
57624	438. 第1遺跡 2区 T-7 暗褐色土上	金山東(20%), 金山西(2%)	金 山		石 砂
57626	416. 第1遺跡 9区 7層 黄灰色土	金山西(25%)	金 山		石 砂
57628	391. 第1遺跡 10区 H層 暗褐色土	金山西(20%)	金 山		石 砂
57629	399. 第1遺跡 H区	金山西(40%), 金山西(15%)	金 山		石 砂
57628	(A)遺跡・B遺跡 111. - D遺跡 T-1	金山西(40%), 旅山(7%)	金 山		石 砂
57629	861. 第1遺跡 H区 東山上	金山西(40%), 金山西(2%)	金 山		石 砂
57630	469. 第1遺跡 H区 黑褐色土	金山西(81%)	金 山		板状大斧 石材の石片
57631	466. 第1遺跡 黑褐色土 №18	金山西(88%)	金 山		刃器片
友田遺跡					
57618	SK-18	久慈(25%)	久 慈		石 砂
57632	SK-18	金山西(24%), 金山西(2%)	金 山		石 砂
57633	SK-18	平堁(サヌカイトイド?)			石 砂
長砂11号墳					
57634	墓上土	金山西(99%)	金 山		本機石器

注意: 遺物産地分析を行ったがなくなりましたが、種別採取が選択もしくは回らざる結果のみ回らざる結果のみ回被採用される場合があります。
 本機器では主としてにおける地質学的・鉱物学的の判別基準を一括りして、遺物分析を行っていきますが、種別採取の所なる研究方法の基準も研究方法で異なるように思えます。そのため、本機器から得られた結果は必ずしも正確な結果ではない場合があります。
 逆にこれが、全く正確でない(カルテッシュン)ではありません。本研究結果が誤解されざるには正確な研究法で再分析が必要です。
 本機器の分析結果を参考書等資料とす場合には常に同じ基準で測定されている結果が古代文化遺物などを考慮する必要があります。

環壕内出土石板状石製品について

松江市教育委員会 岡崎 雄二郎

1. 石板状石製品の概要

田和山遺跡からは、棍と思われる石製品の破片が2点出土している。その内、第1環壕（1-c環壕）から出土した破片No.343（図1-1）は、片面全体がよく研磨されており、側部の断面は台形を成し側面は全面斜め方向の擦痕がある。

もう一方の面は、石を打ち欠いてほぼ均一な厚みに剥離させたままの状態で凹凸があり、一部こすれて摩滅した箇所は認められるものの意識的に研磨はされていない。

2点目の破片（1-a環壕弥生中期堆積土出土）No.95（図1-2）は、全体的にやや摩滅しており、さほど明確ではないが、一面には雲母状の鉱物が確認される。側部の断面はほぼコの字で面取りが施されている。

2. 研究者の見解

これら2点の石製品の復元形状及び用途については、当初は全く考えが及ばなかったが、平成12年1月9日に発掘調査を担当していた財團法人松江市教育文化振興事業団の瀬古諒子が、シンポジウムに参加するため松江市に来ておられた九州大学大学院の西谷正教授に実物を見ていただいたところ、後日楽浪の硯ではないかとの見解が資料と共に示された。

又、平成12年3月4日、当時島根県教育委員会文化財課の上幹足立克己氏が真っ先に注目され、東京大学文学部列品館所蔵の楽浪・王肝墓出土の硯を実測、田和山遺跡出土品と比較検討された。その結果、石質は違うが加工の方法はよく似ており、硯の可能性が高いとの感想であった。

同年4月、当時島根県埋蔵文化財調査センターの松本岩雄氏も同じくこの石製品に注目され、東京国立博物館に当該遺物を預け、白井氏ほかに見ていただいた。白井氏は、東京国立博物館所蔵の楽浪の硯を観察・比較され「岩質や裏面の様相が類似するようにも感じられた」とのことであった。

以下、研究者の見解の概要を記す。

（1）西谷 正（九州大学大学院人文学科研究院教授）の見解

田和山遺跡出土品（図1-1）と同時代の楽浪郡から出土した硯と比較すると、石の質や加工の仕方が非常に似ていること。石の側面や裏面を見ると割れ方や石材そのものの粒子などがとても似ている。このことから、おそらくこれは楽浪からきた硯（上の石だから研石）であろう。最初、平安時代の「石帶」ではないかと思ったが、縫い付けるための穴がないことと弥生時代中期の上層から出土のものだというのでわからなくなってしまった。

そこで楽浪郡関係の報告書を見てみたら似たものがあった。そして、東京国立博物館に同種のものが陳列してあったことを思い出し、見せてもらった結果、田和山遺跡出土のものは、硯の部品の一部である。正確に言えば研石と言うべきだと思う。これが硯であって楽浪から何らかの経路で地元の弥生人が手に入れたとしても、ステータスシンボルとしての認識しかなく、文字文化が付随していたとは思えない。（参考文献1、2及び直接お聞きした話から要約した）

(2) 白井克也（東京国立博物館文化財部展示課主任研究員）の見解

福岡県前原市の三雲南小路遺跡出土の金銅四葉座金具や山口県下関市の地蔵堂遺跡出土の蓋弓帽も、田和山遺跡出土の硯と同じ弥生時代中期後半頃に入ってくる。最初は、砥石ではないかと思ったが、東京国立博物館や東京大学、韓国の国立中央博物館に所蔵されている楽浪の硯と比較して硯だと確信した。

東京国立博物館所蔵の石板を観察すると上面は非常に平坦で滑らかである。研石のほうは、下のほうは四角く、上のほうは丸く作られている。側面と上の部分は赤漆が塗られている。また、若干墨が付着している。これは、硯で墨をするための道具つまり研石である。

こうした楽浪の硯の特徴をふまえた上で、田和山遺跡出土の石板状石製品を見ると、細かい特徴を全て備えているわけではないが、広い面の一つは非常に綺麗であること。側面は荒削りのままであること。このような表面処理の組合せは硯以外考えにくい。石材もキラキラ光るもののが入った堅い石材を使い雰囲気も似ている。側面に残る黒いところは墨かどうか疑問だが、継続的に盛んに使っていたものではないだろう。

楽浪からの直接の関係ではなくて、北部九州あたりに来ていたものがなんらかの地域間の繋がりによって順繰りに回ってきたものである可能性が高い。（参考文献4、5から要約した）

(3) 曹喜勝（朝鮮社会科学院歴史研究所所長）の見解

ピョンヤンの楽浪一帯では、約25個の硯が出土した。田和山遺跡の硯造物は、形態、及び大きさから見ても硯に相違なく、厚さも楽浪の硯と符合します。黒く付着してあたかも墨跡のような黒い部分があります。この事実は、田和山遺跡で出土した硯が、正しく楽浪の人達が残したものと見られる可能性を与えてくれます。勿論、だからと言って、それは田和山遺跡の硯台1～2個をもって「弥生時代の人達全部が文字を所有していた」とは断定できません。恐らくそれは当時少数のピョンヤン楽浪人達が、田和山遺跡に寄って、偶然に残した遺物と觀るのが合理的であります。（参考文献3から要約した）

3. 国内所在、楽浪の硯の観察結果

平成14年6月3・4日の両日、財團法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課の瀬古諒子係長と同係落合昭久及び松江市教育委員会文化財課長岡崎雄二郎の3名が、東京国立博物館及び国立歴史民俗博物館において東京国立博物館及び東京大学所蔵の楽浪出土の硯を実見・観察したので、以下にその結果を記す。

■東京国立博物館所蔵品（小倉コレクション：朝鮮楽浪遺跡出土品）

(1) 石硯（図1-4）

短辺（磨面）5.5×残存2.2～5cm、厚さ5mm、方形板状であったと思われるが、折損している。断面には、石膏が付着しておりかつて補修復元されていたらしい。紫灰色の緻密な石材で金雲母様の粒子を含み研石と同じ石材とみてよい。石材を方形に切り上面を平滑に整える。

上面端部は、面取りし、平滑に仕上げられている。上面には、斑点状に墨跡が残る。側面は下がやすぼまっており、木枠などに硯を落としこんだものと思われ、下面は割り面のままで

墨痕様の黒色部分が数ヶ所みられる。側面は下面に向かってやや内傾し、長さ5.2cmとなる。

(2) 研石 (図1-3)

3.2cm四方の正方形。高さ1.4cm。紫灰色の緻密な石材で磨面を観察すると金雲母様の細かい粒子を含んでいる。石材を方形に切り、上半部を丸く整えて上円下方形とする。下面を除く全面に赤漆塗り。下面是平坦で磨研により平滑。下面数ヶ所と四隅上面に墨が付着している。

■東京大学所蔵文学部列品館所蔵品

(3) 王肝墓出土石板 (図2-6)

縦9.05～9.1cm、横3.15cm、厚さ約4～5mm。石材は金雲母様の粒子が多く含まれ、側面に層理が観察され粘板岩と思われる。上面は、ほぼ全面に墨痕あり。下面是墨痕なし。短辺の側部は約0.5mm内傾し、長辺の側部はほぼ垂直である。側部の3面にわずかに墨が付着。

(4) 王肝墓出土石板 (図2-5)

石材は、(3)と同じ。2.35～2.45cm×2.35cmの略方形で厚さは3～4mm。上面には墨痕のような薄い膜があり、半だが端部がわずかに丸くなっている感じがする。下面に墨は付着していない。約1.8cm四方がわずかに窪んでいる。つまみを受けた痕跡かもしれない。側面を約1mmカットしたため、各辺共内傾し2.3×2.2cm四方となり、剥離面のままで端部が若干隆起する。側部は全面斜め方向に擦痕を残す。

(5) 楽浪土城出土石板

石材は、雲母のような金色に光る粒子を含む。3.55×3.4cmの略方形で、厚さ4mm。上面は研磨されかなり光沢がある。下面是研磨し滑沢があるが、全面ではない。側面は、四面とも擦痕が見えないくらいに研磨されている。

参考文献

- 東京帝国大学助教授原田謙人、同文学部嘱託川澤金吾「楽浪 五官掾王肝の墳墓」(東京帝国大学文学部編
『楽浪』昭和15年11月所収)
東京大学文学部考古学研究室「考古学研究第三冊 昭和三十九年 楽浪郡治址」昭和40年3月

4. 楽浪出土の硯について

楽浪で出土した石硯と研石について、曹喜勝の示した「楽浪出土硯一覧表」を見てみると、25点中、研石は4点あり長さ2.6、3、4cm四方、厚さ2、4mmのものもあれば1.8、2cmの分厚いものもある。石硯のほうは、長辺8.8～15.6cm、短辺3～7cmまでばらつきがある。厚さは、4mmのものと6mmのものの2種があり、田和山遺跡出土品は破片なので厚さしか比較できないが、楽浪出土品の分厚いほうとほぼ同じである。

参考文献

- 朝鮮社会科学院歴史研究所室長 曹喜勝「絹と硯を中心とした楽浪遺物を通じて観た楽浪文化の性格と出雲地方への伝播」(北東アジアシリーズ2002 楽浪文化と古代出雲 当日レジュメ) 所収

5. 小 結

田和山遺跡出土の石板状石製品2点と国内・外所在の楽浪出土の硯を比較観察した結果、以下の特徴が共通点として挙げられる。

第1環塚（1-c環塚）出土品No.343（図1-1）

- (1) 一面は、磨研され非常に平滑に仕上げられている。
- (2) 側面は、斜め方向の条線が見られ、荒削りの仕上げとなっており、断面は垂直ではなく、片面のほうへ傾斜する。
- (3) 片面は、打ち欠いただけの粗削の段階に留り、磨研していない。

1-a環塚弥生中期堆積土出土品No.95（図1-2）

- (1) 一面は、層理状の石の性質を利用して、横方向から割った後、不明確だがやや磨研しているものと思われる。そして表面は、茶褐色を呈しこすったような形跡が見られる。
- (2) 側面は、ほぼ直角に切削され一方の端部に面取りを施す。
- (3) 片面は、層理状の石の性質を利用して、横方向から削った面を磨研せずそのままとしている。剖面には金雲母様の鉱物をまじえる。縦部から1.5cm内側から中央部に向けては、ほぼ円形のすり鉢状に窪んでいる。

以上の点から、石板状石製品は2点共、楽浪出土の硯と共通点が多く、総合的に考えて硯の道具と考えてよいが、それでは果たして「石硯」なのか「研石」なのかという問題に当たる。中国・前漢出土例をみると、石硯では「長方形板石硯」が圧倒的に多い。研石でみると「上円下方形」が最も多く、次いで「円墳形」がある。そして「方板形」はごくわずかである。そこで当該品を見るに円形の把手の部分は確認できないので少なくとも上円下方形の研石ではないことがわかる。残るは方板形の研石か長方形板石硯かということになるが、現時点で確認されている量的な確率からいいくとNo.343（図1-1）の破片は長方形板石硯のほうが高いのではなかろうか。No.95（図1-2）の破片は、すり鉢状の窪みがあって不自然な形状を示すが、この点で参考になるのが前漢頃に見られる円板形研石で円墳形の把手を別に装着したらしい品である。すり鉢状の窪みは、その把手が剥離した形跡の可能性がある。

次に、田和山遺跡出土の2点とも環塚内の堆積土中から出土し、上器幅年でいうIV-1様式の上器を伴出したことから弥生時代中期後半頃に何らかの理由で壊れ、或いは意識的に壊されてその一部が環塚内に落ちたと考えられている。

田和山遺跡出土の中後期後半の土器付着すによる¹⁴C年代は、最近のAMS法による年代測定結果では紀元前230年代から紀元前40年頃までの試料によってばらつきのある数値が出ており、いまだ信頼できる段階に至っていないが、少し幅をもたせ紀元前3世紀終から紀元前1世紀終頃までと考え、一応この年代幅を想定しておきたい。

（註：考察「松江市田和山遺跡出土試料の¹⁴C年代測定（国立歴史民俗博物館他編）」・「年代測定結果報告書（加速器分析研究所編）」参照）

一方の「楽浪郡」は、前漢の武帝が、衛氏の朝鮮を滅ぼして紀元前108年に設置した郡で、現在の平安・黄海方面にあたる。後漢末の紀元204年には、南方に帶方郡を分置し、魏の所領となる。

この時、倭の女王卑弥呼は使節を送り、中国と通交した。大陸文化の東方伝播の中継地として重要な位置を占め、特に朝鮮及び日本に及ぼした文化的影響は大きい。紀元313年、晉の時、高句麗に滅ぼされた。楽浪郡の遺跡は、朝鮮平壤市外大同江沿岸に所在し、漢の樂浪郡治址（東西約700m、南北約600m）を中心とし、周辺に当時の古墳群（2,600基におよぶ）がある。

したがって、両者はほぼ重なる年代幅の中に含まれるので田和山遺跡出土の石板状石製品が「弥生時代中期後半頃に樂浪方面からもたらされたのではないか」という年代的な条件も備えているだろう。

それでは、観と考えられる田和山遺跡出土の石製品がどのような経路で樂浪郡からもたらされたのかという問題であるが、この点については研究者の間で、北九州経由とか直接山陰沿岸に来たとか、逆に倭人が樂浪郡に行って入手したとか色々なルートが考えられており、定まっていない。今後は、山陰地域で出土している樂浪郡或いは朝鮮半島からの移入品も含めて総合的に検討していくなければならない。

参考文献

1. 西谷 正「古代出雲の国際化」（北東アジアシリーズ報告書'01 「北東アジアのなかの古代出雲—古代朝鮮三国を中心に」）環日本海松江国際交流会議（2002年3月）所収
2. 西谷 正「楽浪文化と古代出雲」（北東アジアシリーズ報告書'02 「楽浪文化と古代出雲」）環日本海松江国際交流会議（2003年3月）所収
3. 曹喜勝「縄と鏡を始めとした楽浪遺物を通じて観た楽浪文化の性格と出雲地方への伝播」（北東アジアシリーズ報告書'02 「楽浪文化と古代出雲」）環日本海松江国際交流会議（2003年3月）所収
4. 白井克也「誌上ギャラリー・トーク3 樂浪郡の観 弥生人は文字を使っていたのか」（国立博物館ニュース2001.11・12月号）所収
5. 白井克也「朝鮮半島の文化と古代出雲」2004年8月8日講演記録（田和山サポートクラブ編「田和山遺跡国史跡指定3周年記念講演記録集」）所収
6. 林巳奈夫編「漢代の文物」京都大学人文科学研究所（昭和51年12月）
7. 西林昭一・玉村壽山「ヴィジュアル藝術全集第十卷文房具」
8. 吉田恵二「長方形板石観考」（論苑考古学 坪井清足さんの古種を観る会編 天山舎（1993年4月）所収

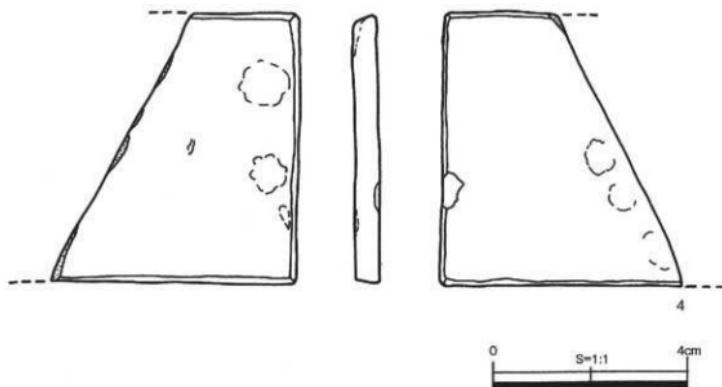
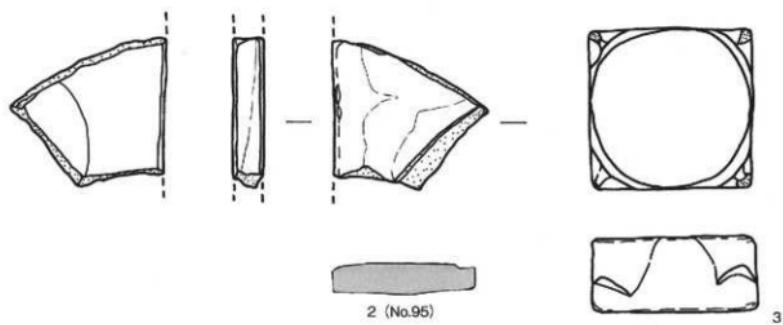
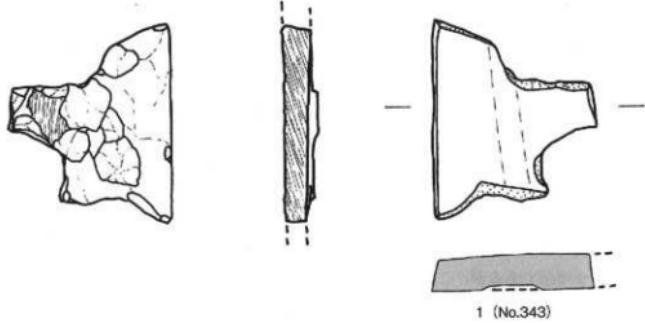
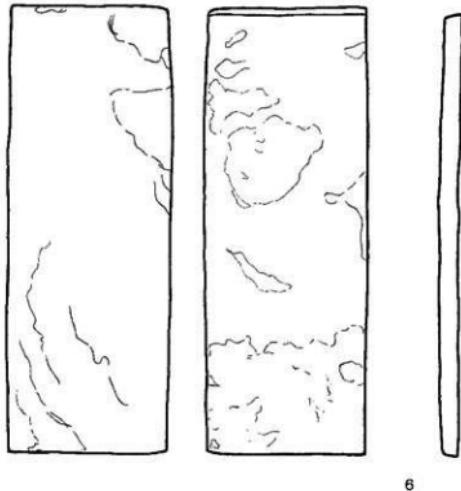
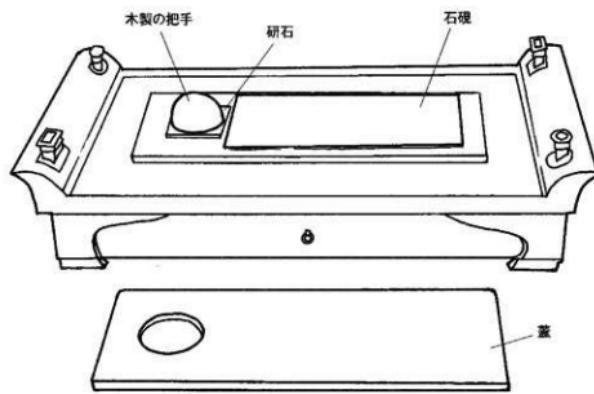


図1 田和山遺跡出土石板状石製品・楽浪郡出土現実測図



0 S=1:1 4cm



7. 平安南道彩繪塗出土硯研台(復元図)

図2 楽浪郡出土硯実測図・硯台復元図



1 (No.343)



2 (No.95)



6



5



田和山遺跡出土石板状石製品・秦浪郡出土硬写真



4



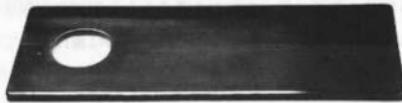
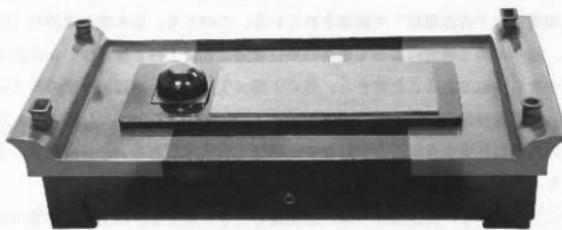
3



4



3



硯台（復元模型）

秦浪郡出土硯・硯台（復元模型）写真

第6章 総括

本章では、田和山遺跡の核となる山頂部の5本柱造構・9本柱造構・規則性が見られない柱穴群についての検討と、弥生期を中心とした田和山遺跡の遺構の変遷を述べ総括に代える。本来なら遺物・住居跡群及び弥生期以外の遺構等の検討・考察を加え、まとめとすべきものであるが、文章量的な問題もあり本章では割愛させて頂くことを了承願いたい。なお、各遺構の詳細については、第4章 発掘調査の結果を参照してもらいたい。

1. 5本柱造構・9本柱造構・規則性のない柱穴の性格の検討

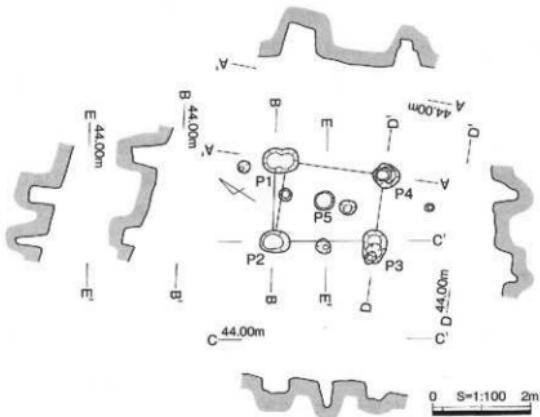
田和山遺跡において3重の環壕を廻らした山頂部にて検出した遺構は、この空間を囲む構跡、三日月状加工段、5本柱遺構、9本柱造構、規則性のない柱穴のみである。通常、弥生時代の環壕を廻らす遺構は環壕集落と呼ばれる。名前の如く、環壕の内側に竪穴住居等の居住施設を設け、環壕によって守られているものである。しかし、田和山遺跡山頂部には、居住施設と思われる竪穴住居等の施設が存在せず、竪穴住居等の施設は環壕の外側に作られている。この状況は、あたかも一般的の民を排除した非日常的な空間であった特殊性の強いものさえ感じさせるものである。

では、この山頂部のおいて主となろう9本柱造構と5本柱造構は如何なるものであったのか。山陰地方においては近年、田和山遺跡の9本柱遺構のような「田」の字状の9穴の柱跡遺構が各地で報告されている。弥生時代ものでは、鳥取県淀江町の妻木晩田遺跡¹⁰、鳥取県淀江町の百塚遺跡群¹¹等が知られ、古墳時代になるとその数は多くなり、近隣では島根県安来市の浜山池遺跡¹²等で確認されている。奈良～平安時代のものとしては、島根県斐川町の杉沢Ⅲ遺跡¹³でL字状の柱穴列を作り立派な9本柱遺構が検出されている。また、5本柱遺構と類似する可能性がある弥生時代の遺構は、島根県山雲市下古志遺跡¹⁴で確認されている。このうち、妻木晩田遺跡の「田」の字状9本柱の遺構は、近年の調査研究によって集落の単位集団ごとに1～2棟程度しか存在せず、全体の掘立柱建物の中でも少数であること等から、他の1間×1間ないし1間×2間の掘立柱建物とは異なるものであった可能性が高いことが指摘されている。¹⁵また、こういった遺構のあり方から集落の一般構成員のための住居や倉庫などではなく、居館・公共施設あるいは集落に暮らす弥生人たちの精神的なよりどころとなる宗教的な施設であったとの解釈も成されている。¹⁶

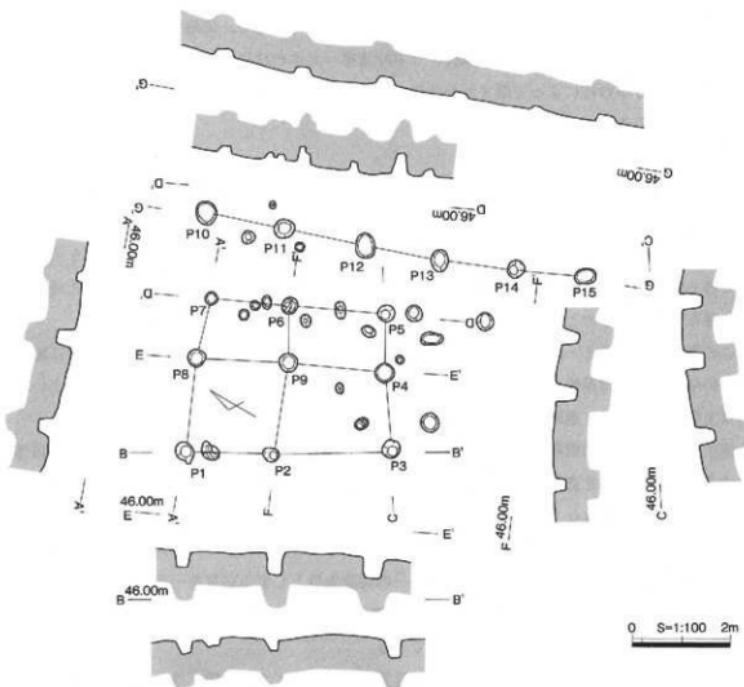
田和山遺跡に目を移すと、山頂部からは、祭祀遺物とされる土玉が出土し、環壕内からは、山頂部からの転落物であろう同じく祭祀に用いられたと考えられる銅劍形石劍等の出土が確認されている。また、前述のとおり環壕外に住居域が広がり、その内側には壕によって開拓された住居等や動産的富が見られない特異な空間が存在するその形態から、山頂部は祭祀性が強い空間であったと推測される。

このような状況から、この山頂部内に所在する5本柱造構・9本柱造構は、妻木晩田遺跡で示されたような弥生人たちの精神的な依りどころとなる宗教的・祭祀的な要素をもった施設とも考えられようものである。

山陰の5本柱の遺構または9本柱の遺構については、浅川滋男氏によって早くから検討が成され



第1図 5本柱造構



第2図 9本柱造構・柱穴列

ており、特殊性が見出せる 5 本、9 本柱の遺構を各時代の変遷を追いながらその性格について論及している。田和山山頂部について浅川氏は、規則性が見られない柱穴が山頂部に現れた初現期の依代であって、始めは 1 本で存在し、その次に 5 本柱遺構の 4 本の隅柱に心柱をもつ所謂、4 本の標杭によって囲まれた依代に変わり、その後 8 本の標杭をもつ依代の 9 本柱遺構に変化していくものと考察している。また同氏は、9 本柱遺構となった段階で覆屋が設けられた可能性があることも推論している。⁽⁸⁾ その他、古代史学から岡田精司氏は、古代の祭場について「はじめは特に建造物は作らず、祭場の一角に神靈をむかえるための籠岸やヒモロギ=神木があるだけの、簡素なもの」と推論している。⁽⁹⁾

宗教的、とりわけ祭祀的なものとして古代から依代・ヒモロギと言うものがある。神靈が現れる時の媒体となるもの、神宿る木とされるものである。弥生時代の祭祀形態は、農耕儀礼・太陽信仰・地母信仰等、多種多様なものが想像されているが、いずれにしても目的達成のため、何かに頼る、願うという所謂、「カミ」といった概念があったことは想像に難くない。この「カミ」概念に基づく祭祀を考えるとその祭場に依代・ヒモロギのような存在を思考することは可能と考える。(依代・ヒモロギ=神社といった概念は除いたうえで)

5 本柱遺構・9 本柱遺構(柱穴列含む)・規則性のない柱穴は、前述のとおり、特殊な立地状況・祭祀系遺物の出土等から祭祀色が強い施設と判断する。そのうえで、現時点におけるこれら遺構の性格は、規則性のない柱穴 = 1 本の依代・5 本柱遺構 = 4 本の柱によって囲まれた依代・9 本柱遺構・柱穴列 = 8 本の柱によって囲まれた依代・これの日陰し塀(欄)といったものであったと現時点では推しておきたい。

2. 田和山遺跡の変遷における考察

〔弥生時代前期末～中期初頭〕

この期の山頂部には、南東端に三日月状加工段、北西端に 5 本柱遺構がこれと同時もしくは前後して作られている。また、建物を想定できない規則性がない柱穴の中の幾つかもこれらとほぼ同時期に存在していたものと考えられる。

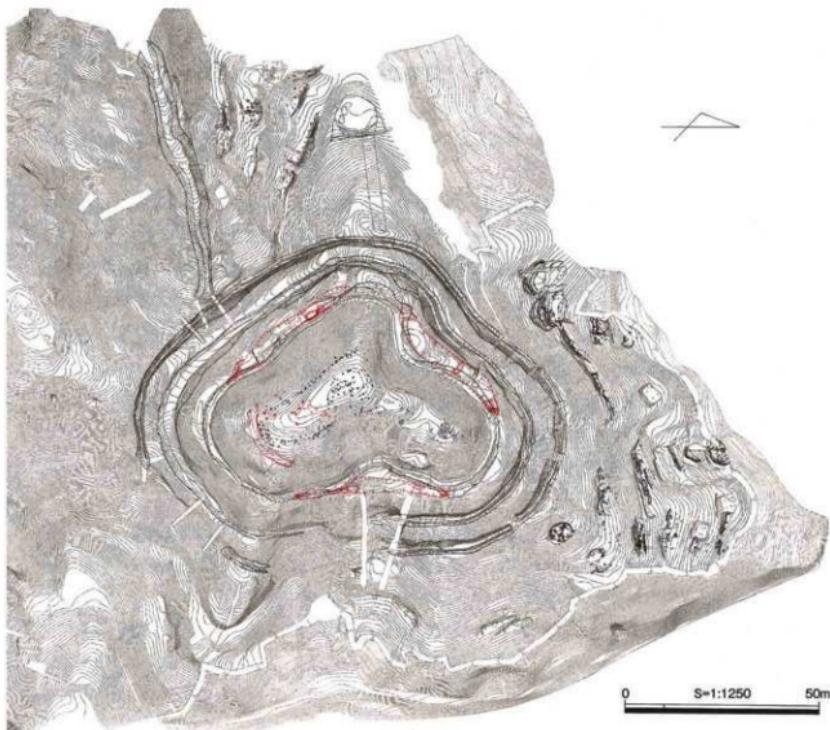
この期の塙である 1-a 環塙は、東部、南西部、北西部の三方のみ造られ、丘陵から裾に延びる四方の尾根はいわば開放された形を呈する。環塙外側においては、住居等の遺構は存在しない。遺物は土器の他、石鐵・飛鏢石の出土も見られる。

弥生前期末～中期初頭期の田和山遺跡は、塙が尾根部を開放することから、遺跡外から山頂部に対する「人」の侵入を遮断することには主眼が置かれなかったものと推測される。そしてその主たる目的は「防衛」ではなく「区画」するといったものであったと考える。出土遺物に目を移すと、防衛的行為を示す石鐵・飛鏢石等の戦闘系遺物も見られるが、仮に「人」対「人」の戦闘が想定される背景がこの期にあったのなら、塙は第一の防衛施設として山頂部を一周させるのが自然な行為であろう。しかし、塙はあくまでも尾根部を開放する形をとっている。この状況も、塙の「区画」という性格を後押しさせる要素の一つである。

この期に存在する遺構は前述のとおり、三日月状加工段と 5 本柱遺構、それと規則性の見られない柱穴のみである。三日月状加工段は、これが立地する斜面下に谷部地形で唯一塙が造られていない

いことを考えると、壇に変わるものとしてこの場所に加工段が造られた可能性が高いものとも推察される。また、5本柱遺構は第4章 第1節で述べたとおり、山頂部の南側縁辺部にあたる極めて不安定な場所に立地することや、遺構内面積3m²という規模から見て、建物跡等の居住に関する施設が存在していたとは考え難く、前述のとおり依代のような性格をもつ遺構と想定している。その他、この期に存在する可能性がある遺構として規則性の見られない柱穴がある。この柱穴の中には5本柱遺構に見られるような大形の柱穴も幾つか見えるが、建物と想定出来得る規格性は認められていない。これら柱穴の大きさからは、ある程度大きな柱がそこに立っていたことは想像できる。その性格は、前述のとおり、独立した柱がある意味をもってそこに立っていた、所謂、依代のようなものがあったと想像する。

弥生前期末～中期初頭期に存在する遺構は以上のとおりであるが、これら遺構はすべて山頂部の南東側に位置しており、当該期に属すI-4～II-1様式の出土遺物も山頂部南東側の範囲で多くが認められている。これらのことから、A期山頂部の主たる活動・活用範囲は南東側であったと考えられる。



第3図 田和山遺跡群 弥生前期末～中期初頭 全体図

えられる。また、前述のとおり塹と見立てた三日月状加工段は南東側に位置し、5本柱遺構もこれに近いところに立地する状況より、弥生前期末～中期初頭期においては、南東方向が特別な意識をもたれていたものと推測できる。

弥生時代前期末～中期初頭の田和山遺跡の塹は、「防御」よりも「区画」として用いられ、この塹により外界とを区切られた山頂部空間の構築物は「柱」のみであったとの状況が窺えるのである。

〔弥生時代中期中葉～中期後葉〕

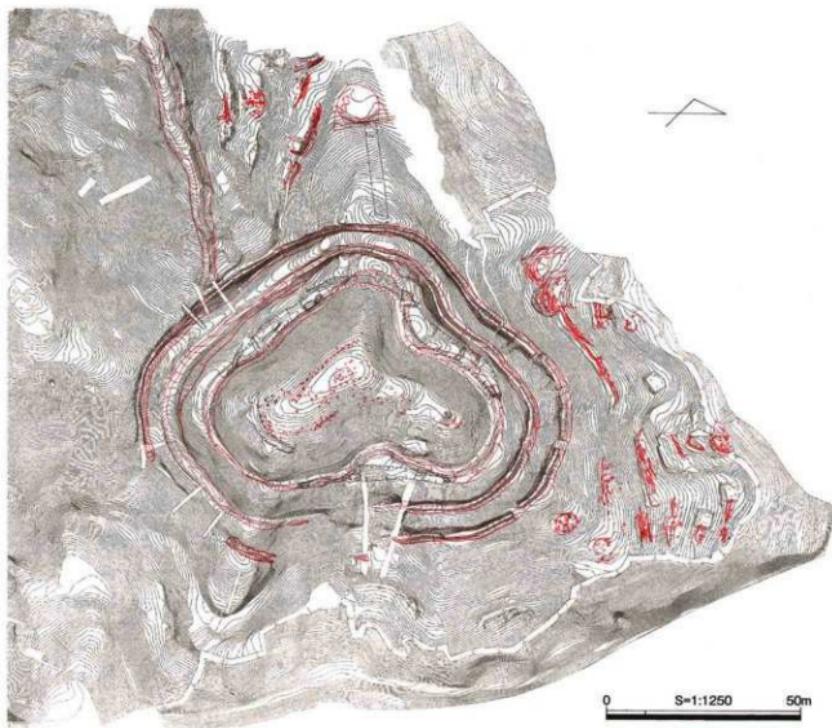
当該期の山頂部においては、それまで存在した三日月状加工段・5本柱遺構と規則性のない柱穴の多くが機能を停止、埋没し、新たに山頂部縁辺部を一周する柵と9本柱遺構・柱穴列が作られる。

塹は、弥生前期末～中期初頭期の開放していた尾根部を掘削し山頂部を一周させ、これと時期をほとんど置かず、その外側に2本の塹を造っている。山頂部に柵を巡らし、その外側の斜面に3重の環塹を閉鎖させたその姿は、弥生前期末～中期初頭期の簡素的なものから防御色の濃いものへと大きな変化を見せるものである。また、それまで手が加えられることのなかった環塹外側の斜面には竪穴住居や掘立柱建物等が作られ、弥生前期末～中期初頭期の山頂部のみに見られた活動・活用範囲が丘陵裾部にまで拡大する状況が窺える。遺物の出土状況は時期が違うだけで基本的には弥生前期末～中期初頭期と同様であるが、土器・石器・石鎚・飛鏢石等、その量は格段に増えている。器種は銅劍形石剣・土玉・分銅形土製品等の祭祀遺物が新たに見られ、これらは環塹外側の住居群からも出土している。

弥生中期中葉～中期後葉期の田和山遺跡の形態は、3重の環塹によって守られる防御色の強いものへと大きく変化するが、依然、塹によって守護された山頂部の空間には住居跡は存在していない。この期の山頂部には前述のとおり、9本柱遺構・柱穴列と山頂部空間を一周する柵のみの存在しか認められない。9本柱遺構は2間×2間で真中に心柱をもつ遺構で、本遺跡の最高所に位置しているものである。この遺構は「田」の字がやや変形する歪な平面形を呈することから掘立柱建物跡と想定し難く、さきの5本柱遺構と同様、建物とは相違する施設であったと考えられ、これも5本柱の性格を踏襲する依代状の遺構と現時点では想像する。また、9本柱遺構の北側に並列する柱穴列は9本柱遺構に付随するこの遺構を遮断する目的で作られた目隠しの柵で、山頂部を一周する柵は防御を目的とした施設の他、山頂部空間を隠す遮断施設の性格も併せ持ったものであったと推測できるのである。

以上の考察から弥生中期中葉～中期後葉期の山頂部は、柵によって囲繞された空間に目隠しの柵を伴った9本柱遺構のみが存在した様子を窺うことができ、弥生前期末～中期初頭期と同様、居住・貯蔵等の動産的富に関する遺構はなかったものと思われる。

環塹については、全周する3重の環塹へと移り変わり、環塹の本質であろう「人」からの防御といった要素がこの期には見られる。これは当該期に戰さがあった、もしくはそのようなことが起こりえる背景が当地に存在したことを示唆させようものである。しかし、南東側の一部において、第3環塹が意図的に造られず、開放する形をとることや、同じく第3環塹が防御的な必要がない南丘陵にまで及んで造られている事等から、この期の環塹も弥生前期末～中期初頭期と同様な目的、性



第4図 田和山遺跡群 弥生中期中葉～中期後葉 全体図

質をもつものであったとも考えられる。またそれは、防御としての機能の他、視覚的または精神的な要因により3重の環壕形態に拘った弥生前期末～中期初頭期の外界との区画と言った機能を色濃く残した壇であったと考えられるのではないだろうか。

環壕外側に存在する住居群においてはこの期で始めて作られる。その存在期間は3重の環壕と同様で中期後葉に機能を停止する。また、その存在する位置は南西側と北側に別れており、意図的に区分けされたものと思われる。南西側の住居エリアは、山頂部への唯一の進入経路と推される西側尾根ルートが所在するうえ、本遺跡最大の竪穴住居SI-01と掘立柱建物SB-02等、特殊性が強い遺構が集中して認められている。また、この南西側に存在する遺構は環壕外側で確認されている住居等の遺構18所に対し、7所とその数は少ない傾向が見てとれる。このように数少なく特殊性が見られる南西側の住居エリアの遺構は、山頂部へと上がることの出来た限られた者の住居または、祭祀の建物・遺構との解釈も成り立ちよう。これは南西側の住居エリアからは山頂部を眺望でき、北側の住居エリアからはこれを見ることが出来ないといった視覚的な要素が示すことも推測材料の

一つとなり得る。

弥生中期中葉～中期後葉期の木遺跡は、弥生前期末～中期初頭期の5本柱遺構の機能を踏襲した日隠し櫛を伴う9本柱遺構と、その周りに更なる日隠し櫛を巡らせた山頂部空間に3重の環壕が外界との区画・精神的要因と防衛を目的として巡っていた状況が窺われるのである。また、環壕外側の斜面においては環壕集落の定義と相反する様相で住居群が存在し、その中にでも南西側の住居エリアが祭祀性の強い特別な住居域であったものと考えられよう。

3. 結語

本章では、田和山遺跡の核となり得る山頂部の5本柱遺構・9本柱遺構を「依代」の遺構と想定し、また、実際に「人」対「人」の「いくさ」が行われたことにやや否定的な見解を述べた。ただ、これは所謂一案にしか過ぎず、「いくさ」があった等の推論を本質的に否定するものでもない。実際、調査結果からは「いくさ」について、これを正当できる要素と否定できよう要素が共存する。また、祭祀遺跡としての位置づけに関しても、その形態においては全くもって想像の域をでないものである。

近年、田和山遺跡と類似する、壕によって囲繞された空間に居住施設が見当たらない遺跡が幾つか報告されている。島根県雲南市三刀屋町の要害遺跡⁽¹⁰⁾は尾根状の狭い空間を1重の壕が周るもので、壕の内側の空間には遺構が一切確認されていない、同県安来市伯太町の経塙鼻遺跡⁽¹¹⁾も完全なる姿は見ないが1重の壕が廻り、その内側の空間には壕と同時期の遺構はないようである。その他、兵庫県和田山町の大盛山遺跡⁽¹²⁾や韓国京畿道安城市所在の盤諸里遺跡⁽¹³⁾も同様、環濠外に住居等の遺構が存在する遺跡として知られている。

本遺跡の性格を解明していくにあたっては、このような類似する遺跡の検討が不可欠なものであり、それをなくしては実際の遺跡像を復原することはできないように思われる。

今後、田和山遺跡を含め、類似する遺跡の更なる検証・考察が行われ、このような特異な遺跡の性格と、山陰の弥生時代がより一層明らかにされることに期待し、本章の結語とする。

註

- (1) 「妻木山地区」「妻木曉田遺跡発掘調査報告書」2003.3 大山スイス村埋蔵文化財発掘調査團・鳥取県大山町教育委員会
- (2) 「百塚遺跡群Ⅳ」「鳥取県宮小流域は場整備に伴う発掘調査報告書」1995.3 深江町教育委員会
- (3) 「浜山池遺跡」「一般国道9号安米道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 西地区Ⅵ 浜山池遺跡・原ノ前遺跡」1997.3 建設省松江国道工事事務所・鳥取県教育委員会
- (4) 「杉沢Ⅱ遺跡 現地説明会資料」斐川町教育委員会
- (5) 「下古志遺跡」「一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2001.3 鳥取県出雲市建築事務所・出雲市教育委員会
- (6) 中原 齊「2 妻木曉田遺跡における掘立柱建物について（1）～9本柱掘立柱建物跡を中心に～」『妻木曉田遺跡発掘調査研究年報』2002 鳥取県教育委員会
- (7) 中原 齊「妻木曉田遺跡にみる弥生の岡田 九本柱掘立柱建物の問題を中心に」『建築雑誌 都市と都市以前 アジア古代の居住構造 VOL.117』2002.5 日本文庫学会
- (8) 浅川滋男「五本柱と九本柱 大社造りの起源と『五大本殿の復元・序説』」「文化財 文化財講座特集号」2003.3 鳥取

県文化財所有者連絡協議会

- (9) 岡田耕司「日本の神と社」「神社の古代史」1985 大阪書籍
- (10) 「熊谷遺跡・要害遺跡発掘調査報告書」2001.3 烏根県教育委員会
- (11) 「経塚鼻遺跡発掘調査概要」|現地説明会資料』2004.12.18 安来市教育委員会
- (12) 「大盛山遺跡」「和田山町文化財調査報告書第7集」1995.3 和田山町教育委員会
- (13) 角田徳幸氏より資料提供頂いた。

安城 離諸里遺跡 発掘調査】2004.12 鎌田(財)中原文化財研究院

参考文献

- ・浅川滋男「九本柱と九本柱 大社造りの起源と巨大本殿の復元・序説」『文化財 文化財講座特集号』2003.3 烏根県文化財所有者連絡協議会
- ・岡田耕司「大型埴物遺構と神社の起源」『日本古代史 都市と神殿の誕生』1998.7 新人物往来社
- ・中原 齊「2 妻木晩出遺跡における掘立柱建物跡について（1）～9本柱掘立柱建物跡を中心に～」『妻木晩出遺跡発掘調査研究年報』2002 烏取県教育委員会
- ・中原 齊「妻木晩出遺跡にみる弥生の国々 九本柱掘立柱建物の問題を中心に」『建築雑誌 都市と都市以前 アジア古代の集住構造 VOL.117』2002.5 日本建築学会
- ・鎌田剛志「古代神殿論」をめぐる近年の研究動向（上）（下）－考古資料の解釈をめぐって－』『皇學館大学神道研究所所報 第63号』2002.7.30 皇學館大学神道研究所
- ・鎌田剛志「『田』字形建物研究の最前線から～『神社』「大社造」は田和山遺跡に遡れるのか？」『田和山遺跡活用事業秋季講演会資料』2003.12.21
- ・渡田竜彦「弥生の祭場 中・四国 - 日本海沿岸地域を中心に」『季刊 考古学 第86号』2004.2.1 雄山閣
- ・広瀬和雄「日本古代史 都市と神殿の誕生」1998.7 新人物往来社
- ・松木武彦「田和山遺跡鑑定書」2001.1.23
- ・松本岩雄「田和山遺跡の空間構造 3重の環濠は何を守護していたのか」『建築雑誌 都市と都市以前 アジア古代の集住構造 VOL.117』2002.5 日本建築学会
- ・「日本海をのぞむ弥生の国々 ～環濠から見える弥生社会とは？」『第3回妻木晩出弥生文化シンポジウム』2002.11 烏取県教育委員会
- ・「弥生時代の磨製石器」『鳥取県古代文化センター調査研究報告書13』2003.3 鳥取県埋蔵文化財調査センター・鳥取県古代文化センター
- ・「第1年度シンポジウム 山陰地方の掘立柱建物跡 - 弥生・古墳時代 - 」鳥取環境大学 平成15-16年度
- ・浅川利研『大社造の起源と変容に関する歴史考古学的研究』資料 2004.11

遺物觀察表

遺物観察表（土器）

博物館番号	器種	出土位置	寸法(cm) 直径 口径	形態・文様の特徴		測定	色調	備考
				頭部	腹部			
1	弥生土器 盆	山頂部 二月井鉢加工段 No.17		頭部:クシ彫直線文	風化	米澤~灰茶色	II-1様式	
2	弥生土器 壺	山頂部 三日月状加工段 No.26		頭部:6条のヘラ彫直線文	外腹:ハケ後ナデ 内腹:ナデ	淡褐色	I-4様式	
3	弥生土器 壺	山頂部 2区 No.80		頭部:1条の突唇文、6条のクシ彫直線文	外腹:風化 内腹:ハケ後ナデ	黃褐色	II-1様式	
4	弥生土器 壺	山頂部 3区 No.25		頭部:3条の突唇文、7条のヘラ彫直線文	ナデ	白茶色	I-4様式	
5	弥生土器 壺	山頂部 山頂部 No.14		頭部:6条のヘラ彫直線文	ナデ	淡褐色	I-4様式	
6	弥生土器 壺	山頂部 12区 表土 No.123		頭部:3段以上の連続押広文	風化	表面:淡茶色 断面:灰色		
7	弥生土器 壺	山頂部 3区 表土 No.96		頭部:円形刻文、クシ彫直線文	内腹:ヘラミガキ	外腹:黑色 内腹:淡茶色	II-1様式	
8	弥生土器 壺	山頂部 表土中 No.118		頭部:3条の突唇文	外腹:ナデ 内腹:風化	外腹:棕褐色 内腹:橙褐色	I-4様式	
9	弥生土器 壺	山頂部 2区 地山上 No.122	10.2	口縁部は傾く外反	風化	暗黃褐色	I-1~II-1様式	
10	弥生土器 壺	山頂部 4区 表土 No.118		頭部:連続浮文	風化	灰褐色 底面:淡灰色		
11	弥生土器 壺	山頂部 5区 茶褐色土 No.29	5.6	頭部:3条のクシ彫直線文、 一角形突文	外腹:下端ヘラミガキ 内腹:ハケ口、ナデ	外腹:淡茶色 内腹:黑色	II-1様式	
12	弥生土器 壺	山頂部 4区 No.32		頭部:3条以上の突唇文	外腹:ヘラミガキ、ナデ 内腹:風化	灰茶色	III-2様式	
13	弥生土器 壺	山頂部 2区 地山上 No.122	11.8	口縁部上面2条の凹彫文	風化	淡黃茶色	IV-1様式	
14	弥生土器 壺	山頂部 12区 表土 No.117	17.2	頭部:クシ彫直線文、羽状文	外腹:ハケ口 内腹:風化	淡褐色	IV-1様式	
15	弥生土器 壺	山頂部 4区 表土 No.118		頭部:4条のヘラ彫直線文 外腹:にスカット痕	風化	茶褐色	I-4様式 AMIS試料 TW-1	
16	弥生土器 壺	山頂部 4区 表土 No.118	11.4	口縁部は傾く外反	風化	外腹:黃褐色 内腹:橙黃褐色	I-4~II-1様式	
17	弥生土器 壺	山頂部 12区 表土 No.103	18.4	口縁部は「く」字状に屈曲 口縁部上面の凹彫文		薄褐色	IV-1様式	
18	弥生土器 壺	山頂部 2区 表土 No.131	19.0	傾く傾向の口縁部	強いナデ	淡褐色	I-4~II-1様式	
19	弥生土器 壺	山頂部 二月井鉢加工段 No.13	5.8		風化	外腹:淡褐色 内腹:淡灰色	T-4~II-1様式 2mm前後の砂粒含	
20	弥生土器 壺	山頂部 三日月状加工段 No.16	6.4		風化	褐色	I-1~II-1様式 2~3mmの砂粒多含	
21	弥生土器 底部	山頂部 3区 瓦部分	底径 5.8	わずかに上げ底	ナデ	白茶色	1mm以下の砂粒含	
22	弥生土器 底部	山頂部 12区 表土	底径 3.2	上げ底	ナデ	外腹:棕褐色 内腹:淡褐色	1mm以下の砂粒含	
23	弥生土器 高杯	山頂部 4区 黒色上	20.2	口縁部:崩み口、5条の凹彫文 脚部:崩み口、10条の凹彫文			IV-2様式	
24	弥生土器 高杯	山頂部 5区		口縁部:崩み口 口縁部:4条の凹彫文	外腹:ナデ 内腹:風化	淡茶色	IV-1様式	
25	弥生土器 高杯	山頂部 2区 地山上 No.77	13.2	口縁部は傾いて内傾 口縁部:2条の凹彫文	風化	白茶色	IV-2様式	
26	弥生土器 高杯	山頂部 12区 地山上		口縁部上面3条の凹彫文	ナデ	灰~淡黄褐色	III-2~IV-1様式	
27	弥生土器 高杯	山頂部 貴賀色土 No.1、10		脚部:8条の直線文、1個の円形 貫通孔	風化	淡黃褐色~灰色	IV-1~2様式	
28	弥生土器 高杯	山頂部 3区 表土 No.96		脚部:3条の直線文	外腹:ヘラミガキ 内腹:ヘラ削り	赤茶色	IV-1~2様式	
29	弥生土器 底部	山頂部 6区 No.69	大形 12.0	大形	風化	外腹:褐色 内腹:棕褐色	2~4mmの砂粒含	
30	弥生土器 壺	山頂部 個別番 茶褐色土		頭部:7条、3条のヘラ彫直線文、 三角形刻文	外腹:ナデ 内腹:ハケ後ナデ	外腹:淡褐色 内腹:茶褐色	I-4様式	
31	弥生土器 壺	山頂部 東端 茶褐色土	12.9	口縁部は傾く外反 口縁部下口端の凹孔	風化	深茶色	I-4様式	
32	弥生土器 壺	山頂部 北側 貴賀色土		口縁部:崩み口、1条の凹彫文 内腹:3条の凹彫直線文、波状文	ハケ口		IV-1様式	
33	弥生土器 壺	山頂部 東側斜面 4区 ~8.0	17.5 雜記 20.0	口縁部は傾く外反	外腹:ナデ 内腹:ナデ	外腹:淡茶色 内腹:淡茶色	I-4様式	
34	弥生土器 壺	山頂部 磁磚間 8区	20.0	口縁部は傾く外反	外腹:ハケ口、ヘラミガキ 内腹:ナデ	淡褐色	I-4~II-1様式	
35	弥生土器 壺	山頂部 楊柳窓 8区 茶褐色土	21.1	口縁部は「く」字状に屈曲 直線彫直線文	外腹:ナデ 内腹:ハケ口	淡黃茶色	IV-1様式	
36	弥生土器 底部	山頂部 一段腰窓 8区 暗褐色土		上げ底	ナデ	白茶色		

博物 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 重量(g)	形態・文様の特徴	病 変	色 調	備 考	
47	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 56番	11.6	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	風化	表面:褐色 断面:墨灰色	I-4様式	
48	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 T-8 19号 No.11	13.0	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	表面:風化 断面:褐色	表面:淡褐色 断面:灰褐色	I-4様式	
49	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 36番	16.8	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	風化	黄褐色	I-4様式	
50	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.37	14.8	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	ナデカ	表面:淡褐色 断面:黑色	I-4様式	
51	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.11	17.6	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	表面:風化 内面:ナデカ	淡褐色~灰色	I-4様式	
52	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 No.1	20.0	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	風化	表面:灰茶色 断面:黑色	I-4様式	
53	弥生土器 盆	B-1区 16番	12.9	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	表面:指壓斑痕	褐色を帯びた 黄土色	I-4~II-1様式	
54	弥生土器 盆	A-A土器断面 28番	13.3	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	ナデ	表面:褐色	I-4~II-1様式	
55	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 35番	15.8	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	表面:ハケ後ナデ 内面:ナデ	茶褐色	II-1様式	
56	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 33番	14.8	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	風化	淡褐色	I-4~II-1様式	
57	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 T-8 No.31	18.2	口縁部は継ぐ外反 腹部のヘラ括縫線文	表面:ナデ 内面:ヘラミガキ	外画:白茶色 内面:深褐色	I-4~II-1様式	
58	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 T-8 No.14	12.4	口縁部はわざかに逆U字状 腹部のヘラ括縫線文	表面:ナデ 内面:ヘラミガキ	外画:褐色 内面:こげ茶色	II-1様式	
59	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 36番		口縁部はわざかに逆U字状 腹部のヘラ括縫線文、利突文	表面:ハケ後ナデ	明茶色	II-1様式	
60	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.6		頭部:5条のヘラ括縫線文、三角 形刺突文	表面:風化	黄茶色	I-4様式	
61	弥生土器 盆	B-1区 剣断面 25番		頭部:5条のヘラ括縫線文、利突文	内面:ナデカ	外画:灰褐色 内面:淡青色	I-4様式	
62	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 36番		側部:ヘラ括縫線文、 利突刺突文	風化	外画:灰褐色 内面:淡青色	I-4様式	
63	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 No.7		側部:ヘラ括縫線文、 利突刺突文			I-4様式	
64	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 No.1		側部:ヘラ括縫線文、 利突刺突文	内面:風化	表面:褐褐色 内面:淡褐色	I-4様式	
65	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.29	20.3	口縁部:割み日 頭~側部5条 のヘラ括縫線文、三角形刺突文	ナデ	淡褐色	I-4様式	
66	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.18-25	23.6	頭~側部5条のヘラ括縫線文、 三角形刺突文	表面:ハケ日 内面:ナデ	外画:灰褐色 内面:淡茶色	I-4様式	
67	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 B-B土削断面 6号	20.0	口縁部:割み日 頭~側部5条 のヘラ括縫線文、三角形刺突文	表面:ハケ日 内面:風化	淡茶色	I-4様式	
68	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 36番		頭~側部5条のヘラ括縫線文	風化	茶色	I-4様式	
69	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 B-B土削断面 18号	23.6	頭~側部5条のヘラ括縫線文、 三角形刺突文	ハケ日	表面:淡青茶色 断面:灰褐色	I-4様式	
70	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 北側 27号	27.6	口縁部:割み日 頭~側部5条 のヘラ括縫線文、利突刺突文	表面:風化 内面:ハケ日	表面:白茶色 内面:墨褐色	I-4様式	
71	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.12	19.2	頭~側部5条のヘラ括縫線文、 三角形刺突文	外画:ハケ日 内面:風化	淡灰褐色~青褐色	I-4様式	
72	弥生土器 盆	1-a 墓場 B-2区 21号	30.2	頭~側部5条のヘラ括縫線文、 利突刺突文	風化	橙色	I-4様式	
73	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 T-8 No.24		頭~側部5条の直縫文、 三角形刺突文	ハケ日	明茶色	I-4~II-1様式	
74	弥生土器 盆	1-a 墓場 B-1区 北側 29号		口縁部:割み日 頭~側部5条の ヘラ括縫線文、2段の三角形刺突文	ナデカ	外画:褐色 内面:裡~黒色	I-4様式	
75	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.35	25.6	口縁部:割み日 頭~側部10 条の直縫文、利突刺突文	外画:ナデ	黄褐色	I-4~II-1様式	
76	弥生土器 盆	1-a 墓場 A-A土器断面 26番	24.0	頭~側部5条の直縫文、 利突刺突文	風化	黄褐色	II-1様式	
77	弥生土器 盆	1-a 墓場 B-2区 16号		頭~側部11条のヘラ括縫線文、 利突刺突文			黄土色	I-4様式
78	弥生土器 盆	1-a 墓場 B-1区 北側 27号		頭~側部7条のヘラ括縫線文、 三角形刺突文	内面:ナデ	外画:灰色 内面:褐色	I-4様式	
79	弥生土器 盆	1-a 墓場 7区 25番		頭~側部7条のヘラ括縫線文、 利突刺突文	風化	黄茶~淡褐色	I-4様式	
80	弥生土器 盆	1-a 墓場 1区 No.22	23.4	口縁部は継ぐ外反	ハケ日	黄茶色	I-4~II-1様式	
81	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 36番	23.9	口縁部は継ぐ外反	口縁部:ナデ 他の不明	淡茶色	I-4~II-1様式	
82	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 33番	23.1	口縁部は継ぐ外反	外画:ハケ後ナデ 内面:風化	明茶色	I-4~II-1様式	
83	弥生土器 盆	1-a 墓場 3区 No.3	22.1	口縁部は継ぐ外反	外画:ハケ日	青がかった茶色	I-4~II-1様式	
84	弥生土器 盆	1-a 墓場 2区	20.6	口縁部は継ぐ外反	外画:ハケ日 内面:滑脂斑痕	淡茶色	I-4~II-1様式	

種別 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高・口径	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考	
85	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 T-8北	31.3	口縁部はくびく外反 内面:黒化	表面:黄褐色 断面:灰黑色	I-4~II-1様式		
86	弥生土器 甕	I-a埋蔵 3区 No.6	25.0	口縁部はくびく外反 黒化	茶褐色	I-4~II-1様式 AMS試料:TW-3		
87	弥生土器 甕	I-a埋蔵 2~3区同 品	16.8	口縁部はくびく外反 黒化	茶褐色	I-4~II-1様式		
88	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 No.20	15.6	口縁部はくびく外反 黒化	淡褐色	I-4~II-1様式		
89	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 No.37	23.4	口縁部はくびく外反 口縁部に平坦面を持つ 内面:ナデ	表面:淡褐色 断面:灰黑色	I-4~II-1様式		
90	弥生土器 甕	I-a埋蔵 3区 53号	32.0	口縁部は浅く字状 黒化	表面:淡褐色 断面:灰黑色	I-4~II-1様式		
91	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 B-1十層断面 6層		口縁部は浅L字状 外面:ハケ後ナデ	外面:黒色 内面:褐色	I-4~II-1様式		
92	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 No.19	21.0	口縁部はくびく外反 黒化	黄褐色	I-4~II-1様式		
93	弥生土器 甕	I-a埋蔵 3区 50号	8.6	小形甕 口縁部はくびく外反 黒化	外面:灰褐色 内面:褐色	I-4~II-1様式		
94	弥生土器 甕	I-a埋蔵 1区 No.19	20.6	口縁部はくびく外反 外面:ナデ 内面:ナデ	外面:灰褐色 内面:淡褐色	I-4~II-1様式		
129	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区 B-1土壌断面 6層	17.9	口縁部はくびく外反 颈部5条のヘラ捺直線文	黒化	外面:淡褐色 内面:白褐褐色	I-4様式	
130	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区 A-A十層断面 13層	22.0	口縁部はくびく外反 颈部5条のヘラ捺直線文	ナデ	暗褐色	I-4様式	
131	弥生土器 甕	I-b埋蔵 3区 25号	11.6	口縁部は直線的に外傾 颈部1条の突起文	黒化	表面:淡褐色 断面:灰黑色	I-4~II-1様式	
132	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区	21.0	口縁部はくびく外反 黒化	淡褐色	I-4~II-1様式		
133	弥生土器 甕	I-b埋蔵 1区 糙面底面	23.7	口縁部:斜め口 頭~胴部:9条 のヘラ捺直線文・三角形刺突文	外面:ナデ 内面:ハケ日	表面:白黃褐色 断面:褐色	I-4様式	
134	弥生土器 甕	I-b埋蔵 1区 B-1土壌断面 6層		頭~胴部:9条のヘラ捺直線文 ・三角形刺突文	黒化	暗褐色	II-1様式	
135	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区	21.8	口縁部はくびく外反 黒化	ナデ	暗褐色	I-4~II-1様式	
136	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区	36.2	口縁部はくびく外反 黒化	外面:ナデ 内面:指頭状	黄褐色	I-4~II-1様式	
137	弥生土器 甕	I-b埋蔵 0区 16号	22.2	口縁部はくびく外反 黒化	ナデ	茶褐色	I-4~II-1様式	
138	弥生土器 甕	I-b埋蔵 1区 T-8 黄褐色+	16.4	口縁部は浅L字状 頭~胴部:直線文の痕跡	黒化	外面:黄褐色 内面:淡褐色	I-4~II-1様式	
139	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区 A-A十層断面 13層	16.0	口縁部はくびく外反 黒化	表面:淡褐色 断面:淡褐色	I-4~II-1様式		
140	弥生土器 甕	I-b埋蔵 3区 附 26号	23.3	口縁部はくびく外反 颈部半周面を持つ 内面:ナデ	ナデ	暗褐色	I-4~II-1様式	
141	弥生土器 甕	I-b埋蔵 2区 B-B十層断面 2層	26.6	口縁部はくびく外反 黒化	外面:淡褐色 内面:ナデ	外面:淡褐色 内面:褐色	I-4~II-1様式	
142	弥生土器 甕	I-b埋蔵 B-1区 24号	15.7	口縁部はくびく外反 颈部2条のヘラ捺直線文	外面:黒化 内面:ナデ	外面:淡褐色 内面:褐色	I-4~II-1様式	
143	弥生土器 甕	I-b埋蔵 C区 ~ 唐下肩	18.2	口縁部はくびく外反 黒化	外面:淡褐色 内面:ナデ	外面:淡褐色 内面:淡褐色	I-4~II-1様式	
144	弥生土器 底盤	I-b埋蔵 2区 B-B十層断面 2層	底盤 5.5	むすかに上げ底	黒化	表面:淡褐色 断面:褐色	2~3mmの砂粒含	
145	弥生土器 底盤	I-b埋蔵 1区 T-8 No.26	底盤 8.4		ナデ	表面:白黃褐色 断面:淡褐色	2~3mmの砂粒含	
146	弥生土器 底盤	I-b埋蔵 2区 A-A十層断面 13層	底盤 7.5		黒化	表面:灰褐色 断面:褐色	1~3mmの砂粒含	
150	弥生土器 甕	I-c埋蔵 S区 No.23	14.4	口縁部:9条の凹型文 頭部:クシ捺直線文、波状文			II-1様式	
151	弥生土器 甕	I-c埋蔵 7区 T-2 暗黃褐色上 文	18.0	頭部:5条のヘラ捺直線文、刺突 文	黒化	淡褐色	I-4様式	
152	弥生土器 甕	I-c埋蔵 S区 斜系褐色土	8.6	口縁部はくびく直立 頭~胴部:クシ捺直線文と波状文	内面上部:ヘラミガキ 下部:ハケ日	外面:淡褐色 内面:褐色	II-1様式	
153	弥生土器 甕	I-c埋蔵 3区 5層 暗黃褐色上 文	15.8	口縁部はくびく外反 頭部:直線文	ナデ	表面:淡褐色 断面:灰黑色	I-4~II-1様式	
154	弥生土器 甕	I-c埋蔵 B-2区? 暗黃褐色土	15.6	口縁部はくびく外反 口縫部:斜め口	ナデ	表面:暗褐色 断面:褐色	I-4~II-1様式	
155	弥生土器 甕	I-c埋蔵 S区 斜系褐色土	11.6	口縁部はくびく外反 頭部:直線文の痕跡	黒化	表面:黒化 内面:指頭状	I-4~II-1様式	
156	弥生土器 甕	I-c埋蔵 7区 黄褐色上 文	1-c	口縁部はくびく外反 内面:ナデ	外面:ハケ日 内面:黒化	外面:淡褐色 内面:褐色	I-4~II-1様式	
157	弥生土器 甕	I-c埋蔵 7区 暗黃褐色土	21.0	口縁部はくびく外反 内面:ナデ	黒化	外面:淡褐色 内面:淡褐色	I-4~II-1様式	
158	弥生土器 甕	I-c埋蔵 1~2区同	10.8	口縁部はくびく外反 口縫部:半周面を持つ	黒化	灰白茶色	I-4~II-1様式	
159	弥生土器 甕	I-c埋蔵 0区 つぶて石より	17.6	口縁部はくびく外反 黒化	黒化	表面:淡褐色 断面:褐色	I-4~II-1様式	

博国 番号	器種	出上位置	寸法(cm) 器高・口径	形態・文様の特徴	調 査	色 調	備 考
160	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 T-2 明治茶色土		口縁部:3条の突文、円形浮文の 外面:ハラミガキ 内面:ハケ目	外面:茶褐色 内面:深灰色	1-4様式	
161	弥生土器 壺	1- ^o 環縛	16.8	口縁部:刺み目、円形浮文 部:5区 扇形側面土		淡褐色	II-1~2様式
162	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 黄茶色土	17.5	口縁部は鏡外反 部:2条の突文	表面:帶黃金色 斯前:灰色	II-1~2様式	
163	弥生土器 壺	1- ^o 環縛	18.2	口縁部は大き外反	外面:ハケ目 内面:ナデか	淡褐色	II-1~2様式
164	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 6区 サブレンチ	19.6	口縁部は大き外反		淡褐色	II-1~2様式
165	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 茶褐色土		頭部:2条、5条の突文	風化	表面:青白色 斯前:淡白色	II-1~2様式
166	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 6区 つぶて石より下		頭部:4条以上の突文	外面:ハラミガキ 内面:風化	外面:褐灰色 内面:淡褐色	II-1~2様式
167	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 C区 ~8区 最下肩	30.2	頭部:刺模頭文帶 另一部斜行斜突文	外面:ハケ目 内面:ハラミガキ、ナデ	黄白色	II-1~2様式
168	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 淡黃褐色土	17.0	口縁部は弧曲:下垂 口縁部:3条、円形浮文	風化	暗灰色	II-1~2様式
169	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 C区 ~8区 下部 以下層	29.1	口縁部:弧曲:下垂 口縁部:5条の突文 部:5区 削格子文	外面:ハケ目 内面:ナデ	黄茶:褐灰色	II-1~2様式
170	弥生土器 壺	1- ^o 環縛	28.4	口縁部:弧曲:下垂 口縁部:5条の突文 部:5区 明治茶色土	ナデ	褐色	II-1~2様式
171	弥生土器 壺	1- ^o 環縛	28.6	口縁部は人字開き縞部は下垂	風化	黄褐色	II-1~2様式
172	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 黄茶色土	25.4	口縁部は大き開き縞部は下垂	風化	黄褐色	II-1~2様式
173	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 3区 T-5 墓石側面土	36.0	口縁部:3条の凹縞文 内面:波状文		暗褐色	IV-1様式
174	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 C-2区 淡黃褐色土		口縁部:刺み目、4条の凹縞文 内面:ナシ揚文、波状文、突文	ハラミガキ	外面:淡茶色 内面:黑色	IV-1様式
175	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 2段長部 地山1		口縁部:刺み目、3条の凹縞文 内面:波状文、2条の突文			IV-1様式
176	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 B-1d No.5.11	27.6	口縁部は人字開き縞部は下垂	表面:青褐色 斯前:黒褐色		IV-1様式
177	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 黄褐色土	21.0	口縁部は大き開き縞部は下垂	風化	黄褐色	IV-1様式
178	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 3区 No.15	27.0	口縁部:3条の凹縞文 内面:波状文	ナデ	黑褐色	IV-1様式
179	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 SIS 黄茶褐色土	27.8	口縁部:3条の凹縞文	ナデか	表面:黄白色 斯前:淡白色	IV-1~2様式
180	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 6区 T-3 暗茶褐色土	22.8	口縁部:3条の凹縞文 内面:波状文		暗灰色	IV-1様式
181	弥生土器 壺	1- ^o 環縛		頭部:6条以上の凹縞文	外面:ハケ目 内面:風化	表面:青紫色 斯前:深灰色	IV-1~2様式
182	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 SIS No.2.3	25.0	口縁部:3条の凹縞文 頭部:6条以上の凹縞文	外面:青紫色 斯前:黑色	表面:青紫色 斯前:黑色	IV-1~2様式
183	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 7区 T-8 No.21		頭部:6条の凹縞文 頭部:6条の凹縞文	風化	表面:白黄色 斯前:灰色	IV-1~2様式
184	弥生土器 壺	1- ^o 環縛	16.0	頭部:6条の凹縞文 頭部:6条の点文	外面:ハケ目 内面:ナデか		IV-1~2様式
185	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 6区 T-3 暗茶褐色土	19.0	口縁部:直角的:外反 頭部:6条の凹縞文	外面:ハケ目 内面:風化	表面:青紫色 斯前:深灰色	IV-1~2様式
186	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 1-2区間	25.0	口縁部:3条の凹縞文 頭部:6条の凹縞文	風化	黄白色	IV-1~2様式
187	弥生土器 壺	C-1-8区 最下肩	24.0	口縁部:人字外反 口縁部:3条の凹縞文	ナデか	表面:青茶色 斯前:灰黑色	IV-1~2様式
188	弥生土器 壺	NP 黄茶褐色土	20.3	口縁部:刺み目、3条の凹縞文	風化	表面:黄褐色 斯前:暗褐色	IV-1~2様式
189	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 C区 ~8区 最下肩	22.4	口縁部:3条の凹縞文 頭部:6条の凹縞文	ハケ目	表面:黄白色 斯前:深黑色	IV-1~2様式
190	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 2-3区間		頭部:7条の凹縞文	外面:ハケ目 内面:風化	外面:灰茶褐色 内面:灰黑色	IV-1~2様式
191	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 C-2区 黑色上下	22.4	口縁部:大き外反 口縁部:3条の凹縞文	ナデ	灰白色	IV-1~2様式
192	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 1区 T-8 No.4.7.22	30.8	口縁部:3条の凹縞文 頭部:6条以上の凹縞文	外面:風化 内面:ハケ目	外面:灰茶褐色 内面:深灰色	IV-1~2様式
193	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 8区 No.13		頭部:具眼による突文、7条の凹 縞文	外面:黑色	IV-1様式	
194	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 8区 No.13	32.1	口縁部:2条の凹縞文、頭部:5条 の凹縞文、指痕:農文、判文	風化	外面:灰黑色 内面:黄茶色	IV-1様式
195	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 AK		頭部:6条以上の凹縞文、指痕:农 文、突文	内面:ハラミガキ	表面:黄茶色 斯前:黑色	IV-1様式
196	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 2-3区間		頭部:6条の凹縞文、肩:5段 の判文、斜状文、クシ括縫線文	外面:ハケ目 内面:風化	淡黄色	IV-1様式
197	弥生土器 壺	1- ^o 環縛 SIS No.7 黄茶褐色土	28.8	口縁部:5条の凹縞文 頭部:5条の凹縞文	風化	微褐色	IV-1~2様式

桜園 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高 口径		形態・文様の特徴	測 容	色 調	備 考
			器高	口径				
198	弥生土器 壺	1-c 塚塚 B-1区 No.13	26.6		口縁端部4条の凹縞文 腹部3条の凸縞文	ハケ日	淡黄褐色	IV-1~2様式
199	弥生土器 壺	1-c 塚塚 S区 T-3 貫褐色土.	21.5		口縁部は直線的に外反 下部1条の突出文	風化	暗灰茶色	IV-1~2様式?
200	弥生土器 壺	1-c 塚塚 7区	19.6		口縁端部:丸み、3条の凹縞文	外面:ナデ 内面:ナデ、ヘラミガキ	灰黒褐色	IV-1~2様式
201	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 黄褐色土	10.2		口縁端部:4条の凹縞文 下部4条以上の凹縞文	ナデ	黄白茶色	IV-1~2様式
202	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C区~E区 着下層	15.0		口縁端部:4条の凹縞文、円形浮文	ナデ	橙白色	IV-1~2様式
203	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区			頭～肩部:波状文、4条の凹縞文、羽状文	外面:ナデ 内面:シケ接ナデ	白茶色	IV-1様式 茶系顔料
204	弥生土器 壺	1-c 塚塚 S区 喰青褐色土.			腹部5条以上の凹縞文、斜開圧出文帶 頭部:斜開列文、羽状文、円形浮文	内面:ハケ日		IV-1様式
205	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 烟茶褐色土	38.4		口縁端部に斜面を持つ 下部3条の凹縞文	外面:風化 内面:ハケ日	表面:黄白茶色	IV-1様式
206	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C-2区 No.4	38.4		口縁端部上面:斜縞文、円形浮文 下部2条以上の凹縞文	風化	淡灰茶色 外側:黒褐色	IV-1様式
207	弥生土器 壺	1-c 塚塚 4区 T-6 黄茶色 I.	38.0		口縁端部上部:斜縞文、円形浮文 下部2条以上の凹縞文	風化		IV-1様式
208	弥生土器 壺	1-c 塚塚 T-5 喰青褐色土			口縁端部上部:斜縞文、円形浮文 下部1条以上の凹縞文	風化	黄白茶色	IV-1様式
209	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 喰青褐色土. No.9	40.0		口縁端部上部:斜縞文、円形浮文 下部6条以上の凹縞文	やや風化	淡黄褐色	IV-1様式
210	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C区~E区 着下層	31.6		口縁端部:斜開文、斜開列文 頭部:斜縞文、羽状文、斜開斜付	ナデ	深茶色 外側:口縁底面	IV-1様式
211	弥生土器 壺	1-c 塚塚 5区 喰青褐色土	37.0		口縁端部:2条の凹縞文 上向斜縞文	外面:ハケ日 内面:風化	表面:黄茶色 断面:灰色	IV-1様式
212	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C-2区 黑色土. I'	37.4		口縁端部:3条の凹縞文 上面:斜縞文 C-2区 黑色土. I'	風化	表面:黄褐色 断面:黑色	IV-1様式
213	弥生土器 壺	1-c 塚塚 4区 T-6 黄茶色上	34.6		口縁端部:2条の凹縞文 上面:斜縞文子	やや風化	黄褐色	IV-1様式
214	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 黄茶色上	38.6		口縁端部上部:斜縞文	外面:風化 内面:ナデ	外側:黄茶色 内面:灰白茶色	IV-1様式
215	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C区~E区 着下層	37.0		口縁端部上部:斜縞文、円形浮文底部7条以上の凹縞文、斜十筋粘付		黄白茶色	IV-1様式
216	弥生土器 壺	1-c 塚塚 2~3区同 4层	43.0		口縁端部上部:斜縞文、円形浮文	外面:ハケ日 内面:ヘラミガキ	灰黑茶色	IV-1様式
217	弥生土器 壺	1-c 塚塚 S区 黄褐色土. No.6	49.6		口縁端部上面:円形浮文 下部3条以上の凹縞文		淡黄茶色 断面:灰褐色	IV-1様式
218	弥生土器 壺	1-c 塚塚 3~4区間			頭部かなりはつきりした3条以上の 穴縞文	ナデ 内面:剥離	綠茶色 九州系? 領瓦II~III	
219	弥生土器 壺	1-c 塚塚 0区 吻			脇部:3条の突文带、ヘラ括直縞文 頭部:斜縞文	内面:風化	表面:黄白茶色 断面:灰褐色	II~2様式
220	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C-2区 黄褐色土	14.8		口縁端部上面:2条の凹縞文 頭部:横目状弦文带		表面:黄褐色 断面:灰褐色	II~2~ IV-1様式
221	弥生土器 壺	1-c 塚塚 C-2区 南壁 20層	11.0		口縁端部:2条の凹縞文	風化	黄茶色	IV-1様式
222	弥生土器 壺	1-c 塚塚 7区 明黄色茶色土	10.2		無頭蓋の蓋 4個の円孔		外側:黒~灰茶色 内面:剥離	
223	弥生土器 壺	1-c 塚塚 B-3区 黄褐色土. No.37	28.4		口縁端部:剥離み 直頭~頭部6条 のヘラ括直縞文、竹管文			1~4様式
224	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区	20.8		頭～脇部:9条のヘラ括直縞文	外面:やや風化 内面:ヘラミガキ	褐色	IV-4様式
225	弥生土器 壺	1-c 塚塚 0区 つぶてより下	30.8		頭部3条の直縞文	風化	表面:淡黄褐色 断面:淡灰色	IV-4様式
226	弥生土器 壺	1-c 塚塚 7~8区同	17.1		口縁部は極く外反	風化	淡橙褐色	IV-4~ II~1様式
227	弥生土器 壺	1-c 塚塚 6区 T-3 喰青褐色土	30.4		口縁部は小さな逆L字状	風化	橙褐色 内面:淡橙褐色	IV-4~ II~1様式
228	弥生土器 壺	1-c 塚塚 4区 烟茶褐色土	18.0		口縁部は小さな逆L字状	風化	淡茶色	IV-4~ II~1様式
229	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 黄褐色土			口縁部は頭~仰外反 外側に脱化物有	ナデ	綠茶色	I~4~ II~1様式
230	弥生土器 壺	1-c 塚塚 7区 黄褐色土			頭～脇部:円形浮文、6条のヘラ 括直縞文	風化	黄褐色	IV-4様式
231	弥生土器 壺	1-c 塚塚 S区 黄褐色土上			口縁部は逆L字状 頭～脇部:4条のヘラ括直縞文	風化	外側:灰褐色 内面:淡茶色	I~4~1様式
232	弥生土器 壺	1-c 塚塚 0区 吻	18.0		口縁部は逆L字状 外側にスカラ有	外面:ハケ日 内面:風化	表面:淡茶色 断面:灰褐色	I~4~ II~1様式
233	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 黄褐色土			口縁部は極く外反	風化	淡茶色	IV~III~1様式
234	弥生土器 壺	1-c 塚塚 8区 喰青褐色土			口縁端部:刻み月 頭部:2条のヘラ括直縞文	ナデ	淡褐色	I~4様式
235	弥生土器 壺	1-c 塚塚 0区 つぶてより下			口縁部は逆L字状	外面:ハケ日	外側:黑色 内面:茶色	

押送番号	器種	出土位置	寸法(cm) 高さ 口径	形態・文様の特徴	測 容	色 調	備 考
236	弥生土器 甕	1-c環縛 2区 基盤褐色土 壳	12.8	口縁部は「く」字状に傾曲	風化	淡黄茶系	I-1~II-1様式
237	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 基盤褐色土 壳	16.8	口縁部は「く」字状に傾曲	外側:ナデか 内面:風化 底:茶褐色土	云南鹿白系色 新街灰色	III-1~2様式
238	弥生土器 甕	1-c環縛 4~5段間 底:茶褐色土 壳	15.2	口縁部は「く」字状に傾曲	外側:ナデか 内面:風化 底:茶褐色土	淡黄茶色	III-1~2様式
239	弥生土器 甕	1-c環縛 8区 黄褐色土 壳	17.0	口縁部は「く」字状に傾曲	外側:風化 内面:ハケ日		III-1~2様式
240	弥生土器 甕	1-c環縛 C区~E区 底下層	17.4	口縁部は「く」字状に傾曲 底:茶褐色土 壳	外側:ハケ日 内面:ナデか	表面:黄茶色 断面:灰黑色	III-2様式
241	弥生土器 甕	1-c環縛 6区 No.1	17.3	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	ハケ日	白茶~青灰色 断面:灰黑色	III-2~IV-1様式 AMS試料TW-2
242	弥生土器 甕	1-c環縛 5区 基盤褐色土 壳	21.8	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	外側:風化 内面:ハケ日	灰白茶色	IV-1様式
243	弥生土器 甕	1-c環縛 5区 基盤褐色土 壳	19.2	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	風化	表面:白茶色 断面:灰黑色	IV-1様式
244	弥生土器 甕	1-c環縛 6区 灰褐色土 壳	18.1	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	外側:ナデ 内面:風化	灰白茶色	IV-1様式
245	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 灰褐色土 壳	17.0	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	ハケ日	灰黑茶色	IV-1様式
246	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 基盤褐色土 壳	19.4	11縫縛部2条の凹縫文 頭部:貝殻施釉による模倣文	外側:ハケ日、ヘラミガキ 内面:ハバナナデ	赤橙~黄褐色 表面:白茶色	IV-1様式
247	弥生土器 甕	1-c環縛 0区 黄褐色土 壳	18.3	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	外側:ハバナ 内面:ナデ	淡橙色	IV-1様式
248	弥生土器 甕	1-c環縛 8区 基盤褐色土 壳	20.0	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	外側:ハケ後ナデ 内面:ナデ	淡棕灰色	IV-1様式
249	弥生土器 甕	1-c環縛 2区 黄褐色土 壳	20.0	口縁部は「く」字状に傾曲 口縁部2条の凹縫文	風化		IV-1様式
250	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 基盤褐色土 壳	14.8	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	風化	淡棕茶色	III-2~IV-1様式
251	弥生土器 甕	1-c環縛 0区 つぶて石より下	17.4	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	ナデ	明黄褐色	III-2~IV-1様式
252	弥生土器 甕	1-c環縛 13区	17.7	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	外側:ナデ 内面:風化	白褐色	III-2~IV-1様式
253	弥生土器 甕	C区~E区 底下層	21.2	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	風化	外側:棕褐色 内面:真褐色	III-2~IV-1様式
254	弥生土器 甕	1-c環縛 5区 基盤褐色土 壳	19.9	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	ナデ	真褐色	IV-1様式
255	弥生土器 甕	1-c環縛 5区 基盤褐色土 壳	18.0	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	口縫部:ナデ		IV-1様式
256	弥生土器 甕	1-c環縛 0区 明黄褐色土 壳		口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	ナデ	淡褐色	IV-1様式
257	弥生土器 甕	1-c環縛 5区 基盤褐色土 壳	20.6	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	外側:風化 内面:ハケ日	黄褐色	IV-1様式
258	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 T-6 黄茶色 壳	27.0	口縁部は2条の凹縫文 頭部:指印压印文	風化	淡黄褐色	IV-1様式
259	弥生土器 甕	1-c環縛 4区 基盤褐色土 壳	21.4	口縁部は2条の凹縫文 頭部:指印压印文	風化	云霧~淡褐色 表面:灰黑色	IV-1様式
260	弥生土器 甕	1-c環縛 7区 3区 黄褐色土 壳	22.8	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	ナデ	暗灰~淡褐色	IV-1様式
261	弥生土器 甕	1-c環縛 C-1区 黄褐色土 壳	19.2	口縁部は2条の凹縫文 頭部:指印压印文	風化	外側:淡褐色 内面:灰白色	IV-1様式
262	弥生土器 甕	C区~B区 貝下附	20.0	口縁部は「く」字状の凹縫文 頭部:指印压印文	ハケ日	白褐色	IV-1様式
263	弥生土器 甕	1-c環縛 7区 3区 黄褐色土 壳	20.2	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	風化	淡黄茶色	III-2~IV-1様式
264	弥生土器 甕	1-c環縛 8区 黄茶色土 壳	20.4	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文		淡褐色	III-2~IV-1様式
265	弥生土器 甕	1-c環縛 8区 基盤褐色土 壳	25.0	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	風化	淡黄褐色	III-2~IV-1様式
266	弥生土器 甕	1-c環縛 7区 基盤褐色土 壳	21.6	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	外側:風化 内面:ナデ	外側灰褐色 内面:灰黑色	IV-1様式
267	弥生土器 甕	1-c環縛 2区 基盤褐色土 壳	21.2	口縁部は「く」字状に傾曲 頭部:指印压印文	風化	黄褐色	IV-1様式
268	弥生土器 甕	1-c環縛 7区 T-2 黄褐色土 壳	23.8	口縁部は2条の凹縫文 頭部:指印压印文	風化	薄茶色	IV-1様式
269	弥生土器 甕	1-c環縛 8区 基盤褐色土 壳	20.6	口縁部は2条の凹縫文、円形浮文 頭部:指印压印文	外側:ハケ日 内面:ナデ	白茶色	IV-1~2様式
270	弥生土器 甕	1-c環縛 T-5 稕黄褐色土 底	25.6	口縁部は2条の凹縫文 頭部:指印压印文	外側:風化 内面:ハケ日	淡灰褐色	IV-1~2様式
271	弥生土器 甕	1-c環縛 3区	20.9	口縁部は2条の凹縫文、円形浮文 頭部:指印压印文	外側:ハケ日 内面:ナデ		IV-1~2様式
272	弥生土器 甕	1-c環縛 C-2区 稕黄褐色土 No.47	7.4	底:灰褐色 内面:スヌ付着	外側:ハラミガキ 内面:ハケ日	暗茶褐色 2mm以下の砂粒含	
273	弥生土器 甕	1-c環縛 P区~C区	7.0	底:灰褐色 内面:ナデ	外側:輕茶色 内面:灰黑色	1~5mmの砂粒含	

標識番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高 口径	形態・文様の特徴	調 砂	色 調	備 考
274	弥生土器 底部	1-c環縁 C-2区	底盤 6.9	高い上げ底 底部4条以上の凹縁文	外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ナデか	根灰白色 白擦茶色	1mm前後の砂粒多含
275	弥生土器 底部	1-c環縁 C-1区 No.1.2	底盤 6.9	高い上げ底 底部4条以上の凹縁文	ナデか	白擦茶色	1mm以下の砂粒多含
276	弥生土器 底部	1-c環縁 3-4区間 9回	底盤 6.9	脚部に「ハ」字状に開く 底部4条以上の凹縁文	外面:ハク後ナデ 内面:ハラ開リナデ	淡茶色	2mm以下の砂粒多含
277	弥生土器 台形土器	1-c環縁 8区 底黄色土: No.1	上縁 21.5	上面:ドーナツ状堆灰 粘土付着	外面:ヘラミガキか 内面:ナデ	黄白系色 断面:灰白色	III-NI様式
278	弥生土器 高环	1-c環縁 1区 山猿那側 地山上	16.0	LJ縁部に半周面を持つ	風化	褐褐色 断面:暗灰色	III-1~2様式
279	弥生土器 高环	1-c環縁 0.5 黄灰土色	24.5	口縁部に平周面を持つ	風化	赤茶色 断面:灰白色	III-1~2様式
280	弥生土器 高环	1-c環縁 C-2区 No.14	28.1	口縁部上面に4条の凹縁文、円 形突起	ナデか	内面:灰白色 外面:灰白色	III-1~2様式
281	弥生土器 高环	1-c環縁 3区	21.8	口縁部は肥厚し平周面を持つ	外面:風化 内面:灰~白け目	黄白茶色	III-1~2様式
282	弥生土器 高环	1-c環縁 8区 黒茶褐色土+	35.0	口縁部に半周面を持つ 口縁部4条の凹縁文	外面:ヘラミガキか 内面:黒	灰褐色~灰白色 断面:黑色	NI-1様式
283	弥生土器 高环	1-c環縁 6.5 黑褐色土	17.7	口縁部に半周面を持つ 口縁部4条の凹縁文	外面:ヘラミガキ	表記:淡茶色 外面:山形部に堆灰	NI-1様式
284	弥生土器 高环	1-c環縁 C区~8区	27.0	口縁部は強く内凹 口縁部4条の凹縁文	外面:風化	内面:灰白色	IV-1~2様式
285	弥生土器 高环	1-c環縁 C区~8区 最下層		口縁部4条以上の凹縁文	ヘラミガキ	外面:暗灰色 内面:淡茶褐色	IV-1~2様式
286	弥生土器 高环	1-c環縁 8.5 黄灰土色	21.6	口縁部は内酒し構造に半周面を 持つ 口縁部2条の凹縁文	外面:ナデ 内面:風化	外面:淡茶色 内面:灰褐色	IV-1~2様式
287	弥生土器 高环	1-c環縁 7区 T-2 黄褐色土+		口縁部:刻込み、4条の凹縁文	外面:ヘラミガキ	外面:黑色 内面:灰褐色	IV-1~2様式
288	弥生土器 高环	1-c環縁 8区 暗黃褐色土: No.6		円錐充填法	外面:風化 内面:シホリ	桃褐色	III-1~2様式
289	弥生土器 高环	1-c環縁 8.5 暗茶褐色土		円錐充填法	風化	外面:茶褐色 内面:淡茶色	IV-1様式か
290	弥生土器 高环	1-c環縁 8.5		脚部筋部の直縁文	風化	外面:茶褐色 内面:黄褐色	IV-1様式か
291	弥生土器 高环	1-c環縁 6区 T-3 暗黃褐色土	底盤 13.8	脚筋部3条以上の凹縁文、8個の 円形通し穴	ナデ	表記:黄白色 断面:灰白色	IV-1様式
292	弥生土器 高环	1-c環縁 7区 T-2 黄褐色土	底盤 14.6	脚筋部4条の凹縁文	風化	黄褐色	IV-1様式
293	弥生土器 高环	1-c環縁 C区~8区 C-2レンジ No.10		脚筋部5条のヘラ抹直縁文	風化	表記:淡茶色 断面:灰褐色	IV-1様式
294	弥生土器 高环	1-c環縁 3区 T-5 暗黃褐色土	底盤 11.4	脚筋部4条以上の凹縁文	外面:ヘラミガキ 内面:シホリ	表記:淡茶色 断面:灰褐色	IV-1様式
295	弥生土器 高环	1-c環縁 8区 暗黃褐色土: No.11	底盤 14.8	脚筋部は接地面を持つ	外面:風化 内面:ハケ削り	灰褐色	IV-1様式か
296	弥生土器 高环	1-c環縁 0.5 黄褐色土	底盤 11.6	脚筋部は肥厚	外面:ハケ目 内面:風化	淡茶褐色	IV-1~2様式
297	弥生土器 高环	1-c環縁 C区~8区 最下層	底盤 14.8	脚筋部4条以上のヘラ抹直縁文 6方向の三角形透かし	ナデ	黄白茶色	IV-1~2様式 本色の顔料
298	弥生土器 高环	1-c環縁 3区 暗茶褐色土+	底盤 16.3	脚筋部3条以上の凹縁文、直縁文、 斜筋子文、脚筋部4条の凹縁文	外面:ハケ目 内面:ナデ	灰褐色 断面:灰白色	IV-1~2様式
299	弥生土器 高环	1-c環縁 B-3区 黄茶褐色土		脚内部は焼成ではない	風化	淡茶色	
300	弥生土器 底部	1-c環縁 7~8回 暗茶褐色土	底盤 2.7		風化	淡茶色	1~5mmの砂粒多含
301	弥生土器 底部	1-c環縁 3区 暗黃褐色土: No.2	底盤 8.0		外面:ヘラミガキ	暗灰~暗茶褐色	2~3mmの砂粒多含
302	弥生土器 底部	1-c環縁 8区 黄褐色土	底盤 7.0	高い上げ底	風化	淡茶色	1~2mmの砂粒多含
303	弥生土器 底部	1-c環縁 C-2区 黄褐色土: No.41	底盤 5.2		風化	淡茶色	2mm前後の砂粒多含
304	弥生土器 底部	1-c環縁 A区 黄褐色土	底盤 4.8	やや上げ底	ナデ	淡茶色	1~5mmの砂粒多含
305	弥生土器 底部	1-c環縁 3区 黄褐色土: No.52	底盤 6.2		外面:ハケ目 内面:風化	根茶色	1~3mmの砂粒多含
306	弥生土器 底部	1-c環縁 C-2区 黄褐色土: No.44	底盤 6.2		外面:ハク後ナデ 内面:ナデ	根茶色	1~2mmの砂粒多含
307	弥生土器 底部	1-c環縁 7区 T-2 暗茶褐色土	底盤 6.9		外面:風化 内面:ナデ	淡茶色	2mm前後の砂粒多含
308	弥生土器 底部	1-c環縁 A区 明黄褐色土	底盤 8.0		外面:風化 内面:ナデか	表記:根茶色 断面:根茶色	1~2mmの砂粒多含
309	弥生土器 底部	1-c環縁 C-2区 No.8	底盤 9.0		風化	表記:淡茶色 断面:根茶色	1~3mmの砂粒多含
310	弥生土器 底部	1-c環縁 8区 暗黃褐色土: No.10	底盤 11.4		指捺圧痕	黄褐色	1~2mmの砂粒多含
311	弥生土器 底部	1-c環縁 7区 暗黄茶色土	底盤 11.9			明褐色	2mm前後の砂粒多含

掲載番号	品種	育苗位置	寸法(cm)	形態・文様の特徴	開花	色調	備考
312	赤生土器底部	1-c 堆壠 S区 黄褐色土	底径 9.4		外面:風化 内面:ナデ	黄白茶色	1~2mmの砂粒多含
313	赤生土器底部	1-c 堆壠 13mm	底径 2.8	上げ底	風化		小砂粒含
314	赤生土器底部	1-c 堆壠 7区 黄褐色土	底径 6.0	上げ底	底面:ナデ	黄白茶色	1mm前後の砂粒含
315	赤生土器底部	1-c 堆壠 1区 T~8 黒色土 No.1	底径 5.9	上げ底	外面:ヘミガキ 内面:指輪状痕	表面:青茶色 断面:淡茶色	
316	赤生土器底部	1-c 堆壠 8区 最下層 黒色土	底径 7.2	上げ底	ナデか	淡黃褐色	1mm以下の砂粒含
317	赤生土器底部	1-c 堆壠 8区 煎茶褐色土	底径 5.1	上げ底	風化	灰黒茶色	1mm以下の砂粒含
318	赤生土器底部	1-c 堆壠 8区 煎茶褐色土	底径 4.9	上げ底	ナデ	淡茶色	1mm以下の砂粒含
319	赤牛上器底部	1-c 堆壠 C~2区 脱黄褐色土	底径 6.2	上げ底	ナデ	外面:黒色 内面:黄茶色	0.5mm前後の砂粒含
320	赤生土器底部	1-c 堆壠 5区 淡茶褐色土	底径 7.4	上げ底	外面:ナデ	外面:深緑茶色 内面:淡灰茶色	1mm以下の砂粒含
321	赤生土器底部	1-c 堆壠 1~2区間	底径 4.8		外面:ヘミガキ 内面:指輪状痕	灰白茶色	1mm以下の砂粒含
322	赤牛上器底部	1-c 堆壠 1区 黄褐色土	底径 4.2	やや上げ底	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	淡茶色	1mm以下の砂粒含
323	赤生土器底部	1-c 堆壠 D区 石割出土地点	底径 6.2		風化	外面:深褐色 内面:淡緑色	1mm以下の砂粒含
324	赤生土器底部	1-c 堆壠 4区 No.5	底径 6.8		風化	表面:黄白茶色 断面:灰白色	砂粒少含
325	赤牛上器底部	1-c 堆壠 5区 つぶて石下 黒色土	底径 6.4		ハケ日	淡茶色	1mm前後の砂粒含
326	赤生土器底部	1-c 堆壠 0区 つぶて石より下	底径 3.6	底部付近1条の直線文	外面:ヘミガキ 内面:ナデ	外面:黒褐色 内面:暗緑色	1mm以下の砂粒含
327	赤生土器底部	1-c 堆壠 8区 脱黄褐色土	底径 6.2		外面:ヘミガキ 内面:ハケ日	外面:灰褐色 内面:灰色	1mm前後の砂粒含
328	赤牛上器底部	1-c 堆壠 B~2区 No.5	底径 6.8		風化	外面:淡緑褐色 内面:暗褐色	1mm以下の砂粒含
329	赤生土器底部	1-c 堆壠 0区 No.5	底径 7.0		風化	表面:明褐色 内面:淡褐色	砂粒多含
330	赤生土器底部	1-c 堆壠 0区 No.1	底径 7.0		外面:ヘミガキ 内面:ナデ	表面:淡灰茶色 断面:淡灰茶色	砂粒多含
331	赤牛上器底部	1-c 堆壠 7区 黒褐色土	底径 7.4		外面:ヘミガキ 内面:ナデか	表面:深褐色 断面:灰褐色	1mm前後の砂粒多含
332	赤生土器底部	1-c 堆壠 B~2区 No.4	底径 6.9		風化	外面:淡褐色 内面:淡灰褐色	1mm以下の砂粒含
333	赤生土器底部	1-c 堆壠 1~5区 煎茶褐色土	底径 7.4		外面:ヘミガキ 内面:ナデ	外面:深茶色 内面:深茶褐色	1mm前後の砂粒含
334	赤牛上器底部	1-c 堆壠 5区 No.4	底径 7.2		外面:ヘミガキ 内面:ナデ	外面:深褐色 内面:茶褐色	1mm前後の砂粒含
487	赤生土器底部	第2堆壠 A区		口縁端部:羽状文 内面:円形・山形網目文	風化	表面:茶褐色 断面:淡褐色	I~4~II~I様式
488	赤生土器底部	第2堆壠 2区	22.0	口縁部は強めに外反 口縁端部2条の凹縫文	外向:ハケ日 内面:風化	外面:淡褐色 内面:淡茶褐色	I~4~II~I様式
489	赤生土器底部	第2堆壠 0区	27.0	口縁部は強めに外反 口縁端部2条の凹縫文	風化	黄白色	III~2~IV~I様式
490	赤生土器底部	第2堆壠 3区 黑褐色土	40.0	口縁端部:内面:刷毛目、斜線文、 円形浮文、渦巻状の突起、撲紋	表面:黄色 断面:黑色		II~I~2様式
491	赤牛上器底部	第2堆壠 A区 T~1 黒褐色土	18.2	口縁端部:3条の凹縫文、粘土類 貼付	外面:微かにハケ日	表面:棕褐色 断面:深灰色	II~I様式
492	赤生土器底部	第2堆壠 2区 黑褐色土	21.0	口縁端部:4条の凹縫文 下部3条以上の凹縫文	外面:淡褐色 断面:黑色		IV~I様式
493	赤生土器底部	第2堆壠 C~1区 黑褐色土	25.3	口縁部は強めに外傾 口縁端部:3条の凹縫文	風化	表面:茶褐色 断面:深褐色	IV~I様式
494	赤牛上器底部	第2堆壠 4区 黒褐色土	26.0	口縁端部:刷毛目、2条の凹縫文 下部1条以上の大突起文	表面:ナデ 断面:灰褐色		IV~I様式
495	赤生土器底部	第2堆壠 4区 黑褐色土	23.0	口縁端部:3条の凹縫文 上部1条以上の突起文	ナデ		IV~I様式
496	赤牛上器底部	第2堆壠 2区	28.6	口縁端部:3条の凹縫文 下部2条以上の文帯文	風化	表面:黃褐色 断面:灰褐色	IV~I様式
497	赤生土器底部	第2堆壠 C~1区 黑褐色土	26.0	口縁端部:3条の凹縫文 上部1条以上の突起文	表面:淡茶色 断面:灰褐色		IV~I様式
498	赤生土器底部	第2堆壠 2区 T~1 黃褐色土 No.1		通縫:4条の凹縫文、指頭印痕文 帯:背筋5条の凹縫文	風化	淡白茶色	IV~I様式
499	赤牛上器底部	第2堆壠 D区 つぶて石下	17.0	口縁端部:3条の凹縫文、円形浮文	外面:ナデ 内面:風化	外面:淡褐色 断面:暗褐色	IV~I様式
500	赤生土器底部	第2堆壠 D区 つぶて石下		頭部3条の突起文	ハケ日	外面:淡茶褐色 内面:暗褐色	II~2様式
501	赤牛上器底部	第2堆壠 1区 T~8 黒色土		頭部:羽状文、タシ模様直線文、内 円形浮文	風化	淡茶色	I~2~III~I様式

件名 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 高さ 口径	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
502	陶生土器 壺	第2環礁 3区 留黄褐色土	26.0	口縁部:輪み平,2条の凹線文 内面:5条の凹線文,円形容文,斜文	内面:ハケ日		IV-1様式
503	陶生土器 壺	第2環礁 1区 T-8 黄褐色土	27.4	口縁部:3条の凹線文 内面:3条の凹線文	外面:ハケ日	黄褐色 断面:黒褐色	IV-1様式
504	陶生土器 壺	第2環礁 B区 留黄褐色土	30.8	口縁部:斜み外反 内面:3条の凹線文	ナデ,ハケ日	淡紅茶色 断面:淡灰色	IV-1様式
505	陶生土器 壺	第2環礁 1区 T-8 黄茶色土	23.6	口縁部:大きめ外反 内面:3条の凹線文	風化	黄白色	IV-1様式
506	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄褐色土	35.5	口縁部:削み日,3条の凹線文	風化	外向:留褐色 断面:淡灰色	III-2~IV-1様式
507	陶生土器 壺	第2環礁 A区 T-1区 留褐色土	28.8	口縁部:2条の凹線文 内面:5条の凹線文	外面:ナデ	黄茶色	IV-1様式
508	陶生土器 壺	第2環礁 2区 留褐色土	24.6	口縁部:3条の凹線文 内面:5条の凹線文	内面:ハラミガキ	灰褐色	IV-1様式
509	陶生土器 壺	第2環礁 2区 留褐色土	26.0	口縁部:人聞き細部は下垂 内面:3条の凹線文	外面:ハケ日	こぼ茶~黒色	IV-1~2様式
510	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄褐色土	11.4	直口壺 口脛部:5条の凹線文	内面:ナデ,ハラミガキ	表面:黄白色 断面:墨灰色	IV-1~2様式
511	陶生土器 壺	第2環礁 4区 留褐色土	10.0	直口壺	外面:ナデ,ハケ日 内面:ナデ	表面:黄白色 断面:灰褐色	
512	陶生土器 壺	第2環礁 B区 留褐色土	8.5	直口壺 口縁部上面:1条の凹線文	漏斗部:ナデ	黄茶色	III-2~IV-1様式
513	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄褐色土	22.8	口縁部は小さな逆字状	風化	外向:留褐色 内面:明褐色	II-4~II-1様式
514	陶生土器 壺	第2環礁 B-1区 茶褐色土	20.7	口縁部はごく短く外反	内面:ハケ後ナデ	墨茶色	I-4~II-1様式
515	陶生土器 壺	第2環礁 1区 地山上,茶褐色土	18.0	口縁部:く字形に留曲 頭部:沿底直線文帯	風化	黄白色	II-1様式
516	陶生土器 壺	第2環礁 B-1区 茶褐色土	24.2	口縁部:く字形に留曲 内面:3条の凹線文	内面:風化 白留褐色 断面:白留褐色	II-2~IV-1様式	
517	陶生土器 壺	第2環礁 3区 T-5 茶褐色土	24.0	口縁部:2条の凹線文 頭部:留頭直線文帯	ナデ	淡茶褐色	IV-1様式
518	陶生土器 壺	第2環礁 1区 留褐色土	23.3	口縁部:く字形に留曲 頭部:沿底直線文帯	風化	灰白色	III-2~IV-1様式
519	陶生土器 壺	第2環礁 3区 T-5 留褐色土	20.2	口縁部:3条の凹線文 頭部:沿底直線文帯	口縁部:ナデ 外面:ハケ日	白茶色	IV-1様式
520	陶生土器 壺	第2環礁 0区 留褐色土	30.1	口縁部:3条の凹線文 頭部:3條筋直線文帯	風化		III-2~IV-1様式
521	陶生土器 壺	第2環礁 B-2区 留褐色土	17.8	口縁部:削み日,3条の凹線文 頭部:沿底直線文帯	外面:ナデ 内面:ハケ日	外向:留褐色 内面:淡灰褐色	IV-1様式
522	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄褐色土	20.2	口縁部:く字形に留曲 頭部:沿底直線文帯	外面:ナデ 内面:風化	外向:留褐色 内面:褐色	III-2~IV-1様式
523	陶生土器 壺	第2環礁 2-5区 四 片 黄褐色土	21.9	口縁部:3条の凹線文,円形容文 頭部:沿底直線文帯	ナデ	灰白茶色	IV-1様式
524	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄褐色土	18.9	口縁部:削み日,2条の凹線文 頭部:沿底直線文帯	口縁部:ナデ	表面:桜白色 断面:一部灰色	IV-1様式
525	陶生土器 壺	第2環礁 0区 黄褐色土	27.1	口縁部:3条の凹線文 頭部:沿底直線文帯	風化	黄白色	IV-1様式
526	陶生土器 壺	第2環礁 4区 墓灰褐色土	20.0	口縁部:平面形状を持つ	風化	灰白色 断面:灰色	II-1~2様式
527	陶生土器 壺	第2環礁 1区 地山上	28.2	口縁部は厚底し平壠面を持つ	外面:ハラミガキ	外向:灰褐色 内面:留褐色	II-1~2様式
528	陶生土器 壺	第2環礁 1区 T-8 黄茶色土	38.6	口縁部は厚底し平壠面を持つ	風化	淡黄褐色	II-1~2様式
529	陶生土器 壺	第2環礁 2区 T-7 留褐色 No.7		口縁部:坂状 頭部:下方の三角形造出し	外面:ハラミガキ,ハケ日 頭部:ハケ日,シリゴ	表面:淡茶色 断面:灰黑色	
530	陶生土器 壺	第2環礁 B区 留褐色土	22.1	口縁部:2条の凹線文 内面:3条の凹線文	内面:風化	淡青~淡留褐色	IV-1様式
531	陶生土器 壺	第2環礁 A区 黄茶色土	22.8	口縁部:平壠面を持つ 内面:3条の凹線文	ハケ日	表裏:淡茶色 断面:灰白色	IV-1様式
532	陶生土器 壺	第2環礁 5区 留褐色土	23.6	口縁部は強く留曲 外:スズ付村	ナデ	体部外面:黒麗 口縁部:ナデ	II-1~2様式
533	陶生土器 把手	1区 茶褐色土					
534	陶生土器 底鉢	第2環礁 1区 T-8 黄褐色土 底鉢	底鉢 3.8	底面に円孔	風化	外向:赤褐色 内面:留褐色	1mm以下の砂粒含
535	陶生土器 底鉢	第2環礁 4区 T-6 留褐色土	底鉢 5.6	底面に円孔	ナデ	外向:留褐色 内面:留褐色	1mm前後の砂粒含
536	陶生土器 底鉢	第2環礁 B区 留褐色土	底鉢 8.9		ナデ	外向:淡茶褐色 内面:淡灰色	2mm前後の砂粒含
537	陶生土器 底鉢	第2環礁 A区 留褐色土	底鉢 10.2		内面:ナデ	外向:留褐色 内面:留褐色	1~2mmの砂粒含
538	陶生土器 底鉢	第2環礁 B区 留褐色土	底鉢 4.7	やや上げ底	外面:ハケ日 内面:風化	外向:淡茶褐色 内面:白留褐色	3mm前後の砂粒含
539	陶生土器 底鉢	第2環礁 2区	底鉢 4.4		外面:ハケ後ナデ	淡茶褐色	2mm前後の砂粒含

標本番号	器種	出土位置	寸法(cm) 最高	形態・文様の特徴		調 整	色 調	備考
				上口径	下口径			
540	弥生土器 底部	第2環座 3区 T-5 茶褐色上	底径 6.7-7.0			外面:ナデ後ミガキ 内面:淡黄白褐色	外面:淡黄白褐色 内面:淡黄白褐色	1mm以下の砂粒含
541	弥生土器 底部	第2環座 A区 黄褐色土	底径 7.4			外面:風化 内面:指痕JH痕	外面:絞灰、褐色 内面:白褐色 内面:口部黄褐色	2mm前後の砂粒含
542	弥生土器 底部	第2環座 3区	底径 6.6			風化	内面:褐色 内面:白茶色	2mm前後の砂粒含 内面:白茶色
543	弥生土器 底部	第2環座 3区 黄褐色土	底径 6.2			外面:風化 内面:ナデ	淡褐色	3mm未溝の砂粒含
544	弥生土器 底部	第2環座 2区 黄褐色土	底径 7.4	上げ底 外面上にスヌ付着		風化	外面:暗茶褐色 内面:茶褐色	1mm以下の砂粒含
545	弥生土器 底部	第2環座 3区 黄褐色土	底径 6.9			外面:ハマガタか 内面:ナデか	外面:暗茶褐色 内面:黄白色	1mm前後の砂粒含
546	弥生土器 底部	第2環座 B-1区 黄褐色土	底径 6.7	上げ底 内面上に炭化物付着		外面:ハマ日、ナデ	外面:白褐色 内面:黑色	1mm以下の砂粒含
560	弥生土器 蓋	第3環座 1-2区間	13.0	頭部9条以上のヘラ括弧線文	ナデ	褐色	I-4様式	
561	弥生土器 蓋	第3環座 2区 T-7	27.2	口縁端部1条の門型文 頭部10条の直線文	不明		I-4-~II-1様式	
562	弥生土器 蓋	第3環座 0区 F-7 暗茶灰色土	13.6	口縁部は綺く外反 0区 F-7 暗茶灰色土	外面:ハマ日、ナデ 内面:ヘマミガキ	桙白色	I-4-~II-1様式	
563	弥生土器 蓋	第3環座 1区 T-8 黄褐色土		頭部7条の直線文	外面:ハマ日 内面:シボリ	赤茶色	I-4-~II-1様式	
564	弥生土器 蓋	第3環座 C区 黄褐色土		頭部9条のヘラ括弧線文 内面1条の突文	外面:ナデか 内面:黄白色	外面:茶色 内面:灰黑色	I-4様式	
565	弥生土器 蓋	第3環座 C区 黄褐色土		頭部10条の突文	外面:ハマ日 内面:ナデ、ヘマミガキ	淡黃褐色	II-1様式	
566	弥生土器 蓋	第3環座 C区 黄褐色土		頭部2条以上の突文	外面:ハマ日 内面:風化	外面:桙褐色 内面:淡青褐色	II-1様式	
567	弥生土器 蓋	第3環座 1-2区間	19.0	口縁部はやや直線的に外反 頭部1条以上の突文	外面:ハマ日	褐色	II-1様式	
568	弥生土器 蓋	第3環座 C区 暗茶褐色土	11.6	口縁部は綺くすこびり反 0区 暗茶褐色土	外面:ハマ日 内面:1角形刺突文	桙褐色	B 1様式	
569	弥生土器 蓋	第3環座 1区 T-8 黄褐色土	26.6	口縁部は大きく外反 口縁端部2条の門型文	風化	黄褐色 灰褐色混	N-1様式	
570	弥生土器 蓋	第3環座 C区 暗茶褐色土		口縁下部4条以上の門型文	ハマ日	淡黃茶色	IV-1様式	
571	弥生土器 蓋	第3環座 3-4区 1層	31.0	口縁端部に1条の円形文、刃形文 内面:クシ横筋状文	内面:ナデ 外面:横ハマ日、ナデ	外向:淡褐色 内面:褐色	N-1様式	
572	弥生土器 蓋	第3環座 0区 黄褐色土		肩部:クシ横筋文、突文 口縁端部2条の内乳孔	内面:風化 外面:ハマ日	麻灰色	II-1様式	
573	弥生土器 蓋	第3環座 0区 暗茶褐色土		脚付無筋 口縁端部:2条の内乳孔	外面:ナデ、ヘマミガキ 内面:ナデ	淡黃茶色 麻灰色		
574	弥生土器 蓋	第3環座 1区 T-8 黄褐色土	27.0	脚部2条のヘラ括弧線文	風化	淡黃褐色	I-4様式	
575	弥生土器 蓋	第3環座 C区 暗茶褐色土	17.3	口縁端部:刻み目 頭部5条のララ括弧線文	ナデ	外面:一連螺旋 内面:茶褐色	I-4様式	
576	弥生土器 蓋	第3環座 0区 暗茶褐色土		頭部3条以上10条のヘラ括弧線文	ナデ	淡黃茶色	T-4様式	
577	弥生土器 蓋	第3環座 C区 黄褐色土	21.3	頭部6条のヘラ括弧線文	内面:風化	黃褐色-淡黃褐色	I-4様式	
578	弥生土器 蓋	第3環座 2区 T-7	15.0	口縁部は綺く外反 外面上にスヌ付着	内面:ナデ 外向:風化	外向:淡茶褐色 内面:淡青褐色	I-4-~II-1様式	
579	弥生土器 蓋	第3環座 2区	11.8	口縁部は綺く外反	外面:ハマ日 内面:風化	外向:黒褐色 内面:褐色	T-4-~II-1様式	
580	弥生土器 蓋	第3環座 0区 暗茶褐色土	26.0	口縁部は逆3字狀 横筋2条のヘラ括弧線文	ナデ	赤褐色	I-4様式	
581	弥生土器 蓋	第3環座 0区 暗茶褐色土	12.3	口縁部はく字状に削齒 口縁端部2条の凹文	外面:ナデ、ヘマミガキ 内面:風化	尚白茶色	I-4-~II-1様式	
582	弥生土器 蓋	第3環座 C区 暗茶褐色土		口縁部はく小字狀に削齒	風化	时段褐色	I-4-~II-1様式	
583	弥生土器 蓋	第3環座 1-2区間	24.7	口縁部はく字狀に削齒	風化		B-1-~2様式	
584	弥生土器 蓋	第3環座 C区	16.4	口縁部はく字狀に削齒 口縁端部2条の凹文	ナデ	外向:淡褐色 内面:淡茶褐色	III-2-~IV-1様式	
585	弥生土器 蓋	第3環座 3-4区 1-2層	16.0	口縁部はく字狀に削齒 口縁端部1条の門型文	外面:ハマ日、ヘマミガキ 内面:ヘマミガキ	淡茶-茶褐色	III-2様式	
586	弥生土器 蓋	第3環座 3-4区 2層	17.0	口縁部はく字狀に削齒 頭部:横筋付骨文	ナデ	淡褐色	III-2-~IV-1様式	
587	弥生土器 蓋	第3環座 3-4区 1層		口縁部はく字狀に削齒	外面:ハマ日 内面:ナデ	外向:褐色 内面:桙褐色	III-2-~IV-1様式	
588	弥生土器 蓋	第3環座 1区 T-8 黄褐色土	20.0	口縁部はく字狀に削齒 横筋:削齒付骨文	内面:ナデ、ハケ目	外向:褐-黑色 内面:桙褐色	IV-1様式	
589	弥生土器 蓋	第3環座 B-3区 暗茶褐色土		口縁部はく字狀に削齒	風化	淡黃褐色	III-2-~IV-1様式	
590	弥生土器 蓋	第3環座 1区 T-8 黄褐色土	24.0	口縁部はく字狀に削齒 横筋:削齒付骨文	内面:ナデ			

探査番号	器種	出土位置	寸法(cm) 笠置・白透	形態・文様の特徴	調 整	色 調	備考
591	弥生土器 壺	第3環礁 0区	23.9	山線彫刻3条の四縞文、粘土貼付 脚部・指屈土板文帯	外面:ナデ 内面:風化	白褐色	IV-1~2様式
592	弥生土器 壺	第3環礁 T-3区 梗褐色上	27.6	内敷瓦片状・山線彫刻:糸み日 脚部3条の突帯文	外面:ハケ後ミガキ 内面:ナデ	黄白色 脚内面:灰黑色	II-1~2様式
593	弥生土器 壺	第3環礁 C-1区 黄褐色土	18.0	山線彫刻部に平坦面を持つ	風化	外面:赤褐色 内面:灰黑色	II-1~2様式
594	弥生土器 壺	第3環礁 1-2区間	17.4	内敷瓦片状 脚筒部:3条以上の四縞文	环部外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	淡褐色	IV-1様式
595	弥生土器 壺	第3環礁 0区 明褐色上	-	内敷瓦片状 脚筒部:3条以上の四縞文	环部外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	淡褐色 脚内面:灰黑色	IV-1~2様式
597	弥生土器 壺	第3環礁 C-1区 梗褐色上	-	内敷瓦片状 脚筒部:3条の四縞文	風化	茶褐色	IV-1~2様式
598	弥生土器 壺	第3環礁 2区 T-7 灰色土	35.2	口縁部:3条の四縞文 脚筒部:3条の四縞文	外面:ハケ日 内面:風化	淡黄褐色	IV-1様式
599	弥生土器 壺	第3環礁 B-2区 暗黃褐色土	-	脚筒部:3条の四縞文、2段の長方 形:三角形透かし	風化	淡褐色	IV-2様式
600	弥生土器 壺	第3環礁 0~1区 暗褐色土上	17.6	脚筒部:12万回の三角形透かし 脚部:3条の四縞文	外面:ヘラミガキ、ナデ 内面:ハケ日	白茶色 脚内面:淡茶色	IV-2様式
601	弥生土器 鉢?	第3環礁 C-1区 黄褐色土	19.3	口縁部下部:3条の四縞文 番文、突起文	内面:ナデ	青褐色 脚内面:灰褐色	-
602	弥生土器 底盤	第3環礁 2区 T-7 茶褐色土	7.8	底盤	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	褐色	砂粒少半合
603	弥生土器 底盤	第3環礁 2区	底径 7.0	-	外面:ハケ日、ミガキ 内面:指屈压痕	外面:赤褐色 内面:褐色	大粒砂粒合
604	弥生土器 底盤	第3環礁 C区	底径 7.0	底盤	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	外面:淡茶褐色 内面:灰褐色	1cm前後の砂粒合
605	弥生土器 底盤	第3環礁 0区 黄褐色土	底径 7.5	底盤	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	黑灰~茶褐色	2mm前後の砂粒合
606	弥生土器 底盤	第3環礁 0~1区 黄褐色土	7.0	底径	外面:ハラミガキ 内面:風化	淡黄褐色	-
607	弥生土器 底盤	第3環礁 B-2区 暗褐色土	3.2	底径	ナデ	外面:淡褐色 内面:灰褐色	無砂合
608	弥生土器 底盤	第3環礁 3区 淡黒色土	6.1	内面に共化物付着	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	外面:淡茶褐色 内面:灰褐色	1mm前後の砂粒合
609	弥生土器 底盤	第3環礁 B-2区 梗褐色土上	6.8	底径 トネ底	外面:ヘラミガキ後ナデ 内面:指屈压痕	外面:褐色 内面:白茶色	1mm以下砂粒合
610	弥生土器 底盤	第3環礁 2区	底径 5.2	底径	外面:ハケ日 内面:ナデ	外面:暗褐色 内面:赤褐色	大粒砂粒合
611	弥生土器 底盤	第3環礁 0区 綠褐色土	5.8~5.9	上げ底	外面:ナデか 内面:指屈压痕	外面:淡褐色 内面:灰色	1mm前後の砂粒合
612	弥生土器 底盤	第3環礁 3~4区	底径 5.0	トネ底	外面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ	暗褐色	細少合
613	弥生土器 底盤	第3環礁 CLX	底径 5.6	高い上げ底	外面:ナデ 内面:ナデ	外曲:赤灰黑色 内曲:黄白色	1mm以下の砂粒合
614	弥生土器 底盤	第3環礁 1区 黄褐色土	底径 5.4	トネ底 底部に凹孔	風化	表面:淡灰褐色 内面:褐色	1mm以下の砂粒合
615	弥生土器 底盤	第3環礁 0区 緑褐色土上	底径 11.2	-	外曲:ヘラミガキか 内面:ナデ	黄茶褐色	1mm前後の砂粒合
616	弥生土器 底盤	第3環礁 CLX	底径 10.2	-	外曲:ナデ 内面:ナデ	外曲:灰褐色 内面:淡褐色	1mm前後の砂粒合
620	弥生土器 壺	第3環礁地滑り部 C区~8区	-	頭部:4条以上の突帯文 肩部:3条の突帯文	外曲:ナデ 内面:ナデ	淡褐色	II-2様式 2~3mmの砂粒多合
622	弥生土器 壺	第3環礁地滑り部 CLX	15.2	口縁部は強めに外反	風化	白桃色	大粒砂粒多合
630	弥生土器 壺	第2環礁地滑り部 CLX~8区 黑褐色上	12.6	口縁部は外反	外曲:ハケ日 内面:ナデ	淡黄褐色	大粒砂粒合
631	弥生土器 壺	第2環礁地滑り部 CLX~8区 明褐色土上	17.9	山線彫刻:糸み日、2条の四縞文 肩部:3条の四縞文	外曲:ナデ 内面:ハケ日	淡褐色	IV-1様式
632	弥生土器 底盤	第2環礁地滑り部 CLX~8区	底径 4.3	口縁部は強めに外反	風化	淡褐色	2mm以下の砂粒多合
635	弥生土器 壺	第2~3環礁 旧表土	-	部:山線彫刻:4条の四縞文 外曲:スズボウ	内面:風化	黄茶褐色	II-1様式
636	弥生土器 壺	第2~3環礁 T-8 黄褐色土	17.4	口縫部は「J」字状に屈曲	風化	暗黄褐色	-
637	弥生土器 壺	第2~3環礁 旧表土	-	口縫部は緩く外反	風化	淡茶色	I-4様式
638	弥生土器 壺	第2~3環礁 II表土	18.0	山線彫刻:糸み日 外反にスズボウ	外曲:ハケ日、ヘラミガキ 内面:ナデ	淡褐色	I-4~ II-1様式
639	弥生土器 底盤	第2~3環礁 II表土	上げ底	ナデ	體茶色	2mm前後の砂粒合	-
640	弥生土器 壺	第2~3環礁 II表土	21.1	口縫部は緩く外反	外曲:ハケ後ナデ	淡茶色	I-4~ II-1様式
641	弥生土器 壺	第1~2環礁 2区 T-7 表土上角色上	19.8	口縫部:別目 頬部:クダツ底直進文	内面:ナデ	蒸褐色	II-1様式
642	弥生土器 壺	第1~2環礁 2区 T-7 表土下褐色土	-	頬部:クダツ底直進文 底:スズボウ	内面:ナデ	-	II-1様式

掲題 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高×口径	形態・文様の特徴	調整	色調	備考	
				表面 裏面				
615	弥生土器 壺	第1~2環礁間 8区 1~3標岸外 堆積土.	縦幅4条、3条のヘラ描直線文 1条の突起文	風化	表面:黄系色 裏面:灰色	I~I様式		
644	弥生土器 壺	第1~2環礁間 2区		肩部:クシ描直線文、淡状文	ハケ目			
645	弥生土器 壺	第3環礁外堆積向 D区		口縁部に刷み日、3条の門羅文 内面:指須庄灰文	外面:ナデか 内面:ハケ目	表面:淡白茶色 前面:黒色	II~2様式	
646	弥生土器 壺	第2~3環礁間 西側		口縁部:刷み日、3条の門羅文、 円形浮文 内面:クシ描波状文	ナデ	淡褐色	II~2様式	
647	弥生土器 壺	第1~2環礁間 8区 T~7 2号船面土	12.1	口縁部は大きく開く	風化	白褐色	II~1~2様式	
648	弥生土器 壺	第2~3環礁間 1区 T~7 西側 地盤上		縦幅6条のヘラ描直線文、円形 刻突文	風化	外面:茶褐色 内面:黑色	T~4様式	
649	弥生土器 壺	第1~3環礁外堆積土 8区 北壁	25.6	口縁部:刷み日 縦幅9条のクサ描直線文	風化	外面:淡茶色 内面:黑色	I~4様式	
650	弥生土器 壺	第3環礁外堆積土 8区 No.2 墓土面下より	23.0	口縁部は鋸く外反	外面:風化 内面:ナデか	茶灰褐色	I~4~II~1様式	
651	弥生土器 壺	第1~2環礁間 2区 施黄色土	23.4	口縁部は丸く字状	風化	暗茶褐色	I~4~II~1様式	
652	弥生土器 壺	第1~2環礁間 2区 山側面 施黄色土	19.2	口縁部は鋸く外反	外面:ハケ目 内面:ハケ後ナデ	茶褐色	I~4~II~1様式	
653	弥生土器 底部	第1~2環礁間 2区 T~7 黄色土		上げ底	風化	外曲:灰褐色 内面:黄褐色	2mm以下の砂粒含	
654	弥生土器 底部	第2~3環礁間 AF 黄色土	底径 11.6		外面:ハケ目 内面:風化	外曲:淡茶色 内面:灰褐色	2~3mmの砂粒多含	
655	弥生土器 底部	第1~2環礁間 第3環礁山側面	底径 8.6		外曲:ハケ目 内面:ナデ	外曲:暗褐色 内面:白褐色	2~3mmの砂粒多含	
664	弥生土器 壺	平版加工面直邊 4区 4層		口縁部内面:刷み文、円形浮文、直 線文、波立文(象鼻の)文字文	外曲:ハケ日 内面:ナデ	表裏:淡褐色 研磨:灰褐色	II~1~2様式	
665	弥生土器 壺	平版加工面直邊 1区 4斜面 4層	27.0	口縁部:刷み日、2条の門羅文	外曲:ハケ日 内面:風化	外曲:淡褐色 内面:暗褐色	N~1様式	
666	弥生土器 壺	平版加工面直邊 4区		山側面:刷み文、2条の門羅文 下部:刷み文+字型+1条以上の門羅文	ハケ目	孔黄土色	II~2~N~1様式	
667	弥生土器 壺	平版加工面直邊 1区 4層	25.0	口縁部:刷み2条の門羅文 脚部:指須庄灰文、刻突文	ハケ日	暗茶褐色	IV~1様式	
668	弥生土器 鉢	平版加工面直邊 黑色土	19.4	口縁部は鋸く外反	ナデ	乳褐色		
669	鶴文土器 底部	平版加工面直邊 1区 施斜面 4層	底径 3.2		外曲:ヘラミガキ 内面:ナデ	外曲:け茶色 内面:黒褐色	1mm前後の砂粒含	
670	弥生土器 底部	平版加工面直邊 2区 南斜面 4層	底径 5.2		ナデ	淡茶褐色 底面:黑色	1mm以下の砂粒含	
671	弥生土器 底部	平版加工面直邊 成層	底径 10.2		外曲:ヘラミガキ 内面:ハケ目、指須庄灰	茶褐色	紺合含	
672	弥生土器 底部	平版加工面直邊 1区 施斜面 4層	底径 3.8		外曲:ヘラミガキ 内面:暗褐色	外曲:暗褐色 内面:暗褐色	1mm以下の砂粒含	
673	弥生土器 底部	平版加工面直邊 2区 南斜面 4層	底径 5.2		外曲:ヘラミガキ 内面:ナデ	外曲:明茶色 内面:茶色	1~2mmの砂粒含	
674	頭窓 小形壺	平版加工面直邊 2層		小形窓部が 肩部:波状文 脇部:1条の門羅文	外曲:ハケ削り 内面:ハケ後ナデ	乳褐色	模不成良	
675	土質質:等 底部	半坦加工面直邊 4区 2層	底径 10.5	窓台は:ハク字状に凹く	同様ナデ	淡褐色		
680	弥生土器 壺	SB-01 P1内	12.4	18.8	剥落S部の列線文 底部:上げ底	外曲:ナデ、ヘラミガキ 内面:ナデ、ハラ削り	黄白茶色	III~1~2様式
681	弥生土器 壺	SB-01 3層	18.6	口縁部:く字状に屈曲 肩部部:2条の門羅文	外曲:風化 内面:ハケ目	明褐色	IV~1様式	
683	弥生土器 壺	SB-01 東斜面:施斜面 黑色土上		肩部:1条の突起文 肩部:直線文、円形浮文、羽状文	内面:ハケ後ナデ	外曲:灰茶色 内面:深褐色	III~2様式	
684	弥生土器 壺	SB-01 東斜面:施斜面 黑色土上	9.8	直口壺 壺内:門羅文 2 以上上の突起文	ナデ	外曲:投茶色 内面:灰茶色		
685	弥生土器 壺	SB-02 17層	8.8	口縁部は外反	ナデ	黄白色	II~1~2様式	
686	弥生土器 壺	SB-02 16層	14.6	口縁部はく字状に屈曲	風化	明褐色	II~1~2様式	
687	弥生土器 鉢	SB-02 黃褐色土	16.0	口縁部はく字状に屈曲 口縁部:2条の門羅文	外曲:ハク目 内面:ナギキ、ハケ目	淡灰褐色	II~2~N~1様式	
688	弥生土器 壺	SB-02 17層		口縁部はく字状に屈曲 口縁部:2条の四四文	内面:ハケ目	明褐色	II~2~N~1様式	
689	弥生土器 鉢	SB-02 5層		口縁部:3条の門羅文 颈部:指須庄灰文	外曲:ハケ後ナデ 内面:風化	黄白茶色	IV~1様式	
690	弥生土器 壺	SB-02 黄褐色土	25.2	口縁部:刷み日 颈部:施斜面直文	風化	黄褐色	II~2様式	
691	弥生土器 环	SB-02 2層	18.2	口縁部:上部2条の門羅文 スス舟形	外曲:ハケ目 内面:ナギキ	黄白茶色 内面:淡褐色	II~2様式	
692	弥生土器 台形:等	SB-02 遺構(17層下層)	22.6	台:壺は水平に突出 要部:刷み日 3条の門羅文	上面:ナデ、ヘラミガキ 内面:ハラ削り	云母:青1茶色 新面:灰色	IV~1~2様式	
693	弥生土器 鉢	SB-02 黄褐色土	22.2	口縁部に水平線を持つ 口縁部:2条の門羅文	ナデ	橙色	IV~1~2様式	

持固 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 鉢名：上口径		形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考
			底径	5層				
694	弥生土器 底部	SB-02	底径 5.4		上げ底	ナデ	暗褐色	
695	弥生土器 底部	SB-02	底径 7.0		外縁:ヘラミガキ 内面:ヘラ削り、ミガキ		黒灰色	
696	弥生土器 高杯	SB-02	底径 7.0		脚輪部2条の凹線文	ナデ	明褐色	N-2様式
697	弥生土器 底部	SB-02	底径 6.6		上口底 外向にスス付着	ナデ	明褐色	
698	弥生土器 底部	SB-02	底径 5.4		上げ底	外縁:ヘラミガキ	外面:暗褐色 内面:橙色	
705	弥生土器 底部	SB-03	底径 7.0			ヘラミガキ	外縁:灰茶色 内面:灰黑色	
706	弥生土器 底部	SB-03	底径 7.3		上口底	ヘラミガキ、ナデ	灰褐色～明褐色	
707	弥生土器 底	SB-03西側付近	16.8	3層	口縁部上面2条の凹線文 裏：肩部3条の凹線文、表裏文、波紋文	ハケ日	茶～黄白茶色	N-1様式
708	弥生土器 底	SB-03西側下方斜面	33.0	5層	口縁部2条の凹線文	ナデか	褐色	N-1様式
709	上部器 灰	SB-03西側下方斜面	13.6	5層	二重口縁	横ナデ	暗褐色	
710	上部器 灰	SB-01北側付近	3層		二重口縁	横ナデ	赤褐色	
711	上部器 高杯	SB-02西側付近	21.0	3層	口縁部はごく短く外反	風化	外縁:暗褐色 内面:橙色	
712	上部器 灰	SB-03西側下方斜面	15.0	3層	継やかに凸彎	横ナデ	褐色	
713	上部器 灰	SB-05西側下方斜面	15.6	3層	継やかに凸彎	ナデ、横ナデ	外縁:暗褐色 内面:橙色	
714	七輪器 高杯	SB-02付近	底径 4層	9.7	環状は有段	風化	淡褐色	
715	七輪器 高杯	SB-03西南側下方斜面	底径 3層	14.0	脚部は大きく開き厚唇	風化	褐色	
716	直立器 灰	SB-01下方	11.2	3.7	立ち上がりが低い内腹	圓弧ナデ 底部:圓弧へラ切り	表面:灰色 断面:紫灰色	出云5層
717	弥生土器 灰	SI-01 SK01(中央ビット2)	20.5		口縁部3条の凹線文 黒墨:指輪印灰文帶	外縁:風化 内面:ハケ日		N-1様式
718	弥生土器 灰	SI-01 SK01(中央ビット2)			口縁部はく、字状に留痕	内面:ナデ	淡茶褐色	Ⅲ-2様式
719	弥生土器 灰	SI-01 4層			口縁部はくの字状に留痕 口縁部2条の凹線文	ナデ	淡褐色	Ⅲ-1様式
720	弥生土器 灰	SI-01下方 (加工段1 繋上)			口縁部はくの字状に留痕 口縁部2条の凹線文	風化	白褐色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
721	弥生土器 底	SI-01下方 (加工段1 繋土)			壳等の蓋 つまみ部分	ナデ	白褐色	
726	弥生土器 底	SB-06 No.2	底径 6.2			外縁:ヘラミガキ 内面:風化	白灰褐色	
727	弥生土器 底	SB-05 No.2	底径 5.9			風化	淡褐色	
738	縄文土器 鉢	西側自然流水路	19.0		削り消し純文	風化	表面:白茶色 断面:灰白色	縄文後期
739	弥生土器 鉢	西側自然流水路	19.0		口縁部は強めに外反 頭部:指輪印灰文帶	風化	白褐色	Ⅲ-1～Ⅱ様式
740	弥生土器 鉢	西側自然流水路	27.5		口縁部は大きめに引き締めは下垂 口縁部:新規子文	風化	淡褐色	Ⅲ-1～Ⅱ様式
741	弥生土器 鉢	西側自然流水路	42.7		口縁部はくの字状に留痕 内面:浮文、下垂部繊維、折れと枝文	ナデ	表面:白褐色 断面:白灰褐色	Ⅳ-1様式
742	弥生土器 鉢	西側自然流水路	23.0		口縁部はく、字状に留痕 口縁部:剪み目	ナデか	表面:白褐色 断面:淡灰色	Ⅲ-2様式
743	弥生土器 鉢	西側自然流水路	23.0		口縁部はくの字状に留痕 口縁部2条の凹線文	外縁:ナデ、ハケ日 内面:ハケ日か	淡褐色	Ⅳ-1様式
744	弥生土器 鉢	西側自然流水路	20.9		口縁部はくの字状に留痕 口縁部2条の凹線文	ナデ	外縁:白褐色～橙色 内面:橙色	Ⅳ-1様式
745	弥生土器 鉢	西側自然流水路	20.2		口縁部はくの字状に留痕 頭部:指輪印灰文帶	外縁:風化 内面:ナデ、ハケ日	表面:白褐色 断面:白灰色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
746	弥生土器 鉢	西側自然流水路	28.8		口縁部はくの字状に留痕 頭部:指輪印灰文帶	ナデ	白褐色 断面:淡灰褐色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
747	弥生土器 鉢	内側自然流水路	19.6		口縁部はくの字状に留痕 頭部:指輪印灰文帶	外縁:ハケ日 内面:ナデ	白褐色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
748	弥生土器 鉢	西側自然流水路	38.7		口縁部はくの字状に留痕 頭部:指輪印灰文帶	外縁:ナデ 内面:ナデ、ハケ日	淡褐色 表面:褐色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
749	弥生土器 鉢	西側自然流水路	14.0		口縁部はくの字状に留痕 外縁:スス付着	ハケ日	灰褐色	Ⅳ-1様式
750	弥生土器 高杯	西側自然流水路	33.8		口縁部はくの字状に留痕 内面:浮文、凹形浮文	外縁:風化 内面:ヘラミガキ	白褐色 断面:灰色	Ⅲ-2～Ⅳ-1様式
751	弥生土器 高杯	西側自然流水路	37.0		口縁部はくの字状に留痕 内面:浮文	風化	表面:茶色 内面:淡褐色	Ⅳ-1様式

地図番号	種類	出土位置	寸法(cm) 深さ 上様	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
732	弥生土器 高坏	西側自然流水路		円筒光須法	風化	淡紅~白褐色	
753	弥生土器	西側自然流水路		脚部從3条の四縞文、5条のハラ 横直縞文	外縁:ヘラギキ 内面:ハラ割り	白青褐色 断面:黄褐色	N-1様式
754	弥生土器 底部	西側自然流水路	成徑 8.1	上げ族	外縁:ナデ後ハケ目 内縁:風化	外縁:白褐色 断面:灰褐色	1mm以下の砂粒含 有
755	弥生土器 底部	西側自然流水路	成徑 9.3		風化	淡褐色	2mm前後の砂粒含 有
756	弥生土器 底部	西側自然流水路	成徑 6.9		ナデ	灰~白褐色	2mm前後の砂粒含 有
757	弥生土器 底部	西側自然流水路	成徑 6.0	上げ族 外縁にスス付有	外縁:ヘラギキ 内縁:ナデ	外縁:黑色 内縁:茶色	1mm前後の砂粒含 有
758	土師器 壳	西側自然流水路	16.0	二重口縁の板跡	外縁:ナデ 内縁:ハケ目、ヘラ割り	表面:褐色 断面:白褐色	
759	土師器 壳	西側自然流水路	10.4	口縁部は外反	口縁内縁:ナケ目	淡褐色	
760	土師器 高坏	西側自然流水路	22.4	脚部は有段 口縁部は外反	外縁:ナデ 内縁:ヘラギキ	白褐色	
761	土師器 低脚环	西側自然流水路		环部は内湾	外縁:ハケ目 内縁:ハケ目、ヘラギキ	表面:明褐色 断面:白褐色	赤色顔料
763	須恵器 环坏	西側自然流水路	12.8	口縁部はわずかに内湾	回転ナデ 足元部:多方向ナデ	灰色	出雲5期
764	須恵器 环坏	西側自然流水路	12.3	4.0 口縁部はわずかに内湾 井手部外縁にヘラ記	回転ナデ 足元部:斜面	表面:灰褐色 断面:灰褐色	出雲5期
765	須恵器 身身	西側自然流水路	10.75	3.9 立ち上がりは弧内縁	回転ナデ 底部:脚部:ヘラ切り	灰色	出雲4期
766	須恵器 身身	西側自然流水路	10.2	4.9 立ち上がりは凸内縁	回転ナデ 底部内面:多方向ナデ	淡灰色	出雲4期
767	須恵器 高坏	西側自然流水路	15.5	10.1 脚部は内湾 脚部2方向の凸形透かし	内縁:ナデ 环部内面:ナデ	灰色	出雲4期
768	須恵器 高坏	西側自然流水路	14.0	环部外縁:1条の四縞文	回転ナデ 回転:ナラ割り	灰色	出雲4期
769	須恵器 高坏	西側自然流水路	15.4	脚部2方向の凸形透かし	内縁:ナデ 环部内面:ナデ	外縁:黒褐色 内縁:灰褐色	出雲4~5期
770	須恵器 底	西側自然流水路		頭部:波状文	回転ナデ 回転:ナデ 回転:ナラ割り	外縁:灰褐色 内縁:灰褐色	出雲4~5期
771	須恵器 底	西側自然流水路		脚部2条の四縞文、板目による網 文	回転ナデ	外縁:灰褐色 内縁:灰褐色	出雲1~2期
772	須恵器 底	西側自然流水路	14.2	頭~脚部:4条の四縞文	回転ナデ	淡褐色	
773	須恵器 底	西側自然流水路		頭部:波状文、3條以上の波状文	回転ナデ	外縁:灰褐色 内縁:灰褐色	
798	弥生土器 底	南丘壁西斜削面下 黑色土	28.6	口縁部は大きく開き脚部は下垂 口縁部3条の四縞文	風化	表面:白青褐色 断面:灰褐色	N-1~2様式
800	弥生土器 底	南丘壁西斜削面下 黑色土	19.0	口縁部は「く」字状に屈曲 口縁部1条の四縞文	外縁:ハケ目	白色	
801	弥生土器 底	南丘壁西斜削面下 黑色土	19.4	口縁部は「く」字状に屈曲 口縁部3条の四縞文	ナデ 外縁:ハケ目	淡褐色	N-1様式
802	弥生土器 底	南丘壁西斜削面下 黑色土	18.2	口縁部は「く」字状に屈曲 口縁部4条の四縞文	ナデ	暗灰褐色	II-2~N-1様式
803	土師器 身	多目的広場 灰黑色土	17.0	二重口縁	外縁:横ナデ 内縁:横ナデ、ヘラ割り	淡褐色	
804	土師器 身	多目的広場 灰黑色土	21.25	半純口縁 口縁部は外反	外縁:横ナデ、ハケ目 内縁:横ナデ、ヘラ割り	淡褐色	
805	土師器 身	SI-03 1区 上段 SI-03 2区 古土器層	32.3	口縁部は大きく開き底部は下垂 口縁部:斜削子文	外縁:ハケ目 内縁:ミガキ、ハケ目	表面:黄褐色 断面:灰褐色	II-1~2様式
806	弥生土器 底	SI-03 4区 下段 1層 墓茶褐色土	16.6	口縁部は大きく水平に開く 口縁部2条の四縞文	ハケ目	表面:暗褐色 断面:灰褐色	N-1様式
807	弥生土器 底	SI-03 2区 1層 墓茶褐色土	17.4	口縁部:屈み目、2条の四縞文、 円形浮文 内縁:カシ波状文	ナデ	淡褐色	II-2様式
808	弥生土器 底	SI-03 2区 1層 墓茶褐色土	16.5	口縁部は「く」字状に屈曲 内縁:浮文	風化	黄茶色	II-2様式
809	弥生土器 底	SI-03 1層 墓茶褐色土	21.1	口縁部は「く」字状に屈曲	風化	淡褐色	II-2様式
810	弥生土器 底	SI-03周辺 4区 墓茶褐色土	16.6	口縁部は「く」字状に屈曲 外縁にスス付有	ハケ目	淡黃褐色~灰褐色	II-2様式
811	弥生土器 底	SI-03 燐跡付底 ほぼ焼成物(2例)	16.0	口縁部:1条の四縞文 脚部:3段の波点文	外縁:ハケ目、ヘラギキ 内縁:ハケ目	黄茶褐色	AJSJ式和SMMT-10 III-2~IV-1様式
812	弥生土器 高坏	SI-03 1層 墓茶褐色土	21.7	口縁部:屈み目、1層 口縁部4条の四縞文 脚部:内縁文	ヘラギキ 脚部内面:ヘラ割り	黄茶褐色	N-1~2様式
814	弥生土器 底	SI-03 4区 下段 1層 墓茶褐色土	5.0		風化	淡褐色	1mm以下の砂粒含 有
815	弥生土器 底	SI-03 P3附近 3区 2層 墓茶褐色土	4.7	底付	外縁:風化 内縁:ナデ	淡褐色	細砂含

種別 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高 口径	形態・文様の特徴	調 査	色 調	備 考
816	弥生土器 底部	SI-03 3区 下段 1层 暗茶褐色土	底径 7.6		外面:ナデ	外面:淡黄褐色 内面:淡黄褐色	2mm以下の砂粒含 有
817	弥生土器 底部	SI-03 3区 P3内 暗茶褐色土	底径 7.3		風化	外面:淡褐色 内面:淡褐色	網目多含
818	弥生土器 底部	SI-03 3区 P3内 暗茶褐色土	底径 9.6		外面:ハラミガキ 内面:風化	外面:淡褐色 内面:淡灰褐色	1mm以下の砂粒含 有
819	弥生土器 底部	SI-03 4区 P2内 暗茶褐色土	底径 8.0		外面:ナデ	外面:淡褐色 内面:ナデ	網目多含
820	弥生土器 底部	SI-03 1区 上段 SI-03-03 道壁上層部 3m	底径 7.2		外面:ハラミガキ 内面:ハラ削り	外面:明褐色 内面:暗褐色	
846	弥生土器 底部			腹部:2条の凹縞文、2条の横顎筋 腹文	内面:ナデ	表面:黃白色 箇所:淡褐色	IV-1様式 茶系顔料か
847	弥生土器 窓	SI-05 2区 暗茶褐色土	16.6	口縦縞部:輪み目 口縦縞部:2条の凹縞文	ハケ後:ハラミガキ	外面:黑色 内面:淡茶色	IV-1様式
848	弥生土器 底部	SI-04* P9内	底径 7.0	上げ縫 16個の円孔	ナデ	外面:淡茶褐色 内面:淡褐色	
853	弥生土器 窓	SI-06 濃黒削出面 D-D'土唇断面 5層	13.5	頭部:2条の突審文	風化	黄褐色	III-1~2様式
854	弥生土器 窓	SI-06 SK01内	26.8	口縦縞部:下道2条の凹縞文 頭部:2条の突審文、クシ縞状文	内面:ハケ後ナデ	淡黃茶色	III-2~IV-1様式
855	弥生土器 窓	D-D'土唇断面 5層		頭部:上部:2条の突審文	外面:ハラミガキ 内面:ハケ	茶褐色	III様式 1mm以下の砂粒含 有
856	弥生土器 窓	SI-06 加工後削出面 D-D'土唇断面 5層	19.2	口縦縞部:く字状に彫曲 口縦縞部:2条の凹縞文	外面:ハラミガキ、ハケ目 内面:ハケ目、ヘラ削り	淡褐色	IV-1様式 AMS試料SMMT-9
857	弥生土器 窓	SI-06 D-D'土唇断面 3層	17.2	口縦縞部:く字状に彫曲 口縦縞部:2条の凹縞文	ナデ	灰褐色	IV-1~2様式
858	弥生土器 窓	SI-06 SI-06 1区 D-D'土唇断面 5層	17.0	口縦縞部:く字状に彫曲 口縦縞部:2条の凹縞文	外面:ハケ目 内面:ハケ後ナデ	淡褐色	IV-1~2様式
859	弥生土器 窓	SI-06 1区 D-D'土唇断面 5層		頭部:上部:2条の突審文 スヌ付	外面:ナデ 内面:ハケ目	表面:淡褐色 瓶面:淡黃褐色	
860	弥生土器 窓	SI-06 1区 底部	底径 5.2		外面:ナデ 内面:削出面	外面:淡茶褐色 内面:白褐色	
865	弥生土器 窓	SI-07 1区 7層 暗茶褐色土	13.4	口縦縞部:く字状に彫曲 頭部:削出面直文	内面:ナデ	淡褐色	IV-1様式
866	弥生土器 窓	SI-07 1区 7層 暗茶褐色土	17.4	口縦縞部:く字状に彫曲 頭部:削出面直文	内面:ナデ	外面:淡褐色 内面:黄褐色	IV-1様式
867	弥生土器 窓	SI-07 柱穴内	23.6	口縦縞部:削み目:3条の凹縞文 頭部:削出面直文	外面:ハケ目 内面:ナデ	表面:白色 瓶面:灰白色	IV-1様式
868	弥生土器 窓	SI-07 2内 底部	底径 10.4		外面:ハケ目 内面:ナデ	表面:淡茶色 瓶面:淡茶褐色	
869	弥生土器 窓	SI-07 柱穴内	7.9		外面:ナデ 内面:ナデ	表面:黑色 瓶面:淡褐色	
872	弥生土器 窓	SI-08 はげ造構造		頭部:直線文、波状文、3条の突審文	内面:ハケ目	黑褐色	III-1~2様式
873	弥生土器 窓	SI-08 P5内 暗褐色土	2.5	つまみ部分	ナデ	灰褐色	
874	弥生土器 窓	SI-08 はげ造構造	26.7	口縦縞部:1条の凹縞文、円形浮 文	風化	黄褐色	III-2様式
875	弥生土器 窓	SI-08 1層 暗褐色土	16.6	口縦縞部:削み目、3条の凹縞文	ナデ	外面:淡茶褐色 内面:深灰色	IV-1~IV-2様式
879	弥生土器 窓	小ビタ群1 選土炉 暗茶褐色土	16.9	口縦縞部:く字状に彫曲	風化	古茶色	III-1~2様式
881	弥生土器 窓	SI-08 3区 暗茶褐色土	30.0	口縦縞部:3条の凹縞文		暗褐色	IV-1様式
882	弥生土器 窓	SI-08 底部	25.4	口縦縞部:2条の凹縞文 頭部:削出面直文	内面:ハラミガキ	外面:淡褐色 内面:灰色	IV-1様式
883	弥生土器 窓	SI-08 No.2	25.6	口縦縞部:2条の凹縞文 頭部:削出面直文	ハケ目	淡灰褐色	IV-1様式
884	弥生土器 窓	SI-08 底部	20.4	頭部:削出面直文 頭部:削出面直文	ハケ目	赤褐色	IV-1様式
885	弥生土器 窓	SI-08 底部 No.1	10.0	ねずみに上げ底	ハラミガキ	外面:淡茶褐色 内面:灰黑色	1mm前後の砂粒含 有
886	弥生土器 窓	SI-08 底部 柱穴内	底径 5.7		外面:ハラミガキ 内面:ハラ削り、ナデ	茶褐色	1mm前後の砂粒含 有
894	弥生土器 窓	SI-09 柱穴内	28.1	口縦縞部:大く開く	風化	黃白色	III-1~2様式
895	弥生土器 窓	SI-09 柱穴内		口縦縞部:3条の突審文	内面:ハラミガキ	外面:淡褐色 内面:淡褐色	III-1~2様式
896	弥生土器 窓	SI-09 柱穴内		頭部:2条の突審文	外面:ハケ目 内面:ナデ	表面:淡茶褐色 瓶面:淡灰色	III-1~2様式
897	弥生土器 窓	SI-09 4区 深内	11.9	口縦縞部:強く外反 口縦縞部:3条の凹縞文	風化	黃白色	IV-1様式
898	弥生土器 窓	SI-09 4区 造構造	20.6	口縦縞部:3条の凹縞文 内面:4条の凹縞文	風化		IV-1様式
899	弥生土器 窓	SI-09 造構造	17.0	口縦縞部:3条の凹縞文	風化	黃白色	IV-1様式

探査番号	器種	出土位置	寸法(cm) 最高・山様	形態・文様の特徴	測 定	色 調	備 考
900	弥生土器 甕	SB-09 遺構面	21.9	口縁部はく字状に屈曲	風化	真白色	Ⅲ-2様式
901	弥生土器 甕	SB-09 溝上埋土	19.2	口縁部はく字状に屈曲	風化	黄茶色	Ⅲ-2様式
902	弥生土器 甕	SB-09 遺構面	14.4	口縁部はく字状に屈曲	ハケ付		Ⅲ-2様式
903	弥生土器 甕	SB-09 遺構面	18.6	口縁部はく字状に屈曲 口縁部底に3条の凹線文	外面:ハケ目 内面:風化		Ⅲ-2様式
904	弥生土器 甕	SB-09 No.2	16.6	口縁部はく字状に屈曲	ナデか	淡褐色	Ⅲ-2様式
905	弥生土器 甕	SB-09 遺構面	16.2	口縁部底削み日、2条の凹線文 頭部折頭張文	ナデ	淡黃褐色	IV-1様式
906	弥生土器 甕	SB-09 溝上 墓上	19.2	口縁部削み日、3条の凹線文	外面:ナデ 内面:ハケ後ナデ	淡黃褐色	IV-2様式
907	弥生土器 甕	SB-09 4区 墓内	15.4	口縁部:折頭張文帶 頭~肩部:7条の凹線文	内面:ハケ目		IV-1様式
908	弥生土器 甕	SB-09 4区 黑色土	24.9	口縁部底は肥厚し平坦面を持つ	風化		Ⅲ-1~2様式
909	弥生土器 高杯	SB-09 溝上 墓上	32.0	口縁部削み日、1条の西面文 上面:斜格子文、円形浮文	ハラミガキ	淡褐色	Ⅲ-1様式
910	弥生土器 底部	SB-09 底部 溝上 墓上	4.8	底径	ナデ、指面:川痕	外面:淡黃褐色 内面:淡灰色	3mm以下の砂粒含
911	弥生土器 底部	SB-09 4区 遺構面	6.2		外面:ハラミガキ 内面:ナデ	白褐~暗褐色	1mm以下の砂粒含
912	弥生土器 底部	SB-09 底部 4区 遺構面	5.3		外面:ハラミガキ 内面:ハケ後ナデ	外面:淡褐色 内面:淡灰色	1mm以下の砂粒含
913	弥生土器 底部	SB-09 底部 底部	4.8		ナデか	外面:淡黃褐色 内面:淡褐色	1mm以下の砂粒含
914	弥生土器 底部	SD-09 底部 底部	6.1	底径	外面:ハラミガキ 内面:ナデ	外面:淡黃褐色 内面:淡褐色	1mm以下の砂粒含
915	弥生土器 底部	SB-09 底部 底部	9.8		外面:ハラミガキ 内面:ナデ	灰褐色	1mm以下の砂粒含
916	弥生土器 底部	SB-09 底部 4区 墓内	7.2		外面:ナデ	淡黃褐色	1mm前後の砂粒含
917	弥生土器 底部	SB-09 底部 底部	8.8	底径	外面:ハラミガキ 内面:ハケ付	白褐色 程~暗灰色	1mm以下の砂粒含
918	弥生土器 甕	SB-10 柱穴内	14.8	頭部3条の大帶文	外面:ハケ付		Ⅲ-1~2様式
919	弥生土器 甕	SB-10 甕土	16.4	口縁部はく字状に屈曲	ナデ	外面:淡黃褐色 内面:淡褐色	Ⅲ-2様式
920	弥生土器 甕	SB-10 溝の北側 5区 暗茶褐色土	21.0	口縁部はく字状に屈曲	風化	外面:棕色 内面:暗褐色	Ⅲ-1~2様式
921	弥生土器 底部	SB-10 遺構面 墓上	8.0		外面:ハラミガキ 内面:ナデ	表面:淡褐色 断面:暗褐色	
922	弥生土器 底部	SI-06, SB-09, 10 1列刃 黒色土	15.2	口縁部2条の凹線文 頭部:3条の凹線文	外面:細いハケ目	外面:褐色 内面:淡褐色	Ⅳ-1~2様式
923	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 1列刃 黄褐色土	17.4	頭部:3条の突帯文	ナデ	外面:淡褐色 内面:淡褐色	Ⅲ-2様式
924	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	23.3	口縁部はく字状に屈曲 頭部:折頭張文	風化	外面:淡褐色 内面:淡褐色	Ⅳ-1様式
925	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	21.8	口縁部:2条の凹線文 頭部:折頭張文	ハケ付	表面:灰茶色 断面:灰茶色	Ⅳ-1様式
926	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	18.2	口縁部:削み目、2条の西面文 頭部:折頭張文	外面:ハケ付 内面:ナデ	外面:灰茶色 内面:淡褐色	Ⅳ-1様式
927	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	23.0	底盤剥離 底盤削離	内面:ハケ付 ナデ	外面:黒褐色 内面:淡褐色	Ⅳ-1~2様式
928	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	6.6		ハラミガキ	程茶~褐色	粗糲質
929	弥生土器 高杯	SI-06, SB-09, 10 剥刃 黑褐色土	5.6	上げ底	外面:ハラミガキ 内面:ナデ、ヘラ削り	外面:暗褐色 内面:灰白色	1mm前後の砂粒含
930	弥生土器 底部	SI-06, SB-09, 10 周辺 No.3	5.6	焼成底	外面:ハラミガキ 内面:ナデ	外面:暗褐色 内面:灰白色	
931	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	10.4	5.3 5.6	火立ちがゆく高内筋 环状剥離内面	外面:ハラミガキ 内面:ナデ、ヘラ削り 程軽~ハケ付	灰色 出火1~2期
932	弥生土器 甕	SI-06, SB-09, 10 周辺 黑褐色土	10.4	5.3	5.6	外面:暗褐色 内面:灰白色	
933	弥生土器 甕	SI-11 溝内 黑褐色土		口縁部3条の凹線文、円形浮文 内面:クレ波状文	ナデ	表面:灰白色 断面:黄白色	Ⅳ-1様式
934	弥生土器 甕	SI-11 溝内 黑褐色土		口縁部3条の凹線文	外面:ハケ付 内面:灰褐色	表面:淡黃褐色 断面:灰褐色	Ⅲ-2様式
940	弥生土器 甕	SB-11 表土		口縁部:削み目、3条の凹線文	ナデ	淡茶色	Ⅳ-1様式
941	弥生土器 甕	SB-11 溝内 黑褐色土	21.4	口縁部:削み目、1条の凹線文 頭部:折頭張文	外面:ナデ 内面:ハケ後ナデ	茶色	Ⅳ-1様式
942	弥生土器 甕	SD-11 黑褐色土	19.0	口縁部:削み目、2条の凹線文 頭部:折頭張文	ナデ	表面:白黃褐色 断面:淡灰色	IV-1様式
943	弥生土器 甕	SB-11 表土	20.0	口縁部:削み目、3条の凹線文	ナデ	白褐色	IV-1様式
944	弥生土器 甕	SB-11 底部	5.6	口縁部:削み目、1条の凹線文	外面:明褐色 内面:ナデ	明褐色	

井戸番号	器種	出土位置	寸法(cm) 高さ 口径	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
945	弥生土器 底部	SB-11 底面 P5内	底径 6.2	上げ底	外面:ハケ日 内面:ナデ	外面:褐色 内面:褐色	
948	弥生土器 底部	SB-12 P5内		口縁部は6条以上の突文で、新七輪 取付	内面:沿縁压板	外面:茶色(頬界) 内面:灰色	III-1~2様式
949	弥生土器 底部	SB-12 P5内		脚環部は4条の円錐文、斜縫文	風化	白茶色	
950	弥生土器 底部	SB-12 P5内		口縁部はく字状に屈曲	ナデか	淡褐色	III-2様式
951	弥生土器 底部	SB-12 P5内		口縁部はく字状に屈曲	風化	表面:淡褐色 断面:淡灰色	III-2様式
952	弥生土器 底部	SB-12 P5内	14.0	口縁部はく字状に屈曲 口縁部2条の円錐文	外面:ハケ日 内面:沿縁压板	淡灰~淡褐色	IV-1様式
953	弥生土器 底部	SB-12 P5内	底径 5.2		外面:風化 内面:ヘラ削り	外面:桜茶色 内面:黄白茶色	2mm以下の砂粒含
954	弥生土器 底部	SB-12 P5内	底径 3.4		外面:風化 内面:ナデ	淡茶色	1mm以下の砂粒含
955	弥生土器 底部	SB-12 P5内	底径 3.8		ナデ	灰白茶色	1mm以下の砂粒含
956	弥生土器 底部	SB-12 P5内	底径 4.4		外面:風化 内面:ヘラ削り	灰茶色	2mm以下の砂粒含
957	弥生土器 底部	SB-13 2層 黒褐色上	18.3	口縁部はく字状に屈曲	外面:ハケ日、ナデ 内面:ハケ日	外面:淡褐色 内面:淡褐色	III-2様式
958	弥生土器 底部	SB-13 P7 黒褐色上		口縁部はく字状に屈曲	外面:風化 内面:ナデ	淡茶色	III-2様式
959	弥生土器 底部	SB-13 黒褐色上		口縁部2条の西線文	ナデ	淡茶~灰茶色	IV-1様式
960	弥生土器 底部	SB-13 2層 黒褐色上		口縁部2条の西線文、沿縁压 板文書	表面:淡褐色 断面:淡褐色	N-1様式	
961	弥生土器 底部	SB-13 明黄褐色上		内燃充填法 脚部3条以上の西線文	外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	表面:淡茶色 断面:灰色	IV-1~2様式
962	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 9.2	脚部1条の西線文	ナデ	灰白茶色	IV-1~2様式
963	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 5.8	底部に丸	外面:風化 内面:ハケ日	外面:暗灰色 内面:淡灰褐色	1mm前後の砂粒含
964	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 3.7		風化	灰茶色	1mm以下の砂粒含
965	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 5.6		外面:ヘラミガキ 内面:ナデ	淡茶色	細砂多含
966	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 5.2		外面:ナデ 内面:ヘラ削りか	淡灰褐色	1mm以下の砂粒含
967	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 6.0		ナデ	淡褐色	1mm以下の砂粒含
968	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 6.2	上げ底			
969	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 6.0	上げ底	ナデか	外面:茶褐色 内面:淡灰色	1mm前後の砂粒含
970	弥生土器 底部	SB-13 2層 黑褐色上	底径 6.0	上げ底	ナデ	灰茶色	1mm以下の砂粒含
971	弥生土器 底部	SB-13 黑褐色上	底径 10.0		外面:風化 内面:ナデ	外面:黄褐色 内面:淡灰色	1mm以下の砂粒多 含
973	弥生土器 底部	SB-14 黑褐色上	13.1	口縁部は極外反 脚部1条の文書文	ナデ	淡褐色	III-1~2様式
974	弥生土器 底部	SB-14 中央部 屋上	9.5	口縁部は強外反	風化		III-1~2様式
975	弥生土器 底部	SB-14	27.0	口縁部2条の西線文	外面:風化 内面:ハラミガキ	明褐色	IV-1~2様式
976	弥生土器 底部	SB-14		脚部1条の文書文	外面:ハラミガキ 内面:ハケ日、ナデ	外面:黑褐色 内面:黄褐色	II-1~2様式
977	弥生土器 底部	SB-14 屋上	17.4	口縁部はく字状に屈曲 脚部:指痕压板文書	風化	明褐色	II-2様式
978	弥生土器 底部	SB-14	17.5	口縁部はく字状に屈曲 脚部:指痕压板文書	風化	淡褐色	III-2~IV-1様式
979	弥生土器 底部	SB-14 2層 暗灰褐色上	23.6	口縁部2条の西線文 底面:指痕压板文書	風化		IV-1様式
980	弥生土器 底部	SB-14	21.0	口縁部内側 口縁部2条の西線文	ナデ	外面:淡褐色 内面:淡茶褐色	IV-1様式
981	弥生土器 底部	SB-14	34.2	口縁部は直立 脚部:將み日、6条の門線文	外面:ハラミガキ 内面:ハケ日、ナデ	淡褐色	IV-2様式
982	弥生土器 底部	SB-14	底径 6.6	全体にスリット裏	外面:ヘラミガキ 内面:ハケ日	淡褐色	1mm以下の砂粒多 含
987	弥生土器 底部	SB-15-1 2層	20.0	口縁部はく字状に屈曲	風化	淡褐色	II-2様式
988	弥生土器 底部	SB-15-1 2層	20.0	口縁部はく字状に屈曲 脚部:指痕压板文書	風化	淡褐色	II-2様式
989	弥生土器 底部	SB-15-1 2層	19.0	口縁部2条の西線文	ナデ	淡灰褐色	IV-1様式

備考番号	器種	出土位置	寸法(cm) 高さ/口径	形態・文様の特徴	測定	色調	備考
990	弥生土器 甕	SB-15-1 造構面1上～2層	15.8	口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	ナデ	明褐色	N-1様式
991	弥生土器 甕	SB-15-1 造構面1上～2層		口縁部はく字状に屈曲	外面:ハケ目 内面:風化	表面:淡青褐色 画面:淡灰色	
992	弥生土器 甕	SB-15-1 造構面1上～2層	18.8	口縁部はく字状に屈曲 造構面1上～2層	ナデ	黄白茶色	N-1様式
993	弥生土器 甕	SB-15-1 造構面1上～2層	17.3	口縁部はく字状に屈曲 口縁部2条の凹線文	ナデ	灰茶色	N-1様式
994	弥生土器 甕	SB-15-1 造構面1上～2層	17.1	無柄 口縁部端はやや肥厚し 平口部を持つ	ナデ	淡灰褐色～淡褐色	III-2様式?
995	弥生土器 底盤	SB-15-1 造構面1上～2層	底径 8.0		風化	淡褐黃褐色	細砂多含
996	弥生土器 底盤	SB-15-1 造構面1上～2層	底径 6.6		ナデ	外面:淡青褐色 内面:淡茶色	1～2mmの砂粒含
997	弥生土器 高杯	SD-15-2及び3 造構面1上層	17.2	口縁部端は肥厚し直面を持つ 口縁部3条の凹線文	風化	淡青褐色	N-1様式
998	弥生土器 壺	SB-15-2及び3 造構面1上層	11.2	直口部 口縁部6条の凹線文、沿 邊压出文	ナデ	明茶色	N-1様式
1000	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土	23.0	口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	淡青褐色	III-2様式
1001	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土	14.8	口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	青褐色 断面:灰黑色	III-2～IV-1様式
1002	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	ナデ	灰茶褐色	IV-1様式
1003	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部はく字状に屈曲	風化	淡青褐色	III-2様式
1004	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	ナデ	淡茶色	N-1様式
1005	弥生土器 高杯	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部3条の凹線文	風化	灰褐色 断面:灰黑色	N-1様式
1006	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	外面:茶褐色 内面:淡褐色	N-1様式
1007	弥生土器 甕	SI-07 1層 咲黄褐色土		口縁部3条の凹線文	ナデ	外面:黑灰褐色 内面:淡茶色	
1008	弥生土器 高杯	SI-07 1層 咲黄褐色土		内縫丸塗法 縫合部4条の凹線文	ナデ/内面:シボリ	外面:淡茶褐色 断面:灰褐色	N-1～2様式
1009	弥生土器 底盤	SI-07付近	底径 5.2		外面:ナデ 内面:ハラカキ	1mm以下の砂粒多含	
1010	弥生土器 底盤	SI-07 1層 咲黄褐色土	底径 4.4		外面:ハラカキ 内面:ハラカキ	1mm以下の砂粒多含	
1011	弥生土器 底盤	SI-07 1層 咲黄褐色土	底径 4.4		外面:ハラカキ 内面:淡青褐色	2mm以下の砂粒含	
1012	弥生土器 甕	SI-16 PS南 黄褐色土	20.6	口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	青褐色 断面:灰黑色	IV-1～2様式
1013	弥生土器 甕	SB-16 造構面近くNo.7		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	淡青褐色	IV-1様式
1014	弥生土器 甕	SB-16 PS南 黄褐色土	14.6	口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	ハケ目	外面:淡褐色 内面:淡褐色	N-1様式
1015	弥生土器 甕	SB-16 造構面近くNo.7		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	風化	淡青褐色	IV-1様式
1016	弥生土器 甕	SB-16 造構面近くNo.7		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	ハケ目	外面:淡褐色 内面:淡褐色	IV-1様式
1017	弥生土器 甕	SB-16 造構面近くNo.7		前部:直線文、羽状文、円形浮文	内面:風化	外面:淡褐色 内面:淡褐色	IV-1様式
1018	弥生土器 甕	SB-16 墳頂 No.8		前部:直線文による斜刺文	ハケ目	外面:淡褐色 内面:淡青褐色	
1024	弥生土器 甕	SI-08 PS内		口縁部はく字状に屈曲 口縁部3条の凹線文	灰褐色		N-1様式
1025	弥生土器 底盤	SI-09 暗青茶褐色土			外面:ハラカキ	外面:灰褐色 内面:淡褐色	4mm以下の砂粒含
1027	弥生土器 甕	SI-09 4区 造構面 No.3	20.6 38.8	口縁部は強めに外反 端面は下垂気味	外面:ハケ目、ハラカキ 内面:ハケ目、ハラカキ	黒褐色	III-2様式
1028	弥生土器 甕	SI-09 4区 造構面 No.2	26.8 53.3	口縁部強めに下垂 内面:強めに下垂	外面:ハケ目後～ハラカキ 内面:ハケ目	青白系～ 灰黑色	III-2様式
1029	弥生土器 甕	SI-09 造構面 No.1	25.0	口縁部:内面:斜格子文、判点文 部:直線文	外面:ハケ目 内面:ハケ目後ナデ	青系褐色	III-2様式
1030	弥生土器 甕	SI-09 底盤	底径 9.0	内面にスズ付着	ナデ	外面:淡青褐色 内面:淡青褐色	1mm前後の砂粒含
1052	十脚器 甕	2号壇 主体部 I. 主体部II. 瓶新面 2層	10.0	...底部の直口甕 瓶部:直口甕	横ナデ	暗青褐色	古墳時代前期
1053	上脚器 甕	2号壇 主体部上 No.3.8	22.0	上白内面:ハラカキ 下白内面:ハラカキ	上白内面:ハラカキ 下白内面:ハラカキ	淡褐色	古墳時代前期
1054	上脚器 甕	2号壇 壺新面 2層	18.0	...底部:直口甕 瓶部:直口甕	回転ナデ	青灰色	
1055	双頭器 甕	SI-17 底盤	10.7 4.3	もと上からは軽く内傾	回転ナデ 底部:ヘラ切り後ナデ	灰色	山空5期
1056	上脚器 甕	SI-17 瓶上		火痕 底部にスズ付着	外面:シケ目 内面:ヘラ削内	青褐色	
1057	双頭器 甕	SI-17 付近	12.6 3.9	口縁部と天井部の境に1条の沈 線	回転ナデ 天井部:ヘラ切り後ナデ	灰褐色	出雲4期

博認 番号	器種	出土位置	寸法(cm)		形態・文様の特徴	調 整	色 調	備 考	
			高さ	口径					
1058	須恵器 环身	SB-29 深付鉢	11.3	3.9	立ち上がりは低く内傾	回転ナデ、ナデ 回転ヘラ削り	灰色	出雲4期	
1059	土師器 高环	SB-30 盆佛面	底径 6.8		高台は低く重直	風化	外面:刷毛褐色 内面:淡黑色	平安~中世	
1060	土師器 高环	SI-10 2層			接合部分	外面:ハケ日 内面:ナデナ	棕褐色		
1061	土師器 高环	SI-10 邊縁面近く			接合部分	外面:ハケ日 内面:ナデナ	淡褐色		
1062	土師器 高环	SI-10 2層			接合部分	外面:ハラミガキ 環部内面:ハラミガキ	茶色		
1063	須恵器 环身	SI-10 1.2層間	13.2	4.0	口縁部と天津部の境にわずかな段	回転ナデ、ナデ 回転ヘラ削り	青灰色	出雲4期	
1064	須恵器 环身	SI-10 1.2層間	12.8			回転ナデ	淡灰色	出雲4期	
1065	須恵器 环身	SI-10 1.2層間	10.0	3.8	立ち上がりは内傾	回転ナデ、ナデ 回転ヘラ削り	外面:淡灰褐色 内面:淡灰色	出雲4期	
1066	須恵器 环身	SI-10 1.2層間			口縁部はわずかに外反 脚部2方向に切込み状造込	回転ナデ	淡青灰色	出雲5期	
1067	土師器 高环	SI-10 1.2層間	23.6		口縁部は強く外反	横ナデ、ヘラ削り	淡茶色		
1068	土師器 高环	SI-10 1.2層間	22.2		口縁部は強く外反	横ナデ、ヘラ削り	棕褐色		
1069	土師器 高环	SI-10 1.2層間	20.6		口縁部は弱く外反 外向下半にスス付着	外輪:横ナデ、ハケ日 内面:横ナデ、ヘラ削り	棕褐色		
1070	土師器 土製作	SI-10 1.2層間	底径 16.0	13.5		ヘラ削り、ナデ	赤褐色		
1071	土師器 土製作	SI-10 1.2層間	底径 8.0	9.7		ヘラ削り、ナデ	棕褐色		
1073	須恵器 环身	SB-18-19 漆内	底径 11.0		脚部:三角彫れが長方形造込	回転ナデ	外面:灰白色 内面:灰白色		
1074	須恵器 环身	SB-18-19 東側埋積土		11.2	3.7	立ち上がりは低く内傾	回転ヘラ削り 回転ナデ、多方向ナデ	外面:灰黄色 内面:淡黄色	出雲4期
1075	須恵器 环身	SB-18-19 車輪模様土		13.8	3.3	口縁部と天津部の境にわずかな段	瓦打部:ナデ 回転ナデ	外向:灰黑色 内面:灰黑色	出雲5期
1076	須恵器 环身	SB-18-19 漆2層近表上		9.8	立ち上がりは低く内傾	回転ナデ	外向:赤茶色 内面:灰褐色	出雲4期	
1077	須恵器 环身	SB-18-19		19.2	口縁部底部下面に段	平行叩き 回転ナデ	灰~暗灰褐色 断面:紫灰色		
1078	須恵器 环身	SB-18-19西側 土器窓01	8.5	12.8	环部:沈線、クシ状前突文 脚部:波状文	回転ナデ 底面内面:轟止ナデ		出雲4期	
1079	須恵器 环身	SB-18-19西側 土器窓01	9.8	14.3	环部:波状文 脚部:波状文の沈線、利突文	回転ナデ 回転ヘラ削り		出雲4期	
1080	須恵器 环身	SB-18-19西側 土器窓01	6.0	14.0	脚部に把手の痕跡	叩き後回転ヘラ削り		出雲4期	
1081	土師器 高环	SB-18-19西側 土器窓01		21.2	粗鈍口縁	外向:ハカ日 内面:ハラ削り	灰灰褐色		
1082	土師器 高环	SB-18-19西側 土器窓02			粗鈍口縁	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	灰褐色		
1083	土師器 高环	SB-21			环部:右段	風化	棕~棕赤色	5c末	
1084	土師器 高环	SB-21				風化	棕赤褐色		
1088	須恵器 环身	SB-22 漆内		12.6	4.2	天津部:ヘラ切り後ナデ 回転ナデ	外向:灰褐色 内面:灰白色	出雲4期木	
1089	須恵器 环身	SB-22 漆内		11.7	4.5	立ち上がりは低く内傾	回転ナデ 回転ヘラ削り	灰色	出雲4期末
1090	須恵器 环身	SB-22 東側		11.8		立ち上がりは低く内傾	回転ナデ 回転ヘラ削り	灰褐色	出雲4期末
1091	須恵器 环身	SB-22 埋土		11.7		立ち上がりは低く内傾	回転ナデ	灰色	出雲5期末木が5期初
1092	須恵器 环身	SB-22 東側		9.2		立ち上がりは低く内傾	回転ナデ	灰色	出雲4期
1093	土師器 高环	SI-11 6層 暗黄灰褐色上		15.4		外向:ハカ日、ナデ 内面:ヘラ削り、ナデ	褐~淡褐色		
1094	土師器 高环	SI-11		17.2			鐵ナデ	淡灰褐色	
1095	土師器 高环	SI-11 6層 暗黄灰褐色上		8.9			鐵ナデ	淡灰褐色	
1097	弥生土器 壺	SI-11周辺 壺		16.5	LH部は強く外反	外向:ナデ 内面:ハケ後ナデ	表面:灰褐色 断面:灰褐色	■-1~2様式	
1098	弥生土器 壺	SI-11周辺 壺		14.4	LH部周部:コ森の凹縞文	ナデ	表面:灰褐色 断面:灰褐色	■-1~2様式	
1099	弥生土器 壺	SI-11周辺 壺		13.8	LH部周部に丁字曲を持つ 壺部:1条の突弦文	外向:ハケ日 内面:風化	表面:黄白茶色 断面:灰褐色	■-1~2様式	
1100	弥生土器 壺	SI-11周辺 壺		16.8	LH部周部:み日、1条の凹縞文 壺部:折腹仕立支袋	ナデナ	淡茶色	■-1様式 外向:茶色無料	

地図 番号	器種	出土位置	寸法(cm) 高さ 口径	形態・文様の特徴	測定	色 華	備 考
1101	朱生土器 高环	SI-11周透 底透	17.2	脚部に平坦面を持つ	外面ヘラミガキ 内面ナデ	灰色	N-1~2様式
1102	?	SB-24 柱穴内	18.2		ハケ目	黄褐色	Imb後の移鉢合
1103	弥生土器 底透	SB-24 柱穴内	5.5		外面:ナデ 内面:風化	淡褐色	Imb以下の移鉢合
1104	土師器 高环	SB-24 柱穴内	10.2	脚部は緩やかに聞く	外面ナデ 内面:シボリ	橙色	
1105	土師器 脚部透	SB-24	17.8	把手があるが接着不可 平底	ハケ目	淡褐色	1~2mmの移鉢合
1106	土師器 縫	SI-24 柱穴内	31.2 24.2	把手付 平底	ハケ目 底部:ナデ	淡黃茶~淡褐色	1~2mmの移鉢合
1107	土師器 丸	SI-12 透構面	15.7	退化した二重口縁	外面:ナデ 内面:ハケ目	淡褐色	
1110	土師器 要	SI-12 6層 黄褐色土	14.7	退化した二重口縁	外面:ナデ 内面:ナデ後ハケ目	橙褐色	
1111	十脚器 丸	SI-12 透要面	14.6	SI脚部はく字状に屈曲	横ナデ、ヘラ削り	明褐色	
1112	土師器 丸	SI-12 3層 黑色土		退化した二重口縁	横ナデ	橙茶色	
1113	土師器 丸	SI-12 3層 黑色土		口縁部はく字状に屈曲 スヌ:変化物付着	外面:ハケ後ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	外:茶~透茶色 内:暗褐色	
1114	土師器 丸	SI-12 6層 黄褐色土		口縁部はく字状に屈曲	外面:ハケ目、ナデ 内面:ナデ、ヘラ削り	透茶色	
1115	土師器 丸	SI-12 6層 黄茶色土		口縁部はく字状に屈曲	外面:風化 内面:ナデ、ヘラ削り	表面:淡黃褐色 内部:淡褐色	
1116	土師器 丸	SI-12 3層 黑色土		口縁部は内凹	ナデ	暗色	
1117	十脚器 丸环	SI-12 3層 黑色土	16.8	环部は有段	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ目	橙褐色	
1118	土師器 高环	SI-12 透構面	17.4	环部は有段	外面:風化 内面:ハケ目	橙色	
1119	土師器 高环	SI-12 住居内東隅	14.3	环部は有段	外面:ハケ後ナデ 内面:ハケ目、ナデ	橙色	
1120	七脚器 高环	SI-12 透構面		环部は有段	風化	橙色	
1121	七脚器 高环	SI-12 透構面		口縁部はわずかに外反	外面:ナデ 内面:ハケ後ナデ	橙褐色	
1122	土師器 高环	SI-12 透要面		环部は有段	風化	明褐色	
1123	七脚器 高环	SI-12 溝内			外面:ハケ目 内面:ナデ	明褐色	
1124	土師器 高环	SI-12 6層 黄褐色土			風化	明褐色	
1125	七脚器 高环	SI-12 3層 黑色土			外面:ハケ後ナデ 内面:シボリ	淡黃褐色	
1126	土師器 高环	SI-12 3層 黑色土			外面:ヘラミガキ 内面:シボリ、ヘラ削り	橙茶色	
1129	土師器 要	SI-13 溝内	18.0 29.5	退化した二重口縁 丸底 外面にスヌ付着	外面:ハケ目 内面:ナデ削り	黄褐色~橙色	
1130	七脚器 高环	SI-13 黒褐色土		接着部分	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ	表面:橙褐色 断面:明褐色	
1131	土師器 高环	SI-13 排水			外面:風化 内面:シボリ、ヘラ削り	外:暗色 内:淡黃褐色	
1132	土師器 高环	SI-13 住居構内			内面:シボリ	明褐色	
1133	弥生土器 高环	SI-13 埋土		脚筒部6条の平行縞文	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	外面:灰白茶色 内面:黒灰色	
1134	弥生土器 高环	SI-13 埋土		脚筒部5条以上の平行縞文 1132と同一	外面:ナデ 内面:ナデ削り	外面:灰白茶色 内面:黒灰色	N-2様式か
1136	土師器 丸	SI-25 柱穴内	31.0	SI脚部は反 外面:変化物付着	口縁部:ナデ 脚筒部:ナデ 内面:ヘラ削り	外:黑色 内:赤褐色	
1137	土師器上器 馬蹄付	SB-26 透構面		底部:回転糸切り	回転ナデ 底部内面:多方向ナデ	赤褐色	
1138	土師器上器 底部	SB-26-1の溝内				橙褐色	
1139	土師器上器 合付底	SB-25 3層 黑色土	底径 4.6		風化	肌色	
1140	土師器上器 底部	SB-25-26回透	底径 7.2		回転ナデか	淡褐~橙色	
1141	土師器上器 底部	SB-25 2層 暗褐色土	底径 6.0	底部:回転糸切りか	風化	肌色	
1142	土師器上器 合付底	SB-25-26周辺			底部外面:ナデ 風化	純い橙褐色	
1143	土師器上器 底部	SB-25-ト万斜面 暗褐色土			底部外面:ナデ 風化	純い橙褐色	

辨明番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高 口径	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
1144	朱生土器 蓋	SB-25, 26周辺		口縁端部に半周面を持つ下部5条以上の凹繩文		表面: 淡茶褐色 底面: 淡墨色	H-1様式
1145	朱生土器 蓋	SD-25, 26周辺	底径 9.0		外面: ハラミガキ 内面: ナデ	淡褐~褐色	
1148	土罐實上器 蓋合台状器	SB-27 遺構面	底径 7.2	高台は低い	風化	肌色	
1149	土罐實上器 環底部	SB-27 柱穴内	底径 7.6		風化	淡橙~赤褐色	
1150	十輪竹十唇 环底部	SB-27 柱穴部	底径 6.8	3層 黒褐色土	風化	淡褐色	
1151	土罐實上器 环底部	SB-27 柱穴内	底径 4.2		風化	淡褐色	
1152	土罐實上器 环底部	SB-27 柱穴内	底径 6.5	底面に圓軌系切り	外面: 圓軌ナデ 内面: ナデ	橙色	
1153	陶器 小瓶	SB-27 柱穴内	8.2	口縁端部・内面: 沈物が薄くかかる		乳灰色	
1154	土製器 蓋	SB-27 遺構面	29.2	口縁部は直線的に外傾	横ナデ ヘラ削り	褐褐色	
1155	十輪器 蓋	SB-27 遺構面	30.2	口縁端部はごくわずかに内傾 底部外側に沈物付着	横ナデ ヘラ削り	褐褐色	
1156	須恵器 蓋	SB-27付近 3層	3層 黑褐色土	側部: 格子叩き文の痕跡	圓軌ナデ 多方向ナデ	灰色	
1157	朱生土器 底部	SB-27付近 3層	底径 6.0		外面: ナデ 内面: ナデ, 指廻す痕	澄赤色	2~3mmの砂粒含

遺物観察表(土製品)

辨明番号	器種	出土位置	寸法(cm) 器高 口径	形態・文様の特徴	調査	色調	備考
37	土玉	山頂溝南側 褐色土上	直径 4.0 2.4	球形	風化	淡褐色	13.99g
335	土玉	島1塚地 C-3区 岸褐色土	直径 3.8 3.3	球形	ナデ	淡黃茶~灰黑色	44.36g
336	土玉	第1環礁 CIK-8SK 番下層	直径 3.7 3.0	球形	風化	淡褐色	32.16g
337	土玉	第1環礁 C区~B区 番下層	直径 3.8 3.6	横断面凸形 横断面やいびつな円形	ナデ	黄白茶色	43.31g
338	土玉	第1環礁 B区1冠番荷色土	直径 3.4 2.9	横断面円形 横断面上下や平坦	風化	淡黃褐色 一部灰褐色	32.35g
339	土玉	第1環礁 JLK-T-7 No.29 黄褐色土	直径 3.5 3.1	球形			33.22g
340	土玉	第1環礁 4区	直径 3.0 4.2	横断面圓形の長円形 横断面長径の長円形			39.08g
341	土玉	第1環礁 3区 岸褐色土	直径 3.5 2.0	横断面やいびつな円形 横断面長径の長円形			22.55g
342	土玉	第1環礁 C-2区 黃褐色土+	直径 3.55 2.2	横断面長径の長方形			27.67g
347	土玉	第2環礁 0区 脊褐色土	直径 1.9 1.7	やいびつな球形			5.45g
617	土玉	第3環礁 8区 黒褐色土	直径 2.0 2.0	球形か	風化	白茶	5.85g
774	分割形 土製品	西側自然流水路	底径 4.0 1.3	背面に網文文		表面: 黄白茶色 底面: 灰白色	
880	土玉	小ビット押1 周上層	直径 2.7 3.0	やいびつな球形		茶~灰茶色	18.57g
887	土玉	SI-06 当体面	直径 5.0	球形か	ナデ	黑茶色	48.23g
983	土玉	SB-14	直径 3.0 2.3	横断面圓形 横断面上下や扁平	風化	淡茶~灰茶色	21.53g

石器観察表 (武器形石器)

地図番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
38	磨製石剣(鉄劍形)	山頂部斜面~1-c環塚7区T-2	(6.7)	4.2	1.35	54.36	塩基性岩	4面共よく研磨
95	磨製石劍(鉄劍形)	1-a環塚3区 黃褐色土	(4.2)	(1.4)	0.7	14.95	凝灰岩	
97	磨製石劍(鉄劍形)	1-a環塚下の崩壊土 3区	(6.6)	3.1	1.2	25.87	凝灰岩	
344	有柄式磨製石劍(鋼劍形)	1-c環塚 B-2区	(10.0)	(4.0)	1.0-1.5	38.61	黑色頁岩(鳥居半島産) 少少?	鋼劍形石劍1式 間に刃孔なし
345	磨製石劍(鉄劍形)	1-c環塚 8区 晴黃褐色土	(6.2)	3.4	0.7	10.06	凝灰岩	抜玉の切削か?
346	環状石斧	1-c環塚 3区 地山1.等 茶褐色土	11.8	5.9	2.6	204.28	玄武岩	直径11.8cm 円孔直径2.6cm
347	環状石斧	1-c環塚 4区 黄褐色土	(5.7)	(4.2)	(0.9)	12.21	凝灰岩	円孔直徑3.6cm
348	環状石斧	1-c環塚 7区 黄茶褐色土	(6.4)	(4.5)	2.0	85.25	塩基性岩	直径12.0cm(推定) 円孔2.6cm(推定)
548	環状石斧	第2環塚 0区 山頂斜面下 崩壊土	(7.7)	(5.3)	(1.7)	37.34	砂岩	直徑不明 円孔2.2cm(推定)
662	環状石斧	平坦加工1.向道築 2区 南 斜面4層	(5.0)	(4.5)	(1.2)	31.99	安山岩?	直徑11.2cm(推定) 内孔2.2cm(推定)
775	磨製石劍(石刀?)	西側自然水流路	(4.9)	4.1	1.3	24.19	凝灰岩	先端部のみ残存
833	石劍先の可能性あり	SI-03 3区 2層 黄褐色土	(1.8)	(1.4)	(0.3)	0.36	サスカイト	
861	打製石劍(先端の可能性あり)	SB-06 D-T土層断面 3層	(2.2)	(3.0)	0.6	6.03	サスカイト	尖頭型状石器
923	磨製石劍(鉄劍形)	SB-10 環塚面上崩の裡	19.3	3.5	0.9	102.05	真岩	全体よく磨かれている 側面刃溝
933	磨製石劍(鉄劍形)	SI-06, SB-09, 10近傍 茶褐色土	(5.1)	3.8	1.3	23.96	頁岩	

石器観察表 (石器)

地図番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
39	大型石包丁	山頂部~環塚2区黑色土	10.2	(3.5)	1.0	43.86	凝灰岩	
40	打製石斧(打製石器)	山頂部2区裏+No.83	(10.2)	9.7	1.0	136.97	流紋岩	
41	蛤刃石斧	山頂部12区表上	14.4	5.6	4.0	566.40	玄武岩	やや屈屈な蛤刃(片刃が強め)
42	蛤刃石斧	山頂部~環塚C-2区	(13.5)	5.3	(3.6)	431.96	塩基性岩	刃が欠損後使用した可能性あり
43	穂石(ハンマーストーン)	山頂部3区表上No.113	7.2	5.3	4.7	241.34	珪質岩(チャート)	
44	磨製石包丁?	山頂部3区表上No.113	5.2	(5.3)	0.5	18.13	頁岩?	石包丁とするなら1.3程度残存
45	石器未製品	山頂部~月日状加工段No.46	5.35	4.2	1.5	35.35	黒曜石	久見床(原材产地分離説)
46	原石	山頂部3月日状加工段No.47	8.2	5.7	3.3	161.05	黒曜石	久見床(原材产地分離説)
95	石板状石製品(石板)	1-a環塚C区A-A'土層断面5層	3.1	3.0	0.6	8.22	砂岩	1-b環塚堆積土中
123	石包丁	1-a環塚3区黄褐色土	(6.4)	(6.3)	0.32	22.01	頁岩	穿孔あり
124	扁平刃石斧	1-b環塚C区A-A'土層断面8層	6.35	3.3	0.8	29.44	凝灰岩	1-b環塚堆積土中
125	蛤刃石斧	1-a環塚1区No.43	(9.0)	(3.6)	(4.3)	331.16	塩基性岩(玄武岩)	削ぎ音質あり?
126	蛤刃石斧	1-a環塚1区T-8北	(11.7)	5.7	4.3	463.85	塩基性岩	全体に丁寧な研磨
127	蛤刃石斧	1-a環塚3区No.4	(15.9)	6.8	5.4	770	塩基性岩	
128	磨石	1-a環塚1区No.48	12.2	8.9	8.2	1240	花崗岩	
149	蛤刃石斧	1-b環塚C区~8区褐色土	15.8	6.0	4.4	700	塩基性岩	1-c環塚の可能性もあり

博団 番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重量 (g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
343	石板状石製品(石鏡)	1-c環礁0区つぶて石より下	(4.1)	(3.3)	0.7	10.29	凝灰岩	幅4.5~5mmの滑沢部分あり
443	石包丁	1-c環礁8区黒色土・黄色土混合土	(6.3)	(4.8)	(0.7)	23.27	安山岩	表面研磨 穿孔あり
444	石包丁	1-c環礁2区	(4.0)	(3.7)	(0.45)	13.01	真岩	穿孔あり
445	石包丁	1-c環礁7~8区暗緑黃褐色土	(5.5)	(4.2)	1.0	17.96	凝灰岩	
446	石包丁	1-c環礁8区茶褐色土(粘質)	(4.6)	(4.1)	(0.4)	9.55	頁岩	表面は研削 多方向の使用痕あり
447	石包丁	1-c環礁T区T-8黑色土	5.3	4.3	0.45	18.24	真岩	穿孔4~7mm
448	石包丁	1-c環礁1区T-8黑色土	3.0	1.6	(0.6)	3.93	頁岩	穿孔6~15mm
449	大型心包丁	1-c環礁C区~8区最下層	15.0	(5.5)	1.0	103.49	凝灰岩?	
450	石包丁の刃部の被片か?	1-c環礁A区黄褐色土	4.1	(4.8)	0.5	5.50	泥灰岩か凝灰岩	
451	輪刃石斧	1-c環礁5区耕土	(11.2)	5.0	3.9	353.39	塩基性岩	側面研削 横装着痕?
452	輪刃石斧	1-c環礁6区黄色土下黄茶褐色土	(6.1)	5.0	3.3	147.96	玄武岩	
453	輪刃石斧	1-c環礁1区耕土	(7.4)	4.3	(3.0)	144.57	塩基性岩	研磨仕上げ
454	輪刃石斧	1-c環礁黑色土下黄茶色土上	(6.7)	4.5	(1.7)	61.90	塩基性岩	
455	扁平片刃石斧	1-c環礁7区耕土	(5.5)	3.4	(0.5)	9.78	火山岩(安山岩?)	全面研磨
456	扁平片刃石斧	1-c環礁7区黄褐色土	10.0	3.8	1.5	104.84	凝灰質砂岩(砂岩)	全面研磨と思われる風化により剥離
457	砥石	1-c環礁8区黑色土	(9.0)	7.5	1.5	163.41	砂岩	
458	砥石	1-c環礁5区耕土	10.6	4.1	1.7	113.69	凝灰岩	若干の欠損あり
459	砥石	1-c環礁C-2区	7.8	7.0	2.3	207.59	玄武岩	上部に研削使用痕
460	砥石	1-c環礁2区	(5.2)	(3.8)	1.0	28.36	凝灰岩	
461	砥石	1-c環礁A区黑色土下黄褐色土	3.4	(2.7)	2.2	26.48	凝灰岩	3面使用
462	砥石	1-c環礁B-1区黑色土下黄褐色土	(6.9)	(3.9)	0.75	29.14	凝灰岩	
463	砥石	1-c環礁8区	4.5	(3.2)	1.2	26.10	凝灰岩	
464	用途不明石製品	1-c環礁0区黑色土	3.95	(3.8)	0.45	9.78	凝灰岩	343の石鏡に無似 果のような痕跡あり
465	礁石(ハンマーストーン)	1-c環礁3区地山直上茶褐色土上	5.9	4.7	4.8	147.71	頁岩	
466	大型砥石	1-c環礁8区	(33.6)	(14.1)	(10.5)	5400	流紋岩～花崗岩(アブライト)	
467	石匙	1-c環礁0区表土下黑色土上	(5.45)	3.4	0.8	14.68	サスカイト	
468	刃器片	1-c環礁茶褐色土No.13	5.3	4.1	1.0	30.17	サスカイト	鏡・板の裏面あり 金山産 (原材産地分析済)
469	板状大型石材の石片	1-c環礁8区茶褐色土	5.3	4.0	2.1	58.41	サスカイト	研磨面を一部にもつ金山 (原材産地分析済)
470	石斧未製品	1-c環礁C-2区黑色土	4.0	1.8	0.9	5.14	黑曜石	
471	楔形石器	1-c環礁B-2区黑色土下 黄茶褐色土	(3.6)	(1.8)	0.9	6.49	サスカイト	
472	楔形石器	1-c環礁C-2区	2.1	1.7	0.5	2.31	サスカイト	
473	楔形石器の可動性あり	1-c環礁4区黑色土下茶褐色土上	2.7	(2.4)	0.6	3.33	サスカイト	
475	板状材料	1-c環礁C-2区耕土	16.7	12.0	3.5	710	サスカイト	金山産(原材産地分析済)
476	礁石(つぶて石)	環礁内	12.0	10.3	8.6	1090	花崗岩	
477	礁石(つぶて石)	環礁内	10.9	5.7	5.7	530	安山岩	
478	礁石(つぶて石)	環礁内	6.4	5.9	4.0	154	花崗岩?	
479	礁石(つぶて石)	環礁内	10.8	10.5	5.9	700	デイサイト～安山岩	
480	礁石(つぶて石)	環礁内	16.4	11.7	8.4	1800	安山岩	

井戸番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重量(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
481	礫石(つぶて石)	環壕内	10	9.2	6.2	680	ディサイド～安山岩	
482	礫石(つぶて石)	環壕内	19.4	13.1	11.0	3390	花崗岩	
483	礫石(つぶて石)	環壕内	10.1	9.2	9.5	1200	安山岩	
484	礫石(つぶて石)	環壕内	16.2	13.3	11.3	2720	安山岩	
485	楔形石器	I-c環壕B-3区黒色土	3.31	2.80	1.73	16.40	水晶	ほぼ透明
486	鍛造剥片剥片素材	I-c環壕C区～8区間 黒色土	3.45	1.85	0.96	5.60	水晶	向左・方向側縫の研磨剥片 未特
555	石包丁	第2環壕2区黄茶褐色土	(5.3)	(4.7)	3.5	11.07	凝灰岩	左右、上下部分欠損
556	船刃石斧	第2環壕3区黒色土	(10.5)	5.9	(4.1)	352.47	暗基性岩	
557	船刃石斧	第2環壕B区暗黃褐色土	(9.0)	(2.9)	(2.9)	84.55	塩基性岩	刃先～基部研磨
558	砥石	第2環壕C区つぶて石下	(10.9)	8.3	2.5	306.27	凝灰岩	鋸面のみ砥石として使用
359	剥片	第2環壕2区T-黒色土 F 黄褐色土	3.92	2.34	0.92	7.30	碧玉	
620	石包丁	第3環壕付近1区T-8	5.1	(1.9)	0.3	4.57	凝灰岩	弯曲崩壊
621	砥石?	第3環壕B-2区暗黃褐色土	(7.2)	(6.7)	3.3	110.18	砂岩	
622	柱状片刃石斧(有柄式)	第3環壕C区	(8.0)	2.5	3.1	81.45	凝灰岩	砥石として転用した可能性あり
623	砥石	第3環壕B-定跡付近C 区～8区	8.2	(8.0)	3.2	219.38	流紋岩?	
624	砥石	第3環壕D区黒色土	5.0	(3.3)	1.0	26.17	頁岩	
625	砥石	第3環壕付近1区T-8耕土	9.3	6.5	4.4	326.21	流紋岩～花崗岩(アブ ライ)	3枚の清と1枚の蘇 標表等の使用痕なし
626	用途不明	第3環壕C区根褐色土	12.2	8.5	1.1	154.61	流紋岩?	
627	ナイフ形石器	SB-25, 26周辺剥離	4.89	1.63	0.89	6.37	錆質岩	
631	石匙か石小刀	第2-3環壕通路?部東斜 面挖土上層	3.3	2.5	0.55	3.85	黒曜石	
663	原石	平野加工面遺構3区(北斜 面)	12.3	7.7	4.7	292.75	黒曜石	
679	石匙	平坦面 T面遺構3区(東側) 斜面	(1.25)	(0.95)	(0.18)	0.21	黒曜石	
682	四石	SB-01暗黃褐色土	8.0	4.05	1.5	74.63	凝灰岩	
699	扁平片刃石斧	SB-025層	(5.5)	3.5	1.3	43.43	玄武岩	研削による仕上げ
700	用途不明	SB-02茶褐色土	10.41	3.1	2.0	86.19	流紋岩	
701	楔形石器	SB-0226層	5.4	4.3	0.9	22.04	ナスカイト	
722	柱状片刃石斧(両刃式)	SI-01埋土	(9.2)	3.9	1.3	246.64	玄武岩	刃先は研削
729	船刃石斧?	平野加工面遺構西辺黒色 土上層	(9.9)	5.7	2.5	288.31	玄武岩	刃部欠損
730	砥石	平野加工面遺構西辺南斜 面深層土	(6.2)	3.3	2.1	68.93	流紋岩または凝灰岩	
731	人骨石包丁	SB-01の北京側斜面	(25.6)	9.2	0.5	224.75	頁岩	
732	大型石包丁	SB-02周辺黒色土下	8.0	(4.9)	0.95	52.04	玄武岩	
733	砥石	SB-02下方根褐色土(崩 れた土)	(16.2)	4.5	2.6	225.78	流紋岩	
734	火葬石包丁	SI-01周辺	(12.2)	8.8	1.5	229.65	玄武岩	
735	砥石	SI-01周辺	(8.8)	(3.6)	(3.0)	98.15	流紋岩～ディサイド	
737	勾玉未製品	SI-01周辺表土	2.9	1.9	1.1	7.10	瑪瑙	勾玉調整剥片
776	石包丁	西側自然流水路黒色土	(5.8)	4.3	0.7	28.48	塩基性岩	孔に浅い凹部・頭を通して 使用した痕あり
777	石包丁	西側自然流水路	(6.9)	(2.8)	(0.6)	15.41	凝灰岩	表面と背面部は研磨
778	石包丁	西側自然流水路	(5.6)	(3.0)	0.65	14.38	凝灰岩	両面研磨

標 番 号	種 類	出 土 位 置	寸法(cm)			重 量 (g)	石 材	備 考
			長 さ	幅	厚 さ			
779	石包丁	西側自然流水路	(4.5)	(2.5)	0.7	8.60	頁岩	穿孔あり 刀部欠損
780	蛤刃石斧	西側自然流水路	10.9	5.4	3.3	313.95	玄武岩?	肩部:浅い研磨 刃部:丁寧な研磨
781	蛤刃石斧	西側自然流水路	(6.1)	(3.5)	(3.1)	75.44	塩基性岩	肩部:刃部:研磨
782	打製石斧(打製石斧)	西側自然流水路	(7.6)	7.4	2.1	161.51	流紋岩	
783	砥石	西側自然流水路暗灰色土上	(4.7)	1.7	1.7	21.21	凝灰岩	4面砥石として使用
784	砥石	西側自然流水路	(5.2)	(5.0)	2.2	54.29	流紋岩~花崗岩(アブライド)	
785	砥石	西側自然流水路	(5.2)	(5.15)	8.3	18.88	片岩	
793	何かの未製品	西側自然流水路3区褐色土	3.6	3.3	0.9	9.53	黒曜石	
797	楔形石器	西側自然流水路	2.88	3.01	1.02	8.60	瑪瑙	
827	何かの未製品	SI-033区下段1層暗茶褐色土上	3.3	2.15	0.55	4.55	黒曜石	
831	楔形石器	SI-033区1層暗茶褐色土	(1.85)	(4.5)	0.6	4.68	サスカイト	
834	石錐	SI-031区2層暗茶褐色土	2.9	1.1	0.3	0.95	サスカイト	一部にだけ瘤状あり
835	楔形石器	SI-031層暗茶褐色土	3.7	1.4	1.25	9.32	サスカイト	
836	楔形石器	SI-033区1層暗茶褐色土	2.3	2.6	0.5	3.44	サスカイト	
837	楔形石器	SI-031層暗茶褐色土	2.8	2.2	0.55	4.32	サスカイト	
838	楔形石器	SI-031層暗茶褐色土	2.2	1.95	0.45	2.45	サスカイト	
839	砥石	SI-03下段(0203)層泥土層 断面3層	11.0	6.1	2.5	276.58	凝灰岩	3面使用
840	石包丁	SI-031層暗茶褐色土	(2.8)	(2.5)	5.5	5.79	頁岩	穿孔あり 両面共研磨
841	石包丁	SI-03黑色土上層	(2.35)	(3.65)	0.4	5.13	流紋岩	
842	石核	SI-031層暗茶褐色土	(6.6)	(4.5)	3.1	86.65	黒曜石	黒曜石接着資料
843	剥片	SI-031層暗茶褐色土	(5.45)	(3.15)	1.2	18.16	黒曜石	842から取れた板長状の剥片
844	剥片	SI-031層暗茶褐色土	(3.0)	(2.5)	0.6	3.29	黒曜石	842から取れた不定形剥片
845	残核	SI-031層暗茶褐色土	(6.6)	(3.9)	2.8	65.2	黒曜石	842から843、844を取った後の残核
849	砥石	SI-052層暗茶褐色土	14.1	6.2	3.2	587.25	頁岩	転用品の可能性あり
850	砥石	SI-05層	9.9	4.55	3.0	209.15	流紋岩	
851	楔形石器	SI-011層褐色土	3.6	(3.95)	0.9	13.85	サスカイト	3箇所に研磨痕 上部流れ板
870	用途不明	SB-07溝2内No.2	(13.35)	(2.4)	1.8	46.67	頁岩	所々研磨
876	何かの未製品	SB-08上層紅土灰褐色土	1.8	1.4	0.55	1.36	黒曜石	
888	用途不明	SI-05茶褐色土	(2.2)	(3.25)	0.45	2.31	安山岩~玄武岩	研磨面あり
889	砥石?	SI-05造塊土	5.0	1.9	1.2	9.28	流紋岩	研磨面あり
890	用途不明	SI-06暗茶褐色土	(4.9)	(2.7)	0.75	10.87	凝灰岩	
891	大京石包丁?	SI-06造塊土	(6.8)	(11.5)	1.2	126.62	流紋岩	
892	砥石	SI-06造塊土	8.0	4.6	2.85	104.27	凝灰岩	
934	砥石	SI-06, SB-09, 10周邊 褐色土	(7.9)	(3.9)	(3.3)	139.38	流紋岩	
935	蛤刃石斧	SI-06, SB-09, 10周邊 灰褐色土	9.5	6.9	5.0	830	塩基性岩	先端から基部:研磨 剣の表裏板
936	砥石	SI-06, SB-09, 10周邊 褐色土	11.1	5.3	3.0	305.35	ホルンフェルス	
946	蛤刃石斧	SB-11溝1内	(13.3)	5.8	5.3	436.96	玄武岩	
947	柱状片刃石斧(肩刃状)	SB-11溝1内	12.5	5.1	3.5	480.13	塩基性岩?	

標識番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重さ(g)	石材	備考
			長さ	幅	厚さ			
972	敲石?	SB-13溝内黒色土	4.9	6.7	2.8	82.41	頁岩	側面叩いて潰れたような痕あり
985	砥石	SB-14	(7.7)	(4.5)	4.4	162.2	アブライド	
986	台形様石器?	SB-14中央縫付近	3.03	3.15	0.85	6.90	珪質岩	
1012	石包丁	SI-07縫黄褐色土1層	(4.7)	(4.9)	0.85	18.26		
1013	石包丁	SI-071縫暗黃褐色土	6.8	3.8	0.8	27.78		
1019	打製石斧(打製石鏡)	SB-16P5内	(11.8)	7.9	2.3	346.04	砂岩か?	
1022	不明(何かの木製品)	SI-071縫暗黃褐色土	1.2	0.9	0.25	0.19	黒曜石	
1026	砥石	SI-08	(13.0)	4.2	4.1	312.29		4面砥石として使用
1031	石包丁	SI-09P3内	(5.7)	(3.35)	0.55	9.07	頁岩	
1032	石包丁	SI-09縫構面	(8.3)	(7.2)	8.5	63.17	頁岩	穿孔4~8mm
1033	大形石包丁	SI-094区1層暗茶褐色土	(7.9)	(6.3)	1.0	52.33	鍛灰岩	
1036	石包丁	II区トレンチ周辺	8.0	6.4	(0.4)	24.70		
1037	敲石	II区トレンチ周辺	9.65	4.5	1.95	127.35		他からの転用か?
1038	砥石	SB-14-15付近黒褐色土	6.9	2.1	1.6	33.69	凝灰岩	4面砥石として利用
1039	敲石?	I区トレンチ周辺	9.7	(7.2)	3.5	340.89		叩いて潰れた痕あり 表裏に紗膜
1040	燧石石斧	出土地不明	13.2	4.9	5.1	413.67	塩基性岩	側部研磨
1041	扁平片刃石斧	出土地不明	8.0	4.6	0.9	46.52	火山岩(玄武岩?)	
1042	石包丁	出土地不明	3.0	3.6	0.4	6.46	頁岩	両側から穿孔
1043	砥石	7区付近黄褐色土中	6.6	3.9	1.2	29.14	凝灰岩	
1044	大型石包丁	出土地不明	12.3	(12.6)	1.9	393.45	玄武岩	
1045	四石(石鏡)	出土地不明	14.5	(12.2)	7.0	1730	安山岩(大海崎石か も?)	多數の凹痕
1046	敲石	6区縫画下付近	11.7	5.8	3.1	341.39	頁岩	
1047	四石	3区拂土	11.9	9.6	4.4	870	玄武岩	表裏に凹痕
1085	勾玉未製品	SB-22P11、12、13付近 色土	(2.7)	(1.6)	(0.7)	4.12	瑪瑙	勾玉一次研磨品
1086	勾玉未製品	SB-22P11、12、13付近	2.6	2.9	1.7	12.77	瑪瑙	勾玉素材調査
1087	勾玉未製品	SB-22P11、12、13付近	3.9	5.5	2.1	27.34	瑪瑙	勾玉素材調査
1096	砥石	SI-11SK01内	(3.7)	(3.4)	(0.9)	22.15	凝灰岩	
1108	砥石	SB-21縫暗茶褐色土	(7.2)	(6.6)	(1.8)	139.77	凝灰岩～花崗岩(アブ ライド)	粗い砥石
1128	砥石?	SI-12堆上	3.0	1.1	1.3	10.70	流紋岩	1面に研磨痕
1135	砥石	SI-13帶帶溝	6.5	4.3	2.2	79.30		4面使用

石器観察表 (石鏃)

標識番号	石材	形態	寸法(cm)			重量(g)	出土地	備考
			長さ	幅	厚さ			
98	黒曜石	円系	2.85	1.25	0.4	0.86	1-a環礁 8区 塵底近く 黒色土	
99	黒曜石	四基	1.9	1.4	0.25	0.52	1-a環礁 1区 C-C'上層断面 35層	
100	黒曜石	四基	(1.25)	1.5	0.25	0.50	1-a環礁 B-H区 B-1北側上層断面 19層 棕灰色土	
101	黒曜石	四基	1.8	1.2	0.18	0.33	1-a環礁 7区	
102	黒曜石	未製品	2.1	1.9	0.4	1.44	1-a環礁 深い始め斜 淡墨黃褐色土	
103	黒曜石	未製品	3.4	1.9	0.7	3.51	1-a環礁 2区 暗茶褐色土	
104	サヌカイト	四基	(1.9)	(1.6)	0.3	0.94	1-b環礁 2区 7層 黑褐色土	
105	サヌカイト	四基	(2.05)	1.3	0.3	0.69	1-a環礁 1区 T-8 A-A'土層断面 17層	
106	サヌカイト	四基	(2.1)	1.3	0.25	0.57	1-a環礁 B-1区 南側上層断面 43層(1-a環礁)	
107	サヌカイト	四基	(2.2)	1.5	0.25	0.86	1-a環礁 3区 地面付土中	
108	サヌカイト	四基	(1.1)	1.25	0.25	0.31	1-a環礁 B-1区 B-1北側上層断面 21層 棕灰色土	
109	サヌカイト	四基	1.65	1.15	0.2	0.40	1-a環礁 1区 T-8	
110	サヌカイト	四基	(1.45)	(1.0)	0.2	0.32	1-a環礁 3区 (2-1区) 塘底	
111	サヌカイト	平基	1.5	1.1	0.2	0.38	1-a環礁 1区 A-A'土層断面 49層	
112	サヌカイト	四基	(1.2)	1.4	0.3	0.40	1-a環礁 1区 No.11	
113	サヌカイト	四基	2.0	(1.9)	0.35	0.72	1-a環礁 3区 (6-2区) 55層	
114	サヌカイト	平基	(1.95)	1.15	0.2	0.43	1-a環礁 3区 2-3区間 8層	
115	サヌカイト	四基	1.15	1.0	0.2	0.27	1-a環礁 B-1区 B-1北側上層断面 29層	
116	サヌカイト	四基	(1.6)	1.35	0.3	0.85	1-a環礁 1区 つぶて石の下	
117	サヌカイト	平基	1.75	1.5	0.3	0.70	1-a環礁 3区 (4-2区) 36層	
118	サヌカイト	平基	1.5	1.0	0.25	0.27	1-a環礁 2区 1-a環地理上	
119	サヌカイト	平基	1.45	1.1	0.2	0.31	1-a環礁 0区	
120	サヌカイト	凸系II式	(1.65)	0.8	0.15	0.27	1-a環礁 1区 A-A'土層断面 49層(1-a環礁底1層)	
121	サヌカイト	平基	1.2	(1.05)	0.2	0.19	1-a環礁 A区 T-1	
122	サヌカイト	平基	(1.2)	0.75	0.2	0.25	1-a環礁 1区 基4 2層	
147	凝灰岩	平基	1.6	1.3	0.3	0.44	1-b環礁 0区	
148	サヌカイト	平基	(1.7)	(1.3)	0.25	0.64	1-b環礁 0区 14層 黑褐色土	
349	黒曜石	四基	3.8	(1.9)	0.2	1.26	1-c環礁 3区 善茶褐色土	
350	黒曜石	四基	(3.05)	1.95	2.5	1.72	1-c環礁 2区 T-7 黒色十ド黄褐色土	
351	黒曜石	四基	(2.9)	(2.1)	0.5	2.00	1-c環礁 6区 善土	
352	黒曜石	四基	2.7	1.85	0.25	0.86	1-c環礁 B区 黑色上下黄褐色土	
353	黒曜石	四基	(2.05)	1.85	0.29	0.79	1-c環礁 4区 1-3区の排土	
354	黒曜石	四基	(1.3)	(2.0)	0.2	0.66	1-c環礁 C区～B区 基下層	
355	黒曜石	四基	2.65	2.0	0.3	1.23	1-c環礁 6区 サブトレーナ内	
356	黒曜石	四基	(1.5)	1.9	0.25	0.70	1-c環礁 C-1区 黑色十	
357	黒曜石	四基	(2.1)	1.8	0.2	0.85	1-c環礁 B-H区	
358	黒曜石	四基	(2.1)	1.5	0.23	0.72	1-c環礁 8区 サブトレーナ排土	
359	黒曜石	四基	(2.6)	1.6	0.25	0.40	1-c環礁 0区 7層	
360	黒曜石	四基	(3.0)	(2.0)	(0.35)	0.65	1-c環礁 0区 排土	
361	黒曜石	四基	(1.6)	1.45	0.35	0.62	1-c環礁 3区 善茶褐色土	
362	黒曜石	四基	(1.8)	(1.2)	0.3	0.53	1-c環礁 4区 T-6	
363	黒曜石	四基か平基	(1.5)	(0.8)	0.2	0.29	1-c環礁 4区 黑色十ド黄褐色土	
364	黒曜石	四基	2.0	(1.1)	0.3	0.44	1-c環礁 1～2区間	
365	黒曜石	四基	2.2	1.25	0.25	0.52	1-c環礁 0区 排土	
366	黒曜石	四基	(1.8)	1.35	0.3	0.50	1-c環礁 0区 排土	
367	黒曜石	四基	1.5	1.2	0.3	0.45	1-c環礁 C-2区 黄色土下黒色十(炭含む)	
368	黒曜石	四基	2.85	2.0	0.3	1.57	1-c環礁 7～8区間 善土	
369	黒曜石	四基	2.25	1.8	0.2	0.77	1-c環礁 3区	
370	黒曜石	四基	(1.95)	(1.85)	0.25	0.84	1-c環礁 A区 善土下黒色土	
371	黒曜石	四基	(2.0)	1.85	0.4	1.00	1-c環礁 7区 T-2 黑色土・善茶褐色土中間	
372	黒曜石	四基	(1.5)	1.6	0.2	0.55	1-c環礁 3区 黑色土・No.1	

標識番号	石材	形態	寸法(cm)			重量(g)	出土地	備考
			長さ	幅	厚さ			
373	黒曜石	円基	(2.4)	1.7	0.45	1.24	1-c環礁 A区 表土下黄褐色土	
374	黒曜石	平基	(2.45)	(1.35)	0.3	1.08	1-c環礁 0区 黄褐色土	
375	黒曜石	平基	1.2	1.5	0.2	0.26	1-c環礁 B-2区 黑色土下黄褐色土	
376	黒曜石	凸基 II式	2.3	1.0	0.35	0.92	1-c環礁 A区 黑色土下黄褐色土	
377	黒曜石	凸基か平基	(1.5)	(1.2)	0.3	0.76	1-c環礁 B-2区 黑色土下黄褐色土	久見産(原材産地分析済み)
378	黒曜石	凸基か平基	(1.8)	(1.4)	0.2	0.67	1-c環礁 B-2区 表土下黑褐色土	
379	黒曜石	円基	(1.75)	(1.3)	0.3	0.59	1-c環礁 3~4区間 基 9層	
380	黒曜石	凹基か平基	(1.6)	(0.9)	0.2	0.38	1-c環礁 B-2区 黄色土(小ブロック・底含む)	
381	黒曜石	円基か平基	(1.3)	(1.1)	0.23	0.27	1-c環礁 3区 排土	
382	黒曜石	不明	(0.75)	(0.8)	0.31	0.10	1-c環礁 3~4区間 基 7層	
383	黒曜石	未製品	2.35	1.35	0.7	2.81	1-c環礁 4区 黑色土下黄褐色土	
384	黒曜石	未製品	1.85	1.5	0.68	1.60	1-c環礁 2F T-7 黑色土	
385	黒曜石	未製品	2.95	2.55	0.9	6.42	1-c環礁 4区 茶褐色土	
386	サヌカイト	円基	(2.35)	1.93	0.35	1.73	1-c環礁 3区 基土	
387	サヌカイト	四基	2.9	(1.75)	0.5	1.19	1-c環礁 北側 喻黃褐色土	
388	サヌカイト	四基	(2.4)	1.8	0.4	1.80	1-c環礁 2区 喻茶褐色土	
389	サヌカイト	四基	3.1	1.75	0.3	1.56	1-c環礁 B-4区 黑色土下黄褐色土	
390	サヌカイト	円基	(1.7)	1.9	0.4	1.19	1-c環礁 2区 T-7 黄褐色土	
391	サヌカイト	四基	(2.35)	1.85	0.3	1.11	1-c環礁 0区 8層	金山産(原材産地分析済み)
392	サヌカイト	小明	(1.8)	(1.3)	0.4	0.64	1-c環礁 B-2区 黑色土下黄褐色土	金山産(原材産地分析済み)
393	サヌカイト	四基	(1.0)	1.15	0.2	0.32	1-c環礁 B-1区 黑色土(フロッカ)下黑褐色土	
394	サヌカイト	円基	(0.9)	1.15	0.3	0.38	1-c環礁 B-2区 黑色土下黄褐色土	
395	サヌカイト	四基	1.65	1.25	0.2	0.42	1-c環礁 8区 喻茶褐色土(底・底色土混入)	
396	サヌカイト	四基	(1.65)	(1.25)	0.3	0.59	1-c環礁 B-2区 黑色土下黄褐色土	
397	サヌカイト	四基	2.1	(1.7)	0.3	0.75	1-c環礁 3~4区間 基 7層	
398	サヌカイト	四基	(1.5)	(1.0)	0.2	0.18	1-c環礁 排土	
399	サヌカイト	四基	1.85	1.2	0.2	0.39	1-c環礁 8区	金山産(原材産地分析済み)
400	サヌカイト	四基	2.2	(1.2)	0.25	0.62	1-c環礁 2区 喻茶褐色土	金山産(原材産地分析済み)
401	サヌカイト	四基	(1.4)	1.05	0.35	0.45	1-c環礁 0F 7層 黄褐色土	
402	サヌカイト	四基	(1.7)	1.3	0.25	0.83	1-c環礁 B-2 黑色土下黄褐色土	
403	サヌカイト	四基	(1.7)	1.5	0.4	0.63	1-c環礁 3区	
404	サヌカイト	四基	(2.2)	1.55	0.3	0.65	1-c環礁 1区 黑色土下黄褐色土	
405	サヌカイト	四基	2.15	1.5	0.3	0.83	1-c環礁 0区 排土	
406	サヌカイト	円基	(2.05)	1.25	0.25	0.31	1-c環礁 7区 黄褐色土	
407	サヌカイト	四基	(2.45)	1.55	0.5	1.15	1-c環礁 3区 黄褐色土	
408	サヌカイト	四基	1.95	1.25	0.25	0.41	1-c環礁 0区 黄褐色土	
409	サヌカイト	四基	(2.2)	1.6	0.3	1.20	1-c環礁 4区 排土	
410	サヌカイト	円基	(1.9)	(1.3)	0.4	0.69	1-c環礁 A区 喻褐色土	
411	サヌカイト	四基	(2.0)	1.35	0.25	0.58	1-c環礁 0区 つぶて石の下	
412	サヌカイト	平基	(1.65)	(1.45)	0.2	0.54	1-c環礁 2区 T-7 喻黄褐色土(やや珍質)	
413	サヌカイト	円基	1.5	(1.5)	0.3	0.53	1-c環礁 3区 喻褐色土	
414	サヌカイト	平基	1.35	1.2	0.23	0.38	1-c環礁 0区 つぶて石の下	
415	サヌカイト	四基	1.95	1.25	0.25	0.49	1-c環礁 8区 山頂断面西 喻褐色土	
416	サヌカイト	円基	(1.6)	(1.3)	0.3	0.59	1-c環礁 0区 7層 黄褐色土	金山産(原材産地分析済み)
417	サヌカイト	四基	1.5	1.2	0.3	0.53	1-c環礁 2区 排土	
418	サヌカイト	四基	(1.5)	(1.0)	0.2	0.30	1-c環礁 3区 T-5	
419	サヌカイト	平基	(1.25)	1.15	0.25	0.35	1-c環礁 2区 喻茶褐色土	
420	サヌカイト	四基か平基	(1.3)	(0.8)	0.18	0.18	1-c環礁 3区 喻褐色土	
421	サヌカイト	平基	(1.5)	(1.2)	0.25	0.32	1-c環礁 0区 6層	
422	サヌカイト	円基	(1.9)	(1.35)	0.25	0.47	1-c環礁 1区 黄褐色土	
423	サヌカイト	平基	1.8	1.3	0.2	0.57	1-c環礁 3~4区間 基 7層	
424	サヌカイト	平基	(1.3)	1.35	0.3	0.76	1-c環礁 3区 喻茶褐色土	
425	サヌカイト	平基	1.6	1.2	0.25	0.39	1-c環礁 0区 7層 黄褐色土	
426	サヌカイト	四基か平基	1.65	(1.1)	0.2	0.34	1-c環礁 8区 黑色土下喻茶褐色土	

標図 番号	石材	形態	寸法(cm)			重量 (g)	出 土 場	備 考
			長さ	幅	厚さ			
427	サヌカイト	平基	1.5	1.2	0.2	0.30	1-c環礁 北側	
428	サヌカイト	平基	(1.35)	(0.9)	0.35	0.17	1-c環礁 3-4区間 略 7層	
429	サヌカイト	四基	(1.1)	1.3	0.2	0.36	1-c環礁 B-2区 黒色上下黄褐色土	
430	サヌカイト	凸基Ⅱ式	(3.5)	1.4	0.4	1.96	1-c環礁 2区 黄褐色土	
431	サヌカイト	凹基Ⅱ式	3.5	1.05	0.3	1.03	1-c環礁 1区 地山上	
432	サヌカイト	凸基Ⅲ式	(2.8)	1.0	0.3	1.15	1-c環礁 7区 T-2 黑色土	
433	サヌカイト	凸基Ⅳ式	(2.3)	0.85	0.3	0.69	1-c環礁 4区 つぶて石下の黄褐色土	
434	サヌカイト	凸基Ⅴ式	2.0	0.7	0.2	0.37	1-c環礁 2区 T-7 鮎青褐色土(やや砂質)	金山産(原材产地分析済み)
435	サヌカイト	凸基Ⅵ式	(2.2)	0.7	0.2	0.37	1-c環礁 2区 T-7 鮎青褐色土(やや砂質)	
436	サヌカイト	凸基Ⅶ式	(2.1)	0.9	0.45	0.88	1-c環礁 A区 表上層黑色土	
437	サヌカイト	凸基Ⅷ式	(1.65)	0.8	0.21	0.29	1-c環礁 3区 黄褐色土	金山産(原材产地分析済み)
438	サヌカイト	凸基	(1.6)	0.9	0.4	0.36	1-c環礁 2区 T-7 鮎青褐色土	金山産(原材产地分析済み)
439	サヌカイト	凸基か平基	(1.2)	(0.25)	0.3	0.35	1-c環礁 地山上1層 黄褐色土	
440	サヌカイト	凸基Ⅸ式	(2.1)	1.1	0.3	0.89	1-c環礁 3-4区間 略 7層	
441	サヌカイト	凸基Ⅹ式	(1.5)	0.85	0.35	0.53	1-c環礁 0区 5層 黑色土	
442	サヌカイト	凸基Ⅺ式	1.7	0.85	0.3	0.42	1-c環礁 0区 5層 黑色土	
519	黒曜石	四基	2.1	1.7	0.4	0.94	第2環礁 1-2区間 社	
550	サヌカイト	凹基	2.4	1.6	0.35	1.08	第2環礁 2区 T-7 鮎青褐色土	
551	サヌカイト	四基	2.4	1.7	0.45	1.47	第2環礁 4区 山頂斜面 黑色土か暗褐色土	
552	サヌカイト	凹基	1.6	1.2	0.35	0.49	第2環礁 2区 (山頂斜面) 黄褐色土	
553	サヌカイト	凹基	3.1	1.8	0.3	1.33	第2環礁 2区 山頂斜面 黑色土	金山産(原材产地分析済み)
554	サヌカイト	平基か四基	(1.7)	(1.1)	0.3	0.48	第2環礁 2区 池山上	金山産(原材产地分析済み)
618	黒曜石	四基	(2.6)	(2.0)	0.3	1.15	第3環礁 3-4区	
619	黒曜石	凹基	1.65	(1.35)	0.35	0.35	第3環礁 掘土	
633	黒曜石	凹基	(1.8)	(1.55)	0.35	0.74	第3環礁後沿部 C区 ~8区 第3環礁深泥 黑色土	
656	黒曜石	四基	2.72	1.9	0.32	1.14	第3環礁外輪斜面 C区 ~8区 黄褐色土	
657	黒曜石	凹基	(2.3)	(1.4)	(0.25)	0.47	第1-2環礁間 北側 滝1	
658	黒曜石	凹基	(1.6)	(1.15)	0.25	0.54	第1-2環礁間 4区 黑褐色土	
659	黒曜石	本製品	2.15	2.1	0.5	1.82	第2-3環礁間 B区	
660	サヌカイト	凹基	(1.75)	1.55	0.3	0.84	第1-2環礁間 四区	
676	黒曜石	本製品	1.9	1.65	0.45	1.63	平坦地 I面(造形面)(東側)の西面	
677	黒曜石	本製品	(1.85)	1.7	0.28	0.65	平坦地 I面(造形面)(東側)の斜面	
678	黒曜石	凹基本製品	1.5	1.4	0.35	0.68	平坦地加面(造形面)(斜面)	
702	黒曜石	四基	(1.3)	(1.4)	0.25	0.41	SB-02 24屏	
703	黒曜石	凹基	3.05	2.1	0.4	1.60	SB-02 東側面 準粘土 黄褐色土	
704	黒曜石	凹基	1.5	1.5	0.3	0.45	SB-03 3層	
723	頁岩	凹基	3.6	3.2	0.45	5.48	SI-01 逆巻面上 1層	
724	黒曜石	凹基か平基	1.5	1.6	0.4	0.70	SI-01 P15内	
725	黒曜石	凹基	1.95	2.1	0.25	0.80	SI-01 粘土	
728	黒曜石	凹基	2.6	(1.8)	0.3	1.13	SB-05 3層	
736	黒曜石	凹基	(1.9)	(1.95)	0.3	0.98	南西傾斜面 表様	
787	黒曜石	瓶形石瓶	(1.65)	(1.72)	0.3	0.60	西側自然流水路	
788	黒曜石	平基	2.3	1.65	0.4	1.25	西側自然流水路	
789	黒曜石	凹基か平基	(1.25)	1.4	0.2	0.29	西側自然流水路	
790	黒曜石	凹基本製品	2.7	1.3	0.48	1.58	西側自然流水路	
791	黒曜石	凹基	(2.7)	1.6	0.4	1.45	西側自然流水路	
792	黒曜石	凹基か平基	2.8	(1.1)	0.35	1.01	西側自然流水路	
794	サヌカイト	凹基	2.2	1.5	0.4	0.94	西側自然流水路	
795	サヌカイト	平基	1.35	1.05	0.3	0.46	西側自然流水路	
796	サヌカイト	平基	(1.9)	1.5	0.3	0.93	西側自然流水路	
821	黒曜石	平基	2.2	1.45	0.32	0.89	SI-03 1層 端茶褐色土	
822	黒曜石	凹基	2.2	1.4	0.2	0.83	SI-03 5層 淡黒褐色土	
823	黒曜石	凹基本製品	2.02	1.55	0.4	1.12	SI-03 1区 1層 煙茶褐色土	
824	黒曜石	凹基	2.1	(1.5)	0.35	0.73	SI-03 2区 1層 烟茶褐色土	

辨別番号	石材	形態	寸法(cm)			重量(g)	出土地	備考
			長さ	幅	厚さ			
825	黒曜石	凹基未製品	2.4	2.25	0.55	2.17	SI-03 3区1層 暗茶褐色土	
826	黒曜石	凹基か平基	(0.92)	(0.95)	0.12	0.14	SI-03 3区1層 暗茶褐色土	
828	黒曜石	凹基未製品	(3.2)	(2.3)	0.35	2.02	SI-03 4区上段 SI-02,03周辺 土層断面 3層	
829	黒曜石	凹基	1.7	(1.2)	0.3	0.38	SI-03 4区上段 SI-02,03周辺 土層断面 3層	
830	黒曜石	未製品	(2.6)	(2.4)	0.7	3.18	SI-03 2層 暗黄褐色土	
832	サスカイト	凹基	(1.3)	(1.65)	0.2	0.43	SI-03 2層 暗黄褐色土	研磨面あり
852	サスカイト	不明	(2.9)	1.0	0.2	0.36	SI-05 溝2D-D'土層断面 5層	
862	黒曜石	平基	2.05	1.7	0.5	1.09	SB-06 D-D'土層断面 5層	
863	黒曜石	未製品	2.48	1.6	0.5	1.95	SB-06 D-D'土層断面 5層	
864	黒曜石	凹基	(1.4)	1.75	0.32	0.67	SB-06 下方斜面	
871	サスカイト	平基	1.6	1.05	0.2	0.38	SB-07 やや暗い褐色土	
877	サスカイト	凹基	1.9	1.3	0.3	0.48	SB-08の上方	
878	黒曜石	凹基	(2.3)	1.45	0.32	0.65	小ビット群柱穴検出面	
893	黒曜石	凹基か平基	(2.22)	(1.5)	0.22	0.67	SB-09 4区 溝内	
922	黒曜石	不明	(1.2)	(0.4)	0.2	0.09	SB-10 3区 道構面上	
937	サスカイト	凹基	2.1	2.15	0.33	0.92	SI-06,SB-09,10周辺	
984	黒曜石	凹基	2.15	1.4	0.4	0.76	SB-14 褐土	
999	黒曜石	未製品	2.2	1.85	0.52	2.57	SB-15 褐土	
1020	サスカイト	凹基	1.85	1.6	0.3	0.96	SI-07 1層 暗黄褐色土	研磨面あり
1021	黒曜石	未製品	2.7	2.3	0.45	2.27	SI-07 1層 暗黄褐色土	
1023	黒曜石	凹基	(1.9)	(1.65)	0.25	0.61	SI-07の下方斜面	
1034	黒曜石	未製品	1.95	1.65	0.25	0.63	SI-09 1区 無土面上	
1035	白色頁岩	平基	1.7	(1.4)	1.25	0.48	SI-09 4区 埋土	
1048	黒曜石	凹基	2.15	1.25	0.25	0.55	I-e環境から第2環境 1~2区 排土	
1049	黒曜石	凹基	(1.6)	1.5	0.3	0.73	出土地不明	
1050	黒曜石	不明	(1.1)	(0.6)	0.2	0.15	出土地不明	
1051	サスカイト	平基	1.75	0.8	0.3	0.35	出土地不明	
1072	黒曜石	凹基	1.75	(1.35)	1.5	0.38	加工段3層 暗褐色土	久見庵(原材産地分析済み)
1107	黒曜石	凹基	(2.0)	1.8	0.3	0.73	SB-24 1層 暗灰褐色土	
1127	黒曜石	未製品	2.48	2.0	0.5	1.80	SI-12 P2付近	
1146	珪質岩	不明	(1.05)	(0.8)	0.2	0.10	SB-26の下方	珪乳岩か
1147	黒曜石	凹基	(1.0)	(1.65)	0.22	0.49	SB-26の下方	

金属製品観察表

辨別番号	種類	出土位置	寸法(cm)			重量(g)	備考
			長さ	幅	厚さ		
474	火打ち金	1-c環溝 C-1区 サブレンチ 黒色土	(5.8)	(2.2)	0.6	21.30	
661	袋状鉄斧	4区 第1・2環境間の斜面	(10.0)	(4.3)	(0.9)	184.43	
786	鎌のようなもの?	西側自然流水路	(4.0)	(7.6)	0.35	27.69	

図 版



田和山遺跡群 全景（真上上空より）



田和山遺跡群 全景（東側上空より）

図版2



田和山遺跡群 全景（北西上空より）



田和山遺跡（東側より）※1998年10月時（調査途中）



宍道湖上空より田和山遺跡群を望む（北西より）



東側上空より田和山遺跡群～宍道湖を望む